
東方西風遊戯

ぜろたいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方西風遊戯

【Nコード】

N1133U

【作者名】

ぜろたいむ

【あらすじ】

守矢神社を主体とした東方二次創作です。オリ主アリ。というかオリ主が守矢組に含まれます。早苗さんと同年代に生まれて、早苗さんには劣るまでも諏訪子や神奈子の声が聞こえる程度の霊感を持った少年がオリ主です。チート？ 最強？ 八八八御冗談を。そんなノリですがどうぞ宜しくお願いします。それと、独自設定・捏造・妄想成分も含まれる事、ご了承ください。

第一話：プロローグ

それを『昔』と表現するかは人によって感覚が分かれる話だろう。その事件の当事者である双方にとつては人生の半分以上、ともすれば三分の二近くほど昔の話、即ち『大昔』になるのだろう。しかしその当事者の片割れ 東風谷早苗という名の、とある神社の見習い風祝が仕える二柱の神々からすればつい先日の話と表現出来る。

つまりは十年経つか経たぬかといった程度の過去の話だ。

それは少女 当時は幼女 東風谷早苗にとって人生初の聖戦であり、宗教戦争だった。

「かみさまはいるもん！ かなこさまも、すわこさまもわたしたちをみまもってくれてるもん！」

始まりは些細な事だった。

小学校に上がったばかりの早苗が、その教室で初めて出来た学友に自分の家の話をしたのだ。

信仰の廃れた現代。靈感の特別強い彼女以外の人には見えないが、八坂神奈子と洩矢諏訪子の二柱は彼女にとつては両親と同等に或いはそれ以上に敬愛すべき対象だった。

嬉々として自分の家である神社とその信仰について語った早苗に、しかし学友である少年は致命的な一言を投げ付けてしまった。

『へんなの。かみさまなんて、いるわけないじゃん』と。

そして大事なものを、自身の信仰とその対象である神々を馬鹿にされた早苗は怒った。それはもう怒った。

顔を真っ赤にして涙と鼻水を流しながら、早苗は激情の赴くまま

に少年の顔面に拳を叩き込んだ。

明確な宣戦布告。彼女にとっての聖戦のスタートだった。

この年齢では男女の別などあつてないような物である。すぐさま少年も怒鳴りながら反撃し、しかし早苗もやり返す。

エスカレートする喧嘩。他の学友たちが騒ぎ始め、喧嘩の空気にアテられたのか泣き出す子供も出る始末。

目端のきく何人かが先生を呼びに走り、何人かは止めようとするものの当事者双方の　特に早苗の激怒ぶりに手が出せない。

そして結局、学友の連絡により駆け付けた先生が両者を止めるまで、その彼女にとっての聖戦は続いたのだった。

ちなみに彼女はそれを今でも自分の勝利だと言つて憚らず、少年は今となつてはそれについて嫌そうに顔を歪めるだけで言及を避けている。

そして東風谷早苗は本来明るい少女である。

その日そんな彼女が学校から家に帰り、風祝としての修行の間も俯いたままであつた。

更にはおやつの間になつても『要らない』と言つて、大好きな箸のクツキーに見向きもしなかつた。

彼女の様子に慌てたのは両親もであるし、彼女を娘同然として見ていた二柱の神もだ。

「どうしたんだい、早苗。学校で何か嫌な事があつたのかい？　悪い子にいじめられた？」

「ほら、クツキーもあるぞ。お茶もある。少し休憩しながら話をしようじゃないか」

そして神々が信者に供え物を差し出すというそんな異常事態を経

て、幼い風祝は漸く事情を語り出す。

つまりは学友である少年に言われた言葉と、その後の喧嘩だ。それを聞いた二柱の神はどこか寂しそうに苦笑し、早苗を強く抱きしめる。

「あのね、早苗。早苗が私達の為に怒ってくれたのは嬉しいけど、今の時代じゃそれは仕方ない事なんだよ。人間達は私の事も神奈子の事も忘れてる。その子供の言った事は、悲しいけど今の時代じゃある意味当たり前の認識なんだ」

「私達はそれが原因で早苗が喧嘩をして怪我をしたり、友達を嫌いになってしまふ方が悲しいぞ。次からはもっと友達と仲良くしような」

優しくそう言われて、彼女は諏訪子と神奈子の胸の中で泣き出してしまふ。

自分を想ってくれる神々の言葉が嬉しくて、でも彼女達の言い分が悲しくて、彼女達の今の立場をどうにもできない自分が悔しくて。結局その日、早苗は二柱の胸の中で泣き疲れて眠ってしまった。

そんな彼女にとって予想外の事が起こったのは翌日。学校が休みである日曜日の朝の事だ。

長い神社を上った先にあって交通の便は甚だ悪い守矢神社に、息を切らせながら一人の少年がやって来たのだ。

箒を手には神社を掃除　と、本人は思っていたが今にして思えば散らかしていただけだった気がする　をしていた早苗は、参拝客かと思つて挨拶をしようとしたところで固まった。

それは彼女が人生初の聖戦を行い、散々殴り合った学友の少年だったのだ。

何を言うべきか分からず固まる早苗に対して、先に動いたのは少年だった。

彼は早苗の姿を見付けると駆け寄り、頭を下げたのだ。

「ごめん！」

「……え？ あの……」

「あんなに怒るなんて、おもってなかった。さなえちゃんの大事なものをばかにしてごめん」

舌つ足らずで言葉足らずだが、それ故に率直で精一杯の謝罪。

自分の前で頭を下げ続ける少年は、その為にわざわざ日曜の朝から神社の階段を上って来たのだろうか。

そう考えて、早苗は改めて目の前の少年に向かい合う。

彼の態度に昨日の怒りは既に下火になってしまった。すぐさま許しても良いのだが、それもどことなく癩だ。下火と言っただけで、流石に未だ鎮火には至っていない。

そして数秒考えた結果、早苗は手に持ったままだった箒を少年に差し出した。

「これ」

「……え？」

「神社のおそうじ、てつだって。わたしは許すけど、おそうじする事がかみさまにも許してもらわないと駄目なの！」

両手を腰に当てて胸を逸らす。

彼女なりに精一杯の威厳と怒りを表現したポーズ。

そうして言われた言葉に、少年は生真面目な表情で頷いた。

そしてそれから小一時間ほど。

予備の箒を持って来た早苗と、最初の箒を早苗から受け取った少年は二人で掃除　　という名の散らかす作業を終えていた。

別に全然綺麗になっっていないのだが、途中で様子を見に来た早苗の母が用意してくれた冷たい麦茶を手にして縁側に腰掛ける二人の顔には、無駄な充実感が見て取れた。

「……かみさま、許してくれるかなあ」

「……どうだろ？」

そして縁側で冷たい麦茶を飲みながら、少年がぼそりと呟く。

横でその言葉を聞いた早苗は、ちらりと目線を誰も居ない『ように見える』本殿の方に向ける。

縁側を見る事が出来る本殿の入り口には、彼女以外の誰にも見えない二柱の神が優しい笑顔で彼女と少年を見守っていた。

途中から気付いて様子を見て来てくれていたのだが、彼女以外には父にも母にも見えない神々だ。

彼女達に話しかけるような事としては周囲からは変な子にしか見えない為、他の誰も居ない場所以外では彼女達に話しかけられない早苗である。

本来であればどこでも話し掛け、笑いかけたのだが、それが出来ないほどに　　周囲の殆どから認識されないほどに力を失っているのが彼女達二柱であった。

だから早苗は、少年の言葉に対して直接神奈子と諏訪子に問いかけるような事はしなかった。

次の言動もその後の展開を予想しての事ではなかったし、故にその後の展開は彼女にも少年にも、それこそ神々ですら思いもよらぬ展開だった。

「良い。許してつかわす」
「もうウチの早苗を泣かすなよー」

神奈子が威厳を込めて、諏訪子が茶化すように少年に向けて言葉を投げる。

それは少年に聞かせる為の物ではなく、早苗に対して『少年を許す』という意思表示をする為の言葉だった。

「あれ？」

そう、故にそれは慮外の事態。

早苗に投げた筈の言葉に、少年が確かに反応したのだ。

きよろきよろと周囲を見回す。その動作に対して、驚きに目を剥いたのは早苗と、それ以上に二柱の神々だった。

「許すつて、早苗ちゃんを泣かすなつて聞こえた」

「……え？」

二柱の神々は言葉も無く。

早苗もどこか呆然と、その言葉を聞いて少年の顔を凝視する。

きよとんとした年相応の顔は、きよろきよろと今の言葉の主を探して視線を彷徨わせていた。

これが始まりだったと、後に八坂神奈子は笑顔で語る。

あの頃は可愛かったと、後に洩矢諏訪子はやけて語る。

あれが一つの転機だったと、後に東風谷早苗は苦笑で語る。

あれで俺は人生踏み外したと、後に少年 西宮丈一

は誇らしげに語る。

東方西風遊戯、
ともあれこれにて開幕に候。

第一話：プロローグ（後書き）

様々な東方二次創作小説を見ている内に思わず腋上がって
もとい湧き上がって来た妄想を形にしただけの小説です。

ある意味テンプレ。オリ主介人物です。

オリ主は原作知識無し。チート能力も無し。才能の限界まで育つて、正面決戦では3ボス相手が関の山です。あ、3ボスでも勇儀姐さんとか絶対無理です。

戦力面ではどう頑張っても早苗さんにも敵いません。ゆかりん？
ゆうかりん？ ハハハ勝負の土俵に上がる以前の問題ですが何か？
才能では神奈子様や諏訪子様曰く、平安の世にでも生まれていれば良い陰陽師になれたそうです。曰く『千年に一人レベル』の安倍晴明とか、現代において神が見えるレベルの才能を持つ早苗とか、そもそも才能の面では規格外過ぎる霊夢とかには敵いません。

そんな感じで宜しければ、お付き合い願えば幸いです。

第二話：幻想入り（前書き）

神奈子様の口調が差別化の意味もあってやや男っぽいかもしれません。ご了承ください。

あと、幻想入りに関しては『紫が神奈子・諏訪子に勧めた』という解釈で行っております。

第二話：幻想入り

「実際さあ。本体見えなくて声だけ聞こえるってのも妙な話だよな。いや、だからこそ信じ易かったってのもあるんだけど」

「何度目ですかその話。良いからさっさとしてください、西宮」

「はいはい」

「『はい』は一回!」

「はいはいはい」

「増やすな!」

さて、彼女と彼の最初の聖戦から十年近くが経過した。

信仰は薄れ、最早守矢の神社の者にも早苗のような例外を除けば見えない程に力が衰えていた神奈子と諏訪子。その二柱は自分達の声を聞ける程の靈感を持つ相手が早苗以外に、それもこんな近くに居た事に喜んだ。

彼女達自身がどうこうと言うより、彼女達の姿が見えるほどの飛び抜けた才能を持ち、しかしそれゆえ、他の子供と比べて浮いていた早苗にとって良い友人になると思ったのだろう。

早苗もまた、自分にしか見えなれないと思っていた二柱の声を聞ける相手が出来たのが嬉しかったのか。積極的に西宮が守矢神社に来るように勧めた結果、西宮は守矢神社に頻繁に出入りする少年時代を送る事となった。

彼自身としても、神々という神秘に興味があったのもあるだろう。加えて些か複雑な家庭の事情も加わり、彼は小学校・中学校と守矢神社に出入りする日々を送った。

早苗の両親もまた、変わった所がある娘と仲の良い友達として、彼を積極的に歓迎した。

諏訪子と神奈子も早苗の良き友人であり、自分達の声を聞ける西

宮に対しては好意的であった。

しかし十年近くの時が経過して今、聖戦当時からずっと変わらず
早苗と西宮の仲は　　すこぶる悪かった。

「つたく、このぐらい自分でやれよ……わざわざ俺を呼ぶな、アホ
東風谷」

「誰がアホですかバカ西宮。神事を手伝わせて貰っているんだから
信者として泣いて喜びなさい！」

ある日の夕方、守矢神社の敷地にて。

木の棒の先に白い紙をくくり付けた祭具である大幣おおぬひを手にご立腹
なのは、学校から帰って来たばかりで学生服姿の東風谷早苗である。
ぶんすかという擬音が付きそうな様子で大幣を振り回して指示を
出す先には、同じく学生服姿の西宮丈一が注連縄を神木にくくりつ
けて行く。

この十年近くで二人の容姿も随分と変わった。

早苗は緑のかかった髪を長く伸ばし、自らが仕える二柱を象徴す
る蛙と蛇の髪飾りを付けている。

姿形は随分と女性らしくなってきたが、二柱に言わせると『まだ
まだお転婆』らしい。

ただ、最近は学内外の男子から告白されるなどの事も増えて来た
ようだ。

一方の西宮は、随分と背が伸びたというのが最大の成長だろう。
外見は早苗と同じ年にしては随分と大人びて見える。

平たく言えば長身で黒髪の糸目の少年だ。細められた糸目は一見
して温厚そうだが、外見を裏切って彼自身はかなり口は悪い。

当人曰く、早苗との言い争いで培われたスキルらしい。

そもそもこの二人の関係たるや、早苗は例の一件以来西宮を『自分と一緒に二柱に仕える後輩』として先輩風を吹かしたがるが、西宮がそれに対して反発するの繰り返しだ。

西宮はあの一件以後は二柱と交流を得るようになり、それを経て二柱を信仰するようになったが、早苗に対しては初対面が初対面だったせいも、『守矢の巫女』ではなく『ワガママな学友』として扱っている気が強い。

巫女として指示をしたがる早苗と、学友としての感覚で彼女と接している西宮だ。互いの感覚が噛み合わずに衝突するのはしょっちゅうであつたし、それこそ小学校の低学年までは殴り合いも多発した。

ちなみに基本的には早苗の全勝であつた。後に非想天則なるものが出来た折には神力でその身を強化していたとはいえ、妖怪や鬼と肉弾戦を演ずる風祝である。

単純な身体能力では劣るものの、格闘戦のセンスも並ではなかつた。

その互いに反発しあふ関係が破綻しなかつたのは、守矢の二柱が喧嘩の度に仲裁するのもあるだろうが、やはり彼ら自身の性質が大きいだろう。

神の存在を信じていなかったが、自分が軽い気持ちで相手が大事にしているものを蔑ろにしてしまったと気付いたが故、謝りに行かねばならないと思い神社に行く。その事例からも分かるように、西宮は口こそ悪いが根の部分では相手を気遣うタイプだ。

後述する家庭の事情も関わってくるのだが、些か斜に構えた面が強いが思慮もこの年齢にしては深く、大人びている。

対する早苗は一見すると真面目で礼儀正しいが、思い込みが激しく暴走すればどこまでも走って行ってしまう暴走直情型だ。

しかし暴走癖こそあるが、基本は優しく思いやりがあり真面目な性質の持ち主だ。故に自分に非があつて西宮を怒らせた時は二柱に諭されて頭さえ冷えれば、自分の非を認める事が出来る。そして非さえ認めれば相手に謝る事が出来る人間だ。

要は互いに何度喧嘩をしても相手を許せる程度には甘い人種だったのである。

互いにぶつかり、非がある方がそれに気付いて謝り、謝られた側は許す。

そしてまた暫くしたら、詰まらない事で喧嘩する。

神奈子や諏訪子が呆れるほどに、早苗と西宮はそれを繰り返して来ていた。

「……ッと、これでよし。確認頼む、東風谷」

「ええ。 うん、問題無さそうですね」

そして十年近く繰り返して現在。

神木に西宮が結んだ注連縄を早苗が確認し、OKを出した。

最近になって一子相伝の秘儀を受け継ぎ、正式に守矢の風祝として認められた早苗。しかしやはり現代女子高生、力仕事は苦手分野であつた。

太く長い注連縄を持ち運び結び付けるような、こついった力仕事主体の神事は西宮がヘルプで呼ばれる事が多い。

神事を部外者に手伝って貰つて良いのかという葛藤も早苗の内には無いでもなかつたが、その神である二柱直々に許可が出るにあつて、それ以降早苗は力仕事には積極的に西宮を呼び出すようになっていた。

また、その関係が続く中で変わった事と言えば、彼らが互いに苗字で呼び合うようになった事か。

本当に小さい頃は『早苗ちゃん』『丈一くん』と呼び合っていたのだが、いつの間にやら互いの呼び方は苗字となっていた。幼児期から少年期に移る間に発生した照れが原因だというのは、守矢の二柱の共通見解である。

「しかし、どうしたんだこの注連縄。なんぞ新しい神事でもやるのか？」

「ええと……神奈子様のご指示です」

神木に巻いた注連縄を見ながら、巻いた当人である西宮が首を傾げる。

神社を囲むように敷地に巻かれた注連縄は、これまで無かった新しい物だ。

何の意味があるのかと問うた西宮に、早苗は僅かに口を濁す。

西宮はそれに疑問を覚えたものの、神奈子の名前が出たので追求を取り止める。

早苗が二柱に関して嘘を吐かない事は知っていたし、その程度には彼は声しか聞こえない二柱の神々を信頼していた。

「ふうん。なら良いけど……お前また信仰得ようとして暴走して変な事するなよ？」

「失礼な！ そんな事しません！」

「やりかねないから言ってるんだよ。小学校二年生の給食時間、放送室をジャックして参拝を要求する放送を流したお前を俺は生涯忘れん。お前はあの時英雄だった。負の方向で」

「……………」

そして余った注連縄を肩に担ぎ、西宮は先に立って守矢神社の本殿へ歩いて行く。

早苗に対して軽く釘を刺した上で、ついでにからかうことも忘れない。過去の黒歴史を掘り返された早苗、反撃の言葉も思い浮かばずに彼の後ろをついて行く。

故に西宮は分からなかった。

からかわれて怒っているかと思われた早苗が、怒りの表情でもやり込められて拗ねた表情でもなく、どこか痛みを堪えるような寂しげな表情を浮かべていた事を。

しかしその表情も一瞬。

早苗は軽く頭を振って、前を歩く西宮に声をかけ直す。

「まあその話題はそこで終わりとしまして、戻ったらお茶でも淹れますから休んで行って下さい」

「ありがたく。ああ、そっぴや今日は親父さんに晩酌誘われてるんだよな。お前からも親父さんに言ってやってくれよ。俺未成年だつて」

「お父さんは息子が欲しかったって言ってましたからね」

「その場合はお前が俺の姉か妹か。未来が見事なまでに絶望色だな。……ま、実家よかマシだろうけどよ」

どこか本気の香りがする早苗の言葉に西宮が苦笑する。

先述した通り、彼の家は些か複雑な家族事情がある。複雑とかある意味陳腐とも言えるが 母が死に、父が再婚し、再婚相手と父との間に生まれた子供にとって彼は邪魔者であるという、それだけだ。

良くドラマなどで見る展開だと、十にもならぬ年で彼は早苗と二柱の前で苦笑しながら言い放った。その姿には家族に対する情は見

えず、どこまでも自分が置かれた状況を客観視した上での諦観があった。

邪魔とはいえど、積極的に排除されるわけではない。

必要な物があれば買って貰えるし、殊更に暴力を振るわれるわけでもない。

ただ家族との間に明確な壁があり、まるで同じ家に住んでいるだけの他人のような冷たい関係である。それだけだ。

「ぶつちやけこつちの方が実家って感じがするわ。親父さんもお袋さんも良くしてくれるしな」

「……言い切りますね」

「事実だしな」

しかし、からからと笑う彼の表情に暗い影は見られない。

既にそれならそれで仕方ないと、良くも悪くも前向きに割り切っている表情だった。

彼がそんな家庭環境でも、多少斜に構える程度の人格の歪みで済んでいたのは守矢神社の人々と神々のお陰だろう。

幾度となくぶつかり合いながらも、最も腹を割って話せる友人である早苗。

深い慈愛を持って早苗と西宮を見守ってくれた神奈子と諏訪子。

そして両親との関係が冷め切っている彼にとって、まるでもう一組の両親であるかのように接してくれた早苗の父母。

彼らの存在が無ければ、西宮丈一という人間はもっと暗く鬱屈し、歪んだ人格を持っていたに違いあるまい。

「西宮」

「ん？」

そして、そんな西宮に対して早苗は不意に　　しかし、いつになく真面目な声で問いかける。

「私のお父さんとお母さんの事は、好きですか？」

「はあ？　何をいきなり　　」

「答えて」

唐突過ぎる質問に彼は困惑の声を返すが、その声を断ち切る早苗は真剣そのものだ。

故に西宮は困惑しながらも、この質問が何らかの意味を持っていると直感する。それも早苗にとっては大事な意味が、だ。

「……好きだよ。俺にとっちゃウチの両親よりあの二人の方が両親らしいさ」

「そう。……良かった」

そして彼女の問いかけと同じくらい真剣な声で返された言葉に、早苗は安堵の笑みを浮かべた。

これで懸念は無くなったと。

そうとでも言うように、安心しきった笑みを浮かべたのだ。

「……東風谷？」

「さ、早く行きましょう。お父さんってば、もうお酒を用意して待ってるかも。西宮も未成年なんだから、断るときは断るようにして下さいね？　お父さんが調子に乗らないように！」

その様子に漠然と嫌な予感を覚えた西宮だが、早苗は彼の横を抜けて追い越し、神社へと歩いて行く。

「あ、おい…… ったく、何だつてんだよ」

その様子に面を食らった西宮は、それ以上を追求する機会を失って彼女を追う。

或いは西宮の靈感がもつと強ければ、二人の様子を離れて見守っていた二柱の神に気付いたかもしれない。

しかし神事に関わり早苗の修行に付き合った結果、多少なりとも能力は磨かれたが 彼の進歩よりも更に速い速度で信仰が薄れた二柱を見る事は、彼は一度も出来ていない。

故に彼は彼女達の姿に気付かず、神奈子と諏訪子は神社へ向かう早苗と西宮の背を見送り、二人の姿が完全に見えなくなったのを確認してから声を出す。

「…… 大丈夫そうだね。早苗が私達と一緒に幻想郷に行っても、丈一が居れば神社の方はどうにかなる」

「だが、諏訪子。本当にこれで良いのか？」

「なにさ神奈子。もうこの地での信仰は望みようが無い。だから幻想の世界に望みを賭けようと言ったのはアンタじゃないか」

「そういう意味ではない。早苗を連れて行く事、そして丈一には何も告げずに行く事だ」

「ああ……」

幻想郷 妖怪の賢者が創ったと言う、人と妖怪が共に生きる一種の理想郷だ。

忘れ去られ幻想となった存在が辿り着く場所。数ヶ月前、彼女達はその妖怪の賢者から直々にその地へ来ないかと勧誘を受けたのだ。

向こうは幻想郷内のパワーバランスを考えて。神奈子と諏訪子は失った信仰を取り戻す可能性を求めて。

そのような意図から彼女達は这个世界に見切りをつけて、胡散臭い妖怪の賢者の勧誘に乗って幻想郷へ向かう事としたのだがそこで彼女達にとって予想外が一つあった。

『お二柱ふたりが行くなら私も行きます！』

と、別れを告げる心算で幻想入りを伝えたところ、彼女達の風祝である早苗が力強くそう宣言してしまったのだ。

当初は慌てて早苗の説得を行った神奈子と諏訪子だが、早苗の熱意と覚悟にまずは神奈子が、そしてやや遅れて諏訪子が折れた。

彼女達としては早苗には人間として幸せに生きて欲しかったのだが、そう説いた所で『私の幸せは私が決めます』と胸を張って言い切られてしまったのだ。もう何を言っても無駄。小学校にて放送ジャックまで行った信仰暴走機関車早苗さんは、彼女達には止められなかった。

かくして早苗も幻想入りする彼女達について行く事になったのだが、そこで問題となるのが彼女の両親だ。

彼らには認識できない神奈子と諏訪子とはもかくとして、早苗が消えてしまう事は彼らにとっては絶大なショックだろう。

或いは胡散臭い妖怪の賢者ならば何か良いフォローが出来るのかもしれないが、その事を妖怪の賢者に聞く前に早苗が告げたのが西宮の存在だ。

『西宮は私の両親にとって、もう一人の子供のような存在です。彼も私の両親を好いてくれていますし、神事の知識もある。私達が居なくなっても、彼が居ればきっと大丈夫でしょう』

その言葉の中には信頼と申し訳なさとししみと、それ以外にも彼女が理解している物、理解していない物まで含めて多くの感情が含

まれていた。

彼を巻き込むつもりは無いというのが早苗の意見であり、結局は神奈子と諏訪子もそれに同意した形だ。

後事を全て押し付ける形になるのは申し訳ないが、暴走傾向の早苗に比べて神力や霊力はともかくとして世事には格段に長けている西宮だ。どうにかなるだろうというのが早苗の意見だった。

「……丈一にも、早苗にも悪い事をするね」

「そうだな。私は早苗が神社を継ぎ、丈一がその補佐。後は二人の子供が継いでいくかと想像を巡らせていたのだが」

「どうだろねえ。五年十年先でも友人関係で丁々発止とやり合ってる気もするけどね、あの二人は……あと十年放っておいたらどうなったかねえ。ちょっと気になる所だけど、それが見られる可能性も無くなつた……というか、私達が消しちゃったんだけどね」

「私達の都合でな。我儘なものだ」

「神様失格だね」

「神とは我儘な物だろう。とはいえ、信者にこの仕打ちだ。神失格は同感だな」

諏訪子と神奈子は、早苗と西宮が去って行った神社の方角を見やっつて苦笑する。

守矢神社が丸ごと幻想郷に入る、その数時間前の話だった。

#

その夜遅く、早苗は自らと自らの両親が住む母屋を抜け出した。

目的地は自身が仕える二柱の神が居る本殿。

その周囲には西宮をこき使い　もとい、西宮の協力を得て張

り巡らせた注連縄がある。

注連縄に囲まれた範囲を幻想郷に移動させる、神奈子と諏訪子と早苗によるこちらで起こす最後の奇跡だ。

自らが生まれ育った家に深々と一礼する。

母屋には両親と、そして子供の頃から一番長く深い付き合いであった西宮が居るのだ。

結局父の晩酌相手にされて、そのまま泊まらせられる事になったらしい。これなら自分が居なくても大丈夫だろうと、安堵と一抹の寂しさと共に、早苗は母屋に背を向けた。

「……良いんだね？」

「もう戻れないよ？」

「はい」

そして本殿に待っていたのは、紺色の髪を持つ注連縄を背負った大人の女性　軍神・八坂神奈子。

その隣に座るのは、神奈子とは対照的に小柄な少女の容姿をした崇り神・洩矢諏訪子だ。

最終確認とも言える両者の問いに、早苗はしっかりと頷いた。

「大丈夫です。私はお二人の風祝ですから」

「……そうか」

「ありがとう、早苗」

早苗の言葉に神奈子が、そして諏訪子が頷く。

そして早苗が手にした大幣で印を切り、神奈子と諏訪子が自らに残った神力でそれを補助する。

彼女達の全ての力を使って起こす奇跡。それはこの神社ごと、彼女達を幻想の世界へ飛ばす物だ。

そう、全ての力である。

故に彼女達は気付かない。全ての力を注力しているが故に、気付かなかった。

「……東風谷の奴、様子がおかしかつたんだよな。神奈子様と諏訪子様なら何か知ってるかもしれないねーし……」

家人が寝静まるのを待ち、神奈子と諏訪子に早苗の不自然な様子について聞く為に本殿へ出向こうとしていた西宮に、彼女達はまるで気付かない。

彼が注連縄の範囲を越えて　　つまりは幻想郷に飛んでしまう範囲に入った事にも、彼女達は気付けない。

「　　行きます!!」

そして早苗の声とともに奇跡が発動する。

神社の周りが光に包まれ　　そして幻想郷、妖怪の山と呼ばれる場所へと移ったのだ。

これを奇跡と呼ばずに何と呼ぶのか。

そして

#

「ようこそ幻想郷へ。そちらの巫女さんとははじめましてかしら？」

私は八雲紫。幻想郷と外界を隔てる結界の管理などを行っていますわ」

「……風祝の東風谷早苗です。巫女ではありませんが、宜しくお願
いします」

そして妖怪の山の頂上に神社が転移したとほぼ同時。

神社の本殿、早苗達三名の前に空間の切れ目が出来、そこから一
人の女性が姿を現した。

リボンだらけのドレスに身を包んだ金髪の麗人。同性である早苗
が思わず感嘆の声をあげるような美女だ。

しかし周囲に纏う空気は大層胡散臭く、それ故に早苗は二柱から
聞いていた『胡散臭い妖怪に誘われた』という幻想入りの動機の原因が目の前の相手に依るものと即座に理解していた。

「すまないね、八雲紫。これから世話になる」

「あーうー……良い空気だねここ。なんか昔の大和を思い出すよ」

「ふふ……気に入って頂けて何よりですわ。後は貴方達が望んでい
た信仰を得られるかどうかは貴方達次第。幻想郷は全てを受け入れ
ますが、それはある意味でとても残酷な事。ですが、私達は
貴方達四人を歓迎しましょう。 改めて、ようこそ幻想郷へ」

「……四人？」

「あら、二人と二柱と呼んだ方が良いのかしら。それとも風祝さん、
貴方は信仰を受ける現人神としての立場もあるみたいだから一人と
三柱」

「……いえあの」

にこやかにその女性 妖怪の賢者・八雲紫が語った言葉に場
が凍りつく。

早苗も諏訪子も神奈子も、別に呼び方に拘ったわけではない。単
純に数がおかしいのだ。

「八雲紫。私のこの帽子は別に本体とかそういうのじゃないから、私と別に数える必要は無いよ？ 時々勝手に八工とか捕食するけど」
「数えません。……え、っていつかその帽子そんな機能あるんですの？ ゆかりん怖い」

諏訪子が一縷の望みを賭けて言った言葉に紫が引き、

「ははは、馬鹿だなあ八雲紫。算数は苦手か？ 良ければ私が教えてやろうか」

「要りませんわ。私これでも数字には強い方ですから。というか、何なんですか貴方達？」

神奈子が頬に汗を流しながら言った言葉に紫が怒るより先に困惑し、

「あの……まさかとは思いますが」

「……だからどうしたのよ貴方達。何か変よ？ それとも元からこうなの？」

早苗が顔面蒼白で呟いた言葉に、慇懃な態度を取るのすら止めて紫は問いかけた。

基本的に初対面かそれに近い相手には慇懃 或いは慇懃無礼な八雲紫であったが、そんな彼女をして慇懃な態度を忘れさせる程度には目の前の三名は挙動不審だった。

祟り神は頭を抱え、軍神は冷や汗を流し、現人神は顔面が蒼白である。果たして何があったのかと思う妖怪の賢者に対し、三名を代表して早苗が絞り出すように質問した。

「……あの、この場の三名以外にも誰か一緒に来ちゃってるんですか？」

「え？ 何かそれなりの霊力纏った男の子が居たから、貴方達の関係者だと思って藍　　私の式神にそっちへ向かわせたんだけど」
「……………」

質問に答えた紫に、しかし返って来たのは沈黙だった。

祟り神が頭を抱えて地面に伏し、軍神が滝のように冷や汗を流し、現人神の顔色は蒼白を通り越して生物学的に有り得ない色になっている。

沈黙が重いを通り越して痛い。藍助けて何かこの人達怖いと、紫も内心で冷や汗を流す。

「……………あの、本当にどうしたの」
「や……………」

沈黙に耐えかねて声をかけた紫。
しかしそれを遮るように、土気色の顔色をした風祝が声を上げた。
そして次の瞬間

「……………やっちやっただあああああ！！？」
「ひっ！？」

軍神・祟り神・現人神がムンクの叫び宜しく絶叫する光景に、妖怪の賢者八雲紫は思わず悲鳴を上げてしまったのだった。

#

「……………コスプレですか？ 良い尻尾ですね」
「は？ えーと、うん、ありがとう？」

そして同刻。

本殿から少し離れた神社の敷地にて、九尾の狐である八雲藍が現
状を全く把握していない西宮と間抜けな会話をしていた所だった。

第二話：幻想入り（後書き）

相変わらず自分の書く小説は説明臭い部分が多くなると思った今日この頃。

第三話・宗教戦争（打撃）（前書き）

割と今回も捏造設定満載です。

風神録の入りとか、この小説ではこういう感じで始まるのかー、などと納得して頂ければ嬉しいです。

第三話：宗教戦争（打撃）

守矢神社の幻想入りからおよそ一時間。

妖怪の山から神社のある山頂へと、『何が起こったのか』と天狗や河童が様子を見に来るも、それらを紫が結界で完全にシャットアウトした結果、守矢神社の中には何者も立ち入る事が出来ない状況が作られていた。

天狗などは妖怪の賢者が外から連れて来た神と何か陰謀でも企んでいるのかと激しく議論を戦わせながら状況を見守っているが、それを聞けば当の妖怪の賢者　　八雲紫は乾いた笑みを浮かべるしかないだろう。

今現在守矢神社の中で起こっているのは、紫と神による陰謀でもなんでもない。

ただの人間による神様三名（うち一名、現人神なんで半分くらい人間）に対するスーパーお説教タイムだった。

この状況の始まりは一時間ほど前。

事情をあんまり理解しないまま藍に連れられて本殿にやって来た西宮と、これまた事情をあんまり理解出来ていなかった藍。

その二者が本殿で見たのは、ムンクの叫びみたいな勢いで絶叫する神×3と、その光景にビビる妖怪の賢者（涙目）だった。

阿鼻叫喚の地獄絵図。それは西宮の姿を神×3が視認した事で加速する。

「済まない丈一！ 私達のせいだ、私達のせいだ！！」

「ごめんよ丈一いいいい！！」

「誰！？ あんたら誰！？　なんで涙流しながら抱き付いて来てんの！？？」

巻き込んでしまったという立場から、西宮に縋り付くようにして謝罪の言葉を叫ぶ神奈子と諏訪子。

しかし思い返して欲しい。西宮の霊力では彼女達の声を聞く事は出来ても姿は見えなかったのだ。

幻想の存在が集まるこの地に来た事で、ある程度力を取り戻して視認可能になった二柱。彼女達の姿が初見である西宮もまた、見知らぬ美女と美少女に名前を呼ばれながら抱きつかれる状況に思う存分に混乱する。

唯一事情を知っておりこの状況を收拾できそうな現人神は、受けたショックが神奈子と諏訪子以上だった様子で、四肢を地面についで落ち込んだポーズからガンガンと頭を地面に打ち付ける反復運動を開始していた。

そして第三者である八雲紫と八雲藍はというと、

「……藍」

「……なんでしょうか紫様」

「……私怖い。何この状況」

「……その二柱は紫様が呼んだんでしょ。私に言われても困りますよ」

などと言いながら、壁際でその阿鼻叫喚を見守っていた。

紫などは理解不能な奇行を繰り返す三柱に腰が引けている。正直言うと今すぐ帰りたいが、幻想郷を愛する彼女の心がこの場からの離脱を押し留めていた。

結局その騒ぎは西宮が声と口調から相手が神奈子と諏訪子だと気づき、両者を宥めるまでの5分の長きに渡って続く事となった。

そして正気を取り戻した神奈子と諏訪子が宥められて正気を取り

戻し、地面に頭を打ち付ける反復運動を行っていた早苗も含めた三者で西宮に事情を説明　　した所で西宮が怒った。

「……成程。つまり俺を除け者にして三人楽しくキャツキャウフフとこの幻想郷に来る為の計画を練っていたと」

「いやあの、そんなキャツキャウフフとか楽しそうな要素は何処にも」

「少し黙って頂けますか諏訪子様」

「アイ・サー」

温厚そうな糸目を見開き、額に青筋を浮かべてガンを飛ばす西宮。対する早苗も含めた三柱は仁王立ちする西宮の前に正座する形だ。

そして反論をしようとした諏訪子が即座に白旗を上げる。完全に力関係が今この時限定でどっか可笑しくなっていた。

「ぶっちゃけそれ自体はどうでも良いんですよ。それで諏訪子様と神奈子様が平和に暮らせるってんならむしろ歓迎なんですよ、ええ。でも何が腹立って、完全に除け者にされた事が腹立ちますね」

「し、仕方なかるう。早苗も丈一も人間だ。早苗には幻想郷に私達を送る為に協力して貰わないといけないから事情を話しただけで、本来であれば」

「神奈子様、東風谷に話した時点で俺にも話して欲しかったって言うのは我儘なんでしょうね。能力的にも東風谷が上なのは分かるし、神奈子様と諏訪子様への縁で見ても東風谷は俺より上だ。東風谷の協力が無いと神奈子様達はここには来れなかった。俺はぶっちゃけ役には立たなかった。だからそこは俺の力不足。仕方ないって納得しましょう」

溜息を吐きながら西宮が言った言葉に、諏訪子と神奈子がほっと息を吐く。

とりあえず黙っていた事に関しては許されたと察したのだろう。残りの問題は巻き込んでしまった事だが、

「あ、巻き込まれた事に関してはどうでも良いです。むしろ良く巻き込んでくれました。俺だけ残されるとか冗談じゃなかったんで」

「……そ、そうか……」

「え、えーと……それじゃ丈一、私らどうすれば良い？」

「とりあえずそっちの美人さん二人と一緒に端で座って下さい。」

あ、御尊顔は初めて見ましたがお二人も美人ですから安心して下さい
「い」

「……うん、ついでみたいに言われても全く嬉しくないけどありがとう」

さすがごと壁際に居る美人さん二人 即ち八雲紫と八雲藍の所まで退避する諏訪子と神奈子。

『お疲れ様です』『あ、どうも』と全く中身の無い挨拶をしながら、二柱は二人の横に座る。

そして横に二柱が座ると同時、紫が器用に正座のまま『すすすすと移動して二柱のすぐ近くまで近寄り口を手前に居た諏訪子の耳元に寄せた。

「話を聞いてた所によると、あの少年は貴方達がここに来る時の予定には入っていなかったみたいですね」

「うん。……早苗の同級生で西宮丈一。たまたま私達の声が聞ける程に霊力が高くて、色々あって私達の事も信仰してくれてたんだよね」

「外の世界でそれほどの霊力持ちは珍しいですわ。だから幻想郷に来た時に一緒に連れて来た信者かと思ったのですけど」

「確かに私が見た限りでもここ五十年くらいでは、早苗を除けば丈一が一番その辺の素養は高かったかな。ここではどうなんだかは分

「からないけど」

「幻想郷においての基準で見れば、『結構優秀』といったレベルの霊力ですわ。鍛えればそこその線には行けるかと」

ぼそぼそと小声で話す祟り神と隙間妖怪。

その二人の目線の先では、早苗が正座で西宮に向かい合っていた。

「さて東風谷。お前が一番腹立つんだよな、俺的に」

「……………」

「御二柱ふたりは良いさ、仕える相手だし、俺の霊力だと声を聞く程度が精々だ。幻想郷だっけ？ここに来るのに俺を置いて行くっつー判断も分らないでもない。けどお前にまで除け者にされたのは感情論的に腹立つわな」

「……………話したら、絶対について来ようとするじゃないですか」

「当然だろ。向こうに未練は　まあ友人関係とお前ん家関係で無いでもないが、実家が実家だしな。あんまり無いし」

「貴方が居たから、私はお父さんとお母さんの心配をしないでこちらに来れると思ったのに！」

「そりやお前、傲慢つてもんだろ。ウチとは違ってお前んとこの御両親はお前の事を大事に思ってる。俺じゃ代わりにやらねえよ」

「貴方だって今や似たような物ですよ！　貴方まで来てしまって、どうするんですか向こうの神社！」

「逆切れかよ！？　つーか神社云々言うならお前この神社ごとこっちに飛ばしたんじゃねえのか！？　向こうの神社本殿無しで何をやらせるつもりだったんだ！？」

「……………あ」

「かなり考えないと辿り着かないのかお前は！？　ああもう相変わらず馬鹿だなあお前はよオ！！」

「馬鹿つて言う方が馬鹿なんですよこのド馬鹿　　っ！！」

「ンだとコラアアアア！！？」

そして責めるような西宮の言葉に反発する早苗。

そこから始まる彼らにとってはいつもの　　ただし八雲家の二人からすれば非常に見苦しい　　言い争い。

現人神と信者Aが口汚く罵り合うその様子を見ながら、横でドン引きの隙間妖怪を完全放置で諏訪子がそつと目元を拭う。

「ああ、早苗……こっちに来てもあんなに楽しそうな姿を見せてくれるなんて」

「あの、洩矢さん？　アレ凄い激怒中に見えますけど。しかも逆切れで」

「諏訪子で良いよ。いや早苗は昔から真面目すぎて空回っちゃう子だったからね……こっちに来てもちゃんと友人が出来るかが不安だったんだよ。けど、丈一が来てくれたんならそれは心配無くなったなあ、とね。……あ、でも向ここの神社どうしょ」

「……ええと、では諏訪子さんと呼ばせて頂きますわ。っていうか諏訪子さん、なんか貴方のところの信者、現人神へ向けて物凄い勢いで中指立てて挑発キメてますけど。やだ、下品なハンドサイン。ゆかりん怖い」

「歳考えて下さい紫様」

ぼそりと突っ込んだ藍の足元に隙間が開き、悲鳴と共に九尾の狐はその穴に落ちて行った。

そんな彼女を一顧だにせず、紫は諏訪子とその横の神奈子に目を向ける。ちなみに神々も落ちて行った九尾を気にもかけずに、自分達の風祝と信者の元気なじゃれあい（神々主観）を見ながら満足げに笑っている辺り肝が太い。

そして紫は神奈子と諏訪子に向けて口を開く。どうやら彼女は罵倒合戦を繰り広げる現人神と信者Aは意識的に気にしない事にしたようだ。彼女達に構って話が進まない事に気付いたただけとも

言う。

「……ん、ごほん。神奈子さん、諏訪子さん。私から一つ提案がありますわ。貴方達も知っての通り、私は外界とここを行き来出来る。向こうの神社とあそこの風祝の両親に対する何らかのケアを条件に、一つやって欲しい事があるのです」

「やって欲しい事？」

「なんだい？ それは」

そして居住まいを正した紫からの言葉に、諏訪子と神奈子も真剣な表情でそちらに向き直る。

双方共に気付いたのだろう。彼女達を幻想郷に呼んだ八雲紫の目的が、これから語られる話の内容であると。

「貴方達には幻想郷のルールに従い、異変を起こして欲しいのです。より正確には、異変という分かり易い形で力を示して欲しい。」

この妖怪の山の力を示し、パワーバランスを正す為に」

「つまり私達にこの妖怪の山とやらの勢力の一部になれと？」

「そうなりますわ。山の中で貴方達がどういう立場になるか山を統べる事になるかそれ以外かは任せます。とにかく外からの力であろうとも、この山にも今だ巨大な勢力がある事をこころで示すべきなのですわ。紅魔館、永遠亭　今の幻想郷では外から来た勢力がパワーバランスの一角を担っておりませんが、それに対して古参である妖怪の山の勢力がやや落ち目なのです」

口元を隙間から出した扇子で隠しながら、紫は語る。

それは境界の管理者として、幻想郷の現状を憂う本心だ。

ここ最近　スペルカードルールの制定以後に発生した異変を鑑みると、まずは紅魔館、そして白玉楼と永遠亭という順番である。

白玉楼　の一件に関しては西行妖を咲かせようとした時は肝

が冷えたが、基本的に白玉楼の主である幽々子は親紫側で幻想郷において古参だ。ここは良い。

ただ問題となるのは紅魔館と永遠亭。

両者ともにこの幻想郷を破壊するような真似はしないだろうが、外から来た両者が異変を以て力を示し、古参である妖怪の山がノーアクションのままというのは好ましくない。

ある程度の均衡は必要である。そう考えて紫が勧誘したが、外界で力を失いかけていた守矢の二柱だ。

閉鎖的で自分達から異変を起こそうなどとはしない天狗に代わって、妖怪の山の中心となつて異変を起こす。それが出来るだけの力と行動力を持った相手。そう考えて、紫は彼女達を選び。彼女達は幻想郷に来る事を了承したのだ。

「成程。幻想郷内の均衡を保つために、私らに異変を起こして欲しいと」

「ええ。異変の詳細は任せますわ。余りにも問題があるようでしたら一声かけます」

どこか好戦的にやりと笑う神奈子に、紫は自分の見立てが間違つていなかったと確信する。

かつては洩矢の地に攻め込み信仰を奪おうとした行動派の軍神だ。閉鎖的な天狗と違って、積極的に動いてくれるだろう。

未だに神々への信仰／親交が残る幻想郷に来た事で、それなり以上に力は取り戻している。後は妖怪なり人間なりに更に明確に自分を達を信仰させて行けば、往時の力を取り戻す事も難しくはあるまい。そんな神奈子の様子に、隣の諏訪子が苦笑する。

「神奈子はやる気みたいだね。それじゃ八雲紫、さっき言つてた幻

想郷で異変を起こす為のルールとやらを教えて貰える？」

「ええ、勿論ですわ。それはスペルカードルールと言って、人間と妖怪、神々などが対等な立場で挑むそれはそれは美しい決闘法で」

「表に出なさい西宮！ 私は風祝なの！ 平信者の貴方より偉いのです！ それを思い知らせてやります！！」

「おいおいやる気が東風谷？ ガキの頃ならいざ知らず、今となってまで喧嘩で俺に勝てるつもりかよ？」

「ええ、勝てますとも。この地に来てから全身に神力霊力が漲っていますからね。顔面ボコボコにして写メ撮って笑ってやります！」
「言っただなこのやろう！ 泣いても知らねえぞ！！」

両手を広げ、芝居のかかったポーズでスペルカードルールについて語ろうとした紫。

しかし横合いから一際強い声で罵声が聞こえて来た。

どうやら沸点が西宮よりも幾らか低かった早苗が、遂に武力決闘を要求したらしい。対する西宮も、売られた喧嘩を三割増しで買い取って了承。

両者は壁際で話し合う隙間と神などには目もくれず、ずかずかと本殿を出て表へ向かう。

ぴしゃりと開け放たれる本殿の戸。

神奈子と諏訪子、そして両手を広げたポーズのままの紫が見ている前で、早苗と西宮は本殿前の地面で互いに数歩離れた距離で向かい合う。

両者同時にファイティングポーズ。情け無用の戦闘態勢。

「ルールは！」

「金的、目突き、その他急所攻撃の禁止！ あと凶器攻撃も禁止！」

「ラウンド無制限！」

「ファイツ!!!」

そして打撃戦が始まった。

顔面を中心に狙う早苗と、流石に少女相手に顔面やボディ狙いは不味いと思っているのか関節を取ろうと立ち回る西宮。

流石にここまで見苦しい争いに発展したのは、神奈子や諏訪子の記憶を遡っても余り無い。

やや呆然と風祝と信者による格闘戦を見ている三名。
紫がぼそりと呟いた。

「……まあ、アレに比べれば本当に美しく、穏当なルールですわ」

「うん、アレ以下を提示されたら流石に私も引くわー」

「正直それだったら、私も異変を起こすのを考え直すレベルだな」

三者三様の酷評など露知らず、風祝と信者は打撃戦を繰り広げていた。

早苗の宣言通り早くも顔面をボコボコにされながらも、西宮が早苗の腕を取る。

「っしや捕まえた！　ここから関節極め」

「がぶうっ!!」

「っづあああああ!?　噛んだ、この風祝噛みやがったアアアアア
!?!?」

噛まれて思わず手を離れた西宮の顎に、腰を落とした早苗のシヨ
ートアッパーが突き刺さる。

ぐらりと身体が崩れかけた所に、身を翻しての追撃のソバット。

こめかみを踵で打ち抜かれて、西宮がどさりと地面に転がった。

両手を掲げ勝利を叫ぶ風祝。その姿は御両親が見たら泣いちゃい

そうなくらい雄々しかった。

「……彼女達にも後でルールを教えましょう。異変の中であんな事をされたら、私はただ困るしかありませんわ」

「噛みつきは流石に引くわー。年頃の少女としてそれはどうよ早苗？」

「まあ、軍神としては分からんでもない戦術だったな。原始的にも程があるが」

かくして雄叫びを上げる風祝を見ながら、二柱と隙間妖怪による異変に関する相談は進んでいく。

この際に早苗に事情の詳しい説明があれば後の悲劇は防げたのかもしれないが、神奈子も諏訪子も、そして妖怪の賢者と呼ばれる紫ですらこの時は知る由もない。

幻想郷のパワーバランスや状況などを詳しく聞かされないままスperlカードルールについてだけを聞かされた早苗が暴走し、博麗神社に突撃をかける数日前の話。

彼女達にとっての幻想入りは、こうして始まったのだった。

第三話・宗教戦争（打撃）（後書き）

書き溜め分は今回で終了。

ある意味プロローグ部分でした。

紫様がなんか苦勞人チックに。そして神々もドン引く宗教戦争（打撃）。

一応西宮は殴らずに関節技などで対処しようとしています、当然敗北。

ちなみに手加減抜きでやっても勝てません。力関係は早苗＞西宮なのでした。

第四話：布教活動の前に（前書き）

あんまり話が進まない不具合。

とりあえず風神録開始までの数日間を数話使って描く心算です。

まずは布教に行く前に。今回は少し短めです。

主人公である西宮君の才能や思考、立場についてなどの説明回でもあるかも。

第四話：布教活動の前に

「凄い！ 私飛んでますよ、見てくれますか神奈子様、諏訪子様！」

幻想入りの翌日。早朝の妖怪の山頂上、守矢神社にて少女の嬉しそうな声が響き渡っていた。

現人神・東風谷早苗。人生初の飛行体験である。

幻想郷に入る前は空を飛ぶ事など出来なかった彼女だが、幻想郷に入った事で彼女が元々持っていた霊力・神力が強化された事と相まって飛行が可能となったのだ。

それを地上、神社の縁側から眺めるのは彼女に飛び方を教えた諏訪子と神奈子、そして八雲紫の三名だ。

紫が何故まだここに居るのかに関しては二つの事情がある。

まず大きな事情として、妖怪の山の住人 特に実質的に山を支配している天狗に対する説明と仲介だ。

いきなり山にやってきた神社と神々。それが巨大な力を持っているとなれば、天狗社会側の混乱は想像に難くない。排除を叫び出すのは目に見えている。

しかし紫としても、ここで天狗に譲歩する心算はない。

妖怪の山が紫の進言を聞き入れて異変を起こせば面倒は無かったのに、彼らが何の動きも見せないがために、妖怪の山の力を増す為にならざる神社と神々を引っ張って来る羽目になったのだ。

故に彼女はやや皮肉を込めた物言いと共に天狗達と神社の間に立ち、守矢神社のこの地への居住と布教活動を認めさせた。

境界の管理者にして妖怪の賢者、八雲紫。実質的な幻想郷の管理

者である彼女の仲介と、加えて神奈子と諏訪子が幻想入りした事で復活した神力を見せつけた事が大きかったのだらう。

天狗達は渋々ながら、神社がこの山頂に陣取る事と布教活動を行う事を認める事となった。

ちなみにその話し合いは基本的に神奈子、諏訪子、紫が行っており、早苗は神社の奥でボコボコになった西宮の写メを撮っていた。

これは別段彼女がサボったわけではなく、神力霊力ならばまだしも交渉云々に関しては未熟な早苗を天狗達との交渉の場に出せば、交渉の際に付け入られる隙になりかねないという判断があったからだ。

紫が仲介に立っている以上そうそう無いだろうが、天狗側から神奈子や諏訪子に暴言などが飛び出した場合にはこの風祝は激発し兼ねない。

幻想郷ならばある程度話が纏まった後ならば笑い話で済むような事でも、ファーストコンタクトでやっては致命的だ。

結果、早苗はどうせ充電した分が切れれば使う目途も全く無い携帯電話を存分に使い、自分が倒した西宮の姿を写メに収めまくって時間を潰す事となった。

ちなみにほぼ同刻。引き籠りのとある烏天狗が念写を行った際に自分のカメラに写った見知らぬ男のボコボコの顔を見て悲鳴を上げる事になるのだが、本筋には全く関係無いので割愛する。

ともあれそんな天狗達との交渉の翌日である今現在。

早苗は神力や霊力の扱いを脅威的と言って良い速さで掴み、自由自在に幻想郷の空を飛んでいた。

地上から見上げる神奈子と諏訪子は感無量といった様子で早苗の姿を見上げている。

「いやあ、流石早苗だよ。こつも早く飛行のコツを掴むなんて」

「スペルカードや弾幕勝負も、すぐに出来るようになるだろう。やはり私達の風祝だけの事はあるな」

「親馬鹿ですわね」

そんな両者をジト目で見つっ、紫はぼそりと呟いた。

そしてそのまま視線を横にスライド。神社の本殿でメモ帳を手に行っている少年に目を向ける。

西宮丈一。顔面に湿布と包帯を付けた守矢神社の信者Aは、先程まで早苗と一緒に飛ぶ練習をしていたのだが、早苗ほどの才能は無いようだった。

早苗が『浮く』のではなく『飛ぶ』の領域に足を踏み入れた所で、ようやくと『浮く』事が出来た程度だ。その辺りで練習に見切りをつけ、早苗の練習を諏訪子と神奈子に任せ、西宮自身は紫に幻想郷内の事について話を請うて来たのだ。

今手にしているメモ帳は、その際に聞いた事がメモされているのだろう。

西宮も決して才が無いわけではないと、紫は思う。外の世界で多少の修行は積んでいたとはいえ、たかが一、二時間程度の練習で飛行術を覚えて『浮く』事が出来るようになっただけでも大したものだ。

霊夢 と比べるのは愚かだろう。歴代博麗の巫女の中でも頭二つは飛び抜けた鬼才の持ち主だ。驚嘆すべき才能を持つ東風谷早苗ですら、彼女に比べると非才となる。

しかしその早苗とて、紫の見立てでは霊夢を除けば歴代博麗に比べても決して劣らない才がある。

僅かな時間の練習で、既に自由自在に空を飛ぶ感覚を身に付けている。事によれば、弾の撃ち方さえ覚えればそのまま弾幕勝負に出

しても良い動きをするだろう。

要は隣に居る相手が規格外なだけで、西宮とて鍛えれば良い線までは行く筈なのだ。

それが自分から練習を切り上げてしまったというのは、紫からすれば少々勿体無い。

「何であっちの子は練習止めちゃったのかしらね。あの風祝さんがあんまりにも才能があるから、拗ねちゃったのかしら？　だとしたら愚かな話ですわ」

視線を西宮に向けたまま呟いた言葉は、彼に向けた物ではない。

音量的にそちらには届かない声で呟いたそれは、隣の諏訪子と神奈子に向けた物だ。

しかし僅かな落胆と多くの揶揄を含んだ紫の言葉に、神奈子と諏訪子は顔を見合わせて苦笑を浮かべた。

「そんな子じゃないよ、丈一は。あれは早苗が舞い上がっちゃってる分、自分はそのフォーローに回ろっつて考えてるだけ。ああ見えてしっかり者だからね」

「早苗はなんというか、こう……香車だからな。良くも悪くも前進しか知らないような子だから、丈一はその分横を固める心算なんだろう。八雲紫、先程あいつがお前に聞いたのは幻想郷内の地理や情勢だろう？」

「ええ、その通りですわ」

「なら確定だ。早苗が布教活動を効率的に出来るように、あいつは幻想郷内での布教の際のアタリを付けてたのさ」

早苗の事を語るのと同様に、誇らしげに胸を張って神奈子が語る言葉に、しかし紫は僅かに首を傾げる。

目の前の軍神はそう言っているが、あの風祝と信者Aの間にそこまでの信頼関係があるのだろうか。紫脳内には彼らの関係は神々と賢者と狐をガン無視で殴り合いをしていた光景しか残っていない。ファーストコンタクトで見たインパクトは偉大だった。

「……まあ、本当かどうかはすぐに分かりませんが。飛び方は問題無くなっただけですし、私は彼女を人里まで案内して行きますわ。そこから先の布教活動には協力も妨害もありませんけど」

「いや、十分だ。助かったよ八雲紫」

「うん、いつかお礼はするよ」

「貴方達を呼んだのは私ですもの。これくらいは当然のアフターケアですわ」

紫が口元を扇子で隠して囁いた言葉に、神奈子と諏訪子は苦笑しながらもう一度だけ重ねて礼を言うと、空を飛んでいる早苗と本殿に居る西宮を各々呼んだ。

早苗が気付いて高度を下げ、丈一がメモ帳とペンをポケットに仕舞って本殿から出て来る。

「お呼びですか、御二柱ふたりとも！ もっと私の飛行技術を見たいんですか！？ 良いですとも！ この早苗、御二柱の風祝として恥ずかしくないスタイリッシュな飛行を」

「だったら俺まで呼ばれる道理は無いだろ。八雲様が帰るから見送りをするとかそういう話では？」

そして西宮の言葉に『そうなんですか？』とでも言うような視線を向けて来る早苗に対し、紫は口元を隠したまま微笑を返す。

「惜しい、中正解ですわ。送るのは貴方達ではなく私。送り先は人里まで。この幻想郷で最も多くの人間が集まる人間の里、最

初の布教先としては最良でしょう」

「あつ、そうか。幾ら飛べても布教に行くのには人里の場所を知らないと駄目ですもんね」

「ええ。本来であればスキマ　私の能力を使えば早いのですけど、それだと道が分からなくなりますから。初回サービスと言う事で、人里まで一緒に飛んで行ってあげましょう。ただ……」

そう、それが紫がこの場に残った理由である『二つの用事』の二つ目だ。

彼女が呼び込んだ神社側に対する最低限のケア。

しかしここで、紫は困ったように西宮に視線を向ける。

浮く程度しか出来ない彼は一体どうする心算なのか、という意図を視線に込めて。

「御二柱は西宮君も呼んでましたが……浮く程度しか出来ないのに、飛んで行くのについて来れます？」

二柱は彼を東風谷早苗の相方として認めているようであるが、果たして本当にそれに見合う器なのか。

それを見極めるような、試すような妖怪の賢者の視線。

対して西宮は苦笑と共に覚えたての飛行術で宙に浮き、そのまま横に浮く早苗に手を差し出した。

「東風谷、頼む」

「あ、分かりました」

短いやり取り。それで全てを了承したように、早苗が頷いて差し出された手を掴む。

そのやり取りに首を傾げる紫に、早苗はにっこりと笑顔を返した。

「紫さん、大丈夫です。浮きさえしてくれば速度に関しては私が引つ張つて行きますから」

「早く布教活動を行うんだつたら、俺が東風谷の速度に合わせられるようになるまで修行するよりこつちが手早いですからね」

「で、人里……つて何かあるんでしょう？ とりあえず広場とかあれば分社立てれば良いですかね？」

「アホか。まずは稗田家つていう有力者の家に。次は人里を守護している上白沢つて人の所に挨拶に行くのが無難だろうな。有力者に話を通してあげば色々やり易い」

「アホ言つな馬鹿。……まあ、じゃあそれで。その辺りは任せます」

そして僅かに目を見開く紫の前で繰り広げられるのは、『打てば響く』と言つた具合のやり取り、即ち今後に関する打ち合わせだ。

早苗が飛行技術を覚えて移動手段を確保し、西宮が最低限の飛行というか浮き方だけを覚えて、早苗への負担を少なくする。

浮き方も分からなければ、早苗が仮に西宮を連れて行く際は彼一人分の重量をずっと支えながら飛ぶ事になる。体力的に厳しかろう。しかし確かに、浮く事さえ出来るならばそれを引つ張つて行くのはさしたる苦ではない。飛行術の初歩で浮きさえすれば、体重はほぼゼロ。風船を引つ張る程度の負担しか、早苗には掛かるまい。

そして最低限の修行で早苗の負担を最大限減らし、次に西宮が取つた行動は紫からの情報収集。

これが無くては確かに人里での、そしてそれ以降の布教活動は手探りの形を取る物となり、効率は著しく落ちていただろう。

二人が自然と取つた分業によつて、言われてみれば確かに非常に効率の良い形で布教活動の準備が整つていた。

紫は先程一度西宮への評価を下げたが、こうして結果を見せられ

て見れば彼は自分の才覚を自覚した上で、拗ねるでもなく冷静に、最も効率良く布教活動が出来る選択をしたのだらうと理解できた。些か暴走するきらいのある早苗の相方として、これ以上の人材はそうは居まい。

「……成程、確かにこれは私が見誤ってましたわ。謝罪しましょう、守矢の二柱」

「へへへ。早苗もそうだけど、丈一も私らの自慢の信者だからね」

紫が微笑と共に諏訪子と神奈子に頭を下げ、諏訪子が胸を張ってそれに答える。

神奈子もその横でどこか誇らしげに笑い、知らぬばかりの早苗と西宮は首を傾げるのみ。

その両者に対して紫は『なんでもありませんわ』と首を振り、声をかける。

「それではそろそろ行きましょう。早苗さん、少々男女が逆な気もしますが、ちゃんと西宮君をエスコートしてついて来て下さいな」
「大丈夫です、昔頃から基本的に私の方が西宮より強かったですから！」

「そうだな、お前は昔から人類というよりゴリラと言った方が正しい気がするレベルで強かったな」

「ふんっ！！」

「オゴっ！？」

余計な事を口走った西宮に対して、早苗が繋いだ手を引つ張る事で彼を引き寄せ、カウンター気味にボディブローを叩き込んだ。

『ぎゃあ』でも『痛い』でもないマジ悲鳴をあげて、西宮が器用に空中で悶絶する。

「……今の早苗さんなら霊力と神力で身体能力を強化すれば、ゴリラくらいなら倒せる気もしますわ」

「凄いな早苗、エイプキラーだよ！」

「嬉しくありません！ 諏訪子様まで西宮みたいな事を言わないで下さい！！」

諦観交じりの呆れた溜息を吐く紫の言葉に、諏訪子が目を輝かせる。

早苗はそれを否定するものの、空中で痛みをよじる西宮を見ると否定し切れた物ではないと思う紫だった。

「……というか貴方も挑発するような事を言わなければ良いでしょうに」

「……や、八雲様。……お、お言葉ですが東風谷をからかうのは俺のライフワークの一種でして、それを怠ると最悪身体が内部から爆発します」

「どつという構造してるのよ貴方」

悶絶しながらの西宮の返答に、呆れ果てた声で返すしか無い紫だった。

第四話：布教活動の前に（後書き）

早苗と西宮の反発しあいながらの相棒関係が描けてたら良いなあ。
次回は話の中で言ってた通り、人里へ。

あと紫様がちょっと出張り過ぎな気もするけど、この人は元々世話好きっぽいイメージがあったりします。

第五話：稗田家と霧雨道具店と（前書き）

紫様マジ世話好き。そして早苗さんがどんどん愉快痛快系に。人里などについては江戸時代レベルの文明だと思ってます。作中でも語られてるように、例外要素はそれなり以上にありますが。その辺りも含めて、人里は多少独自解釈が含まれていますのでご了承ください。

第五話：稗田家と霧雨道具店と

紫が先導し、それに続く形で早苗が飛び、早苗に引つ張られる形で西宮が飛ぶ。

些か情けないが、こと霊力神力云々に関しては早苗に勝負を挑むだけ無駄なのは長年の経験で分かっている西宮である。特に気にするでもなく、些か歪なフォーメーションでの三名の飛行は続く。

ちなみに早苗は何故か外の世界時代から腋見せだった青と白の巫女服。西宮はジーンズにワイシャツ程度のラフな格好だ。そもそもその格好で転移に巻き込まれたので、彼の場合は他の服が無いのだが。

紫曰く、その手の洋服は確かに多少は目立つが、幻想郷には外の世界からの品がしばしば流れ着く為に、洋服主体の人妖も多いから特に気にするほどでも無いとの事である。

また、西宮の手には外の世界のお菓子（羊羹）が入った包みが二つあった。稗田と上白沢という里の有力者に挨拶に行く為の手土産として、持って行くのを主張した彼が本殿の奥の棚にあった諏訪子のお菓子箱から奪取して来たものだ。

自分で食べたかっいたらしい諏訪子は抵抗したが、挨拶回りを円滑に進めるのに手土産は必要と言う西宮の言葉に神奈子が同調。更には西宮に関しては不慮の事故で巻き込んだ負い目がある為、諏訪子が渋々引き下がった形だ。

結果として諏訪子は拗ねて壁際に座り込んでいたが、そのうち復活すると判断して守矢組＋紫は華麗に無視した。

「わあ……凄いだ自然ですね」

「空気も違うな。流石は幻想郷とでも言うべきかね」

そして飛行初心者及早苗と西宮は、きよろきよろと好奇心丸出しで周囲の光景を目に焼き付けている。
微笑ましいその様子に紫は苦笑。

「物珍しいのは分かるけど、道を覚えておきなさい。妖怪の山に戻る分には、山そのものが目印になるから良いけど……人間の里には高い建造物が無いからね」

「「はい」」

聞こえて来た素直な声に苦笑する。

内心で今代の博麗である霊夢もこれくらい素直だったらと思いなから、飛ぶ事暫し。

紫が居るからか偶然か、ともあれ道中何事も無く人間の里に到着する。

人里では妖怪は人間を襲わないという取り決めがされている為か、里には境界などは張られていない。その代わりに最低限の備えとして周囲を柵で覆われていて、その入り口には門衛らしき人間が立っていた。

入り口前に降り立った早苗達は、門衛に挨拶をして里に入る。

多くの家々が軒を連ねる人里。しかしそれは、外界から来た早苗と西宮からは馴染みの薄い街並みだった。

「映画のセットみたい……」

「見た感じ江戸時代程度つて所か？　なんかカフェテラスみたいなものもあるから、一概にどうとは言えないけど」

「ふふっ、驚いてるみたいね。そうね、西宮君の言った通り、外界から忘れ去られた物が時々流れ込んで来る関係もあって、一概に外界で言う何時代とは言えない文化をしているわ」

「あっ、向こうに映画とかで見たのと同じような茶屋がある……西

宮、食べて行きましたよー！」

街並みを見て初々しい反応を返す二人に対し、紫は口元を扇子で隠して満足げに笑う。

特に早苗のはしゃぎようたるや相当な物で、巫女服に縫い付けてある内ポケットから可愛らしい財布を取り出して中から万札を取り出し た所で、紫と西宮が動いた。

二人は駆け出そうとした早苗の両手を左右から掴んで止める。

「待て」

「待ちなさい」

「うっ!?! いや、その……信仰を集めるのも大事ですけど、腹が減っては戦は出来ぬという名言もありましてですね？」

「別に団子を食うくらい止めねーよ。止めねーけどさ、お前それ……」

「貴方、そのお金……」

西宮が頭痛を堪えるように額を抑え、紫が戦慄混ざりに早苗を見る。

早苗はその様子に何を勘違いしたのか誇らしげに胸を張り、

「幻想郷に来た後で困る事が無いように、貯金を下ろして持って来たんです。西宮、今日は奢って上げますよ」

しかしその誇らしげな言葉に返って来たのは、戦慄を深めた紫の沈黙と、心底呆れ果てたような西宮の溜息だった。

西宮はそのまま隣の紫に向き直り、

「……八雲様」

「……なにかしら？」

「……一縷の望みに賭けて聞きますが、この世界で外界の紙幣は使えますか？」

「……残念ながら。そうね、こちらの貨幣について説明してなかったわ。説明しなくても予想はつくと思ってたんだけど……」

沈痛な二人の反応に焦ったのは当の早苗だ。

お年玉でも貯金していたのだろう。バイトもしていなかった女子高生としては破格の資産である十枚近い諭吉さんを取り出し、焦った表情で紫に問い詰める。

「そんな……！ それじゃあ、この私の諭吉さん達は某世紀末救世主伝説における紙幣価値と同じ程度の価値しか無いんですか!？」

「……西宮君、通訳お願い」

「外の娯楽漫画の台詞で、『ヒヤッハー、ケツを拭く紙にもなりやしねえー』って奴です」

「あながち間違ってるわね……」

外界のサブカルチャーを引き合いに出しての早苗の言葉に、困惑した紫が西宮に通訳を要請。

返された翻訳に紫が沈痛な言葉を返す。

それを聞いた早苗はプルプルと震えながら俯き、

「そ、それなら外に居た時にもっとお買い物をしていれば……。欲しかったプラモとか超合金口ポとか色々我慢したのに……」

「そこで服とかアクセサリとか言い出さない辺りがお前だよな」

「……女の子としてその趣味は珍しいわね……っていうか貴方、ここごとく私の予想を越えてくれるわ。概ね斜め下に」

妖怪の賢者、そろそろ目の前の少女が自分の常識の範疇では捉えられない存在だと認識し始めていた。

ついでに里の入り口でワイワイ騒いでいる妖怪の賢者＋見慣れぬ人間×2という、この不思議な一行に周囲からの視線が集まりつつあった。

これ以上騒いで居れば、口うるさい人里の守護役辺りが出て来かねない。別に然程悪い事をしていないわけではないのだが、通行の邪魔ということで説教をしてくる可能性は大いにあるのだ。

そして人里の守護者は閻魔の次に説教が長いと、幻想郷の中でひそかに呼ばれているほどの説教好きだ。どちらかと言えば、こういう場面で積極的に関わりたい手合いではない。

そう判断した紫は溜息を吐きながら、里の中心部の方を指差した。

「向こうに霧雨道具店という大きな店があるわ。そこに外の世界の物を持って行けば、物によっては多少の値で換金してくれる筈よ。

外の世界の物なら本当は魔法の森の近くの道具屋の方が専門なんだけど、ここからじゃ少し遠いし」

「……とりあえず今持って来てるボールペンでも売りますか。団子代にはなるでしょうし」

「そうね、使える状態で流れて来てる外の品は珍しいからそれなりの値にはなるでしょう。他には日用品なども切れたらそこで買っと良いわ。いつぞやの半獣　　人里の守護者は寺小屋が自宅か分

らないから何とも言えないけど、稗田の当主は家に居る筈だから挨拶をしたいなら方向も同じ。とりあえず中心部へ向かえば間違いは無いわね」

「じゃあ、布教は東風谷に任せるか。秘術とか見せて人集めて勧誘するなら俺より東風谷が向いてるし、俺は換金と挨拶回りをしておく」

「団子はそれが終わってからですね」

当座の小銭程度はくれてやっても良かったのだが、生憎と必要な物はその気になれば殆ど自力で入手可能な八雲紫だ。

こまごまとした買い出しなども式神に任せている為、銭の持ち合わせが生憎無い。まあこれまで十分世話を焼いたし、ここから先は地力で頑張っつて貰おう。

そう判断して持ち物を買って取ってくれそうな場所を教えたところ、早苗と西宮はその情報を元に軽く相談し、そして二人同時に紫に向き直り頭を下げる。

「紫さん、何から何までありがとうございました！」

「八雲様、御恩は忘れません」

「……ふふっ、気にしなくて良いのに。私は私の目的があつて守矢を支援してるんですもの。でも礼儀正しい子は幻想郷には少ないから、そういう対応をされると新鮮ね。それじゃあ二人とも、頑張らないさい」

そう告げて、妖怪の賢者は足元に創ったスキマに消える。

それを見た周囲の人々は、妖怪の賢者が連れて来た外来人辺りなのかとアタリを付け、自分の仕事に戻って行った。

「……さて、それじゃあここからが俺達の仕事か」

「そうですね、頑張りましょう。私は広場辺りで布教活動を開始しますから、西宮は予定通りに稗田家と上白沢さん……でしたっけ？

そちらの方に挨拶回りをお願いします。後はボールペンの換金です。それが終わったら里の中央の方で落ち合いますよ」

「了解。頼むぜ東風谷、頼りにさせて貰う」

そして早苗と西宮は頷き合い、互いに行動を開始する。

神々の庇護下にあつた神社でもなく、ある意味で紫の保護下にあつたここまでの道中とも違う。

彼ら二人からすれば、幻想郷にて彼ら自身の手で生きて行く為の第一歩だ。

「信仰集めにはとりあえず奇跡を見せるって事で、手っ取り早く海とか湖とかその他色々割ればいいでしょうか？」

「マニュアルを書いて渡すから5分待て極限馬鹿」

……： 第一歩から踏み外しそうになっていた風祝が居たのは、それとして。

#

色々と不安はあったものの、早苗に布教活動を任せた西宮は、まずは里の中心部にある稗田家に来ていた。

しかし御阿礼の子と幻想郷縁起については紫から聞いていたものの、外の世界では高校生だった自分より若い少女が当代という事までは考えが至らなかった西宮である。

当初は稗田の屋敷の入り口で屋敷の者に挨拶をして事情を話し、当主に取り次いでくれるように頼んだのだが 少々待たされた後に許可をされ、案内された部屋に居たのは儂げな雰囲気纏った少女。

幻想郷の歴史や妖怪についての資料を纏めている家だと聞き、勝手に厳格そうな老人を想像していた西宮は見事に呆けた。

「 お待たせして申し訳ありません、外来人の方。稗田家当主、稗田阿求と申します」

「……はえ？」

思わず間の抜けた声を漏らした西宮に対して、阿求はその様子が可笑しかったのかこころごとく楽しそうに笑った。

稗田阿求。赤紫の髪を持つ儂げな少女であり、稗田家の当
代。

ごく最近に最新の幻想郷縁起を編纂し終えた所で時間があつたと
いう彼女は、屋敷の者から外来人が訪ねて来たという話を聞いて二
つ返事で会う事に決めたらしく、今はひとしきり最初の西宮の様子
を笑った非礼を詫びた後に彼が持って来た羊羹を茶菓子に彼の事情
を聞いていた。

「成程。八雲紫が招いた外の神社の……」

「はい。かつての大和の時代には建御名方神と崇め奉られた八坂神
奈子様、そして祟り神であるミシャグジ様の統括者であらせられる
洩矢神、洩矢諏訪子様を祀らせて頂いております」

ちなみに阿求は昔何か嫌な事でもあつたのか妖精に対しては些か
辛辣なものの、それ以外は基本的には大人しく礼儀正しい少女であ
る。転生と記憶の引き継ぎという要素もあるのだろう。十代の半ば
に届くかどうかも怪しい年齢でありながら、大人びた雰囲気纏つ
て西宮に対応していた。

対する西宮も早苗相手のぞんざいな対応が素の性格だが、必要で
あれば礼節に則つた対応が出来る程度には世慣れしている。これは
相方である早苗が暴走癖の持ち主であつた為に培われたスキルだろ
う。

結果としてこの両者の対話は、非常に穏当かつ礼儀正しい物とな
っていた。

西宮が語る彼と神社の事情。そして妖怪の賢者である八雲紫がそ
の手引きをした事について、阿求は手元の紙にすらすらと筆でメモ
を取って行く。

「外の世界では神々に対する信仰も失われて久しいのですね。嘆かわしい事です」

「私も昔は神を信じていなかったくらいですからね。当代の風祝相手に『神様なんて居るわけ無い』などと言って殴り合いの喧嘩になったのが信仰の切っ掛けでしたから」

「あら……ちなみに勝敗は？」

「恥ずかしながら敗戦でした」

おどけて話す西宮の言葉に、阿求がくすくすと笑みを返す。

内心で『ああ、東風谷もこれくらい大人しく可愛かったらなあ』などと思う西宮。

ちなみに当の風祝が仮にその内心を聞いた場合、対応は『大人しく可愛くなるう』とするのではなく西宮への制裁のガゼルパンチであろう。気分と機嫌によつてはそこからデンプシーカリバーブローが繋がる。

「事情は分かりました。人里での布教活動は、里の人に迷惑をかけるない範囲でしたら問題無いでしょう。慧音さん　人里を守つて下さっている上白沢慧音さんは今日は少々用事で竹林の方に出向いていますので、彼女には私から言付けしておきます」

「助かります。それではこちらの羊羹も上白沢さんにお渡ししておいて下さい。後日改めて御挨拶に伺います」

「分かりました、承りましょう」

そして阿求は西宮が慧音への挨拶の為に持つて来た羊羹（諏訪子秘蔵）の包みを受け取り、穏やかに微笑んだ。

一瞬だけ物欲しそうな視線を羊羹に向けた事から察するに、西宮が持つて来た外の世界の高級和菓子店の羊羹は、どうやら阿礼乙女の舌に合ったようだ。

幾ら記憶の受け継ぎなどがあるうとも、身体に精神年齢が引つ張られる側面もあるのだろうか。どうやら今代の御阿礼の子は甘党なようであった。

それに気付いた西宮が『うちにはもうありませんが、八雲様に頼めば入手可能かも知れませんよ』と伝えたところ、阿求は頬を僅かに染める。

はしたない事をしたという自覚があるのだろう。咳払いをして話を本筋に引き戻す。

「ごほん。……えーと、稗田家が編纂している幻想郷縁起に、いずれその守矢神社の事を書かせて頂く事もあるでしょう。その際はまたお話を伺っても宜しいでしょうか？」

「はい。その折は神奈子様と諏訪子様ご自身の話を聞くのも良いかと思えます」

「あとは現人神にして風祝であるという方にも話を聞いてみたいですね」

「……イメージがブチ壊れて良いならば止めはしません」

「……はあ。何だか良く分かりませんが……」

早苗についても当人に話を聞きたいと思った阿求だったが、西宮が遠い目をして呟いた言葉に首を傾げる。

八雲紫を戦慄させた脅威の総天然風祝だ。現人神という言葉からイメージされるその幻想をブチ殺してくれることは請け合いだろう。

「ともあれまた伺う事もあるでしょう。その折は宜しく願います。本日はお忙しい中、突然の訪問に快く応じて頂きありがとうございます。ございました」

「いえ、こちらこそ御丁寧にありがとうございます」

かくして守矢神社代表としてこの場に來た西宮と今代の御阿礼の子である阿求の初会談は終始和やかに終わった。

当人達が社交辞令的に交わした再会の約束が果たされる事になるのは、当人達の予想よりも遙かに早い僅か数日後。

総天然風祝・東風谷早苗が守矢神社の他メンバーや紫の思惑の斜め右上に飛び出して、博麗神社にヒヤッハーと言わんばかりの勢いで宣戦布告をした事に端を発する異変に関連する事となる。

#

そして西宮が稗田家を辞してすぐ。

稗田家の近くにある大きな道具店の前 看板に大きく霧雨道具店と書かれた店の前を訪れていた。

成程、紫が日用品などが欲しければここにと推した理由が良く分かる。大きくしつかりした店は年季を感じさせる佇まいで、正しく老舗という雰囲気醸し出していた。

長く続いた店であると言うことは、それだけで信頼が置けるといふ意味にも繋がる。流石に幻想郷内の物事を知り編纂するのが仕事の稗田家とは違い、いきなり当主に面会などは出来まいが、いずれ神社の側から挨拶に來るべきかも知れない。

そう考えている西宮の後頭部に、不意にコッソと何かが当たったのはその時だ。

「……ん？」

「おい、そのアンタ。今後頭部に小石をぶつけられたアンタだ」

何かと違って振り返った西宮の耳に、声を落としたソプラノボー

スが入って来る。

きよるきよると見回すと、霧雨道具店からは死角になる家の影から手招きしている少女の姿があった。

長い金髪に黒と白を基調としたエプロンドレス、そして魔女のような帽子と箒が印象的な快活そうな少女だ。年の頃は西宮や早苗とそう変わるまい。

そして前後の言動から察するに、彼の後頭部にぶつかったのは小石で、それをぶつけたのは魔女風の少女　　と言う事だろう。

「糸目の兄さん。聞こえてるだろ？　悪いがちょっと来てくれないか」

「……いきなり何だ？　美人局や詐欺の類なら御免だぞ」

「違うつての。頼む、少し頼まれてくれ。兄さん今、霧雨道具店に入ろうとしてたろ？」

露骨に身を隠している魔女（推定）からの呼び出しに、警戒しながらも西宮がそちらに近付く。

無論そのまま路地裏に連れ込まれるような事があれば即時離脱する心算で、重心はやや後ろに傾けて逃走準備は完了だ。

しかし少女も、自分が警戒されるような事をしている自覚はあるのだろう。バツが悪そうに帽子の上から頭を掻き、

「そう警戒してくれるなよ。私は怪しいもんじゃないぜ？」

「不審者ほどそう言う俺は思うんだ」

「……あー、確かに道理だな。実際客観的に見りゃ今の私はかなり怪しいか。……訂正だ、怪しいけど悪い奴じゃないぜ。その証拠にまずは名乗ろう」

そして少女は西宮に向けて笑みを向け、自分の名前を高らかに　　ただし霧雨道具店の方には聞こえない程度の声で名乗る。

「私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ」

「……霧雨？」

「……ああ。私がここに隠れている理由もそれだ」

そして西宮が鸚鵡返しに返した自分の苗字に苦笑し、少女

霧雨魔理沙は霧雨道具店をちらりと見やる。

「実は私はあそこの家出娘でな。道具屋で換金したい品があるんだが、生憎私はあそこに入れない。アンタは里の人間じゃないように見えたし、道具屋に行くついでに私の分も換金して来てくれないか？」

照れたようなバツが悪いような、そんな微苦笑を浮かべながら西宮を見上げる魔理沙。

これが幻想郷を代表する異変解決家の片割れ、霧雨魔理沙と西宮の初遭遇だった。

第五話：稗田家と霧雨道具店と（後書き）

と、いうわけで人里タイム。

阿求や魔理沙との初遭遇でした。魔理沙に関しては次回も少し出張って来ます。

第六話・ウサ耳ブレザー 医者見習い（前書き）

今回は題名通りの人物が出て来ます。
置き薬って便利なシステムですよね。

第六話：ウサ耳ブレッザー医者見習い

結局あの後、少々悩んだものの西宮は魔理沙の頼みを了承した。怪しいは怪しいが、彼女の家出少女という立場に対して両親との折り合いが悪かった彼自身の環境を重ね、心情的に協力しなくなったからというのが最大の物だろう。

「……念の為聞くけど、売りたい物って盗品とかじゃないよな？」
「違つぜ。まあパチユリーの本とかは死ぬまで借りたりしてるけど、これは借り物でもないしな。流石に実家に盗品売りつけるのは気が引けるぜ」
「死ぬまで借りるってお前……」

死ぬまで借りると言うのは盗品とどこが違うのかと悩んだものの、他人の事情だという事もあるし、下手に突っ込むと藪蛇と判断。

『あまり他人様に迷惑かけるなよ』と一言軽く釘を刺す程度に留めて、魔理沙が持って来ていた彼女が作ったらしい魔法のアイテム
便利な日用品などだった を受け取り換金に行く西宮。

神社側として人里の有力者に繋ぎを作っておきたい西宮としては不幸な事に、そして家出娘である魔理沙にとっては幸運な事に、道具店の店主 即ち魔理沙の父は不在。

マジックアイテムの出所について何か言われる事も無く、あっさり
りと換金は終了する。

どうやらボールペン（外の世界価格税込63円）は『便利な筆の一種』と判断されたらしく、それなりの高値となった。

外の世界の品を持ちこんで売れば、それだけで幻想郷では一財産
を作れそうだが……流石にそれは幻想郷のバランスを崩しかねない

行為である。

そもそも安定して行き来する手段が西宮の知る限りでは八雲紫に頼るくらいしか無いし、幻想郷のバランスを崩しかねない行為に彼女が加担するとも思えない。

あんな品が高く売れたならそれだけで儲け物とっておこう。

そう判断した西宮が道具店から出ると、相変わらず道具店から死角になる位置から手招きをする魔理沙を発見。

そちらに向かう。

「売れたぞ、家出娘」

「おう、感謝するぜ見知らぬ人。それじゃ悪いが少し移動しよう。あんまり実家の前に長居はしたくないんでな」

「そして移動途中で路地裏を通ろうとした所で、俺は家出娘のボデーブローで気絶させられ身ぐるみを剥がされたのでした。ああ無常」

「お前はどんだけ私を信用してないんだ」

「冗談だ」

軽口を叩く西宮に呆れたような突っ込みを返しながら、魔理沙は道具店から少し離れるようにして里を歩く。ちなみに阿求や紫の前では礼儀を弁えて対応していただけで、こうして軽口を吐いている方が西宮としては素の姿だ。

そして着いた先は、奇しくも最初に早苗が諭吉さんを手に突撃しようとした茶屋だった。魔理沙が茶屋の椅子に腰かけた所で、西宮は魔理沙の持ち込んだマジックアイテムが売れた分の金を彼女に渡す。

受け取った魔理沙は簡単に金額の確認をしつつ、唇を尖らせて西宮に苦言を呈した。

「まあ私も最初に声をかけたシチュエーションが怪しかったのは認めるがな。ボディーブローって何だよボディーブローって。怪しく見られるのは百歩譲って許すが、そんなガッツに見えるか？」

「その男じみた言葉遣いを鑑みると割とガッツな気もするが。まあボディーブロー程度俺からすればまだまだ有情だな。俺の幼馴染は八雲様公認で『エイプキラー』として認められたぞ。素手でゴリラくらいなら殺せるらしい」

「八雲様……ああ、紫か。里の人間には見えなかったが、お前さん紫が連れて来た外来人だな」

そこまで聞いた所で得心がいったように魔理沙が頷き、そして首を傾げる。

「エイプって何だ？ 動物か妖怪か何かか？」

「幻想郷には居ないのか。いや、居ても困るが。……こちら風に言ってしまうれば化け猿の一種で、巨大な身体と強靱な身体能力を誇り、あと糞を投げる」

「それと素手で渡り合うか……お前の幼馴染ってスゲエな」

魔理沙の脳内でまだ見ぬ西宮の幼馴染が某世紀末救世主伝説的な巨漢になった。

彼女の脳内では剛腕を振るう化け猿をそれを上回る剛腕で叩き潰す西宮の幼馴染が大暴れしている。脳内に浮かんだその光景に、豪胆な彼女にしては珍しく頬に冷や汗が一筋流れた。

実際に戦ったわけでも無く、紫はあくまで神力と霊力で身体能力を強化すれば『理論上は可能』という程度の意味合いで口に出した程度なのだが、それは魔理沙には分からない。

更に言うならば幻想郷に生息する非人間型の凶暴な妖怪を元にしたイメージの為、彼女脳内の『エイプ』は四本腕があったり鋭い牙

で獲物を噛み千切ったりする凶獣モンスターとなっている。

しかし流石は異変解決の専門家。『まあそういう奴も外界には極稀に居るのかもれない』と思い、気を取り直して視線を茶屋のお品書きへと向け直す。

「まあ何にせよ、ちよいと手間をかけさせてしまったわけだしな。茶と団子くらいなら奢るぜ？　この団子は美味いんだ」

「気持ちと誘いは嬉しいが、後でその幼馴染と来る約束もあるんな。先に食ったと聞けば拗ねるだろうし、悪いが気持ちだけ頂いておく」

「……その幼馴染とやらも幻想郷に来てるのか」

「ん？　ああ。来てるぞ」

顔をさつと青くする魔理沙。彼女脳内では、まさかの世紀末救世主伝説が幻想入りである。

脳内に表示される映像は、巨大な黒い馬にまたがり幻想郷の大地を駆ける巨漢。

凄まじい光景だった。紫は何を考えてそんなもんを幻想入りさせたのかと、魔理沙は妖怪の賢者の正気を本気で疑った。

完全に勘違いだった。

「ちなみに」

そしてその勘違いにトドメを刺す言葉を、西宮が無自覚に呟いた。

「その幼馴染はウチの神社の巫女だ」

「ちよつと紫退治してくる」

遂には血相を変えて、結局何の注文もせずに茶屋から飛び出していく魔理沙。

彼女の脳内宇宙では腋見せ巫女服を纏った世紀末霸王の幻想入りの完成であった。西宮の説明不足と魔理沙の勘違い、そして二人の認識の相違から起こった悲劇はかくして頂点を迎える事になる。

正気を失っておかしなモノを幻想入りさせた（魔理沙視点。勘違い）妖怪の賢者・八雲紫を叩き伏せて正気に戻す為、普通の魔法使い・霧雨魔理沙の出陣であった。

「お前と八雲様の間で何があったのかは知らないが、一度座っておきながら注文もせずに店を出るのはマナー悪くないか？」

「お前とその幼馴染の分の茶と団子代を先払いで出してやる！それで文句無いだろ！？ ええと……」

「ああ、名乗っていなかったっけか」

既に箒に跨りながら、魔理沙がマジックアイテムの売り上げの中から幾許かの小銭を西宮にトスする。

それを受け取りながら、西宮は自分が名乗っていない事に気付いて領きを返す。

「西宮丈一。守矢神社の信者だ。良ければウチの神社を信仰してくれよ、魔法使い」

「……なるべく御遠慮させて頂きたいぜ。じゃあな、西宮。幻想郷の為に私はもう行く。縁があればまた会おう」

本気で嫌そうな顔をしながら飛び去る魔理沙に、果たして何かそこまで信仰を嫌がられる要素があったかと首を傾げる西宮。

結局この段階では魔理沙の勘違いは欠片も修正される事無く、やれ紫がトチ狂ったかと失礼な事を考えた魔理沙が、まずは彼女の式の住居であるマヨヒガに特攻をかける事になる。

そしてたまたまそこで団欒していた所突っ込んで来た、『正気に戻れ紫！何か辛い事でもあったのか！？ 私でも他の誰かにでも

相談すれば良かったのに！」と涙ながらに叫ぶ普通の魔法使いという光景に、八雲一家がいたく混乱するのは数時間後。

一緒になってマヨヒガに遊びに来ていた天衣無縫の亡霊こと西行寺幽々子が顛末を聞き、危うく成仏しそうなほど笑い転げる事になるエピソードの完成であった。

悲劇／喜劇の種を無意識に撒いた西宮はそんな事など全く気付かず、普通の魔法使いへの布教失敗という彼主観で分かる唯一の事実を首を一つ振って頭から追い出して、茶屋の奥へと声をかける。

店の前で注文もせずに騒いでいた魔理沙と西宮に対して、茶屋の店主と思しき男性が迷惑そうな視線を向けて来ていたが、

「すみません、連れが急用が出来たそうなので帰ってしまいました。別の連れを連れてすぐに来ますので、代金を先払いさせて頂いても宜しいですか？」

「毎度あり！ まあ払って貰えるなら文句無いよ」

西宮が彼的には迷惑料の意味もあって茶代の先払いを提案すると、茶屋の店主は一変してにこやかな笑みを浮かべて来た。

銭の偉大さは幻想郷の外も中も変わらんという俗な感想と共に苦笑し、店主に世話をかけて申し訳ない旨を伝えて一割ほど多く銭を渡す。

幸いにして魔理沙は雑な勘定で西宮に茶代を放つたらしく、二人分どころか三人が茶と団子を頂いたとしてもお釣りがくるくらいの金額を貰っていたのでこの程度の出費は痛くない。

「……さて、ウチの風祝様はどこに居ますかね……っと」

恐らく先の打ち合わせ通り、里の中心部辺りで布教活動をしているのだろう。

そう当たりをつけて、彼はそちらへと歩き出すのだった。

#

そして暫し後。

あの後西宮は風を操る奇跡を人々の前で見せて神奈子と諏訪子の神徳と御利益を説くと言う、西宮作成マニュアルに従った至極真つ当かつ穏当な布教活動をしていた早苗をあつさり発見した。

どうやら神々への信仰ノ親交が深い幻想郷での布教活動は、外界での布教活動に比べて格段に色好い反応が返つて来たらしい。

西宮が発見した段階から、早苗は大層御機嫌だった。

その後ひと段落がついた所で声をかけ、合流。先の茶屋へ向かったのだが、現在並んで座った茶屋の椅子の上で、早苗はそれ以上御機嫌、というか御満悦のご様子だった。

「美味しかったー。御馳走様でした！」

「太れ。肥えろ。食い過ぎだ東風谷」

「甘い物は別腹ですよ西宮。あと肥えろ言つな」

餡団子に醤油団子、餡蜜に何故か実験メニューとして茶屋の御品書きに並んでいた杏仁豆腐まで平らげた早苗に、西宮は舌打ちしながら毒を吐いている。

ちなみに杏仁豆腐は湖を越えた先にある屋敷の門番が教えてくれたメニューらしい。外の世界で食べたコンビニ売りの杏仁豆腐の何倍も美味かった事は、西宮も認める所である。

「ったく、成り行きで貰った茶代から完全に足が出たじゃねえか」

「良いじゃないですか。ボールペン、高く売れたんでしょ？」

「まあな。当座の活動資金程度にはなるから、着替えが無いんで服程度は買っておきたい。後は　　薬だな」

「薬？」

「ああ」

西宮は早苗の言葉に頷いて、懐からメモ帳を取り出した。

紫から聞いた幻想郷内の簡単な地理と情勢が書かれたメモ帳だ。売ったのは別のボールペンを取り出して、今聞いた『杏仁豆腐の作り方を教えてくれた門番』が居る屋敷は推定『紅魔館』と呼ばれる屋敷だろう旨を書き加えた。

そして横に座る早苗に地図の表示されたページを示し、その紅魔館とは別の位置　　竹林の奥にある屋敷の図をペンで差す。

「神奈子様や諏訪子様と違って俺らは脆弱な人間だからな。それも幻想郷では風邪引いたから気軽に病院に……というわけにもいかなだろう。幸いにしてこの永遠亭なる所には名医が住んでいて、その名医の弟子が置き薬の販売を行っているって話だ。頼んで神社に置き薬を常備させて貰えたらと思ってる」

「まあ確かに。備えあれば嬉しいなとも言いますしね」

「嬉しくてどうする、このゆとり世代」

「貴方同じ年じゃないですか、このゆとり世代二号」

丁々発止と会話のドッジボールを交わしながらも、しかし西宮が言った言葉には早苗も賛成らしい。

布教活動が最優先だが、自分達が体調を崩しなどすればその布教活動に遅れが生じる。ならば故にこそ、先んじて憂いは潰しておくべきだろうという考えか。

ともあれ早苗も西宮の言葉に頷き、同意の念を表明して腰を上げる。

「それじゃ、広場で一通り御二柱の神徳も説き終わりましたし……
今日は後は買物と、その永遠亭って所へ行ったら帰りますか」
「いや……一つ問題があつてな。永遠亭の周囲にあるのは迷いの竹林つって、入る人を惑わす不思議な竹林らしい。俺らが行つて辿り着けるかどうか……」
「何でそんな場所に居を構えてるんですか、医者。不便極まりないでしょう」
「俺に言つなよ」

困つたように言いながらも西宮も早苗を追つて腰を上げ、『すいません、お勘定お願いします』と店の奥の店主に声をかける。

「困りましたね。永遠亭に行かないと薬は手に入らないんでしょうか？」

「おや。何ですか、お客さん。竹林のお医者様にご用事ですか？」

「え？ はい。置き薬が欲しくて……」

そして勘定の為に近付いて来た店主が、早苗の言葉を耳にして言葉挟んで来る。

勘定を先に終わらせると店主は事情を聞き、少し待っていて下さいと言ひ残して店の奥に消えて行つた。

何かあるのかと話しながら、西宮と早苗が待つ事少し。店主が『良かった良かった』と笑顔で二人の前に戻つて来た。

「お客さん、運が良いですね。うちにも竹林のお医者様の置き薬があるんですが、その置き薬に書いてある集金スケジュールによると、お医者様のお弟子さんが置き薬の集金に来るのが丁度今日ですよ。もう少し待つて頂ければ来るのではないかと思ひます」

「集金？ えーと、どういふ事でしょう？」

「置き薬つてのは薬箱を各家庭に置いておいて貰って、定期的に業者が回って使った分だけを集金・補充するってシステムなんだよ」

置き薬というシステムを良く分かっていなかったらしい早苗の言葉に西宮が補足を入れる。

その補足に店主が頷き、早苗と西宮に問いかける。

「どうでしょう？ お二方……特にそちらのお嬢さんには随分食べて頂きましたしね。良ければお医者様のお弟子さんが来るまでお待ちになりますか？」

「良いんですか？」

「構いませんとも。その代わり、今後も御贔負にお願いします」

「ええ、是非とも！ それじゃあ店主さん、あの杏仁豆腐もう一つお願いします！」

早苗の元気の良い宣言に、店主が『してやったり』という笑みを浮かべた。

商売上手な事だと内心で思いながら、西宮はその笑みに対して苦笑。

店主の提案は彼らとしても渡りに船だったし、こういう商人らしさは嫌いではないので特に悪感情は無い。しかしあっさりとする商人の思惑に乗って追加注文をする早苗に対しては小さく苦言を呈す事にする。

「絶対に太るだろうな」

「太りませんってば」

にやにやと笑みを浮かべながらの彼の言葉に、ぶすつと頬を膨らませた早苗がそっぽを向く。

それを見た店主は『仲の宜しい事で』と西宮と早苗からすれば甚

だ不本意な台詞を残し、注文された品を作り、奥に引込んで行った。

「……あー、じゃあ俺はその間に適当な服を買いに行つて来るからお前はここで待っていてくれ。すぐ戻るけど、もし俺が居ない間に医者者の弟子が来たら頼む」

「分かりました。あ、杏仁豆腐と……あとその他にも何か適当に食べれる分だけお金置いてって下さいよ」

「……まだ食う気か」

その店主の背を見送つた後、待ち時間の間に適当な所で服を買い、西宮が席を立ち、早苗が食費を要求する。

呆れながらも小銭を早苗に渡すと、西宮はその場を立ち去つた。

#

そして数十分後。

ごく適当に服を購入して来た西宮が店に戻ると、早苗の横には団子や杏仁豆腐の器が幾つも積まれていた。

げんなりとする西宮が声をかけると、嬉しそうな笑みと共に早苗が振り返る。

「あ、西宮。間に合いましたね。今丁度そのお医者さんのお弟子さんが、店主さんの家の置き薬を確認に行つて居る所です。私達の用事はそれが終わつたら話を聞くとこの事でしたよ」

「うわ、ギリギリセーフだったか」

「ええ。あと、そのお医者さんのお弟子さん　　鈴仙さんという方がですね。驚いた事にブレザー姿だったんですよ」

「ブレザー？ …… っ、外の世界の？」

「ええ。流石にウチの学校の制服とは少し違いましたけど」

「はあ…… そりゃまた、なんとも」

早苗から聞いた言葉に、西宮が呆れたような感心したかのような声を上げる。

彼が驚いた様子なのに気を良くしたのだろう。自分の事でも無いのに胸を張り、何故か誇らしげに早苗は追加情報を披露する。

「しかもウサ耳です。バニーちゃんですよ。凄いですね幻想郷」

「ウサ耳ブレザー医者見習いか…… 凄いな幻想郷」

『幻想郷すげえ』という線で合意する二人。

そこに店の奥の方から話し声が聞こえて来る。片方は茶屋の店主の声。もう片方は西宮には聞き覚えが無い、早苗からすれば先程聞いたばかりの女性の声だ。

「はい。では確かに頂きました。それではまた一ヶ月後に伺います」

二、三のやり取りの後にそう話を締めくくった女性　西宮曰くウサ耳ブレザー医者見習いが、店の奥から早苗達の方に近づいて来る。

長い紫銀色の髪とウサ耳、そしてブレザー姿の人物だ。本当に聞いていた通りの姿だった事に、西宮が僅かに表情に驚きを出し、対する早苗は何故か僅かに誇らしげにする。別に自分が凄いわけでもあるまいに。

「ごめんなさい、早苗さんでしたよね。お待たせしました…… っ、あれ？ 増えてる？」

「あ、すいません。コレ私の連れです。用事があって席を外してた

んですけど今戻ってきました」

「コレ言うな駄風祝。申し訳ありません、俺は西宮丈一と言います。俺達はこの度妖怪の山の上に越して来た外来人ですが、置き薬を頂きたいのでお話を伺いたいのですが、お時間宜しいですか？」

西宮の言葉を聞いたウサ耳ブレザー医者見習いは『妖怪の山に？』と疑問を表情に浮かべたが、彼女　永遠亭の妖怪兎、鈴仙・優曇華院・イナバは元より他人の事情に深入りするタイプではない。むしろ他人とのコミュニケーションを苦手とするタイプだ。

別に聞くような事でも無いかと気を取り直し、事務的に目の前の二人に対応を始める。

「場所が少々特殊ですが……薬をお求めなら、師匠に話を通しておきます。置き薬に入れて欲しい薬の種類などでご希望はありますか？」

「私達、外から来たばかりなんですけど……薬の種類って外の世界と変わらないんですか？」

「師匠は凄いですからね。事によると外の世界で手に入らない薬もあると思いますよ」

事務的ながら、師匠の事を話するときだけは自分の事のように誇らしげに語る鈴仙。

さぞやその師匠を尊敬しているのだろうと思いつつ、早苗と西宮は互いに顔を見合わせる。

「うーん……お互い持病持ちでもありませんしねえ」

「特別欲しい薬ってのも無いよな。他の家庭と同じ感じで基本セットみたいなのがあれば　あ、いや待て。外の世界に無い薬ってんなら、俺ずっと欲しかった薬がある」

「あ、奇遇ですね。そう言われてみれば私もずっと欲しかった薬が

あるんです」

二人の言葉に鈴仙は『あれ？ こいつら同棲してんの？』と僅かに好奇心を覚えるが、突っ込んだ事情を聞くのも憚れたのでスルーした。これが比較的常識的な感性と他人とのコミュニケーションが苦手な性格を持つ鈴仙だったからまだ良いものの、某最速天狗辺りが聞いていたらさぞや大変な事になっていたであろう。

ともあれそんな彼女に対して、早苗と西宮は満面の笑顔で互いを指差しながら同時に言った。

「馬鹿うさぎに付ける薬をください！」

「扱っておりません」

ああ、こいつら馬鹿だ。同レベルで馬鹿だ。

鈴仙・優曇華院・イナバ。彼女がファーストコンタクトで東風谷早苗と西宮丈一に抱いた印象は、概ねそのような物だった。

第六話：ウサ耳ブレザー医者見習い（後書き）

ちなみに西宮の口調はある程度相手によって変わっています。

友達感覚だと早苗や魔理沙を相手にする時のようになり、限界ま

で礼儀に気を使うと阿求を相手にした時のような口調に。

鈴仙相手はその中間くらいですかね？

第七話：“里に最も近い”天狗（前書き）

風神録に入る前に、彼らの立場や天狗の立場などについて割と独自解釈満載ですね。

特に文の立場と性格についてはその色が強いかもしれませんが、でもプロットを見るに文の出番は今後も多くなりそうです。

追記：あ、椛の口調が二次創作界隈で時々見る『くっす』口調になったのは、他のキャラとの口調の差別化の為です。

第七話：“里に最も近い”天狗

結局妖怪の山の頂上と場所は流石に鈴仙が置き薬の確認に行くのも一苦労である為、、『置き薬としてのシステムで運用するかは確約はできないけど、師匠に掛け合ってみる』と言う線で鈴仙と早苗・西宮は合意。

仮に鈴仙か他の永遠亭の者が届けに行く場合、天狗や河童と揉める可能性がある為、後日西宮が早苗が永遠亭を訪れる事にして話は終わった。

そして布教の手応えが良かった事に満足し、余り遅くなる前に神社へ戻る事にした二人。

ちなみに西宮は良い感じにポロポロであり、打撲箇所には早速試供品として鈴仙が提供してくれた湿布が張られていた。

理由は単純。互いを馬鹿と笑顔で表現した上で、寸分の狂いも無く全く同時に『馬鹿に付ける薬』を求めた直後に、第何次とも知れない宗教戦争（物理）が勃発したのだ。

同宗派同士の悲しき宗教戦争は、キリスト教のプロテスタントとカトリックの争いの歴史を　　全く想起させる事の無い単なる醜い痴話喧嘩として鈴仙と茶屋の主人に受け入れられた。

その後周囲に出来たギャラリーのトトカルチヨを受けながらも、関節を極めようとした西宮の腕を逆に早苗が極めた辺りで西宮がギブアップ。毎度の如く勝者は早苗と相成った。

付き合い良く最後までギャラリーをしていた鈴仙に治療される西宮を背に、勝者として守矢神社の名を喧伝する早苗は布教者の鑑だったと言えよう。ちなみにトトカルチヨの胴元として儲けていた茶屋の主人は商売人の鑑であった。

ちなみにそんな騒ぎが終わった後、浮くしか出来ない西宮の手を早苗が握って二人一緒に妖怪の山に帰って行く光景を見ながら、鈴仙が『あいつらの関係って結局何なの……？』と真剣に悩んでいたのは別の話。

ともあれ斯様に色々な事があつた幻想入り二日目。

早苗と彼女に腕を引かれた西宮は日が暮れる前に神社に帰りつくが、そこで神奈子や諏訪子と言葉を交わしていた見知らぬ少女二人と顔を合わせる事になる。

「あやややや？ 彼らが先程仰っていた風祝と信者さんですか」
「ども、はじめまして。お邪魔してるツス」

神社の本殿。そこで神奈子と諏訪子の二人に対面していたのは背中に漆黒の翼を生やしたワイシャツにプリーツスカートといった現代衣装の黒髪の少女と、こちらは和装の犬耳と犬尻尾を生やした銀髪の少女だ。

銀髪犬耳はともかく、黒髪羽根付きの方は強い妖力を纏っているのが早苗や西宮にも感じられる。

そして山の妖怪かと当たりをつけながらも会釈をする早苗と西宮に対し、慇懃な態度で 　ただし西宮などに言わせれば、値踏みするかのような視線を存分に乘せた慇懃無礼な態度で挨拶を返したのは黒髪の方の少女である。

「お初にお目にかかります。私、妖怪の山の烏天狗にして新聞記者。清く正しい射命丸こと、射命丸文と申します。文々。新聞と合わせどうぞぞお引き立ての程を宜しくお願いします」

「白狼天狗の犬走椀ツス。宜しくお願いするツス」

次いで銀髪の少女　　犬走椛もぺこりと頭を下げる。こちらは真つ直ぐな性格が前面に出ており、にこやかな表情で尻尾をパタパタ左右に振っている様子からは警戒心は見えない。どうにもチグハグなコンビであった。

「御丁寧にありがとうございます。風祝の東風谷早苗と申します」
「……守矢神社が信者、西宮丈一と申します。天狗様達におかれましては御機嫌麗しゅう」

そんな彼女達に対して早苗は明るく笑顔で挨拶を返し、西宮は警戒心を殊更に表に出して腰の低い挨拶を返す。

その様子に楽しそうに目を細めたのは射命丸だ。

にい、と口元に嫌な笑みを浮かべる姿は、果たして彼女の値踏みが高かったのか低かったのか。

「成程。これはまた随分と面白そうな方々のようですね」

「あー、確かに実直馬鹿そうなのと扱い辛そうなのがセットである意味釣り合い取れて　　おフツ!!!?」

そしてシリアスに口の端を僅かに上げたニヒルな笑みを浮かべた文の横で、椛が笑顔でシリアスブチ壊しの失言を吐こうとした所、文の右手が物凄い速度でブレると同時に打撃音が椛の脇腹辺りで炸裂する。

キョトンとした表情の早苗と、無然とした表情の神奈子。そして笑いを堪えている諏訪子と、呆れが顔に出た西宮。

四者四様の視線を受けながらも崩れ落ちる椛の身体を支え、文は額の汗を拭う仕草を見せる。

「いやあ、神罰ってあるんですね。八坂様と洩矢様の信者であるお二人に暴言を吐こうとした馬鹿犬に罰が下ったのでしょ」

「……右フックが神罰か、斬新だな」
「はてさて、何の事やら」

責めるような神奈子の言葉に羽扇で口元を隠しながら、文は飄々とした様子で立ち上がり、口から泡を吐いている椀の足を掴む。

そのまま二柱と二人に一礼し、

「それでは色々興味深いお話も聞けた事ですし、お暇しましょう。
今現在、この神社の様子は山の妖怪中の注目の的です。身の振り方には御気を付け下さい」

「ああ、ああ。分かつてるよ天狗。其方の忠言ありがたく思う」

と、神奈子と互いにどこか非友好的な視線を交わしながら、ずると椀を引き摺って去って行く。

本殿から外に出る際に段差から落ちた椀が頭部を地面に打ち、『へぐう』という偶蹄目系の悲鳴を上げたがガン無視。
潔いまでの扱いのぞんざいぶりであった。

そして文（+足を掴まれた椀）が妖怪の山、天狗の集落へと飛び去ったのを見送ってから神奈子が溜息を吐く。

「厄介な話だ。天狗は随分と私達が邪魔らしい。河童や他の八百万の神々の反応は悪くないのだがな」

「今のは偵察と警告の意味があつたんだろうね。でも私は今の天狗……射命丸だっけ？ あいつは嫌いじゃないね。取材の名目で乗り込んで来て私と神奈子から直接話を聞こうだなんて、八雲から聞いたた異変を起ここそうともしない天狗達の中では、中々どうして肝が据わってるじゃないか」

神奈子の溜息に対して諏訪子が楽しそうに笑い声を返す。

そして本殿入り口に立ったままだった西宮と早苗に『まあ座りなよ』と声をかけ、彼女はすたすたと社務所に入って行った。

早苗と両親が生活していた母屋はこちらに来ていないが、本殿併設の社務所は神社本体と一緒に幻想入りして来ていた。

客間や布団もある為、現在彼ら四人は適当にそちらで暮らしている現状だ。倉庫に使っている部屋などを片付けない限りはリビングなどは無い為、食事を本殿で取るのはどうにかならないのかと言う気もするが。

ともあれ社務所に入って行った諏訪子は、程無く盆の上に湯気をあげるカップラーメンを四つ乗せて戻って来る。

何を隠そうこのカップラーメン、幻想入りするにあたって神々と早苗が知恵を絞って『必要だろう』と大人買いして社務所に持ち込んでいた物だ。

霊術なり神術なりで火でも起こして湯さえ沸かせれば食べられるので当座の食料としては悪くは無いが、食料より先に考える事があったのではと真剣に思う西宮だった。

神奈子は知恵は回るし蛇を象徴とする神らしく狡猾だが、基本的に大雑把である。諏訪子は祟り神らしく本気で知恵を使えば悪辣とすら言える手腕を発揮するが、生活面などでは駄目駄目だ。早苗に至っては雑事を西宮任せにしていた事もあり、物事を深く考えない悪癖がある。

はつきり言ってしまうば、生活面に関する細々とした雑事が得意な人材が西宮以外に居ないのである。

「……本気で俺、ついて来て良かったわ……」

「なんだい丈一、唐突に」

「いや、ぶつちゃ俺が居ないとこの神社、生活面の雑事に向いた人材が居ないなーと思ひまして……って言うか何でカップ麺買ひ込

んでて他何も用意してねえんですか」

「そう言うな丈一。カツプ麺は美味かるう」

「神奈子様、何で神様がそんなに美味そうにカツプ麺食ってるんですか。っていうか何で食い慣れてるんですか」

「私がちよくちよく奉納してましたからねー」

「もう少し奉納するもん考えろよ。神様にカツプ麺捧げる風祝なんて聞いた事ねえよ」

ずぞぞぞという音と共に、神社の本殿に車座に座った四名はカツプ麺をかつ込む。

そのうち三名が軍神、祟り神、現人神だとは誰も思っまい光景だった。

ともあれ食事がカツプ麺のみとはいえ、貴重な団欒の時間である。話題になったのはやはり二つ。神奈子と諏訪子が居残った神社側で見た妖怪の山側の反応と、早苗と西宮が行った人里での布教活動だ。

「妖怪の山は先にも言った通り、天狗以外は割と良い反応だ。ただ天狗に関しては、やはり山を統べて来たというプライドがあるのだから。反発しつつも八雲や私達の力があるから表立っては動いていない……と言う所か。先の天狗は非主流派と考えるべきだろう。というかアレが主流派なら、八雲が私達を呼ばんでも天狗が勝手に異変を起こしている筈だ」

「まあね。基本的に強い相手には媚びへつらうんだよね、天狗ってそういう意味で敵情視察みたいな事をやってのけたあの天狗は割と変わり者だと思うよ。それに力も相当強い。韜晦しているけど、大天狗格の能力はあると見たね」

山の方はやはり天狗の存在がネックになるか。神奈子と諏訪子は

互いにそう結論付けつつも、先の射命丸という天狗に対して意見を交わしていた。

その場に居る彼らのいずれも知らない事だが、その意見は概ね正解である。

射命丸文。彼女は御歳千歳を越える山でも古参の大妖怪でありながらも、強い好奇心の赴くままに多くの人妖と接触を持っている、ある意味では閉鎖的な天狗社会における異端児だ。

“里に最も近い天狗” という二つ名は、しかしある意味では“山から最も遠い天狗” という意味と表裏一体である。

並の大天狗を凌駕する實力を持ちながらも山の幹部という立場に興味を示さず、未だに新聞を作って自由勝手に飛び回る烏天狗という立場に甘んじている辺りからも、彼女の性格とスタンスが分かると言つ物だろう。

山の秩序を乱す事は無く山の一員としての役目はきっちりと果たして居るものの、その性格ゆえに上層部受けが悪いのが射命丸文だ。神奈子や諏訪子の推察は正解である。

ちなみにプライドは高く他者を見下す傾向が強く狡猾だが、反面下の者に対しては見下しながらも面倒見は良いという不思議な性格なので、後輩受けは割と良い。

些か御脳が花畑傾向があるものの、哨戒天狗としてはこの上無い能力である“千里先まで見通す程度の能力”を持つ犬走椀も、文に懐いている一人である。

ちなみに御脳の花畑ぶりに関しては先の本殿での一件を見れば分かるだろう。御覧の有様である。

「大天狗や天魔といった天狗上層部は保守派で消極的敵対傾向。他は概ね友好的。ですが射命丸女史のようなイレギュラーに関しては

不明という事ですね
「そうなるな」

御馳走様ですと箸とカップ麺を置いた西宮が言った言葉に、神奈子が頷きを返す。

山に関しては以上だと付け加えながら彼女も箸とカップ麺を置いた所で、話を引き継ごうとしたのは早苗だ。が

「ずぞぞー」

「良いから食ってる。俺が話す」

まだ食べる方に忙しい彼女、麺を口に入れたままモゴモゴと口を動かすだけであった。

二日前までは花の女子高生だった身としてそれはどうよという視線を三方から受けた早苗だが、怯んだ様子も無く西宮の言葉に頷いた。ある意味肝の据わり具合では彼女がこのメンバー中随一かもしれない。

「人里の方の感触は良好ですね。外と違って幻想が生きているこの世界、人々と神は伝え聞く大和の時代に似た、或いはそれ以上に距離の近い関係を持っています。お二人の力と神徳と御利益を説いて回れば、徐々に信仰を集めるのは可能だと思います」

「八雲が言ってた里の有力者の反応は？」

「稗田の当主の阿求様は大変良くして下さいました。上白沢様に関しては不在でしたので何とも。阿求様が言伝を引き受けて下さいましたが、明日にでも改めて挨拶に伺おうと思っております」

「そうか。そちらは任せる、丈一」

「御意に」

一通り話し終え、神奈子の一任を受けた西宮が頭を下げる。

フランクな諏訪子や信仰心こそ比類無いがどこか一本抜けている早苗が混ざる時と違い、この二人だけで会話をさせると非常に威厳のある神とその信徒つぼく見える。

それ故に神奈子がこの類のやり取りを好んでいるのは、彼女だけの秘密である。この軍神、この手の神様つぼい威厳のあるやり取りが好きなのだ。

「私と諏訪子は明日もこの場に留まり、妖怪や他の神々と面識を得て交流を深める事にする。人里に関しては万事お前の思うようにするが良い。早苗は丈一の言葉を良く聞いて動くように」

「分かりました、神奈子様」

神奈子から告げられた言葉に早苗も反発しない。

しょつちゆうぶつかり合う彼女と西宮だが、それは早苗が西宮を信用していない事を意味しない。

むしろ長年の付き合い故に、この手の事には西宮の方が自分よりも長けている事を彼女は直感で理解している。

そして神奈子の指示に従い、翌日以降も彼らは人里を中心に信仰を広める為に活動する事になる。

その布教活動は極めて順調に進み　しかし物事とは得てして順調に行っている時こそ落とし穴がある物である。

順調に行き過ぎていたが故に、早苗がついつい領分を見誤り、自分が侵すべきではない領分　博麗神社にちよっかいをかけるのは少し後の話である。

#

「へぐう……何だったんスカね。何か急に右脇腹にフックを食らったような激痛が走って意識が刈り取られたんスカ」

「神罰ね。神前でその信者に対して不躰な物言いをしようとしたから罰でも当たったんでしょ」

「マジっスか。うわぁ怖い、神様怖い。信仰しようかなあ」

「今は止めておきなさい。上が煩いわよ」

同刻。

神社を辞して天狗の里へ戻る途中で、息を吹き返した椀と文が言葉を交わしていた。

幸い神社と里の延長線上には巨大な霊樹があるので、それを目印に飛ばば分かり易い。

そして語る内容は無論、先の神社で聞いた神々の話だ。

「八雲紫が彼女達を呼んだ。それは即ち、八雲紫が私達天狗だけでは妖怪の山は成り立たないと判断したと言う事。全く、上層部も素直に八雲の言う事を聞いてれば良かったのに……」

「文さんは賢者様の味方なんスカ？」

「私は天狗の味方よ、椀。だからこそ　天狗の力を保つ為にも八雲の提案を受けて異変を起こすべきだったと言ってるの。そうすれば天狗は自分達の力を幻想郷に示せる。八雲は幻想郷内のパワーバランスが取れる。WIN-WINの関係で万事丸く収まった筈なのよ」

「もうちよい分かり易く頼むツス」

「つまり今の天狗は、舵取りを間違っつて危ない立場なのよ。このままじゃ外から来たあの神々の下に甘んじる事になりかねない……いえ、ここまで失策した以上それも已む得ないかもしれぬ。でもその中で可能な限り天狗の立場を高く保つためには……」

ぶつぶつと呟きながら思考に没頭する文に、既に足首を掴まれて

いるのではなく自力で飛行しながら椀は問いかける。

「あの神社の神様をやっつけて追い出すってのは駄目なんスか？」

「現実的じゃないわ。見たでしょ、あの神々。建御名方神と洩矢神。それも神々への信仰が色濃く残る幻想郷に来た事で、往時の力を取り戻しつつある。しかも八雲も今は向こうの味方。鬼……伊吹の萃香さんや西行寺の亡霊姫も、八雲が向こうに付くなら恐らく敵に回るわ」

「あー、言われてみれば。それに風祝でしたっけ。あの人も結構な霊力を感じたツスしねー」

得心したと言う様子の椀の言葉に、文が苦笑する。

頷きながらも、しかし出てきた言葉は否定の色が濃い物だ。

「風祝はそこまで怖くないわ。確かに人間としては破格だろうけど、博麗に比べれば大きく劣る。経験を積みばまだしも、今は同じ人間でも霧雨や十六夜にも劣るでしょうね。一対一ならスペルカード戦でも、スペルカードを用いない原初の殺し合いでも私一人で倒し得る。どちらかって言うと私は隣に居た人間の方が面倒そうに感じたわね」

「そうツスか？ そっちの子は霊力の感じから察するに、ボクより弱いくらいだったツスよ？ 特に武芸を齧ってる様子も見受けられなかったツスし」

「椀。私達が、天狗が、妖怪が、そして神々が幻想に追いやられたのは誰の力？」

「……………え？ んーと……………」

「人間よ。小賢しく知恵の回る外の世界の下等な人間が、その知恵を以てして私達幻想を追いやった。そして太古の大和では、人々はカガクという力を持たずとも私達のような妖怪を退治する力を持っていた」

憎悪のような憧れのような、嫌悪のような恋慕のような。

文が外の人間を語る時に浮かべた表情は斯様に非常に複雑な物であつたが、椀にも分かつた事が一つ。

射命丸文は人間を下等と評しながらも、彼らが持つ知恵と力を決して侮つてはいない。

そしてその彼女が西宮を評して曰く、

「あの子は私を見て警戒しながらも、あの場で私が隠さず出していた妖力に力の差を感じながらも、怯えは見せずに見返して来た。あの目はね、椀。太古の大和で妖怪相手に一步も引かずに戦つた、諦めが悪く馬鹿で意地っ張りです。そして妖怪にとって人間が最も愛おしかった時代の人々と同じ類の目よ」

第七話：“里に最も近い”天狗（後書き）

今回は射命丸タイムだった気がします。

今作における彼女の立ち位置はご覧の通り。天狗の中では非主流派でありながら、天狗屈指の実力者です。

椛に関してはダブルスパイラーでの設定より、風神録後の二次創作界限で多かった文に懐いている後輩ポジションで。ボクっ子は正義。

ちなみに西宮に関してはこれといって能力を持たせようとは考えていません。文が最後に言っていた通り、知恵と諦めの悪さと意地が最大の武器です。

弾幕とかやる時は、守矢のお札とかを使う劣化早苗さんなスペックになると思われます。

第八話：人里の守護者（前書き）

さて、今回で風神録前準備篇は終了。

次回か次の次辺りから風神録の入りとなります。

けーね先生と藍様、どうにも口調が似てしまいますね。反省。

第八話：人里の守護者

翌日、早朝から早苗は弾道ミサイルよろしく凄まじい勢いで布教活動に飛び出して行った。

外の世界で失敗続きだった布教が、こちらでは上手く行っているのが楽しくて仕方ないのだろう。

朝食のカップ麺（シーフード味）をかき込み終わってすぐに出撃した満面の笑顔の早苗に手を掴まれて、引つ張られて行く西宮の悲鳴。それをドップラー効果付きで聞きながら、神々は朝早すぎてぐっすり寝ていた。

そしてそんな二人が再び到着した人里前。

着地と言うより着弾と表現した方が良い勢いで到着した彼らに、眠そうな顔で立っていた里の門衛が驚いた表情を向けて来る。

ちなみに綺麗に着地した早苗に対して、着地失敗した西宮は地面に突っ伏すように転がっていた。

「……そのうち泣かす」

「出来るもんですか」

転がったままの西宮の呪詛に対して、ふふんと鼻で笑った早苗が門衛に挨拶をしつつスタスタと人里に入って行った。

彼女が去って程無く、躊躇いがちに門衛が西宮に近付いて声をかける。

「……喧嘩でもしたのか？」

「……ええ。概ね四六時中喧嘩してるようなもんです」

立ち上がった西宮は服についた土埃を払いながら立ちあがる。

ちなみに今日の服装は里で買ったジーンズとシャツ姿だ。

何故明らかに外の世界らしき服装が売ってるのかと驚いた西宮だったが、魔法の森に住む人形遣いが資金稼ぎの為に時々外の世界の衣装を真似て縫っては売りに来るらしい。下手をすれば外で買った服よりも良質なそれは、外の洋服に慣れていた西宮としてはありがたい事である。

ともあれ彼も里に用事があるので、門衛に挨拶をして里に入る。

今日の彼の目標は二つ。

人里の守護者である上白沢慧音への挨拶と、昨日神社の中を整理して気付いた足りない日用品などの買い足しだ。

ちなみに社務所に軽く三百を超えるカップラーメンが仕舞われていた時には、『こいつらいつの間にかこれだけの事を』と思うのと同じ時に、『これしか買ってねえのかよ!？』と西宮が叫んだのは昨日の事であった。

何にせよ件の上白沢慧音女史の家に一度伺ってみるか、里の中央へ向かって歩き始める西宮。

しかし里の中央にこそ何事も無く到着したものの、商店が立ち並ぶ区画で横合いから声をかけられる事になる。

「む、君は確か守矢神社の」

「あ、八雲様の所の……八雲藍様でしたか」

物珍しそうに周囲を見ながら歩いていた西宮に声をかけてきたのは、八雲紫の式神。西宮視点では早苗と喧嘩している間にいつの間にか居なくなっていた、美人の九尾さんだ。

豆腐屋の前で何か買っている様子の子の彼女の名は伝え聞いているので、西宮は名前を呼びつつ頭を下げる。

彼からすれば、仕える神である神奈子と諏訪子に幻想入りという選択肢を与えてくれた紫は恩人だ。その式神である藍もまた、敬意を払うに足る相手だと判断していた。

しかし頭を下げた彼に、藍は驚いた様子で瞠目する。その様子に西宮は、何かおかしな点でもあったかと首を傾げる。

「……何かありましたか？」

「ああ、いやすまない。失礼な話だが、私が君に抱いている印象と少々そぐわなかったものでね。風祝相手の喧嘩と昨日の魔理沙の襲撃もあって、君はもう少し天衣無縫な少年だと思っていたのだが」

「東風谷との喧嘩はライフワークの一種なのでさて置きますが、魔理沙の襲撃……ですか？ 確かに昨日の別れ際に、八雲様を退治するとか息まいてましたが……」

「……ああ、その様子を見ると本当に勘違いとすれ違いの産物だったか……」

本気で悩む彼の様子に、藍は疲れたように肩を落とす。

魔理沙の襲撃　それは一言で言えば以前の魔理沙と西宮の会話が原因による、藍の言う通りの感違いとすれ違いの産物だ。

『世紀末巫女王伝説〜守矢の拳〜』とでも言うようなブツを紫が幻想入りさせたと勘違いした魔理沙が、紫を正気に戻す為に決死の覚悟でマヨヒガに乗り込んで行った件であった。

折しも藍の式神の橙やら白玉楼から来た幽々子と妖夢の主従やらも一緒に団欒中だった八雲家、その襲撃にいたく混乱。

突然の襲撃者を反射的に切り捨てようとする妖夢が相手が魔理沙である事に気付いて、慌てて刀を止めようとしたら止め切れずに八雲家の襖を綺麗に真っ二つにしたり、驚いた橙が味噌汁を被って七転八倒したり、幽々子は何事も無かったかのように食事を続行しておかわりを要求したり、藍がそれらの三者への対応に苦慮したりと、

八雲家は一時地獄絵図の様相を呈した。

結局涙目で翻意を促す魔理沙を紫が宥めて事情を聞き、『エイプキラー巫女』を西宮から聞いた魔理沙が勘違いをしたという事が判明。

ちなみにエイプを知らない妖夢と橙も、そんな恐ろしそうなモノを素手で引き千切る巫女が出たのかと戦慄に身を震わせたりしていたが、早苗を実際に見知っている藍と紫は余りの勘違いに脱力していた。また、幽々子は顛末を聞いた後に成仏しそうなくらい笑い転げていた。

曰く、あの魔理沙が良いように騙されたのが面白くて仕方なかったらしい。正確には騙されたと言うよりも擦れ違いと勘違いの産物なのだが、それでも面白い事には変わりが無かった模様。付き合いの長い紫をして、『あれほど笑った幽々子を見たのは十年ぶり』との事だった。

魔理沙も魔理沙で、そんな勘違いをさせられた事に怒りと羞恥で顔を赤くしていた。

あれは遠からず何かの報復措置があると考えて良いだろうと藍は判断している。

ともあれそのエピソードの原因となった西宮に対して、藍は早苗と口汚い罵り合いをしている光景を見ていた事もあって大層フリーダムな人物という印象を受けていたのだった。

しかし藍が魔理沙襲撃事件の顛末を伝えると、西宮は愕然とした様子で頭を下げた。曰く、『ご迷惑をおかけして申し訳ありません。必要とあらば後日改めて謝罪に伺わせて頂きます』との事。

それには及ばないと返しつつも、西宮のその幻想郷には珍しい対応から、『ああ、幼馴染の風祝が関わらなければ割と常識的な子な

のか』と藍は感慨深く頷く。

運命操ってハシヤギ回る吸血ロリータの率いる紅魔館やら、永遠亭の求婚ブレイカーと宇宙ドクター率いる永遠亭。それらに比べると随分と常識的な対応に見えるのだが、比較対象がその二つの組織である辺り既に末期である。

「……まあ魔理沙襲撃事件に関しては、気になるようなら紫様や魔理沙には会ったら謝罪すれば良いだろう。ただ、仮にも幼馴染の少女にエイプキラーなどという渾名を付けるのは感心しないな」

「八雲様公認ですよ？ 幻想郷に来た事で神力・霊力が強まって、実際に出来るくらい強くなってるみたいですし。それに、ほら見て下さい俺のこの湿布。これ東風谷の仕業です」

「紫様から君達の間柄を聞いてはいたが、本当に殴り合ってるんだな……」

呆れたように呟きながら、藍は店の奥から戻って来た豆腐屋の従業員から商品を受け取る。

そのまま買いた物袋に入れたのは大判の油揚げだった。

『ああ、狐って本当に油揚げが好きなんだ』と感心する西宮。その視線に気付いたのか、藍が視線を強くして、

「やらんぞ」

「要りませんで」

油揚げの入った買いた物袋を庇うように背後に隠す藍に対して、西宮は呆れが混ざった苦笑を返す。

実際に油揚げを食いたいわけでもない西宮である。むしろ昨日のカップ麺に入っていたので当分は要らない。

「まあとりあえず通りがかりで挨拶をしただけで用事があつたわけ

ではないので、俺はもう行きますね。それでは藍様　　で良いですか？　八雲様だと賢者様の方と被りますし」

「ああ、構わないよ。すまん、こっちも用は無かったんだ。見かけて挨拶をしたただけでな」

「ええ。それでは藍様、失礼致します」

そして藍は買い物を終えて家に帰る為、西宮は人里の守護者である慧音の家へ行く為にと、互いに別方向へ歩き出す。

この邂逅によってこの段階で西宮が魔理沙による八雲家襲撃事件について知っていた事が意味を持つ事になるのは　　もう少し先の話である。

#

さて、八雲藍と別れて程無くして西宮が到着したのは寺小屋だった。

里の人に聞くと『慧音先生ならそこだよ』との事だったので、歩いてやって来た西宮なのだが

「だれだー。しらないにーちゃん」

「めずらしいふくー。えいえい」

「はははガキ共いきなり随分な挨拶じゃねーかコノヤロウ」

寺小屋とは里の子供に学問の基礎を教える為の場所である。

そして今日は寺小屋で授業があり、即ち里の子供がわらわらと集まっている。

結果としてそんな場所をノーアポイントメントで訪れた西宮は、子供たちに全力で絡まれていた。

小さい子供が西宮の頭にまでよじ登り、服の裾が引つ張られ、木の枝でペシペシと叩かれる。実にフリーダムであった。

年代としては外の世界で言う小学校程度の年代だろう。上は十代の序盤から、下は一桁の半ばを過ぎた程度の年齢まで。

そんな好奇心旺盛な年齢の彼らからすれば、突然やって来た見知らぬ、それも妙な服を着た男は興味を大いに引く対象だった。

それも外の世界に居る部屋の中でゲームなどで遊んでいる子供達とは違い、幻想郷の子供は実にバイタリテイ豊富であり、既に全力で西宮で遊び始めていた。

「痛い痛い髪引つ張るな頭の上の子ビ！ おい誰だ今ローキックくれたの！ 木の枝で叩くのは止めるそこの！ 叩かなければ

良いって問題じゃねええええ！ お前今鼻に突き刺そうとしたる！ 八年前に学校の先生の鼻の穴に鉛筆を刺した東風谷と同レベルかお前は！！」

寺小屋に入る事もまかりならず、しかし子供相手にあまり強行手段に出るわけにも行かず、完全な立ち往生である。

べしべしびしびしと叩かれ遊ばれ、頭の上の子供には「すすめー！」などと命令される始末。

「ああもう、何が『すすめー！』だよ！ 畜生、昔ロボットアニメを見た東風谷に似たような事をやられた記憶があるな……あの時は俺もあいつも殆ど体格変わらなかつたから、潰れるかと思っただけ。しかも命令が『すすめー』じゃなくて『がったい！』とか『へんけい！』とか大分無茶だったからそれに比べりゃ有情か……」

「こちやつてなにー？」

「おいしい？」

「美味しくないぞ。コングパンチを必殺技とするエイブキラーだ。」

お前らも見たら逃げろよ。目を合わせたら食われる」

「こわーい」

「きゃー」

適当に返す西宮に、周囲の子供たちはきゃっきゃと楽しそうにはしゃいでいる。

そんなどうしようもない状況に対して、動きが出たのは寺小屋の奥からだ。

「お前ら何を騒いでいるんだ！ もう授業が始まる時間だぞー！」

良く響く女性の声で、寺小屋の奥からの一喝。それに対して子供達はビクリと身を竦ませて、慌てて寺小屋の中に駆けこんで行った。ちなみに西宮の頭の上の子供は、『いそげー！ けーねせいせーにおこられちゃう！』と、西宮の髪を引っ張りながら必死に前進を促していた。

「痛い痛い分かった分かった！ すいませんお邪魔します！」

別段抜け毛を気にする歳でもないが、流石に髪の毛を無駄に引っこ抜かれるのは御免被る。

慌てて頭の上の子供の指示に従い寺小屋に駆け込んだ西宮を迎えたのは、

「……誰だ？」

という先程の一喝と同じ声で、しかし先の一喝とは違い困惑した様子で告げられた言葉。

そしてその言葉を言った当人である、弁当箱のような帽子を頭の上に乗せた長身の女性だった。

#

「待たせてすまない、君が守矢神社の西宮君だったか。阿求から話は聞いている」

「いえ、こちらこそ急な来訪で申し訳ありません。お忙しそうですし、日を改めた方が良いでしょう……」

「なんの、構わんさ。昨日は阿求を経て随分と良い羊羹を頂いたからな。友人と一緒に美味しく食べさせて頂いたよ」

結局その後、寺小屋の凶行の最初の時間を自習とした慧音は、寺小屋の中の別室で西宮と向かい合っていた。

言ってしまったえば職員室のような役割をしている部屋で、机の上には慧音が作った寺小屋で使う教科書が整然と積まれている。

その机の横で、慧音と西宮は椅子に座って向かい合っている形だ。

「散らかっていて済まない。どうか気にしないでくれ」

「いえ、お構いなく。急に来たのは私の方ですから」

「そう言ってくれると助かる。さて、阿求から内容は聞いていますよ。人里で布教活動を行うに当たったの挨拶回りだったな。無論構わん、どんどんやってくれ」

慧音が言った言葉に西宮が驚く。好感触 どころの話ではない。積極的に推奨している気配すらある。

加えて西宮からすれば、彼女の表情は何故か心なしか興奮しているように見えた。

「……上白沢様は建御名方神か洩矢神を信仰なさっているのですか

？」

「慧音で構わんよ。里の皆もそう呼ぶ。そして、まあ、そうだな。信仰は特にしていないが、歴史家として非常に興味がある。建御名方神と洩矢神、外界でこれまで現存していた太古の大和の時代の神々だ。歴史書にすらなっていない神話の時代の大和の歴史、彼女達が幻想郷に来た事で生きたその話を聞く事が可能になると言う事だろう！？ これに歴史家として興奮しないでどうするとかのか！ ああいかんいかん満月でも無いのに角が出そうだ！！」

「満月！？ 角！？ ちよ、上白沢様 じゃなくて慧音先生落ち着いて下さい！！？」

興奮の原因はすぐに知れた。

どうやら歴史家でもある上白沢慧音、生きた外の歴史の証言者とも言える二柱の幻想入りにテンションが鰻登りであつたらしい。

頬を赤く染め、自らを抱くように両手を回し、キヤーなどと黄色い声を上げる姿はまるで恋する乙女だ。

ただし彼女の場合、恋の対象が歴史である。色気が無い事この上無い。

「……まあ、認めて頂けるなら良いです。今はまだ来たばかりで忙しいですが、御二柱にも慧音先生が話を聞きたがつていた事を伝えておきましょう」

「ああ、是非とも頼む！ 特に歴史の話を頼むと伝えておいてくれ！ それと、まだ幻想郷に来たばかりで色々と不慣れな面もあるだろう。君と風祝の 東風谷君だったか。困った事があればいつでも訪ねて来てくれ」

「ありがとうございます。何かあれば頼らせて頂く事があるかもしれません」

歴史さえ絡まなければ、幻想郷でもトップを争うほどの常識人で

あり良識人である上白沢慧音。

特に人間に対しての味方であろうと自らに任じている面もあつてか、西宮と早苗に関して気にかけている部分もあるらしい彼女の言葉に、西宮は素直に感謝の念を言葉にする。

そんな西宮に慧音は満足げに笑い、

「うむ、西宮君は礼儀が出来ているな。いつもいつも元気過ぎる子供ばかりを相手にしているせいもあって、君のような子の相手は新鮮だよ。君がこの調子なら、相方の東風谷君も安心して見ていられそうだな」

「あー……いや、東風谷は確かに真面目で根は善人なんですけど時々……というか割としょっちゅう常識の斜め上に飛び出すアホの子なので、期待しない方が」

「……そうなのか？」

西宮が苦みしばった表情で返した言葉に、慧音がきよとんと首を傾げる。

しかし西宮、その慧音の言葉に頷きを返し、

「昔っからあいつの暴走に付き合わされて来ましたからね。子供の頃など思い出すと、先程の寺小屋の子供達が大人しく見えますよ」

「ははっ、守矢の風祝は大層お転婆だったようだな」

「現在進行形でお転婆ですよ。今日だって早朝からまだ寝ている俺の部屋に侵入して来て叩き起こして『休んでいる暇はありませんよ西宮！ 出撃です！』とかお前はどこの対地攻撃爆撃機の伝説的パイロットかと」

「……ちよつと待て」

「はい？ ええと、何か？」

愚痴に近いノリで西宮が言った言葉に、慧音が眉根を顰めて待つ

たをかける。

眉根を顰めつつも僅かに頬を染めた微妙な表情の慧音に西宮は困惑。しかし慧音はそんな彼に構わず、絞り出すように言葉を紡ぐ。

「……もしや君達は未婚の年頃の男女でありながら、同じ屋根の下で眠っているのか？ な、なんとはいはしたない真似を……」

「え？ まあ、言われてみたらそうなりますけど、別にそんな色気のある話じゃ」

「問答無用」

そして西宮の回答を聞いた慧音が頬の赤みを強くし、彼の両肩がしりと掴んで身を反らせる。

『え？』と疑問符を浮かべて西宮が身体を硬直させた次の瞬間

「不純異性交遊撲滅クラアアアアアアッシュ……！」

「ぎにやあああああああああ！……！」

轟音と共に寺小屋名物・地獄のけーねヘッドバッドが炸裂する。

折から響いた鐘でも鳴らしたかのような轟音に、寺小屋の生徒達は『あれ？ もう授業終了の鐘がなる時間だっけ？』などと自習時間の終わりを嘆いていた。勘違いである。

人里の守護者、上白沢慧音。

幻想郷でも屈指の常識人にして良識人だが、歴史狂いと男女関係に対する潔癖症が玉に瑕であった。

第八話：人里の守護者（後書き）

とりあえず風神録開始前にやらなければならない事・会っておかないと不自然な人やらプロットの遭遇して欲しい相手との出会いはひとまず終了。

次か、遅くとも次の次から風神録開幕です。

が、明日（既に今日）は忙しいので更新の可否は不明です。ご了承ください。

閑話其の一：彼と彼女の高校生活（前書き）

本編を更新するほど執筆時間が取れなかったため、友人からネタ出しされた西宮と早苗の高校時代の話を一つ。

両者ともに互いを『ただの幼馴染』と言って憚っていませんでした。ああ、本編の方でもそうか。

ちなみに早苗や西宮の友人は外見描写も敢えてしていないモブの皆さんと御思い下さい。

それと早苗さんは一般的な二次創作では料理は出来るパターンが多かったですが、この小説では西宮がその辺をカバーしてしまった為に全く料理が出来ないまま育ってしまいました。ご了承ください。

閑話其の一：彼と彼女の高校生生活

これは守矢神社が幻想の存在となる前の話。

つまりは東風谷早苗と西宮丈一が未だ普通の　いや、かなり変わった高校生と少し変わった高校生だった頃の話である。

「C組の東風谷ってあんだだけ美人だから告白とか結構されるらしいんだけどさ」

「もぐ……剛の者も居たもんだな」

場所は学校。昼休みの教室にて、弁当を開いていた糸目の少年

西宮丈一。

彼は横でパンを食べている友人からの言葉に、自作の肉詰めピーマンを咀嚼しながら返事を返す。

「幾多の精鋭が彼女の寵愛を得ようと告白を試みたものの、全て伝家の宝刀『ごめんなさい』で一刀両断にされたって話じゃないか。それで、もしかして東風谷ってお前と付き合ってるんじゃないかって噂も出てるんだけど。小耳に挟んだんだけど幼馴染なんだろう？」

「まあ幼馴染なのは事実だが、別段そういう浮いた話に発展した事は一度も無えぞ」

「だったらそれはそれでさ。東風谷が好きなタイプとかって分かる？」

何の事は無い、高校生にはありがちな惚れた何だの恋バナという奴だ。

しかし今話題に挙げられたのは、彼らが通っている高校にて、一年生ながらも『美少女No.1（新聞部調べ）』と評されている東風谷早苗。多少エキセントリックな性格をしているものの、他の追

随を許さない美少女である。

だが彼女は実家である神社の方に熱心であり、浮いた話が全く浮かばない高嶺の花。すわ攻略不可能かとも噂されている美少女だ。

そんな彼女と西宮丈一が幼馴染だというのは、入学してから然程日が経っていない今は未だに学校内では然程知られていなかったらしい。

西宮が友人と交わした会話に、『マジでか!?!』『あの東風谷さんと!?!』という声が教室内のそこかしこから上がる。

「お前ら好きだな、この手の話題。……しかし東風谷の好きなタイプかあ」

そして周囲の声を聞いた西宮は首を傾げる。

付き合いこそ長いがお互いそういった話題で話をした記憶は殆ど無い。丁々発止とアホな事で喧嘩をしていた記憶の方が圧倒的に多いのだ。

故に彼女の普段の言動から彼女の好みのタイプを想像しようとした所、出て来たキーワードはやはり『信仰』だ。

「……やっぱりあいつの今時珍しいレベルでの信仰っぷりを認めてくれる相手じゃねーの？　まずは大前提で」

「東風谷さんってそんなに熱心なのか？　信仰とか宗教とか」

「信仰と宗教って繋げて読むと大分危ない雰囲気になるな。まあ、あいつん家は新興どころか滅茶苦茶古いが。諏訪大戦とか建御名方神とか洩矢神とか、あいつと付き合いたいならその辺程度は抑えておいた方が良い」

いつの間にか周囲に集まって来た男子生徒達に呆れた視線を向けながら、西宮は教鞭のように弁当の箸を手に持つ。

意外なまでの早苗の人気ぶりに驚きつつも、まあ外見は相当な美人だしなと納得する。西宮とて男、美人に惹かれる気持ちは当然良く分かる。

だが付き合いが長いと見なくて良い部分まで見えて来るのも事実であり、

「フーかお前ら、あいつの私生活がだらしないの知ったらそんな事も言えなくなるぞ。神社の掃除はしっかりする癖に自分の部屋は掃除出来なくて、お袋さんに怒られて大体俺に泣き付いて来るんだ」
「……………待て」「……………」

そして呆れながら言われた言葉に、周囲の男子生徒達が揃ってストップを出す。

寸分の間も無く同時に告げられた『待て』の声。無駄なコンビネーションに、思わず西宮が椅子ごと引く。

このコンビネーションを普段から発揮できれば、数カ月後に迎えている球技大会でこのクラスは無双の活躍が出来るだろう。

「西宮。その台詞から察するに、お前はよく東風谷さんの家にお邪魔するのか？」

「ん？ まあほぼ毎日だな。俺あいつの家の神社でバイトみたいな扱いになってるし。バイトつか神職見習い？」

「ガツテム！ 神は死んだ！！」

「それ仮にも神社で働いてる人間の前で言う言葉か」

友人の一人が頭を抱えて天を仰ぎながら叫んだ言葉に、思わず西宮が突っ込む。

しかし周囲の友人達からすれば彼の先の発言は捨て置ける物ではない。

「おま、それは少し家の中を探索すれば東風谷さんの嬉し恥ずかしい下着が置いてある脱衣場へのスニーキングミッションも可能だつて事じゃないですかねえ!？」

「発想がそこから入る辺り、立派に変態だな我が友人」

「俺は変態じゃないよ! 例え変態だとしても変態と言つ名の変態だよ!」

「自覚がある辺り潔いなお前」

友人は選ぶべきかとやや本気で悩みながら、しかし西宮はその友人を更にヒートアップさせる言葉を吐いてしまう。

「フーか下着なんぞ、あいつの場合脱衣場まで行かんでも部屋に脱ぎ捨ててるし」

告げられた言葉に、反応は絶叫。

『幻想壊れた』という叫びから、『そりゃあ東風谷さん誰の告白にも無反応な筈だよ』という叫びまでが聞こえて来る。

「おま、どんだけ仲良いんだよ西宮!？」

「いや別に俺と東風谷は仲良くはないぞ。しょっちゅう喧嘩するし」

「それはどうでも良いから今度その下着一セットくすねて来てくれ! 十万出す!！」

「おい、まずは誰がこの馬鹿どうにかしろ。具体的にどうするかまでは言わなくて良い。そこまでこいつの行く末に興味無いし」

一人だけ凄いテンションになつてる友人がいたので、西宮と他の友人達は手を取り合つて紳士的にその友人を排除した。

亀甲縛りで掃除用工具箱に封印された彼は皆から忘れ去られ、封印が解かれるのは放課後の事になるのだが、一切本筋とは関係無いのでその辺りは割愛する。

#

「早苗の弁当、美味しそうだねー」

そして西宮の教室でそんな騒動が起こっているのと同刻。

屋上で友人数名と昼食を食べていた早苗は、肉詰めピーマンを頬張っていた所で横合いから声をかけられた。

横を見やると、然程友人が多い方ではない彼女にとって数少ない友人と言える少女が、少し物欲しそうに早苗の弁当を覗き込んで来ていた。

「まあ美味しいですけど。どうしたんですか、お弁当忘れたんですか？」

「お母さんが寝坊してさー。今日はコンビニのパンで我慢」

ぶー、と唇を尖らせる友人の様子に、周囲の他の友人達から笑い声上がる。

そのうち一人が『私は自分で作ってるよ』とカミングアウトすると、周囲から上がったのは『すごい』だの『私絶対無理ー』だのという歓声だ。

そしてコンビニのパンを頬張っている友人が早苗に視線を向け、問いかけて来る。

「早苗って神社のお仕事で朝早く起きてるんでしょ？ 早苗も自分で弁当作ってるの？」

「いいえ、早起きなのは事実ですけど料理は得意じゃなくて。いつも西宮に作って貰ってます」

何気なく早苗が返した言葉に、周囲が固まる。

早苗と友人をやっていると、一度は聞く名前。西宮 西宮丈一。

彼女達の同級生の男子生徒にして早苗の神社のアルバイトのような事を行っている少年、なのだが

「早苗、彼氏に弁当作って貰ってるの!？」
「幼馴染ですよ」

周囲で湧きあがる黄色い声に、渋い顔をして早苗は返す。

この場に居るのはいずれも年頃の少女達だ。こういう話題には殊更に敏感なのだが、早苗の表情は苦虫を数十匹纏めて噛み潰したように渋かった。

その様子に周囲の少女達も盛り上がるのを止めて、『はて?』と首を傾げる。

「そーなの?」
「そうなんです。そもそも西宮は酷いんですよ? 見て下さいこのピーマン。私が嫌いだったのをずっと前から知ってるのに、健康に良いからとか言って入れ続けて来るんです。信者が風祝に対する態度としてはあり得ません。肉詰めにする工夫は認めますが」

そう苦々しく言いながら、ピーマンの肉詰めを口に放り込む早苗
『んー美味しい』などと言ってる所、どうやら信者作のピーマンの肉詰めは風祝の舌に合ったようだ。

彼氏の手料理というより、まるで母親が子供にピーマンを食わせる為の工夫だ。周囲の少女達のテンションが一段階下がる。

「じゃあ付き合ってるとかそーいう話じゃないんだ?」

「昔つから四六時中一緒だったせいで、そういう話には逆に成り得ませんよ。あの糸目、いつつも私を無碍にしやがって……」
「む、無碍って……何があったの？」

ぶつぶつと呪詛のように呟くその言葉に、腰が引けながらも周囲の友人が問いかける。

その友人に対して早苗は大層ご立腹の様子で、箸の先にタコさんウィンナーを刺してぶんすかと語り始める。

「まず敬意が足りません。私は風祝で、西宮は神職見習いです。私の方が偉いのに……」

「風祝ってなんだっけ？」

「巫女の変異種じゃなかった？ えーと、ほら。ザザミに対するギザミみたいな」

「普通の巫女は赤いからザザミで、風祝の衣装って青いらしいから早苗はギザミだね」

「モンスターで例えないで下さい」

後にエイプキラーと例えられる少女、東風谷早苗。外の世界での例えはシヨウグンギザミ（モンスターハンター）であった。どうやら彼女は可愛さとは無縁な物に例えられる運命らしい。

「それにですね。この弁当の件で世話になってるからと、先日神奈子様と諏訪子様のアドバイスを受けて料理を作ってあげようとしたんですよ！なのに西宮の奴、全力で逃げたんですよ！？ 幾らなんでも失礼でしょう！！」

「神奈子様と諏訪子様？」

「あ、え、えーと……ウチの神社の偉い人の名前です」
「ふーん」

そして危つく自らが信仰する二柱である神奈子と諏訪子の名前を出した早苗だが、言い逃れに成功。

自分にしか見えず、声も自分と西宮以外には聞こえない相手だ。迂闊に名を出すと変な子扱いされるのは幼少時に経験済みである。

幸いにして神社云々には興味が無いらしい周囲の少女達はそこには突っ込まず、代わりに突っ込まれたのは別の点だった。

「早苗って料理できるの？」

「いいえ」

素朴な疑問に対する返答は、『どうだ文句あるか』と言わんばかりに胸を張って笑顔で告げられた否定の言葉だった。

#

一方の教室では、西宮的には『幼馴染だしこんなもんじゃね？』と思っっている彼から、彼と早苗の日常を聞かされた男子生徒達が呆れ果てた様子で西宮を困んでいた。

困まれた側の彼は、『どうして俺こんな状況に？』という表情である。救いが無い。

「話を整理しよう。西宮、お前はほぼ毎日東風谷の神社で神職見習いとして働いている。東風谷の御両親との仲も良く、父君からはよく晩酌や将棋の相手に誘われる」

「うん」

「更に東風谷自身もお前に対しては無防備で、下着が脱ぎ捨てである部屋の掃除を任せられるレベル。それどころかお前が部屋にいる状況で無防備にベッドで寝る」

「掃除や宿題を俺に押し付けてな。……つたく、風祝としての修行が大変なのは分かっているから良いんだが」

「……お前それは据え膳って言うか……いや、もう良い。何かお前と話していると俺らが敗北者になった気になって来る」

がつくりと頂垂れる友人達。

西宮的には愚痴で言っているつもりなのだが、周囲の友人達からすれば惚気にしか聞こえない。

『リア充爆発しろ』だの『もげる』だの『パルパルパル』だのと聞いた声が周囲から聞こえてくるが、当の本人である西宮の心境は『知らんがな』である。

しかしそんなどうしようもない空気の中、一人の友人が声^{ゆづり}を上げた。

「……色々エピソードは聞けたけどさ。結局西宮、お前は東風谷の事はどう思ってたんだ？」

「あ？ ……そうだな。放っておけない幼馴染だよ。危なっかしくて目は離せないし、恩も借りもある相手だ。 ああ、それと」

#

Q・以下の文は「スクランブルエッグ」の作り方です。空欄を埋めなさい。

1・(A) をボウルに割り、よくかき混ぜます。この時、箸で (B) を切る様に混ぜると、よく混ぜります。

2・薄く (C) をひいた (D) を熱します。蒼白い煙

が消えたら再び（C）をひきます。

3・（D）を弱火にかけ、1で作った物を入れて熱しながら混ぜます。

A・東風谷早苗さんの回答：

A：ジャパニウム鉱石

B：光子力エネルギー

C：超合金ニューZ

D：偉大なる勇者

先生（友人）からの一言：

それで出来るのは「スクランブルダッシュ」です。

「……これは酷い」

「スクランブルダッシュって何？」

「確か古いロボットアニメ関係のネタだった気がする……」

屋上も屋上で、ある意味教室以上の悲劇が広がっていた。

料理が出来ないという早苗、果たしてどれくらい出来ないのかと友人が適当に出題した問題にこの回答である。スクランブルエッグを作るつもりが、出来るブツはスクランブルダッシュ。洩矢神とて予想できまい。

不正解を告げられた時の『なん……だと……！？』とでも言いたげな顔から察するに、恐ろしい事ではあるがマジ回答らしい。

「ま、待つて下さい皆。今のは練習、ノーカウント、ワンモアチャンスです！」

「……いやもう、この回答見るとチャンスとかそういう問題じゃない気もするんだけど……」

「いいえ、大丈夫です！ 私は出来ます。早苗は出来る子だって神奈子様と諏訪子様も言ってくれてました！！」

そして『大丈夫なの？』という視線丸出しの友人たちの前で、早苗は雄々しく立ち上がり、タコさんウィンナーの刺さった箸を大幣代わりに九字を切る。

「建御名方神も洩矢神も御照覧あれ！ここに奇跡を！
風祝の早苗、参る！！」

猛々しく吼える姿。しかしこんな事で、しかもタコさんウィンナーの刺さった箸を祭具に祈られても、建御名方神とか洩矢神も困るだけであろうと友人達ギャラーは思う。

しかもこの問題に答える程度で奇跡とかどれだけ料理が苦手なのか。戦慄すら混ざった様子で見る彼女達の前で、早苗が答えをその頭脳で弾き出した。

Q・以下の文は「スクランブルエッグ」の作り方です。空欄を埋めなさい。

1. (A) をボウルに割り、よくかき混ぜます。この時、箸で (B) を切る様に混ぜると、よく混ぜります。
2. 薄く (C) を引いた (D) を熱します。蒼白い煙が消えたら再び (C) を引きます。
3. (D) を弱火にかけ、1で作った物を入れて熱しながら混ぜます。

A・東風谷早苗さんの回答：

1. (相手が右ストレートを放ったところを左掌で巻き取るように受け、すかさず相手の頭を引き込んで後頭部) をボウルに割り、よくかき混ぜます。この時、箸で (関節の接合) を切る様に混ぜると、よく混ぜられます。

2. 薄く (右足) を引いた (体重移動により相手のバランスを崩し、引き寄せるように相手の身体全体) を熱します。蒼白い煙が消えたら再び (右足) を引きます。

3. (体重移動により相手のバランスを崩し、引き寄せるように相手の身体全体) を弱火にかけ、1で作った物を入れて熱しながら混ぜます。

友人達はその時思った。

『ああ、奇跡だ。負の方向で』 と。

そして負の奇跡を巻き起こした早苗当人は、『どうだ』と言わんばかりにこの歳にしては実り豊かな胸部を張っているが、何を誇る気か。

この回答では既に風祝かぜはがしというより風屠かぜはふりである。

「……早苗、あんたはこの回答で何と戦う心算なのよ……」

「え？ んーと……西宮と？」

「戦ってどうする。料理を作ってあげるんじゃないの？ 何で西宮君を料理する方向に進んでるの!？」

「いやあ、つい癖で」

てへつと舌を出して、いけないいけないとも言わんばかりの表情を見せる早苗。

悪びれないのが彼女の長所であり短所である事を知っている友人達は諦めたように溜息を吐き、代表して一人が早苗に問いかけた。

閑話其の一：彼と彼女の高校生活（後書き）

その頃の諏訪子と神奈子。

「何か凄い電波な信仰が届いた気がする」

「私も届いた気がする。スクランブルエッグで我を呼ぶのはどこの人ぞ」

そんな感じ。

本編では喧嘩ばかりですが、昔からやっぱり喧嘩ばかりでした。けど互いに相応には信頼し合っている関係です。

そういうのを表現するのは難しいですね。

第九話：風神録篇・開幕し候（前書き）

今回のラストから風神録の開始です。

……ここに来るまで長かったなあ。

第九話：風神録篇・開幕し候

布教活動には西宮よりも早苗の方が向いている。

それは彼ら二人が幻想郷に来てから確認した事実だった。

外の世界では給食時間の放送ジャックなどのエクストリーム布教行為は逆効果になるばかりだったのだが、幻想郷においては神々の実在が確認されている以上、その神の神徳や力、御利益を見せるのに最も手っ取り早いのが、神々やその信徒が分かり易く何らかの能力を示す事だ。

そついう意味で奇跡を起こす神力・霊力を持つ彼女の方が、里において信仰を集めるのに向いていたと言う事である。自信ありげにハキハキと話す彼女自身、元々演説などに向いている性向であったのもあるだろう。

要は未だ霊力の扱いが下手な西宮が人里について行った所で、出来るのは早苗のフォローが精々で余り戦力にならなかったのである。

無論初手ではそのフォローこそが大切だったのだが、日用品の買い足しや里の有力者への挨拶回りが終わった後ではフォロー役の仕事も減る。

そして里に行く意味が微妙に薄れていた彼は、布教開始から数日が経ち安定したのを確認した上で、守矢神社に居残る事にした。

最も早苗はそれが不満だったようで、『西宮、一緒に行ってくれないんですか？』だの『風祝である私の言う事が聞けないんですか！』だのと少々ゴネていたが、紫の要請もあつて後々異変を起こす事が内定している守矢神社の一員として、弾幕ごっこを練習しておきたいと西宮が押し通した結果である。

ちなみに神々はほのぼのとした様子でゴネる早苗を眺めていた。

「いやあ、普段からぞんざいな扱いをしている割には甘えたがりだよねえ、早苗」

「一度は外の神社の為に丈一を置いて行く事を決めた後、図らずも丈一までこつちに来てしまったからなあ。その反動もあるんじゃないか？」

そんな会話など知る由も無く、結局ぶーたれながらも早苗は布教に向かい、西宮は弾幕ごっこや飛行技術などの練習の為に神社に残ったのだが、その数時間後

「ほらほらほらあ！ どーしたどーしたその程度ツスカー！？」

「だああああ！ この駄犬調子乗りやがって！」

「誰が駄犬ツスカ負け犬！ しかもボクは犬じゃなくて狼ツス！」

場所は守矢神社の境内前。

現在西宮は、何故か先日会った犬走椛相手に弾幕勝負を行っていた。

それも割と一方的な勝負である。当然、椛有利で　　だ。

辛うじて飛行術が形になってきたものの、慣れない様子でふらふらと飛行する西宮に対して椛が『の』の字型に生成した弾幕を乱射している。西宮は守矢の御札や、靈力の扱い方を教えて貰って辛うじて出せるようになった弾幕で応戦するが、明らかに椛が圧倒的優勢であった。

更に弾幕で弾幕を相殺し、或いは体捌きで辛うじてグレイズしても椛の攻勢は終わらない。

白狼天狗は盾と剣を手にした外見通り、天狗の中でも近接寄りの能力を持つ種族だ。

弾幕を辛うじて捌いた西宮に向けて一気に接近した椛が、訓練用

の木刀で豪快に彼を弾き飛ばす。

「~~~~っ！ 格闘戦もアリかよ!?」

「先の宴会異変の時にはこっちが主体だったらしいツスね。まあア
クセントって事で　　っとオ!!」

弾き飛ばされた先で辛うじて地面に着地した西宮を追い、急降下
した椀が地を這うような低軌道から気合いの声と共に木刀を突き込
んで来る。

狙いは鳩尾。防御も回避も間に合わないままに、人体急所の一つ
を木刀で強打された西宮が打撃の勢いで地面に転がり悶絶する。

「ふはははー！ I'm wiener!」

「winnerな。そつちだとウィンナーソーセージだぞ天狗。慣
れない外来語を無理に使うな」

「似たようなもんツス。ファイトクラブと背徳ラブくらいの差ツス
よ」

「大分違うぞ。というか貴様は外来語なんてどこで覚えたんだ」

「文さんの家つて、魔法の森の近くにある外の世界の道具を扱って
る店で買って来た外の世界の本とかもあつて面白いんすよね。意味
殆どわかんないんすけど。　　っと、さて。西宮君大丈夫ツスカ

ー?」

「……なんとか……」

そして両手を上げて勝鬨を叫ぶ椀に対して、境内に胡坐をかいて
戦いを眺めていた神奈子が突っ込みを入れる。

対する椀は木刀を地面に突き立てからからと笑いながら、倒れた
西宮に手を差し出し、西宮はふらつきながらもその手を取って立ち
上がる。

さて、そもそも何故この神社を敵視している筈の天狗である椀が、こうして西宮の練習相手を務めているのか。その話は少々前に遡る。

#

その日の朝、少しゴネた後に早苗が布教に出掛けた後で、守矢神社に対して天狗側から動きがあったのだ。

元々が極めて強く守矢神社を警戒している天狗社会。特に上層部は妖怪の山を統べるのは自分達だと言うプライドが強いらしく、機さえあれば守矢神社の排除に動きかねない様子だ。

しかし半面、守矢神社 正確には諏訪子と神奈子に喧嘩を売る度胸は天狗には無いらしく、現状では静観して監視という事となっている。

そしてその監視の役目も単調な作業であると同時に、守矢神社と言う天狗側からすれば極めて危険な要素に自分から近づく仕事になる為、殆どの天狗はそれに携わるのを嫌がった。

そんな中で、天狗社会の中では異端気味である文によくついて回っている椀に、天狗上層部が白羽の矢を立てたらしい。

要は嫌な仕事は嫌いな奴や爪弾き者にやらせてしまおうという考えだ。加えて椀の持っている『千里先まで見通す程度の能力』は気付かれずに監視をするには最適だと言う見方もあったのだろう。

「こんにちわー！ おはようございまーっす！ えーと、天狗の里で神社を監視する役目を申しつけられました犬走椀ツスー！ ち

らお土産の山菜ツス！」

「む、先日の白狼天狗か。……え、監視？　これが？」

「ういつす。外で監視すると寒いんで、お邪魔して良いツスか？」

「えーと……うむ、どうぞ。……あれ？」

『取材の基本は挨拶と自己紹介』と射命丸に言われていた犬走椋まさかの監視対象の家にお土産を手にご挨拶に上がるという前代未聞の大暴投。

千里眼、全く意味を為さず。

天狗上層部が知ったならば噴飯ものの惨事だった。

そしてたまたま対応した神奈子、明け透けを通り越してどこか別のベクトルに差し掛かりつつある椋の言動に思わず呆然として頷いてしまったのが運の尽き。

本殿に上がり込んで全力で寛ぐ椋の姿が次の瞬間にはそこにあつた。

『ああー、よく掃除された床ツスー。檜の香りツスー』などと言いながら尻尾を振り振り床をゴロゴロ転がる姿は、もはや自分の家はここだと言わんばかりのレベルでリラックスしていた。

八坂神奈子、万を越える歳を神として過ごしながらも、ここまで神社本殿で寛ぐ部外者を見たのは初めてだった。

「……まあ良く分からんが、軍神的に肝が太い奴は嫌いではない。

天狗、昼餉を食べるか。チャーシューの入ったカップ麺があるぞ」

「食べるツスー！！」

そしてその限界まで好意的に表現すれば『堂々としている』と取れなくもない姿が、何故か軍神である神奈子の御気に召したらしい。西宮の飛行訓練の為に少し神社から離れていた西宮本人と諏訪子

が神社に戻って来た時に見たのは、差し向かいでカップ麺を啜る軍神と尻尾振りまくりの白狼天狗の姿だった。

「……何がどうなってるんだコレ」

「んー？ 細かい事を気にしたら八ゲるツスよ少年！ しかしこの『かつぶめん』とやら、少し味が濃いツスけど美味しいツスねー！」

「お、話分かるね白狼天狗。しかも食べ終わったスープをご飯にかける事で、お手軽にご飯が雑炊もどきになるというオマケ付きさ！」

「す、すげー！ カップ麺マジすげーツス！！ よっしゃ弁当に持って来たオニギリ入れてみるツス！」

そして西宮が状況を把握し切れず頭を抱える横で、嬉々としてカップ麺の食べ方を指南する祟り神とそれに感銘を受ける白狼天狗。

その彼女に『精進すればすぐにこの領域に至れるよ』と答えながら、自分の分のカップ麺を準備する諏訪子。彼女を畏敬の籠った視線で見つめる椀。

「ボク、今日から御二柱を信仰するツス……！！」

「カップ麺で！？ 安いなオイあんたの信仰！！」

カップ麺を啜る二柱を見ながらキラキラ輝く尊敬の眼差しで宣言する椀に、流石に堪え切れずに西宮は突っ込みを入れたのだった。

そしてそんな寸劇から暫し後。

本殿で食休み中の西宮＋二柱＋監視役という状況で、しかし監視など一切気にせずに諏訪子が西宮の練習の進展を神奈子に告げた。

「とりあえず、飛び方は一通りどうにかなったよ。霊弾の撃ち方も

教えたから、後は応用と実践かな」

「実践か。……どうする丈一？ 私と一戦してみるか？」

「神奈子様は手加減とか苦手そうなんで遠慮しておきます。何で最初から難易度がルナティックなんですか。もう少し難易度の低い相手で練習させて下さいよ」

諏訪子の言葉を受け、神奈子が口元に手をやりつつ呟いた言葉に、西宮が両手を上げて降参のポーズで拒否を示す。

それを受けた神奈子、別に自説に固執するでもなく『確かにそうか』と呟きながら意見を取り下げる。

「どうやら手加減が苦手だと言う自覚はあったらしい。しかし自説を取り下げたら取り下げたで、神奈子はどうしたものかと首を傾げる。」

「しかし丈一、難易度の低い相手と言うが……諏訪子も私よりは多少は手加減が出来るが、ほぼ同等の実力の持ち主だ。早苗は今布教で忙しい。そもそも私達は幻想入りしたばかりで知り合いも少ない。となるとそう簡単に難易度の低い相手など」

「ぶつはあー！ いやー御馳走様でしたー！ 『かつぶめん』美味かったツスー！！」

その瞬間、空気を読まずに高らかに告げられた御馳走様。

二柱と一人の視線が集まった先に居たのは、カップ麺に弁当として持って来たオニギリを投入して作った雑炊もどきを食し終わり、頬にご飯粒を付けながら満足そうな笑顔で尻尾を振っている監視役だった。

「天狗」

「あい？」

「夕餉に好きなカップ麺を選ばせてやるから、我が信者の訓練に少

し付き合え」

「チャーシュー入り、豚骨味で手を打つツス」

そして神奈子が告げた言葉に食欲丸出しで しかし安い代価
で椀が即答。

その日から暫く、西宮の実践訓練の相手兼守矢神社の監視役として犬走椀が神社に出入りする事が決まった瞬間だった。

ちなみに言動のイメージとは異なり、白狼天狗としての彼女の鍛え方は意外とスパルタであった。

そして布教を終えてその日の夜に帰って来た早苗は、本殿でさも当然のようにカップ麺の器に顔を突っ込むようにして食っている椀の姿に驚き、顛末を聞いて呆れながらも『西宮を宜しく願います』と椀に頭を下げた。

自分の事で早苗が誰かに頭を下げた事に驚く西宮に対し、早苗は悪戯っ気のある笑みを浮かべ、

「だって西宮が早く一人前になってくれれば、また一緒に布教活動に行けるじゃないですか。人手も増えて万々歳ですよ」

「俺をこき使いたいだけかこの駄風祝」

「あらやだ。不甲斐ない信者に一人前になって欲しいと願う現人神兼風祝のありがたい言葉ですよ？ もう少し敬ってくれても罰は当たりませんよ、西宮」

茶目っ気のある笑みで言った早苗に対し、椀の訓練でそこはかとなくポロポロな西宮は憎まれ口を返す。

そこから始まる丁々発止の掛け合いを神々は微笑みながら見守り
その横で椀はカップ麺の残り汁を啜っていた。

「やべえ美味え。ボクが持って来た山菜の天ぷらも合うとか反則的
ッス」

とは、口の周りをベタベタにしながらの椀の言葉であった。
完全に餌付けされた椀に射命丸が頭を抱えるのは後日の話である。
そして

#

「あれ？ こんな所に神社が……」

そして椀が西宮の訓練相手を始めた日から三日。

早苗はその日、布教を終えて妖怪の山へ戻る途中で、見知らぬ神
社を見付けていた。

たまたまこの日にこの神社を発見した理由は特に無い。

敢えて言うなら、少しいつもと違うルートで帰りたくなる程度の
気分だった。それに尽きるだろう。

しかし最近布教が上手く行っていた早苗は気が大きくなっていた。
或いは相棒である西宮がついて来ていない事で、本人も気付かぬ
うちにフラストレーションが溜まっていたのかもしれない。

「……随分と寂れているようですし、ここは一つこの神社を分社と
して使ってあげましょう。そうすればこの神社の参拝客も増えるし、
私もより多くの信仰を得られる。御二柱や西宮にも褒めて貰えるで
しょうし万々歳ですね！」

そう言いながら、彼女は内ポケットから取り出した筆ペンでメモ用紙につらつらと一方的な宣告を書き立てると、それをその神社の本殿入り口にペタリと張り付けた。

「これでよし、と」

満足げに頷き飛び去る早苗。

彼女が残して行ったメモにはこう書かれていた。

『 当方、山の上の神社の者なり。』

この神社、余りに寂れ見るに忍びないので、我が神社の分社とする『

或いは西宮がついていれば、或いは早苗がもう少しこの神社についての情報を集めていれば、絶対に行わないであろう最悪の悪手。本人的には善意であったのだろうが、何の慰めにもなりはしないだろう。

よりにもよって彼女は、八雲と並びこの幻想郷の管理者とされる“博麗” それも歴代博麗最強と呼ばれる当代の巫女、博麗霊夢に喧嘩を売ったのだ。

「……何よ、このフザけた宣言。山の上の神社？ これは宣戦布告って事で良いのよね」

翌朝になり起きて来た霊夢がそのメモ帳を見て守矢神社めがけて出撃する事を、未だ早苗は、そして守矢神社の面々も、この段階ではまだ知らなかった。

かくして守矢の神社は幻想に入り、幻想の地にて調停を司る博麗と相對する。

東方西風遊戯・風神録篇。これにて開幕し候。

第九話：風神録篇・開幕し候（後書き）

これまでも作中でチラホラ言っていました。萃夢想や緋想天、そして非想天則などで人間組が平然と妖怪と殴り合いをやっているのは、この小説では霊力や魔力で身体能力を強化しているからだという設定で行きます。

つまり西宮も、普通の人間に比べれば身体能力は強化されています。

それでも椛にも勝てませんが。

ともあれ西宮、風神録開幕前に付け焼刃ながらも戦闘訓練。

そして風神録　　今回より開幕です。

第十話：人恋し現人神様（前書き）

色々やっちゃった感。

でもこれでプロット通り。

第十話：人恋し現人神様

「それでは行つて参ります！」

「今日こそ一本取る……」

博麗の巫女、博麗霊夢が陰陽玉とお祓い棒を手にして自宅を出撃したのと同じ日。

その日も守矢神社では、最近繰り返された日常が始まるうとしていた。

早苗が大幣を手に元気良く出発の挨拶をし、西宮は監視役兼訓練相手である椛相手に今日こそ一本取ると息巻きながら、早苗も使っている守矢神社特製の御札を手に策を練っていた。

異変を起こす事が八雲との約定だが、それはもう少し神奈子と諏訪子が信仰を集め、力を取り戻してからになるだろう。

それが守矢勢の判断であると同時に、紫の判断でもあった。

二年三年という先の話にはならないだろうし、戦力が整っていない状態で異変を起こされても『妖怪の山の力を示す』という紫の目的にはそぐわないので、それは当然と言えば当然の話である。

その筈であつた。

その日、早苗が神社を出る前に、八雲紫がスキマを通つて現れるまでは。

「随分と早く動いて頂けたようね。幻想入りから僅か数日で博麗神社に宣戦布告とは、相当な自信があると見て良いのかしら。流石は古の大和の時代より語り継がれし神々と言わせて頂きますわ」

ずるりとスキマから出て来て、口元を扇子で隠しながら胡散臭く

笑うスキマ妖怪。

しかし彼女を迎え入れたのは、博麗神社に宣戦布告をして臨戦態勢で待ち受ける守矢神社 などではなく、『何言ってるのこイツ』的な視線が四対であった。

「……八雲紫、何の話だ？」

「え？ あの、神奈子さん？ 貴方達、博麗神社に宣戦布告を

」

「はあ？ いや、私も神奈子もまだ往時の力を完全に取り戻したとは言えないんだよ？ まだあと最低でも一ヶ月は欲しいんだけど」

「……え？ あの、霊夢が今朝がた凄い勢いで神社から出撃したって……それでたまたま霊夢を見かけた魔理沙も一緒に異変解決と息巻いてるみたいなんですけど」

噛み合わない話。

さも黒幕的なカリスマと共に登場した紫の前には、話の通じない守矢の二柱が困惑顔で首を傾げている。何事かと視線を向けて来た西宮も、その表情に浮かんでいるのは困惑だ。彼の場合博麗神社の名前が出て来たので些かの焦りも浮かんでいるが、それ以上に困惑が強い。

だが、紫が目にした最後の一人。

守矢神社の風祝である東風谷早苗は顔色を蒼白にして、『神社って』や『まさか』などといった単語を呟いていた。

明らかに心当たりがある様子だ。

「……東風谷早苗」

「は、はいっ！」

その様子に自然と紫の声が低くなる。

理由は二つ。まず、守矢神社を招き入れた件は紫にとってもかな

りの大事業だった。

幻想郷のバランスを憂う彼女、バランスを保つ為の大事業を破綻させかねない行動をしたと思いき早苗に対して寛容になるう筈もない。

元々世話焼きの傾向のある彼女だが、しかし幻想郷に仇為す者に容赦はしないのもまた八雲紫という妖怪だ。

第二に博麗の巫女 特に今代の博麗である霊夢は、紫が幼い頃から見守って来た娘のような存在である。

元より初代の博麗と共に紫が幻想郷と外とを隔てる博麗大結界を作ってから、紫は全ての代の博麗と大なり小なり交友があつたのだが、その紫をしても今代の霊夢は傑物であり、手のかかる教え子であり、可愛い娘だった。

その彼女に『異変を起こす』という目的も関係無しに喧嘩を売つた形となる早苗に対して紫の視線が鋭くなり、自然と身体から妖力が漏れる。

しかしその彼女に対して、横合いから待つたがかかった。

「すまない、八雲。私達の監督不行き届きだ」

「私からも謝るよ。まずは少し落ち着いてくれないか」

「……そうね」

神奈子と諏訪子が紫に声をかける。

その声を聞き、紫も些か大人げ無かつたと思つたのだろう。息を吐き、早苗に向けていた鋭い視線を引込める。残つたのはいつも通りの胡散臭い表情だ。

しかし早苗は先に向けられた視線と妖力 即ち彼女がこれまで接して来た優しい『紫さん』ではなく、幻想郷を守る妖怪の賢者『八雲紫』としての姿の片鱗を見た事もあつてか、目の端に涙を浮かべて蒼白なまま崩れ落ちそうになっている。

無理もあるまい。霊力の素養こそ歴代博麗に匹敵するほどの物があるが、所詮は妖怪も神々も殆どが力を失った外の世界から来た少女だ。紫のような存在と本気で相對した事など無いのだろう。

幾ら大きなポカをやらかしたからと言って、たかが数えて20も生きていないような童女に本気で怒りそうになるとは大人げ無かつたか。紫が内心でそう苦笑していると、崩れ落ちかけた早苗を支えるように横に立つ姿が見えた。

西宮だ。

「大丈夫だ、東風谷。落ち着いて深呼吸」

「……は、はい……」

彼の指示通りに早苗は大きく息を吸い、吐く。

その動作を数度繰り返し終わった所で、彼女は今度は怯える事無く　いや、怯えながらも逃げはせず、真正面から大妖怪八雲紫の顔を見据えた。

「紫様、申し訳ありませんでした。恐らく私は取り返しのつかない事をしたのだと思います。　今から私の思い当たる心当たりについてお話します。どうか……可能であればどうか、私のみの責任として、御二柱と西宮を責めないで下さい」

「　良いわ。約束しましょう、言つて御覧なさい」

紫はその言葉に胡散臭く笑みを浮かべる。

大妖怪の圧力に怯え、しかしそれでも逃げずに真正面から向かい合う。

確かに未だ紫からすれば童女ではあるが、その心根は実に幻想郷に見合った物だ。紫からすれば心地良いと言つても良いだろう。

どうせ紫が二柱を呼んだのだ。ならばその二柱に仕える多少早苗がミスをした所で、理由を聞く程度はしてやっても良いか。そう考えながら、紫は早苗に話を促した。

#

「……やっちゃったね」

「……やっちゃいましたわね」

そしてぼつりぼつりと話し出す早苗の言葉を聞き終わった所で、諏訪子と紫が溜息を吐いた。

意図せずとはいえ、博麗への明確な宣戦布告だ。

今更靈夢が言い訳など聞く筈があるまい。何か言う前に弾幕が飛んで来るだろうとは紫の言だ。

その言葉を聞き、早苗が悲壮な顔でその場に集まっている皆に告げる。

「やはり、私が責任を取って謝罪して来ます……。弾幕で撃たれようが何を言われようが、何をされても構いません！ 私のせいで御二柱と西宮に迷惑をかけるわけには……」

「黙れ」

それは全てを自分の責任として、この件を無かった事にしようという言葉。

それに対して紫が、諏訪子が、神奈子が各々の理由から反論を口にしようとする。

しかしそれらに先んじて真っ先に早苗の言を断ち切ったのは、紫でも諏訪子でも神奈子でもなく、早苗の横に立つ西宮だ。

彼はいつも閉じ気味の糸目を見開き、睨むように早苗を見ている。

「お前が一人で責任取る？ 何をされても良い？ フザけんじゃねえぞ、本気で言ってるのか」

「そつ……それ以外にこの件を収める手段があるんですか！？ 誰かが責任を取らないといけないなら私が」

「八雲様、一つ提案があります」

「ふうん？ 言って御覧なさい」

いつもは見せないその表情に怯みながらも反論する早苗。しかし西宮はそれを聞かずに彼女を押しつけ、二柱の横にいる紫に向き直り、頭を下げる。

紫としては西宮に対しての興味は守矢組の中で最も薄い。神奈子と諏訪子が主であり、早苗が従。西宮はその従の従程度の認識だ。

たかが人間と、どこかで低く見ている面もあるのだろう。以前のやり取りで評価は上方修正され、『人間にしては興味深い』程度には感じているが、逆に言ってしまうえばその程度だ。

特に戦闘能力に関しては、鍛えればある程度は物になるだろうが、現状では見るべき所は無い。異変において戦力になる事は無いだろう。

それ故に紫は西宮が発言を求めた事に対して、非常時故にどこか投げ遣りに応答する。が

「この一件を以て異変と為し、我ら守矢神社一同で博麗の巫女を迎撃します。調停者たる博麗神社への宣戦布告は、強弁すれば異変と断じる事も出来るでしょう？」

「」

しかし、その告げられた言葉に対して、紫は僅かに驚きを

顔に出す。

考えなかったわけではない。むしろ、早苗の話聞いた後に彼女が真つ先に思い浮かべた解決方法だ。驚きの内容は、彼女が然程重要視していなかった西宮の口からこの意見が出た事。

「……確かに私も同じ事を考えていたわ。妖怪の山の力を示す為に後に異変を起こすのに、この段階で山の神社の風祝たる早苗さんが霊夢に降伏してしまうのは不味い。力を示すどころか却って侮られる原因になりかねなくなる。けれど良く考えたわね」

「八雲様が先にスキマでいらっしやった時に現状を見て『異変を起こした』と言っておられましたので、この状況は強弁すれば異変と言える状態だと判断しました。ならば予定を繰り上げて、この状況を異変と称する事も出来ると思った次第です」

「良い判断だよ、丈一」

「ああ。早苗一人に責任を負わずなどしてたまるか」

そして言葉を交わす紫と西宮の横で、諏訪子が跳ねるように立ち上がり、神奈子が拳と掌を打ち合わせる。

神奈子はそのまま強気な笑みを口に浮かべ、

「八雲紫、丈一の言う通り私達は早苗の宣戦布告を以て異変と為し、博麗の巫女を迎撃する。スペルカードルールに則った異変だ。問題あるまい？」

「ええ、その形式でやって頂き、妖怪の山の力を示す事が出来るならば私としては願ったり叶ったりですね。ですが、力は大丈夫ですか？」

「まだ往時の全力にはやはり劣るな。だが、十分だ。幾ら話に聞く博麗やその相方の霧雨が相手と言えど、人の子一人や二人相手に力を示すならば存分に出来よう」

嘘ではない。しかし本音でもあるまい。

往時程の力は無いとはいえ、神奈子とて現状で既に天狗が喧嘩を売るのが控える程の神だ。現状の力でも、弾幕を用いた異変というルールの中で力を示すのは可能だろう。

だがそれで確実かと言われれば不安も残る。神奈子は軍神。決して戦を軽視はしない。

それが例え、弾幕ごっこというルールの中で行われる『異変』であろうとも、可能ならば万全で挑みたかったと言うのが本音だろう。万全を怠ったが故に万が一の筈の敗戦を喫した戦いというのを、彼女は軍神として幾度となく見て来たのだ。

しかしそれでも、神奈子は現状での異変の開始。即ち開戦を選択する。

「そうだね。どの道ここで頭下げても、状況が良い方に転ぶわけでもないだろうし。それにね、早苗は私達の娘も同然だよ。娘に責任取らせて知らんぷりなんて、私は御免だね」

けるけると楽しそうに笑いながら、諏訪子も戦意を主張する。

早苗も西宮も知らない事ではあるが、守矢の血族は元々が諏訪子の遠い遠い子孫だ。

幾千もの世代を重ね薄れた血であるが、確かに血族。加えて娘同然と育てて来た早苗の為。予定の繰り上げ如きがどうしたと言いつか。

故に諏訪子は戦意の赴くままに手の中に洩矢の鉄の輪を作り出し、それを弄びながら早苗に声をかける。

「だからさ、早苗。気にしなくて良いんだよ。私ら迷惑だなんて全然考えてない」

「私も諏訪子に同感だな。失敗したと思ったなら、反省して次に生

かせばいい。早苗はそれが出来る子だ」

「諏訪子様、神奈子様……ごめん、なさ……ごめんなさい……」

「そういう時は『ありがとう』だよ」

「そう言う事だ」

「……っ、ひつく……えぐ……！」

まるで恨む様子も無く、朗らかにとすら言っただけで良い様子で笑う二柱。

自分が愛されている事と、自分を愛してくれる二柱にこんなにも迷惑をかけてしまったと言う事が、彼女の涙腺を緩めてその頬に涙を伝わせていく。

思えば外の世界に残してきてしまった両親も、この二柱と同じくらい自分を愛してくれていた。自分が急に居なくなつた事で、彼らはどんなに心配しているだろうか。西宮が居るなら大丈夫かと思つたけど、彼までこちらに来てしまった。

大丈夫なのだろうか。心配しているだろうか。心配だ。会いたい。

悲しみ、嬉しさ、二柱への情、両親への情、望郷の念。

それら全てがこの機に一度に溢れ出たかのようにだつた。

座り込み童女のように早苗は泣き出し、それを見る二柱は困つたように、しかし優しく彼女の頭を一度ずつ撫で、紫に視線を向け直す。

「八雲紫、そういう事情だ。迷惑をかける結果になつたのは謝るが、その分私達が帳尻を合わせよう。だから早苗を責めないでやってくれ」

「分かりましたわ。」

「ようですね」

貴方達を選んだのは間違いでは無かつた

「む？ 何か言つたか？」

「いえ何でも」

了承の言葉の後に呟いた言葉は紛れも無い本音だ。

八雲紫は幻想郷を愛している。

それは彼女がこの幻想郷を創ったというのも大きな理由だが、人と妖怪が隣り合い、時に襲われ時に退治し、それでも互いに友人と言える関係を保っている。この幻想の楽園の厳しくも不思議な温かさを、彼女が誰よりも愛しているからだ。

そんな彼女にとって外の世界から呼び寄せた守矢神社の面々が見せた家族愛と呼べる物は、非常に好ましい物だった。

ならば、故にこそ

「気が変わりましたわ。今回の異変、私は完全に傍観する心算でしたけど……少しだけ依怙贖罪をしまいましょう」

故にこそ、外では生きていけなくなった彼女達には、この幻想郷に根付いて欲しい。

この異変の中で力を示し、確固たる信仰を勝ち得て欲しい。

「元より異変は当事者たちだけで起こす物ではありません。紅魔館の時も白玉楼の時も永遠亭の時も、或いはその辺をうろついていた者がたまたま巻き込まれたり、或いは何らかの目的を以て異変の解決に向かう者を妨害したり。それらまで含めて騒ぎを楽しむのが異変の雅というものですわ」

紫は内心に芽生えたその感情のまま、つまりは嬉しそうに笑みを浮かべ、自らの眼前にスキマを開く。

そしてそこから転がり出た人影が二人。

「故に、私が立場上手を出せない現状では、少々派手さが足りません。妖怪の山の麓の方では、八百万の神々や河童などが慌てて霊夢と魔理沙を迎撃してくれるでしょう。ですがそれだけでは派手さに欠ける。この異変をせいぜい派手に優雅に美しく、後に御阿礼の子が編纂するであろう次の幻想郷縁起にて、他の異変に負けない……いえ、凌駕するほどに目立つ物にしてやる為に。 ご協力下さいな、天狗のお二人」

「……いきなりですね、紫さん。自分に酔った言動と共に唐突な呼び出しありがとうございます」

「あれ？ ここどこ？ ボクは確か家を出た所で変なスキマに引き摺り込まれ……って、巫女さん泣いてるううう！？ だ、大丈夫ツスカ！？ ぼんぼん痛いツスカ！？」

スキマからまろび出て来たのは、守矢の面々からすれば見知った顔。

天狗としては非主流派である烏天狗の射命丸文と、その後輩である犬走椛だった。

椛が泣いている早苗に気付いて大慌てでそちらに駆けて行き、射命丸は周囲の状況 戦意丸出しな様子の二柱と自分をわざわざ呼んだ紫を見て、ある程度の状況は察したようだ。

口元を羽扇で隠しながら、にやりとした笑みを紫に向ける。

「 先程協力して欲しいと仰いましたね、紫さん。謝礼として何が出せますか？」

「天狗の地位を」

しかし紫が口に出した言葉は、射命丸の予想の上。

思わず口元が引き攣る射命丸に対して、紫は訥々と言葉を語る。

「現在、守矢神社は事情があって予定を前倒しして異変を起こして

いますわ。ですが天狗の上層部はこの件に関して恐らく傍観する心算でしょう?」

「……ええ、間違いなく。愚かな事に」

「ええ、愚かですわ。そんな事をしては、この幻想郷において天狗の存在感が益々霞んで行く。どのような形でも良い、彼らは積極的にこの異変に関わるべきだと言うに。故に射命丸文、貴方は

『偶然』取材の帰りに山に侵入する巫女と魔法使いに会って、侵入者を迎撃すると言う『天狗社会の一員としての責務を果たす為に己むを得ず』彼女達と戦う そんなストーリーは如何かしら?」

「……その結果として天狗は力の一端を示し、その立場は守られるか。良いでしょう?」

商談成立。

そうとでも言うように、文はポケットに文花帳と羽根ペンを仕舞う。

そうして守矢神社を出ざま、肩越しに紫に投げかけるのは新聞記者としての慇懃な言葉遣いではない。千年を生きた大妖怪、烏天狗の射命丸として旧知の大妖怪への言葉だ。

「乗ってあげるわ、八雲紫。清く正しい新聞記者としてじゃなく、天狗社会の一員として貴方の謀略に乗ってあげる。でも一つ

聞かせて。こんなに早くに異変を起こしたって事は、何か手違いがあつたんでしょ? その辻褃合わせの為に私に手を借りようだなんて、何で貴方はそこまでこの神社に肩入れをする事にしたの?」

「そうね。この神社が思いの外、温かく優しくかったから……かしら」

「なら仕方ないわね。幻想郷を創った頃からずっと、貴方ってそういうのに弱かったし。椛はこのまま神社に置いて行くわ。貴方達の判断でコキ使って」

呆れたようなその言葉を残し、射命丸は翼を広げて飛び立って行く。

あとは適当なタイミングで適当に魔理沙と霊夢に勝負を挑み、適当に消耗させて適当に負けてくれるだろうと紫は判断。

彼女は元来物事の機微には聡い相手だ。既にこの異変を守矢神社が主体となつて起こしてしまった以上、天狗の彼女が必要以上に暴れる事は却って無粋だと分かっている。

故に引き際を見計らつて引いてくれる筈。

そう判断した紫が目線を動かす先は、童女のように泣きじゃくる早苗とその周囲を困つたようにぐるぐる回る椛。

そして早苗の横に座り、泣きじゃくる彼女の背を優しく撫でる西宮の姿だ。

「ちよつ、巫女さんガン泣き！？ 何したんスカ西宮君！ アレか！？ 胸でも揉んだんスカ！？」

「良い感じに脳味噌腐ってるな駄犬。良いから落ち着け、そこ座れ」
「だが断る！ 女の子泣かせるなんて男の風上にも置けねえッスよ！？」
「それでもボクが戦い方を教えた生徒ツスカ！！」
「だから俺じゃねえつつつてんだろ！？」

椛の言葉に叫び返した西宮。

やれ喧嘩かと思われたが、次の瞬間に彼の手を弱々しく引く手がある。

泣きじゃくる早苗が、自分の横にいる彼の手を両手で掴んだのだ。

「ひっぐ……にし、みゃ……」

「……ンだよ、泣き虫。お前昔つから泣き虫だったよな」

「……ぐす……えう……つぐ……悔、し……」

「……悔しいんだな。ここなら信仰が集められると調子に乗って舞

い上がって、結局神奈子様と諏訪子様に負担かけた馬鹿な自分が悔しいんだな？」

齒に衣着せない言葉。それは容赦の無い言動のようだが、しかしある意味では彼が一番対等の立場として早苗に向き合っているという証左だ。

諏訪子や神奈子のようにな彼女を庇護すべき対象として見るのではなく、対等の相棒として見ているが故のその言葉に、早苗が涙を堪えながら大きく頷く。

「そうだな、俺も悔しい。こうなったのは人里の方での布教を担当していた俺とお前の責任だ。俺が途中から布教をお前に任せて疎かにし、その結果として起こった出来事でもある」

だから、と。

西宮は自分の手を掴んで泣きじゃくる少女の身体にもう片方の手を添え、抱き寄せる。

抵抗もせずに泣き顔を自分の胸に埋める形となった早苗に、西宮は苦笑しながら言葉を紡ぐ。

「だから、もう少し泣いたら立ち直れ。射命丸さんが暴れた後、御二柱の前に俺達の出番だ。御二柱の負担を減らす為にも、失敗した分は俺達自身で取り返すぞ。 　　良いな？ 早苗」

「……………」

そして告げられた言葉に、ぐすつと鼻を噉りながらも早苗は顔を上げる。

随分と聞いてなかった呼び方だ。思えば小学校の半ばくらいから、互いの呼び方を学友からかわれるのが嫌で自然と苗字で呼び合うようになったのだった。

先に呼び方を『東風谷』にしたのは西宮で、それが嫌で当てつけのように自分も『西宮』と呼ぶ事にしたのを思い出す。

「……うん」

ずるいと思う。

勝手に呼び名を変えて、今この時になって勝手に戻すのだ。

だから自分も今だけはずるくなってやろうと、早苗は自分の幼馴染で相棒である少年に抱きすくめられているこの状況を満喫するよ
うに、彼に体重を預ける。

「……うん、丈一。頑張ろう！」

そして涙が残る顔で、それでも精一杯の決意を込めて。

後に幻想郷縁起に『風神録』と記されるこの異変に対し、東風谷早苗は自らの相棒と共に全力で臨む事を決めたのだった。

第十話：人恋し現人神様（後書き）

「……あのー、賢者様。すぐ傍でそんな会話をされてるボクはどーすれば」
「とりあえず黙ってましょう。どこの竜宮の使いみたいに空気読んで」

さて、始めました。そしてやってしまいましたとも言います。

敢えて多くは言いません。これがオリ主である西宮と早苗の関係で、これが私の書く『東方西風遊戯』です。
感想などチキンハートでお待ちしております。

第十一話：烏天狗の射命丸（前書き）

今回も割と捏造設定アリアリ。

ちなみに普段は西宮 早苗の呼び方は『東風谷』のままです。早苗が拗ねそう。

第十一話：烏天狗の射命丸

「山の上の神社からの宣戦布告ねえ。そりゃ最近人里で布教活動してる連中だな」

「そう……うちの素敵な御賽銭箱にずっと何も入ってないのも、人外ばかりしか参拝客が来ないのも、そいつらの陰謀なのね」

「いや、それらは間違はなく山の上の連中が来る前からの事だから、流石に冤罪だと思う」

「良いのよ。私的裁判で奴らは全員有罪よ。罪状は 全部」

「見た事も聞いた事も無い罪状だな。魔女裁判だってもう少し真つ当な罪状を告げるだろ。閻魔が聞いたら腰を抜かすぜ」

一方、博麗神社を飛び立った霊夢は適当に勘の赴くまま異変の原因っぽい方向に飛び、それっぽい奴を撃ち落としていくという勘頼みの。しかし何故か異常に正確な 異変解決方法を実行しようとしていた。

紅魔館の時は赤い霧が濃い方に、白玉楼の時は春度の流れてくる方向にといいおおまかな指針はあったが、永遠亭の件に関しては異変解決に向かった四組が何故ヒントも無いまま永遠亭のある方向に向かったのかを聞かれれば、『巫女の勘すげえ』としか答えようがないレベルだった。

何のヒントも無かろうと正解に辿り着く。恐るべしは博麗の巫女の勘である。

幸い今回は宣戦布告状（霊夢視点）に『山の上』というヒントがあったので悩む余地は無い。

この幻想郷で『山』と言えば、大抵は妖怪の山を意味する。

或いは『山』が何かの隠語だった場合は分からないが、多分そういう事は無いと思うという勘の下で、霊夢は妖怪の山を目指してい

た。

途中でどうやら山に珍しい薬草や山菜でも採りに行く心算だったらしい魔理沙と遭遇。

まあ見かけたんだしとりあえず撃ち落としてから話を聞けば良いやの精神で先制攻撃を仕掛けようとした霊夢だが、既に妖怪の山の麓に侵入していた為に、横合いから豊穰の神と紅葉の神が魔理沙と霊夢に弾幕で攻撃を仕掛けてきたため、成り行きで協力してこれを撃破。

どうやら今回は敵じゃないらしいと判断した霊夢は魔理沙に事情を話し、魔理沙は博麗神社に喧嘩を売る神社が現れるなんて異変だと息巻いて霊夢に同行を宣言。

そして魔理沙が霊夢から事情を聞いて自らの推論を口にしたというのが現在の状況だ。

二人は妖怪の山から流れる川に沿うようなコースで山へと飛びつつ言葉を交わす。

「……つか、山の上の神社なあ。多分西宮の野郎もそこか」

「あら、知り合いでも居るの？」

「まあな。半分が私の自爆とはいえ、半分は奴のせいで酷い勘違いをさせられてしまった相手だ。畜生今にして思えば何だよ世紀末巫女伝説の守矢の拳って。アレを本気で想像して焦った私の心労を返せ」

「言ってる事の一割も分からないわ。まあ別に良いけど」

魔理沙が拳を握ってぶるぶると震えながら言った言葉に、興味無さげに　　「というか実際興味無く霊夢が返す。」

彼女は『それに』と一拍置いた上で、

「別に知り合いが居ようと居まいと、どうせ貴方のやる事は変わらないでしょ？」

「まあな。西宮が居ようが居まいが、異変だつてんならブツ飛ばして解決するだけだぜ」

そう告げられた霊夢の言葉に、魔理沙が頷く。

そう、元よりそこはさして重要じゃない。会えば重点的に狙う程度はするかもしれないが、別に彼がそこに居ようが居まいが目的は変わらない。

異変ならばそれを解決する。赤い霧の異変から先、魔理沙と霊夢はそうやって、スペルカードールの中を駆け抜けて来たのだ。

そしてそんな彼女達の前に、一人の少女がくるくると飛んで来る。川沿いに佇んでいた緑の髪の少女が、何故か横回転しながら飛んで来たのだ。

「あら、人間じゃない。ここから先は妖怪の山。貴方達のような人間には厄いわよ」

「おっと、忠告感謝。けれど私達は山の上の神社に用があるんだ」

「見たとこ神力と厄の双方を取り込んで……祟り神？ いえ、厄神かしら。まあ何でも良いわ。通したくないって言うなら 弾幕で勝負よ！」

「元気な人間ねえ。負けたら大人しく帰りなさいね？」

そして緑の髪の少女 厄神・鍵山雛の言葉に対し、魔理沙と霊夢が突破を宣言。

雛もこれが幻想郷での決闘ルール、スペルカード勝負に基づいた物だと理解しているのだろう。

苦笑しながらも両手を広げ、弾幕を放ち始める。

後に語られる風神録異変は、既に第二段階終盤へと状況が移っていた。

#

「駄犬、状況はどうだ？」
「そうツスね、負け犬。……んー、見た所山の麓でやり合ってるみたいツスね。今やり合ってるのは厄神様かな。……あ、やられた」

そして守矢神社では、本殿の屋根の上に立った椋が目の上に手を翳して麓の方に視線を向けていた。

“千里先まで見通す程度の能力”を持つ彼女の索敵能力は幻想郷内でも上位に入る物だ。純粹な視覚のみに限定すれば最上位とすら言えるだろう。

そんな彼女は神社に居ながらにして霊夢と魔理沙の侵攻状況をかめるモニター役として、境内前から状況を聞いて来る西宮に感じていた所だ。

諏訪子と神奈子は霊夢や魔理沙を迎える準備をするため、神社の周囲に陣地を造りに向かった。

オンパシラ
御柱を突き立てて作る陣地は黒幕つぱく見せる為の演出であると同時に、神奈子と諏訪子の神力を増強する為の即席の祭壇だ。

霊夢達がここに来る前に、二柱は迎撃の準備を済ませる心算でいるのだろう。

早苗は一通り西宮の胸で泣き終わり、今は部屋に引っ込んでいる。どうせ迎撃に出るまでに時間があるなら、身支度を整えてからにしたいとの事だ。

涙の痕が残った顔のまま迎撃に出るわけにもいかないだろうと笑う彼女には、先程までの悲壮な様子は見受けられなかった。

かと言って緩んだわけでもない。纏う雰囲気は、腹を据えたという表現が一番近いだろう。

そして紫は待機。

スキマを使えば直接間接を問わず色々な支援は可能なだろうが、迂闊に彼女が動くと言夢辺りにそれを悟られかねない。

そうなってしまうはこの異変は『妖怪の山の神社が起こした物』から『八雲紫が山の神社と手を組んで起こした物』になってしまふ。それはパワーバランスを考えて守矢を迎え入れた紫の意図にそぐわない。

故に既に文と椀を呼ぶと言う手助けを行った以上、待機と傍観が彼女の仕事だ。少なくともスキマを使った手助けはこれ以上はあり得まい。

先程までは西宮に請われて言夢と魔理沙の戦い方を彼に伝えていたが、今は早苗の身支度を手伝うと言って胡散臭い笑顔のままふふよと浮遊して行った。

「川を遡って来てるツスね。河童辺りに引掛かってくれば、もう少し時間が稼げるんすけど」

「河童ねえ。幻想郷の河童ってどんな奴らなんだ？」

「外の世界で言う『えんじにあ』って奴ツスね。んーと、アレだ。先日幻想入りして来た外の世界の機械を修理しようとしたところ、銅線が足りなかったからとか言ってる蕎麦で代用しようとして爆発させたとか、そんな連中ツス」

「それエンジンアじゃねえよ。変態技術者が只の馬鹿だよ」

「次回は素麺でやってみると言ってるんで、次は幾らか進歩するんじゃないツスカね？」

「何で麺類に拘るんだよ。麺類と機械の融合にどうという学術的意義を見出してんだよ。素直に銅線用意しろよ」

「そこはボクらには分からない『えんじにあ』の拘りがあるんじゃないッスか？」

突っ込む西宮の言葉を意にも介さず、椀は遠く山の麓　　霊夢
と魔理沙が進撃してくる地点を眺めている。

妖精などが霊夢と魔理沙に挑みかかっているのが見えるが、数秒ともたずに撃墜されていく。

「……強いッスねー。文さんは以前にも彼女達に関わった事があつたって言うてましたけど、ボク的には初見なんスが……ありゃマジ強いッスよ。ボクが戦っても絶対無理ッス。西宮君とかそのボクにも勝てないんだから、ぶつちゃけ論外ッスよ？」

「手はあるさ。博麗は本気でどうしようもないが、霧雨ならばまだやりようがある」

その進撃を見ながら椀が投げかけて来る言葉に、しかし西宮は口の端を上げた笑いと共に応じて見せた。

境内前に立つ彼の手に持たれているのは、下っ端哨戒天狗である椀が持っていた山の地図だ。

まだ神社については書きこまれていない古い地図は、しかしこの山の地理に関して西宮に知恵を与えてくれる。

「昔、東風谷が『変な子』って言われて虐められてた時があつてな。その時に報復行為目的で神奈子様と喧嘩の仕方を教わった事がある。あの人は軍神、戦う事にかけての知識は呆れるほどにあるからな。他では微妙に抜けてるが　　ともあれその件を切っ掛けに、喧嘩の立ち回りの仕方……つまりは戦術については多少齧った」

「あー、何か天狗の里でも座学でそれっぽい事を教えられた記憶が

あるツス。半日で全部忘れたけど」

「スゲーなお前の記憶力。ちょっとした衝撃でデータ飛びまくるファミコンソフト並だ。ともあれ、策はある。お前にボコボコにされた数日間で積んだ付け焼刃の戦闘経験と、霧雨と俺との間に出来ていた僅かな縁。そして藍様からその件の後で起こった事件についての顛末を聞いていた事と、八雲様から先程与えられた霧雨に関する情報がここで生きてくる」

そして、『この地図が最後のピースだったな』などと笑いながら、西宮飛行術を使って椀の横まで飛び上がり、地図を返す。

地図を受け取ってぞんざいにポケットに仕舞いながら、椀は特に西宮の言葉に疑問を浮かべるでもなく視線を麓の方に向け直す。

「何やらややっこしい考えがあるみたいツスけど、知っても忘れるんで別に良いツス。お、どうやらにとりが見つかってなし崩しに弾幕を開始したみたいツス」

「にとり？」

「ボクの友達の河童ツス。……あ、光学迷彩壊れて涙目だ」

「……麺類で銅線の代用をしようとする割に、部分的には異常に高度な科学文明を持つてるなオイ」

外の世界でも未だ実用化されていない河童脅威の技術力に、西宮が呻くように呟く。

しかし別段弾幕勝負でそれが有効活用される事も無く、涙目で応戦するにとりは徐々に追い込まれていくが

「あ？」

「……どうした？」

「いえいえ。千両役者の到着ツス」

椛の視界の隅に映った影。千里先を見通す彼女の目ですら、ともしれば捉えられない程の速度で霊夢と魔理沙がにとりと戦っている場所へ向かう黒い影の姿に、椛が嬉しそうに笑みを浮かべて尻尾を振る。

「やっちやえ文さん！ やっつけるーッスー！」

目的を考えるとやっつけちゃ駄目なのだが、それでも椛は両手を掲げて応援の声を上げる。

直後 西宮の目からも視認できる規模の竜巻が、山の麓で巻き起こった。

#

その一撃は、霊夢にとっても魔理沙にとってもにとりにとってもつまりはその戦場に居た全ての者にとつての予想外として顕現した。

「 “ 旋符” ・紅葉扇風ッ！！ 」

「 っっ 」

「 うわっ！？ 何だこりゃ！？ 」

「 っきゃあああああああああああああああああああああああ
ああ……………」

完全なる不意打ちで豪と音を立てて、三者を同時に巻き込むように出現する竜巻。

持ち前の理不尽なまでの勘で直前に気付いていた霊夢はある程度の余裕を持って、魔理沙は持ち前の速度でギリギリながらもそれを

回避する。

代わりと言わんばかりに悲鳴のドゥプラー効果付きで、天空高くに河童が一名打ち上げられて行ったが　　霊夢も魔理沙も視線を既にそちらに向けていない。

両者の目は既に今の竜巻を作り出した者　　高下駄の一本足のみで器用に木の枝の上に立ち、彼女達を睥睨して来ている烏天狗の少女、射命丸文に向けられていた。

射命丸は取材用の笑顔ではなく、彼女本来のにやにやとした笑みを浮かべて場を見渡す。

「あやや……にとりが囿になってくれてる内にやれば、片方くらいにはそれなりにダメージを与えられるかと思っただけだね。反応が前に取材した時よりも良くなってるじゃない。流星人間、短命故に進歩の速度は比類無し、と」

「随分な挨拶ね、文。というかいつもの全く敬意を感じられない敬語はどうしたのよ？」

「アレは取材用。今は天狗の里に住まう天狗として、取材帰りに見かけた山への侵入者に攻撃を仕掛けただけ。だから敬語なんて使わないわ」

そして霊夢の言葉に余裕たつぷりに紫と相談して決めた設定を返す姿は、いつもの慇懃無礼な新聞記者の物ではない。

身に纏う妖力は千の齡を越えた大妖怪の物。更に言うなれば文は天狗の里ではほぼ唯一外と関わり続け、場合によっては戦闘にも巻き込まれていた　　言ってしまうえば天狗の里には極めて数少ない、

『実戦を経験し続けた』天狗だ。

妖力のみならず、戦闘経験も豊富。或いは単純な妖力の過多ならともかく、総合的な戦闘能力ならば天狗の長である天魔さえ除けば天狗の里で屈指とすら言えるだろう。

慇懃無礼な新聞記者としての顔を捨て、そんな大妖怪としての片鱗を覗かせながらの文の言葉。それに応じたのは魔理沙だ。

「つまりアレか。『ここを通りたくば私を倒してから進むのだな！』
って奴か」

「そうね、そうなるわ。異変ってだいたいそういう物だし。

それに天狗としてってのもあるけど、これは古い馴染みの頼みでもあるからね」

「古い馴染み？」

「若く美しく清く正しく頭脳明晰な私だからね。ちよつとそんな眉目秀丽才色兼備な私を頼って、頼みごとをして来た奴が居るのよ」

「まあその辺の事情は興味無いんだが……おい霊夢、天狗が目を開けたまま寝言言ってるぞ。どうすれば良い？」

「憐れんであげれば良いんじゃない？」

「貴方達も大概酷いわね……」

仮にこの場に天空高く打ち上げられて飛んで行き、今はあられも無い格好で遠くの森の木に引つ掛かって気絶しているにとりが居れば、『あんたも同類だ！』と声高に叫んだであろう言葉を文が呟く。しかしこの場に彼女はおらず、従って誰も突っ込む事は無いまま、文はその古馴染みを思い出す。

胡散臭い笑みを浮かべ、反則臭い能力を操る大妖怪。

しかしその実、自らの式神を家族同然として扱い自らの苗字を分け与え、外の世界では生きていけない幻想の者達が最後に流れ着く場としてこの地を創った、文の知る限り最上級の御人好し。

必要であればどこまでも冷酷になれるが、本質の部分で非常に甘く情に篤い。およそ妖怪らしくない、しかし文が知る限り最強級の力を持つ大妖怪。

この騒がしくも穏やかで厳しくも優しい幻想の地を作り出した、境界に住まう優しき賢者　　八雲紫。

その胡散臭い笑顔を思い浮かべ、文の口元に自然と笑みが浮かんだ。

「全く……たまに頼って来たと思えばそれは自分ではなく他人の為しかも私に頼むにあたって天狗の立場に配慮する始末。　　もつと素直に頼れと私は言っただけ。素直に応じられない私も、大概アレだけ」

呟いた言葉と共に、文の周囲に風が集まる。

かつての取材の時とは違う、『新聞記者』としてではなく『大妖怪』としての文の力。

肌を感じるビリビリとした圧力に、霊夢と魔理沙がその文に対して戦闘態勢を取る。

「まあ、だからせめて頼られたからには十全以上の働きをしてあげましょう。私は友達思いだからね」

文にとっての勝利条件は、ここで魔理沙と霊夢に勝つ事ではない。

この二人　　特に霊夢相手では本気でやって勝てるかも実際の所は微妙だが、負けたとて彼女達に出直しを考えさせるほど消耗させては本末転倒。ある程度の余力を残した状態で、この二人には守矢神社組と対峙して貰わねばならない。

その状態の霊夢と魔理沙と渡り合う事で、守矢神社は己の実力を幻想郷に示す事となり　　それで紫の目的は完遂される。

ならば彼女の　　射命丸文の役割は神々が準備を整えるまでの時間稼ぎをしつつ、霊夢と魔理沙にある程度の余力を残させながら、

しかし多少の消耗はさせる事。

故に彼女は本気を出してはならず、二人には本気を出して貰わねばならない。

「……さあ、手加減してあげるから」

そして羽扇を軽く振るうと、轟という音と共に彼女の周囲に強く強く風が絡みつく。

先のように竜巻を飛ばすのではなく、自らの周囲に竜巻を纏う形を取った文が、叫びと共に突撃を開始した。

「本気でかかって来なさい!!」

かくて風神録異変は第四段階ステージに突入する。

第十一話：烏天狗の射命丸（後書き）

射命丸のあの台詞は、東方シリーズ通して一番好きな台詞かもしれません。

ともあれ駆け足気味で1〜4ステージ。

権は4面中ボスとしては不参加です。

東方はキャラが多いので、全員に見せ場を作っていたら色々大変な事になる為　　1〜3ステージの皆様は割を食ったかもしれない。

ごめん。でも穰子様も静葉様も雛もとりも大好きです。

第十二話：信頼（前書き）

今回は少し短め。

まあ、プロットの都合上ここで切った方が区切りが良いかなと思っただけですが、ご了承ください。

第十二話：信頼

「涙の痕は……消えましたね」

「うん、ちゃんと可愛いから心配しなくて良いわよ」

社務所にある早苗の部屋では、身支度を整え終わった部屋の主が手鏡を覗き込んでいた。

紫もその後ろから鏡を覗き、太鼓判を押す。目元に残る涙の痕を消す為に、早苗は彼女から借りた化粧品（しかも何故か外の世界の）を用いたのだった。ついでに紫手ずから、簡単なナチュラルメイクを施すオマケ付きだ。

くすくすと笑みを浮かべながらのその言葉に、早苗がはにかむような表情で肩越しに紫に振り返る。

「いやその、可愛いだなんて」

「あら？　だって早苗さんはとても可愛らしいわよ。外の世界ではモテモテだったんじゃないの？」

「んー……結構告白とかはされましたけど、信仰を集める方が大事だからご遠慮してましたんで、良く分かりません」

「……あらそう」

「それに、一番身近に居た西宮にはそういう事一度も言われた事ありませんでしたから、自分の容姿について深く考えた事はあまりありませんでしたね」

「彼には今度、女心についてレクチャーしてあげる必要があるわね」

やれやれとでも言いたげに、紫は部屋の入り口に向かって戸を開ける。

そして自分は戸の横へ避け、その戸をくぐるうとはせずに穏やかに微笑んだ。

「ここから先は貴方一人でお行きなさい。私がする手伝いはここま
で。貴方達が霊夢と魔理沙に敵うかどうかは分からないし、私は本
来なら霊夢の味方をするのが筋なんだろうけど……今回だけは貴方
達を応援してあげるわ」

「はい。あの」

「ん？」

「紫さん、本当に申し訳ありませんでした!!」

しかし早苗は戸を潜る前に、紫に向き直ると思い切り頭を下げる。
その様子に驚いたのは紫だ。

彼女としては謝罪云々は先の話で終わったと思っていたのである。

「……頭を上げなさい。その話はもう終わった筈でしょう?」

「ですが……先程、神社の周囲に陣地を作りに行く前に、神奈子様
と諏訪子様が仰っていました。紫さんにとっての博麗霊夢さんは、
きつと御二柱にとっての私と西宮みたいな存在だって。私は紫さん
にとつての大事な人に、無作法に喧嘩を売ってしまったんです。だ
からそれを聞いて、もう一度謝らなきゃと……」

「……ええ、確かに霊夢は私にとって、御二柱にとっての貴方達の
ような相手よ。確かにそれで一度、軽く頭に血が上ったのも事実。
でも今は貴方を許す心算でいるわ。御二柱のおかげもあるし、貴方
自身が好ましい人物であるのも理由の一つ。貴方の相棒である西宮
君もね」

くすくすと笑いながら、紫は笑みを浮かべる。

相変わらず胡散臭いながらも、しかし自らの非を認めて重ねて謝
る早苗に向ける視線はどこか優しい。

「だけど貴方が気にするというのなら」

「そうね、この件が終わ

「つたら霊夢と普通に接してあげて貰えるかしら？ 異変が終わり、この神社が幻想郷に受け入れられたら……貴方や西宮君が霊夢の友人となってくれれば、それ以上に嬉しい事はありませんわ」

「分かりました。微力を尽くします！」

「……いや、友人ってそんなに根性入れてなる物じゃないと思うんだけど」

「いえ、何事も全力を尽くすのが私の信条ですので。それで
は行って参ります！！」

元気良く戸をくぐり、進んで行く早苗。その背を見ながら大丈夫かなあという思いが紫の胸に去来するが、同時に大丈夫だろうという根拠の無い樂觀も内心で浮かぶ。

考え無しで無鉄砲。だが根の部分で自らの非を認められる強さと家族を想える優しさがあるこの少女。そして憎まれ口を叩きながらも彼女の横に立つ少年。

彼らならば多分大丈夫だろう。

根拠の無い樂觀、しかし矛盾するようだが根拠はある。

つまりは彼女が根拠としているのは、根拠と呼べぬ程度の根拠。それは

「ン千年生きた女の勘ですわ。 なんてね」

くすりと笑ってそう『根拠』を呟き、彼女はゆったりとした動作で床に座る。

手助けするだけの事はした。後は神々と、そして西宮と早苗の奮戦を祈っておこう。

そう結論付けながら、彼女は早苗の背中を見送った。

#

「遅かったな、東風谷。こっちの準備は今しがた終わったぞ。これ以上遅れるようだったら呼びに行つた所だ」

「文さんも今負けた所ツス。とはいっても大した怪我も無く、今は迂回ルートでこっちに帰つてこようとしてる所ツスね。神様達の準備は八割完了。もう少し時間を稼ぐ必要があるかと。あとにとりはパ
ンツ丸出しで樹に引掛かって気絶してるツス」

「会つた事も無いその河童、エラく不憫な事になつてるなオイ」

そして社務所にある自室から出た早苗を迎えたのは、神社の敷地の外から戻つて来た西宮と椛だった。

何故外から戻つて来たのかと言う疑問から僅かに首を傾げる早苗。その様子に気付いたのだろう、西宮が『ああ』と納得したような
呟きと共に話を始める。

「仕込みだよ。丁度今終わった所だ」

「ボクも手伝つたツス。褒める！」

「あ、ええと……ありがとうございます？」

「褒められたツス！ 感謝の気持ちは『かっぷめん』で良いツスよ
！」

西宮の横でバタバタと尻尾と両手を振って褒めるアピールをする椛に、早苗は良く分かっていないながらも礼を述べる。

その全く分かっていない謝礼に気を良くした椛、露骨にお礼の品まで要求するが、やはり安かった。

「まあそれくらいで良いなら、まだまだ備蓄はありますし……とこ
ろで西宮、作戦は決まってるんですか？」

「一応な。お前は顔に出るから特に説明はしないでおくぞ。全部終わったらネタばらししてやるから、その時に聞いて驚くなよ？ いや、やっぱり驚け」

「どっちですか」

「聞いて驚くなと言うのが定型文だが、やっぱり驚いて欲しいという人情が混ざった」

「まあ別に良いですけど。西宮がアホなのはいつもの事ですし」

「アホ言うな馬鹿東風谷」

いつも通りの馬鹿な会話。

それを交わしながら、西宮は戻って来たばかりだが再度飛行術でふわりと浮きあがり、地上に立っている椀に頭を下げる。

「椀、色々助かった。射命丸さんが戻ってきたら礼を言っておいてくれ。あの人が時間を稼いでくれたから、こちらの仕込みも出来た」

「了解ッス。……ボクも手伝わなくて良いんスか？」

「策を考えると、むしろ俺と東風谷だけの方がやり易い。その気持ちだけ受け取っておくよ」

「……手伝えはその貸しを盾にもっと『かつぶめん』を要求できると思ったのに……」

「お前潔いくらい馬鹿で、いつそ好感が持てるな」

呆れながら、浮上して高度を取る西宮。

早苗もそれに続いて浮き上がる。

「迎撃場所とかは決めてるんですか？」

「ああ。まずは博麗と霧雨が来る前にそこまで移動するぞ」

「分かりました。それと……」

「ん？」

地上では椀が両手を振りながら『頑張れー』と叫んでいる。

その言葉を聞きながら、目的地　　つまりは霊夢と魔理沙の想定侵攻ルート上に移動を開始する二人。

そんな中、早苗が拗ねるような表情を西宮に向ける。

「……さっき一回だけ『早苗』って呼んだのに、もう『東風谷』に戻りましたね」

「あー……そんな風に呼んだか？　意識してたわけじゃないんだけどな」

「呼びました。私は忘れません」

ぶすつとした表情になって、早苗は西宮を追い越すように速度を上げる。

追い越された西宮は呆れたような目線を早苗に向けつつ、ぼそりと呟く。

「お前だつて『丈一』とか呼んだだろ。お前にああ呼ばれるのも懐かし過ぎて驚いたつつの」

「元は貴方が他の子にからかわれて、私の事を名前で呼ばなくなっちゃったんじゃないですか」

「お前だつて俺の事を名前で呼ばなくなつたら」

「それは貴方が私の事を名前で呼ばなくなつたからです」

ふん、と顔を背ける早苗。

機嫌を損ねた事を確信させるその動作に、西宮は溜息を吐く。

これから巫女と魔法使いを迎撃するのにこれで大丈夫なのかと内心想うが、顔はそっぽを向いたまま、早苗は西宮に質問を投げかけて来た。

「作戦の詳細は聞きませんが、一つ教えて下さい。勝算はどれく

「らいありますか？」

「まず異変の内容を考えると、どちらかには神奈子様と諏訪子様の所まで辿り着いて貰わないと困る。博麗は多分俺達の手には負えないから、狙いは霧雨。奴を神奈子様と諏訪子様の所まで行かせなくすれば目的達成で、成功の可能性は三割って所だな」

「ねえ、それかなり低くないですか？」

「高いぜ。少なくとも幻想入りしたばかりの俺達が、異変解決の専門家相手に出し抜ける確率としちゃ破格だろ。それに三割ありゃクリーンナップは張れるさ。そう悪い賭けじゃない」

「あー、まあ確かに」

西宮が告げた言葉に、早苗は控え目に肯定の声を返す。

異変の目的は勝敗に関わらず、守矢神社の力を山の内外に示す事。

故に霊夢か魔理沙 可能ならば調停者である博麗の巫女に、

神奈子と諏訪子の元まで辿り着いて貰わねばならない。それは大前提の一つだ。

しかし先程神社を出る際に椛が言っていた、『神々の準備は八割』という事を考えるとこのまま通す訳にも行かない。

つまり西宮と早苗に求められる役目も、先の射命丸に近い。

『時間を稼ぎながら、可能ならば敵の力を削ぐ』というその目的。射命丸と違うのは、早苗と西宮には彼女ののように手加減する余裕など無いだろうし、全力をぶつけても勝利はおるか、撤退に追い込む事すら逆立ちしても不可能だろうという点だ。

ならば西宮の言う成功率三割に賭けてみるのも悪くは無いだろう。神奈子と諏訪子が力を示すだけならば博麗の巫女相手に十分。魔理沙まで行かせてしまうのは、未だ本調子とは言えない神々に余計な負担を与える事となる。

故に彼女は、可能ならばここで追い返す。

「……分かりました。成功率三割に乗りましょう。大丈夫、必ず出
来ます」

「その根拠の無い自信が出て来る不思議な方程式は何だよ。根拠無
いだろ絶対」

「まさか。方程式と言っか、理由はあります」

早苗が西宮の方に振りかえり、くすりと笑う。

それも先程までの拗ねた表情ではなく、むしろ相手を信頼し切っ
た無垢な表情で。

「西宮はさつき、『失敗した分は俺達自身で取り返す』と言いまし
た。貴方はあんな状況で嘘を吐くような人じゃない。私は貴方とそ
の言葉を信じます」

「……っ反則だろ、それ」

「ふふっ」

その笑顔に、今度は西宮が顔を逸らす。

明らかに照れたその様子に、早苗がしてやったりとでも言っよう
に含み笑いを漏らした。

そしてひとしきり笑い終わった所で、飛行しながら早苗が西宮に
近付き声をかける。

開戦前の、最後の作戦会議だ。

「それじゃ、西宮。信頼してますから、その作戦を成功させ
る為に私が何をしたらいいのかを教えて下さい」

「……ああ。お前の役割は難しいが単純だ。それは」

#

「勝った気がしねー。あいつまだ余力残してただる絶対」

「良いじゃない。そうだとしても、私達も余力を残したまま進めたわけだもの」

そして、程無くして。

霊夢と魔理沙は妖怪の山の七合目辺りを飛行しながら、そのような言葉を交わしていた。

周囲は鬱蒼と木々が茂っており、人の立ち入らない妖怪の山らしさを醸し出している。

彼女達からすればどういうわけか、山に入れば煩いだろうと思われた天狗の姿も射命丸以外に見る事は無く、彼女相手に少々手こずったものの他にはさしたる問題も無くここまで来る事が出来た。

最も、魔理沙はその射命丸戦に少々不満が残っているようだが。

「なーんか不完全燃焼なんだよなあ。そろそろ目的の神社の関係者が来ても良い頃合いだろうし、次の相手はまだかよ」

「私は楽な方が良いんだけど」

そのような会話を交わしながら飛ぶ二人。

しかし次の瞬間、

「噂をすれば、ね」

「甘いぜー！」

両者は全く同時に回避行動に入る。

霊夢はゆるゆると流れるように、魔理沙は鋭く直線的に。

全く質の違う動きながらも、両者は各々自分に飛んで来た弾幕を

回避した。

霊夢の勅に従って進んでいた彼女達の前方　　即ち神社の方角から飛んで来た弾幕。

それは共に同じ御札を媒介とした物であり、しかし別の個人の放った物だった。

「ここから先は通しません、博麗の巫女！　私が相手です！」

「……誰よアンタ。その格好から察するに少し色が違うけど巫女？　……って言う事は、あのふざけた宣戦布告を出した神社の一員ね」

霊夢の方へと荒削りながらも強い霊力で弾幕を放ったのは、青と白の風祝の衣装を身に纏った少女、東風谷早苗。

大幣を手に高々と戦意を叫ぶ彼女に対して、霊夢は三白眼で睨みつけながらもお祓い棒を手に構える。

「よお、久しぶり……って程でも無いか？　“普通の魔法使い”」

「そうだな。だが私としてはお前に少し用と恨みがあるぜ、西宮」

そして魔理沙の方へと霊力は弱いながらも死角を突くような嫌らしい配置の弾幕を放ったのは、ジーンズとシャツに上着を羽織ったラフな格好の少年、西宮丈一。

多少の因縁のある両者は、互いに好戦的な笑みを口元に浮かべて睨み合う。

奇しくも大きく迂回しながらも速度と地の利で大きく霊夢達に勝る射命丸が、守矢神社で待つ椋と紫の元に辿り着いたのと同じ時。

風神録異変は第五段階ステージに突入する。

第十二話：信頼（後書き）

と、いうわけで今回短めに戦闘開始直前まで。

明日は忙しいので更新の可否は不明です。もしかしたらまた番外でお茶を濁すか、一日空くかも。

ご了承ください。

第十三話：策（前書き）

今回、スペルカード戦ということでオリ主がオリジナルのスペカを使っています。ご了承ください。

まあ、名前負けの感が極めて強いですけど。別に能力を使ってるわけでもなく、ノーマルの霊弾をそれっぽく発射してるだけです。

あと割と今回も独自設定などのオンパレードですね。

こちらでもご了承くださいれば幸いです。

第十三話：策

「秘術」・グレイソーマタージ！！」

四者の中で真っ先に戦闘の口火を切ったのは早苗だった。

弾幕をバラ撒きながら霊夢に突撃。その愚直な突撃に対して、霊夢は嫌そうな顔で距離を置こうとする。

「ああもう、近付いて来ないでよね」

突撃した早苗から距離を置くように、霊夢はこれまで進んで来たルートからやや脇へそれる形で山中へ飛び込んで行った。

博麗の戦い方は元々が結界を多用する、攻か防かと言われれば防の戦い方。加えて霊夢自体のスタンスが剛か柔かで言われれば完全な柔だ。

初手からスペルを展開しながらの突撃に、彼女はそのスペルを避け、結界で受け流しつつ距離を取る事を選択した。

これはある意味、早苗がそうさせたと言うよりも射命丸の功績と言えるだろう。

『どちらかと言えば』防であるだけで、霊夢自身は攻撃能力とて相当な物だ。

しかし彼女は目の前の相手を『それなりに出来る』と判断すると同時に、『普通にやっても負ける相手ではない』と直感していた。

弾幕ルールの第一人者としての経験、そして彼女ならではの勘で導かれたそれは、完全な正解だ。

故に彼女は相手の能力を把握し切り　だからこそ後退防御を選択させられてしまったのだ。

理由は先にも言った通り、射命丸戦。正確に言うならば、霊夢が射命丸相手に受けた消耗が原因である。

彼女の乱入の直前まで戦っていた河童までは、霊夢にとっても魔理沙にとっても強敵と言える相手は居なかった。

しかし射命丸は霊夢と魔理沙相手に一歩も引かぬ戦いを見せ、彼女達の双方にスペルカードやアイテムの使用という消耗を強いて来たのだ。

霊夢の勘では、目の前の巫女は黒幕ではない。

とすればこの巫女の先にボスが待っている事となる。故にこれ以上の消耗を抑える為にも、彼女は時間をかけてでも消耗を抑える戦い方をせざるを得ない。

故に事故の起きやすい近距離戦ではなく、見切りのし易い遠距離戦。

誘導弾というどこに居ても相手を追尾する弾幕を多用する彼女にとっては、近距離よりも遠距離の方がやり易い為というのもある。

近距離でもやってやれない事は無いが、近すぎると『誘導性』という弾幕の持ち味が殺されるのだ。

故にこの場で彼女が選択するのは遠距離戦。

安全に、確実に、面倒無く勝つ為に。

しかし

「まだまだです！ 逃がしませんよ “奇跡” ・白昼の客星

！！」

「ああもう、面倒臭いわねえ……！！」

しかし、早苗はそれをさせまいと続けざまにスペルを放ちながら距離を詰める。

故に霊夢は距離を取る。

早苗は明らかにオーバーペースなスペルの連射だ。対する霊夢は引いて時間を稼ぎさえすれば、相手は長くは体力がもつまいという見方もあるのだろう。

そして結果として、彼女達は魔理沙と西宮から大きく引き離される。

そう、西宮が早苗に授けた作戦通りに。

#

そして西宮は魔理沙と対峙しながら、早苗が霊夢と共に飛び去って行くのを横目で見ていた。

魔理沙も同様だが、こちらは初めて見る相手である早苗の能力を警戒していたので、迂闊に動こうとはしなかったというのが強いだろう。

西宮の側は、まずは作戦通りに事が運んだ事に内心で胸を撫で下ろしている状態だ。

彼が早苗に出していた指示は単純だ。

『初手から全力を出して、博麗霊夢を引き離せ』。

それは紫から聞いた博麗霊夢という少女の戦闘スタイルと性格、そして射命丸との戦いで予想される消耗などを計算した上での言葉だった。

攻より防。剛より柔。そして無駄と面倒を嫌う怠惰者。

ならば全力で弾幕を放ちながら突っ込んで来る相手に正面切って付き合う愚を犯さず、まずは距離を取るだろうと読んだ上の指示。

霊夢自身が消耗しているなら尚更だ。

そしてその読み通り霊夢は距離を取り　　つまりここから離れて行った。

博麗の巫女相手に困をやるという難易度の高い役目だったが、早苗はどうやらその役目を十全に果たしてくれているようである。

遠くから聞こえる弾幕音に早苗の奮戦を感じながら、西宮は魔理沙に声をかける。

「さて、向こうは盛り上がってるみたいだし……こっちもそろそろ始めるか」

「おいおい西宮。本気で私相手にやり合う心算か？　見た感じお前、霊夢を引き付けてった青白巫女より弱いだろ。感じる霊力、飛行の慣れ、さっきの弾幕の威力。全てが青白以下だぜ？」

「その心算だよ、霧雨魔理沙。見た感じどころか事実としてその分析は正しい。　けどな、生憎とこっちにも理由があるんだよ。

神様の『神託』でもあるしな」

「ハッ、神託ねえ」

十間ほどの距離を置いて、妖怪の山の山中で対峙する西宮と魔理沙。

しかし魔理沙は眼前の敵の言葉を、鼻で笑う。

神託に従う　　それは即ち、この場で戦う理由を他人任せにしている事に他ならない。

同じ誰かに仕える立場でも、妖夢や咲夜や鈴仙は自分の意思で誰に言われるでもなく、主人を守る為に前に出て来ていた。それに比べると、この理由は些か興醒めだと魔理沙は思う。

粹に華麗に美しく、人妖神霊が対等に決闘する舞台あそび。序盤戦で巻き込まれる程度ならまだしも、この終盤戦に踏み込んでくるのにそ

の理由は、彼女の美学にはそぐわない。

「なんだそりゃ、そんな理由で私と弾幕^やり合う心算かよ。そいつはちよいと粹じゃないぜ。弾幕^ごつこの何たるかが分かってないな」
「仕方ねーだろ。……なあ霧雨。俺が受けた神託^つてな何だと思っ
？」

「あ？ ……そうだな、神社を守れたの我に従えたの、そういうのじゃないのか？ 私にや分からん感覚だが、神様直々にそう言われるってな信者としちや誉れなんだろ？」

「そりゃ俺にも理解できねーな。だいたい当時は神も仏も信じて無かった俺がいきなりそんな神託^つ告げられて喜ぶかよ。そういうもんじゃねえのさ、ウチの神様達が外の世界で今にも消えそうな分際で、最初に俺にくれた『神託』はよ」

口の端を歪め、糸目を見開き好戦的に笑う西宮。

両の袖口から飛び出した札がその手に握られ、ガラガラとした目が実力差を覆して勝機を掴む機を逃すまいと魔理沙を睨み付ける。

それを見た彼女は半ば本能的に直感する。先程までの自分の物言いは間違いだ。

こいつは言われるがままに勝負に踏み込んで来たわけではない。確固とした自分の意思でここに立っている。

そう感じた瞬間、粹ではない理由で弾幕勝負に踏み込んで来た相手に醒めた筈だった興が、再度燃え上がるのを感じる。

成り行きでブチのめした神様やら河童とも、手加減宣言をしながらかかって来た天狗とも違う。

強い弱いの問題じゃない。面白い。

霊力も弾幕慣れも弱いが、それでも本気で勝ちに来ている目だ。彼女はそういう目は嫌いじゃない。

「……随分とまあノツてるみたいじゃないか、西宮。お前はこの先の神社に居る神様に何を言われたってんだ？ 聞かせるよ、オフレコにしといてやる」

「『早苗を泣かすな』だとよ」

そして西宮が苦笑交じりに告げた言葉に、魔理沙がぼかんと口を開けて硬直する。

彼女からすれば、それは余りに慮外の言葉だ。

神々が告げる神託としては余りに陳腐で、しかし故にこそ

「だったらよ、なあオイ！

今にも消えそうな状態で、無鉄

砲でガキ丸出しな風祝にしか姿を見られない分際で！ それでもその風祝を思っただけで告げられた言葉があつて、更にその風祝がイイ女だつてんなら、そりゃ叶えなきゃ男が廃るってモンだろうよ！！」

故にこそ、その陳腐な神託がこの男の軸だ。

自分が傷つけて泣かせた少女を二度と泣かせるまいとする、下らなく陳腐な意地。

西宮丈一は高らかに下らない、しかし彼にとって絶対の意地を叫ぶ。

結局の所、この幻想郷での異変など、殆どが下らない意地や我儘のぶつかり合いだ。

故にこそ そんな理由で立つ西宮の姿は、幻想郷の一員として相応しいものとして魔理沙の目に映った。

「 良いね、痛快だ。理由があんまりにも私好み過ぎて笑えて来る。この恋色の魔法使いこと魔理沙さんをして、ちょっとばかり胸が震えたぜ。エイピキラーだの何だのフザけた呼び方しておいて、

お前あの巫女大好きなんじゃねーかよ」

「正確には巫女じゃなくて風祝ってただけだな。まあお前と最初に会った時は面倒だから巫女って解説したけど」

「まあ何でも良いさ。アレだ、理由は知らんが私らが行くとあの巫女……風祝だっけか？ まあ、そいつが泣くんذار？」

「ああ。そもそもこの異変は割とあいつのミスで始まった側面が強い。だから自分のせいで神様や俺に迷惑かけたのが申し訳ないと先程までは泣いていてな。……だから、これ以上あいつを泣かせない為にも、お前はここで退場願う」

「心地良いね。痛く痺れる。　　けど、異変解決は私のライフワークだ。こればっかりは譲れないな」

強気に笑む魔理沙と西宮の視線が交錯する。

これ以上の言葉は不要。今は異変のと真ん中で、両者の意見は対立中。

ならばこう言う時にどうすれば良いのかは、幻想郷の住人ならば皆分かっている。

「どっちの意見が通るかは」

「　　弾幕で決めるってなあ！」

そして両者は全く同時に弾幕を展開しながら、妖怪の山の中にての弾幕戦を開始した。

#

「椀、状況はどう？」

「そうッスねー……にとりにはパンツ丸出しッス」

「そこはどうでも良いわ」
「あいつス」

守矢神社の屋根の上にて、二人の天狗が会話を交わしていた。

片方は守矢神社への待機を指示された犬走椋。そしてもう片方は、幻想郷最速とすら評される飛行速度^{はやさ}で、迂回ルートを使いながらも霊夢達より早く神社に到着した射命丸であった。

そして射命丸文、まさかの自分が吹っ飛ばした相手の行く末をスルー。

未だにしましまパンツ丸出して樹に引っ掛かっているにとりの存在は、彼女達の会話から秒で省かれた。

「……んー、早苗さんは善戦してるツスね。とは言っても、弾幕もスペカも飛行もどれもこれもオーバーペースに見えるツス。長時間はもたないツスよ」

「そちらは多分、引き付け役ね。霊夢はどうにもならないのは、風祝と信者のタツグにも分かってたでしょ。紫から話を聞いてたみただし。　だとしたら、何か仕掛けるとしたら本命は魔理沙の方。椋、そっちは？」

「まあ、作戦通りの展開ツスね」
「作戦通り？」

神社の上にて椋は自身の能力である千里眼を用いて、射命丸の指示でこの場から早苗と西宮の各々の戦いをモニターしていた。

その椋が返した西宮側の戦況についての言葉に、文が鸚鵡返しに聞き返す。

対する椋は、『仕込み』を行った時に西宮から聞いていた言葉を思い出そうとして、

「やつべえ七割忘れた」

「……凄いわ貴方の記憶力。良いから覚えてる事だけ言いなさい。あと現状」

「えーと、魔法使いさんの立場なら、弱っちい西宮君相手にスペカを放って一気に終わらせるような無駄遣いはしないだろうとか何とか。で、その予想通り、現状は追いまくられてるけど通常弾幕のみなんで、辛うじて逃げ回れてる所ッス。逃げながら向かう場所は

地図で言うところこッスね」

「へえ」

思い出し切れなかった椀の言葉に、射命丸が頭痛を堪えるようにして返す。

しかし椀が首を傾げながら返した断片的な台詞と、地図に示された目的地に、彼女の口元が笑みの形に歪んだ。

元々が射命丸文は頭の回転がかなり早い妖怪だ。

その言葉と椀が連れて行かれずに置いて行かれた事実から、ほぼ正確に西宮の意図を読み取っていた。

椀を連れて行かなかった理由は、彼我の戦力差が縮まり過ぎた事で霊夢や魔理沙に本気を出させない為。

個々の戦闘能力はともかく、三対二という数的不利のある状況になったならば、流石に魔理沙や霊夢とてスペルの消耗を抑えたまま勝とうとは思うまい。

妙な話だが圧倒的に不利な状況であるからこそ、西宮と早苗は辛うじて戦闘を継続出来ていた。

遠からず負ける事が確定している相手に無駄にスペルを使う愚を魔理沙と霊夢が厭ったからであり、その結果として西宮は逃げ回り

「逃げ回った先には、面白い物があるわね。　　そこまで引き込む、か」

そう、これは誘い込みだ。

窮鼠は猫を噛む為に、自らのフィールドに相手を誘い込む。

ならば誘い込んだ先に待っているのは

#

「どうしたどうした！？　大見得切ったつてのに逃げ回るばかりかよ西宮！」

「言ってる火力馬鹿が！　反撃して欲しけりやもうちよい加減しやがれ！！」

「お前地味に滅茶苦茶言ってるなあ！？」

椀の見る先　　つまりは西宮と魔理沙の戦闘は一方的な展開だった。

地上すれすれを飛び回る、否、正確に言うならば駆け回る西宮に対し、魔理沙が上空から一方的に攻撃を加えている。そんな状況だ。

「しかしお前、珍しい移動の仕方してるな」

「そうしねえと避けられねーだろうが！！」

上空からの魔理沙の声に怒鳴り返した西宮がやっているのは、弾幕勝負の定石である空中戦　　ではない。

攻撃をほぼ放棄しているが故の、地面を転がるようにして逃げ回る地上戦だ。

飛行術にもタイプがある。例えば風を操って自らを飛ばす物や、自らの身体を軽くさせて浮遊させる物が一般的だろうか。

それ以外にも色々あるが、前者は弾幕にも応用が効き、後者は体捌きの面で応用が効く。

西宮が習得しているのは後者だ。

結果として彼がこの戦闘で選択したのは、飛行術で自らの身体を軽くし、その軽くした身体で足を使って駆け回る事だった。

要所所での加減速と方向転換を足で行うそれは、熟練した飛行技術を持つ相手から比べれば稚拙な技だ。少なくとも弾幕勝負に慣れ、飛行に習熟した人妖がそれをわざわざ行うメリットは無い。

空中ならばグレイズすればどこかへ飛んで行くだけの至近弾が、対地攻撃として放たれた場合には地面で爆ぜ、弾幕自体の余波や飛散する飛礫などで却って危険だと言うデメリットもある。実際、西宮は直撃弾こそ無い物の既に余波や飛礫でボロボロだ。

更には何も無い平原などならばまだしも、ここは障害物の多い山中だ。地上すれすれで戦うならば、岩なり木々に衝突する危険もある。

しかし飛行に不慣れな西宮にとっては、不慣れな飛行を行うよりも加減速と方向転換が急角度で行えるこの移動方法は都合が良かった。

少なくとも不慣れな飛行で空中戦を挑んでいれば、最初の十秒で落とされていただろう。

魔理沙側としても、地上の敵を相手に戦うのは不慣れだというのは大きい。西宮にとっては移動上の障害物である木々や岩が、魔理沙にとっては射撃上の障害物になっているのだ。

霧雨魔理沙の弾幕は威力こそ高いが、レーザー系とマジックミサイルという直進弾が主体。誘導弾系の物が無く、この手の射線妨害に極めて弱い。

紫から聞いた魔理沙の戦闘スタイルから西宮が得た情報だ。

元来であればスペルを使っていない状態とはいえ、魔理沙自身が元々非常に高い攻撃能力を持つ魔法使いだ。

霊夢が『柔』で『防』ならば、魔理沙は完全な『剛』で『攻』。

正面切つての撃ち合いを最も得意とするタイプだ。付け焼刃の戦闘経験しか無い西宮が真つ向から相手をすれば、本来であれば相手にもならない事は請け合いだろう。

そう考えた上での地上戦。

加えて西宮自身が要所要所で御札や霊弾で相殺を狙い、或いは威力を削いでいる事まで含めて、彼我の実力差を考えれば脅威的な粘りと言える。

そしてその脅威的な粘りを支えるのは、ひとえにその付け焼刃の戦闘経験のおかげだった。

たかが数日の攻防で劇的に戦闘能力が向上するわけではない。技術も体力も身に着くには圧倒的に時間が足りない。多少マシになり、幾らか慣れるのが精々だ。

或いは霊夢や、そこまで行かなくとも早苗程の才能があれば話は違つのだろうが、生憎と西宮はそこまでの才は無い。

だがその『多少マシになった』こそが、西宮を幾度も被弾から救っている。

椛とて天狗。それも射命丸文に付き合つてあちこちに出向いている、見た目と言動にそぐわぬ実戦経験豊富な天狗だ。

彼女相手に身に付けた技術が、僅かな差で西宮の敗北を押し留めている。

「もう少し……ッ!!」

そしてギリギリで敗北を回避しながら、西宮は山中のある一箇所を指していた。

そこは山中にある巨木を目印として椀と『仕込み』をした場所。即ち、窮鼠が猫を噛む為のフィールドだ。

「いつまで追い駆けつこを続ける心算だよ！ あんまり私は気の長い方じゃないんだぜ!？」

上空から僅かに苛立ちを含んだ魔理沙の声が響く。

この追い駆けつこは、どうやら彼女のお気には召さなかったらしい。

魔理沙が遂に上空からスペルを放とうかと考え始めた瞬間しかし、西宮はこの戦いが始まって初めて足を止めた。

「そりゃ悪かった。退屈させた礼だ」

飛礫、泥、至近弾で上着はボロボロ。

所々肌から血が滲んでいる西宮が、しかし満身創痍で上空の魔理沙に攻撃的に歯を剥いた笑みを向ける。

すぐ傍には樹齢千年を越えるであろう巨木。その巨木に寄りかかるようにして、西宮は懐から一枚のカードを取り出した。

それを見た魔理沙が、嬉しそうな声で地上の西宮に向けて叫ぶ。

「スペルカード……！ ハッ、やっとやる気になったかよ西宮!!」

「悪いな、ちよっと俺だけの力じゃ撃てないからよ。 お前を

ここまでエスコートしてやる必要があったわけだ」

そう言いながら、彼は片手にスペルカードを持ち、もう片方の手で
すぐ傍の巨木に触れる。

樹齡千年を越えて、既に靈樹となり自らが靈力を持っているその
巨木に。

その意図に気付いた魔理沙の目が見開かれる。

『まさかこの男、それを狙ってここまであの撤退戦を続けていた
のか』、と口にせずとも表情が語っていた。

「みんぎはら 襖袂”・よせつがえり 黄泉返り！！」

次の瞬間、西宮自身の靈力に加えて靈樹から借りた靈力も上乘せ
したスペルカードが発動。

西宮の眼前に作られた靈弾が、消滅と再生を繰り返しながら徐々
にその数を増やして魔理沙へ向かう。

靈地、という概念がある。龍脈と言い換えれば、紅魔館の
門番辺りが詳しいだろう。パワースポットと言っても良い。

とにかく靈的な強い力の『溜まり場』と思えば分かり易い。外の
世界に残る樹齡幾千年などという靈樹の周辺などがそれに当たるだ
ろう。

その『溜まり場』で修行する事で強い力を得たり、その力を借り
て何らかの呪いが行われたりといった例は枚挙に暇が無いだろう。

或いは古来から怪奇が頻発していた場所は、何らかの靈地であっ
た可能性があった。などとは大和の地を古い時代から眺め続け
て来た守矢の二柱の言葉だ。

そう、怪奇が頻発していた場所。となればこの妖怪の山も、その
最たる地の一つであろう。

加えて天狗は元々が修験者と関わりの深い妖怪。その修験者が籠
る山々にも靈地は多かった。

であれば、その天狗が住み怪奇が頻発している場所である妖怪の山、必ずや何らかの霊地がある筈と当たりを付け、西宮が椀に見せて貰った地図に書いてあったのがこの霊樹だ。

後は魔理沙が来る前に大急ぎでこの樹が霊地である事を確認すると同時に、今神々が神社でやっているのと同様に、御札を使ってこの霊樹周辺に簡単に陣地を作っておいた。

そこまで込み入った物を作る必要はない。要はここに来るまでに油断している魔理沙に向けて、霊樹の力を借りたスペルカードを全力で叩き込む。その為の下地さえできていれば良いのだ。

結果、椀の手を借りた西宮は短時間でこの場の『仕込み』を完了。

そして辛うじてここまで魔理沙を誘い込み、自らの力だけでは決して届かない筈の“普通の魔法使い”へ向け、霊樹の力を借りた渾身のスペルカードが撃ち込まれる。

かくして一連のピースは重なり合い、一つの策へと昇華される。

射命丸の手による魔理沙の消耗、椀の手による西宮への特訓、魔理沙の油断、この場の地理。何れが欠けても成り立たなかったであろう策が成った。

よもつがえり
黄泉返り。

古事記曰く、かつて黄泉の国へとイザナミを連れ戻しに行つたイザナギが、しかし黄泉の住人と化したイザナミと黄泉の住人達に追いまくられて逃げ出した出来事だ。

結局イザナギは大岩で黄泉の国への道を塞ぎ、その大岩を挟んでイザナミとイザナギはこう告げた。

『私はこれから毎日、一日に千人ずつ殺そう』

『それなら私は人間が決して滅びないよう、一日に千五百人生ませよう』

それが人間の生死を現す始まりとなったとされているその逸話。語られた人の数の如く、霊弾は再生と消滅を繰り返しながらも数を増やし、遂には膨大な数を誇る弾幕となって魔理沙へと襲い掛かる。

個々の威力は決して高くはない西宮の霊弾が、しかし霊樹の力を借りて、初めてここで魔理沙に届き得る牙となった。

「　　っ！！」

回避は不可能。

油断と驚きが僅かに彼女の身体を硬直させ、迫り来る弾幕への回避の機を奪う。

そして

#

「　　待っているのは、恐らく策。それも二重三重に考えられた……お見事だわ」

そう呟く文は、しかし苦笑を浮かべて首を振る。

嗚呼、上出来だ。持ち得る手札を全て生かした最上とすら言える。彼は大変良く頑張った。

だが。

だが、それでも

「それでも、たかが策の一つや二つでどうにかなるほど、霧雨魔理沙は甘くない。それで倒せるような相手ならば、彼女は博麗霊夢と共に幾つもの異変を解決するなんて出来なかつたわ」

それでも、霧雨魔理沙には届かない。

#

そして。

「恋符”・マスタースパーク!!」

回避を諦めた魔理沙が掲げたマジックアイテム ミニ八卦
炉から放たれた魔砲が、練られた策と放たれた霊弾ごと、西宮丈一
を飲み込んだ。

第十三話：策（後書き）

やっぱり無理でした。

そりゃ策の一つや二つで落ちるなら、紅魔郷から先幾つもの異変を解決なんぞ出来ませんよね。

西宮、敗北。文曰く、『たいへんよくがんばりました』。

ですが、彼の策は次回に続きます。

しかし今回好き勝手やったなー！。

感想が怖い。そしてイザナギとイザナミの話は超簡略化しています。詳しく知りたい人はググってみるのも良いでしょう。

第十四話：策の裏の策（前書き）

説明部分が多い気がします。

前話、『策』の答え合わせの回ですね。

ある程度以上に独自設定が含まれていますが、毎度ながらご了承ください。

第十四話：策の裏の策

遠くから聞こえて来た轟音とそちらで解放された巨大な魔砲に、博麗霊夢は彼女にしては珍しく僅かに目を見開いた。

見覚えが無いわけではない。むしろかなり見慣れたスペルカードだ。或いは自分のスペルを除けば、最も目にする機会が多いスペルカードとも言えるだろう。

『“恋符”・マスタースパーク』。

霧雨魔理沙という少女の十八番にして代名詞にして切り札。

彼女とて馬鹿ではない。これから先、恐らく神社に黒幕が待っていて、最低でももう一戦はあるのは分かっている筈。

となると彼女がここで切り札を切った理由は、

「使わされた、か。やるわねアンタの相棒。雑魚に見えたのに、魔理沙に切り札一つ切らせるまで追い込んだなんて」

「……今のが何なのか、分かるんですか」

「マスタースパーク。魔理沙の代名詞で、切り札よ」

呟いた霊夢に対し、正面方向から問いが投げかけられる。

現在位置は空中。山中にて空に浮かび向かい合い、彼女に問いを投げかけて来るのは青白の風祝　東風谷早苗だ。

先程から霊夢と弾幕戦を行っていた彼女は、しかしこれまで霊夢相手に善戦した代償として、既に肩で息をするほど疲れ切っていた。

とにかくスペルを連射し、霊力を惜しみなくつぎ込み、集中力も体力も何もかも全てを短期決戦の心算でねじ込んだ。

故に博麗霊夢相手にこれまで戦えたのだが、既にそのいずれも限界。

完全な詰み。そう言える状況でありながら、早苗は僅かに笑っていた。

「……向こうは西宮に任せました。私は西宮を信じます」

「そりやまた随分な信頼ね。……けど、流石にあの靈力で魔理沙に勝てるとは思えないわよ」

「かもしれません。ですが、私には今更向こうに出来る事はありません。私にとっての今の問題は、貴方です」

魔理沙の相手をしている西宮。彼に対して、今早苗が出来る事は何も無い。

敢えて言うならば、信じる事か心配する事。彼女は前者を選んだ。

その彼女が信じる相棒が、この戦いにあたって早苗に授けた策は一つ。

全力を出して博麗の巫女を引き付ける事だけなのだが、その役目は既に終わったと考えて良いだろう。

魔理沙と西宮の方でも大きな動きがあったし、そもそも早苗が限界だ。これ以上その役目を継続する事は出来ない。

そして授けられた策とは別に、策ではない助言が一つだけ。

『気になるようなら、引き付けついでにその巫女相手に言いたい事を言っちまえ』。

それが西宮が作戦会議の終わり際、早苗に告げた言葉だった。

「……私が抱いていた博麗さんへの後ろめたさ、多分彼は分かってたんでしょっね」

弾幕勝負故に距離を置いて対峙している靈夢には届かないような声で、早苗は苦笑と共に呟く。

この異変の原因となった自分の行動。今となってみれば、あれがとても軽率で、相手の立場を考えない行動だったと分かる。

故にこそ彼女は八雲紫に謝罪をしたし、博麗神社の巫女である霊夢に対しても後ろめたさを覚えていた。

それに気付いたからこそ、西宮は作戦会議の最後にあのような言葉を付け足したのだろう。

そう思考し、その気遣いに応じる為にも、早苗は霊夢に向かって声を上げた。

「博麗さん！」

「うわ。……なによ、いきなり。降参？」

「いいえ、降参はしません。ですが、私は貴方に謝らないといけません」

「謝る……？」

その言葉に霊夢がきよとんとした様子で首を傾げる。

早苗が見る限りずっと何事にも興味無さげな表情をしていた彼女だが、それ故にこうして初めて見せたそれ以外の表情は、年頃の少女らしくとても可愛らしい物だった。

早苗はその表情に、『ああ、紫さんが母親代わりとして世話を焼きたくなるのも分かるなあ』という感想を内心で抱きつつも、

「貴方の神社に無作法な宣戦布告したのは私です」

「ああ、アレあんただったの？」

「ええ。幻想郷に来たばかりで舞い上がっていたが故の無作法、謝罪いたします。ですがあれが守矢神社の総意ではなく、私の独断であることは御理解下さい」

「……えと、何て言うか拍子抜けね。レミリアとか幽々子とか永琳と輝夜とか、異変の原因となった連中って大抵もつと我儘と言うか、

私の強い連中だったんだけど。解決した後ならまだしも、こんな真つ最中に謝られたのは初めてだわ」

「悪い事をしたら謝るのです。当然の事ですよ？」

困惑した様子の子の霊夢に、早苗は苦笑しながら言葉を返す。

『めつ』とでも言わんばかりのその言葉に、霊夢は更に困惑を深める。

「……まあ、別に良いけど。いつまでも引き摺るのも面倒だし、実害つたら私が腹立つたくらいだし……神社を物理的に潰されてもしたら、話は別だっただろうけど」

「まさか！ そんな危険な事をするわけじゃないじゃないですか」

「そうよね。幾らなんでも博麗神社にそこまで明確に喧嘩売る奴なんて居ないわよね」

例えば少し過激に過ぎたかと内心で思う霊夢と、小さく笑う早苗。この両者がこの会話を思い出すのは、後に暇を持て余した天人が神社を破壊した後である。

ともあれ元より必要以上の面倒を嫌う霊夢だ。早苗の言葉に、一瞬これでこの異変は解決かとお被い棒を仕舞おうとするが 次
の瞬間、疑問に気付いて首を傾げる。

「……ねえ、謝るならなんで最初に私と遭遇した時に謝らなかったの？ それに降参しないって言ってたし」

「申し訳ありません、謝罪が遅れた事は重ねてお詫びします。

ですが私達にも、私達の都合がある。貴方には是非とも、守矢神社まで来て私達の神社の神様と戦って頂きたいのです」

そして、応じる早苗は大幣を構え直す。

息は荒く、体力霊力共に枯渇寸前だ。

しかし戦意を崩さない彼女に、霊夢は呆れたように溜息を吐いた。

「……訂正するわ。あんたもやっぱり、我儘で我が強い幻想郷の住人よ」

「褒め言葉ですね。ありがとうございます」

「褒めてないわよ。……まあ面倒だけど、ここまで来たんだしね。」

その神社の神様の顔を拝むついでに、弾幕勝負をしたって殆ど変わらないか。ただし思惑に乗ってあげる代わりに、今度うちの神社の素敵なお賽銭箱にお賽銭を入れて行くこと」

「なんか賄賂みたいですね」

「物事を円滑に進めるには必要な事もあるわ」

神社の巫女として言って良いのかどうか怪しい事を堂々と宣言する霊夢。

彼女の言葉に、要求された側である早苗は『良いのだろうか』と少し迷いつつも頷いた。

先方の神は知らないが、自分の所の神はその程度で怒るような度量の狭い神ではないと。

「分かりました。後日にでも西宮と二人で訪れさせて頂きます」

「だったらお賽銭は二人分で宜しく。」で

言いながら霊夢はお祓い棒を構え直し、早苗に告げる。

「この先に居る神様と戦って欲しいってんなら、これはスペルカードを用いた異変として終わらせたといって事よね」

「ええ。だったらこの戦いも、話し合いではなくスペルカードルに則った弾幕戦で終わらせるべきです」

対する早苗も大幣を構え直し、枯渴寸前の体力と霊力を絞り出し

て弾幕を展開する。

つまりはこれから両者が行おうとするのは、スペルカードルールに基づいた決着だ。

応じるように、霊夢も博麗アミュレットと呼ばれる追尾弾を用いた弾幕を展開。

その霊夢に早苗は、疲弊で額に汗を浮かべながらも笑顔で述べる。

「付き合ってくれてありがとうございます、霊夢さん。貴方に感謝を」

「感謝の心は現金で。いつもニコニコ、キャッシュでポン。博麗神社の今月の標語よ」

「また俗な」

「神様だって結構俗よ。だったら神社がそうでも良いじゃない。

と、それじゃ行くわよ」

「ええ、来なさい！ 受けて立ちます！！」

早苗が最後の体力と霊力で弾幕を放ちながらの突撃を敢行し、霊夢が弾幕と結界でそれに応じる。

そしてその数十秒後。

「まあ、来るなら早いうちにね。魔理沙とか他の連中と違って礼儀は出来てるみたいだから、お賽銭を入れに来たらお茶くらいなら出してあげるわ。出廻らしだけど」

「霊夢はその言葉を残しながら、その場を飛び去る。

残されたのは満身創痍で地面に、しかしどこか楽しそうな笑みで倒れている早苗の姿だった。

かくて、この場は決着を迎える。

一方

#

「まったく、使わされたか。後で霊夢辺りに何を言われるか分かったもんじゃないぜ」

「……渾身の罠をスperlカード一枚でひっくり返した分際で良く言うぜ」

遠くで倒れている早苗以上に満身創痍で転がっている西宮に、声をかけているのは魔理沙だ。

霊樹の根元で大の字で倒れる彼は、元々の負傷に加えて魔理沙のマスタースパークを食らった事で見事なまでにボロボロだった。

ともあれ憎まれ口を叩く西宮の様子に、放っておいても大丈夫そうだと判断した魔理沙は筭に跨って再度飛び直す。

西宮の方も撃墜された 即ちスperlカードルールに基づいた敗北である以上、これ以上何をやる心算も無い。

むしろこれ以上何かをしたら、それはスperlカードルールによる敗北を認めないというルール違反だ。最悪の場合、八雲や博麗が黙ってしまい。それは西宮としても望むところではない。

「まあ、なんだ。お前とお前の相棒に関して、悪いようにはしないぜ。お前のとこの、その酔狂な神託を出した神様もだ。異変が終わったら皆でその異変を着に騒いで、水に流す。それも幻想郷の流儀だからな」

「ああ、そう言ってくれとありがたい」

そして魔理沙は倒れている西宮にそう声をかけ、西宮は返事をす

るのも億劫という様子で声を返す。

そんな西宮の様子に魔理沙は肩を竦め、

「さて、霊夢と向かっていたルートとは違うが……神社は山の上だったな。だったらこのまま真つ直ぐ頂上に向かえば良いだろ」

そう言いながら、当初のルートとは違うルートで山を登る為に飛び去って行く。

その様子を見送った西宮は魔理沙が飛び去ったのを確認してから、

「悪いな霧雨。勝負には負けたが、俺の勝ちだ」

勝利を確信した笑みを浮かべ、意識を手放したのだった。

#

「状況はどう?」

「あ、紫」

「賢者様、チーッス」

霊夢と魔理沙が各々の相手を下し、この神社に向かい始めるとほぼ同時。

紫が神社の中から浮遊して、屋根の上の文と椀の元へ飛んで来た。文はにやり笑いで彼女を迎え、椀は元気良く頭を下げる。

そして椀は頭を上げ、今の紫の質問に答える為に再度千里眼を山へ向ける。

「残念ながら西宮君も早苗さんも、各々やられた所ッス。巫女さん

も魔法使いさんも、もうすぐここに来るッスね」

「そう。御二柱の方は？」

「陣地の構築は終わったよ」

椀が続けざまの紫の質問に答える前に、三者の頭上から声がする。鉄の輪を手に持った諏訪子が、ゆったりとした動きで神社の屋根に降り立つ所だった。

降り立った諏訪子は、まず屋根の上に立つ三者に頭を下げる。

「ありがとう、三人とも。おかげでどうにか迎撃準備は完了した」

「いえいえ、私は何もしていませんわ」

「ボク、『かつぶめん』を要求するッス」

「一番働いたのは私だから、私も何か要求しようかしら」

対する三人は各々の反応で、しかし三人ともが笑顔で諏訪子を迎える。少なからずこの異変に協力した身として、霊夢と魔理沙が来る前に神々の準備が完了したと言う事は好ましい事なのだ。

しかしその三者のうち、真っ先に表情を引き締めたのは紫だ。

「聞いていたかもしれませんが、もうすぐ霊夢も魔理沙もここに来ますわ。御二柱ともに準備はよろしいですね？」

「うん、大丈夫。神奈子も私もいつでも行けるよ。神奈子はいつ来ても良いように、陣地の方で待機してる。私もこっちに少し様子見に来ただけで、すぐに向こうに戻るから。……あ、早苗と丈一は負けたみたいだけど、怪我は無い？」

「んー、少しはあるッスけど、すぐ治る程度ッスよ。心配する程のもんじゃないッス」

「西宮君は霊樹まで引き付けて、魔理沙にマスタースパークまで使わせたからね。名誉の負傷って事でしょ」

そして観戦していた天狗二人の言葉に、安心したように諏訪子が『そっか』と笑みを浮かべた。

だが、その天狗二人の言葉に急激な反応を見せたのは紫だ。

「霊樹？ 霊樹って、山の七合目くらいにある大きな樹の事よね？」
「ん？ ええ、そうよ。そこまで引き付けて霊樹の力を借りて弾幕を どうしたの？」

はっとしたように文に質問をした紫が、文の言葉を聞いて震えだす。

ふるふるとした震えは秒を追うごとに大きくなり、しまいには紫は声を殺して肩を震わせ笑い出した。

「ぶっ……くふっ、な、なるほど……いや、見事。見事よ。諏訪子さん、ここには魔理沙は来ませんわ」
「何ですよ？ 目に涙を浮かべるくらい一人で笑ってないで、私達にも分かるように説明してくれない？」

「ええ、良いわ。 あと椛さんと文。 貴方達は後で西宮君にお礼を言っておきなさい」

紫が言った言葉に言われた文と椛も、そして横で話を聞いていた諏訪子も疑問符を顔に浮かべる。

魔理沙は確かに西宮を弾幕勝負で完膚なきまでに撃破し、その場から真っ直ぐに神社へ向けて飛び立った。

方向が間違っているわけではない。七合目まで来れば、あとは山の高い方へ向かうだけだ。そうそう間違える筈も無い とまで思考した所で、文が気付いた。

彼女は驚いた表情で椛に向き直り、

「……椛」

「はい？ なんツスカ文さん」

「天狗の里って何合目にあっただけ」

「えーと、だいたい八合目くらいツス」

「場所は？」

「えーと、ここから真っ直ぐ霊樹に向かう途中

あ」

言われた言葉に椀も気付く。そして横で話を聞いていた諏訪子も、驚愕を表情に浮かべ　　両者は同時に叫んだ。

「「魔理沙^{さん}は、天狗の里直撃ルートを通ってる！？」

「大正解ですわ。ええ、しかもこれ、天狗と　　そして文と椀さんの立場を考えると、相当な妙手ね」

両者の言葉に口元を扇子で隠し、しかし笑いは隠しきれずにプルプル震えながら紫が返す。

彼女は口元を隠したまま、

「天狗の里に魔理沙が突っ込んだ場合、流石に傍観を決め込んでいる天狗も無視はできない。或いは魔理沙の方から積極的に、黒幕へ至る障害として天狗に攻撃を仕掛けるかしら？　ともあれ天狗側は強制的に霧雨魔理沙という異変解決のプロと戦う事になる」

そう、それは以前文と紫が『天狗はそうすべきだった』と話した、異変解決の専門家と戦い、自らの力を幻想郷に示すという行為に他ならない。

「天狗達としては全く望んでない、寝耳に水の戦いでしょうけど…
…その結果として魔理沙を撃退すれば、『天狗侮るべからず』という声は確実に幻想郷内で上がるわ。無論、霊夢と相對する上に異変の主導者と見なされるこの神社には劣る事になるでしょう。けれど

それでも、文だけが力を示す事に比べると段違いに、天狗の名声は守られると言って良い」

「撃退できなかった場合はどうなるのさ、八雲紫？」

「天狗上層部は石頭の馬鹿の集合ですが、そこまで無能ではありませんわ。特に天狗の里を統べる天魔に関しては、文以上の実力者。既に消耗している魔理沙に負ける事は十中八九無いでしょう。そもそもやる気が無かっただけで、天狗達も望めば異変を起こせるだけの実力は確かにあつたのですもの。加えて仮に負けても、魔理沙相手に十二分に戦う姿を見せれば、実力を示すには十分ですわ」

故に彼らとしては望んでいない形なのかもしれないが、魔理沙が天狗の里に突っ込んだ場合は天狗は彼女を撃退し、その名を幻想郷に広める事が出来る。

加えてこの戦いは、石頭で現状を見ようとしないう天狗上層部にとっても良い薬となるだろう。

幾ら石頭とはいえ、自分達の枕元まで弾幕勝負という新しい幻想郷の在り方を象徴する足音が迫ってくれば、現状への認識を変えずにはいられない。

重ねて言うが、霧雨魔理沙は異変解決の専門家。弾幕勝負におけるその戦闘力は、博麗霊夢にこそ劣るが幻想郷でも指折りと言っている。

流石に天魔ならば消耗している彼女の撃退は可能だろうが、逆に言えばそれは他の天狗による撃退は難しいとも言える。

それほどの力を彼女は持っているのだ。

「天狗も今の幻想郷でスペルカードルールを破る事が、どのような意味を持っているか分からないわけでは無い。故に彼らはスペルカード戦で魔理沙と戦い、天狗の頭領である天魔は自らの力を示す事になる。そして同時に彼らは時代の波を実感する事になるでしょう。」

妙手も妙手、大正解ですわ」

「その場合、私が上層部に怒られそうな気もするんだけど。私が麓で二人と戦ったから、里に奴らが攻めて来たのだ、とか言ってるまさか。上層部には貴方を叱責するなんて出来ませんわ。何故なら幾ら天狗の里が危機感を持ったとしても、彼らだけでは今の幻想郷で有力者であり続けるのは難しい。今の幻想郷の有力者である紅魔館、白玉楼、永遠亭、そして新たにその列に加わるであろう守矢神社、そのいずれとも、天狗は友好的な関係を築けていないもの。貴方やその後輩を除いて、ね」

「……成程」

紫の言葉に文が納得の頷きを返す。

今の幻想郷のルールを破る事は天狗には出来まい。行えばそれは、他の全ての人妖の怒りを買ひ、天狗そのものが幻想郷から排斥される原因になりかねない。

そして天狗がこのルールの中で山での指導的な地位を保とうとするならば、既にこのルールの中で高い地位を築いている他の組織との繋がりが殆ど無いのは痛い。

これまでスペルカードルールに馴染まず孤高を保とうとしていた事が完全に裏目に出ている。

故にこそ、既に外との繋がりを多く持っている文、そして椛に対して、天狗上層部は強く出られない。

確かに妙手だと文は頷く。

守矢神社の神々は魔理沙相手に無駄な消耗を強いられる事が無くなり、天狗は自らの力を示しつつも危機意識を得、文と椛は天狗社会内での自らの立場が良くなる可能性が高い。

三者三様、各々に得る物のある結果となる。まあ天狗の里は多少被害を受けたり上層部内で内輪揉めや代替わりが発生する可能性も

あるが、それは時代の移り変わりに必要な痛みだ。

唯一、完全に利用される形になって割を食うのは魔理沙である。彼女に関しては後日何らかのフォローが必要かもしれないが、彼女自身がさばさばとした性格の持ち主であるし、組織ではなく個人であるが故にしがらみも少ない。

珍しい魔法関係の本でも二、三冊見つくるって献上すれば、機嫌も治るだろう。

となれば残る疑問は一つ。

「紫。西宮君はこれを狙ったと思う？」

「ええ、私はそう思うわ。まあ、天狗の立場云々までは副次効果かもしれないけど、恐らく西宮君は最初から、弾幕では逆立ちしても勝ち目が無いのは分かってた筈。如何に戦力を上手く使って、如何に上手く策を弄してもね。だから彼は弾幕での勝利ではなく、作戦目標の達成に目的を絞った。本当は弾幕で勝てれば一番良かったんでしょうけどね。故に彼の作戦目標は、霊樹まで移動して、そこで魔理沙に負ける事」

そして紫は扇子を閉じて、その閉じた扇子で中空に線を引く。

そこに引かれた線は妖力による結界を作り上げるが、それは防御の為ではない。結界上に描かれたのは、簡素な妖怪の山の地図だ。

描かれているのは霊夢と魔理沙の当初の侵攻ルート、守矢神社、霊樹、天狗の里。そして侵攻ルート上に描かれた、饅頭のようにデフォルメされた霊夢と魔理沙の顔である。

何故か見ている文と諏訪子の脳裏に、『ゆっくりして行ってね！』などという幻聴が聞こえた。

ちなみに椀は饅頭みたいな顔を見て、『美味そう』などと考えて

いた。

「まずは霊夢と魔理沙の予想侵攻ルート上で待ち受け、霊夢と魔理沙を引き離す。霊夢は策を弄するに当たったの天敵だからね。幾重にも策を弄しても、勘の一言でそれを回避される。恐らく西宮君にとっての天敵ですわ」

言いながら、紫は結界上の地図に更に線を引く。

霊夢が侵攻ルート上から逸れ、魔理沙のみがそこに残った。

「そして魔理沙を霊樹まで引き込む。これが最も難しい作業だったでしょうけど、西宮君はそれを達成。霊樹の元で全力で魔理沙と戦い、敗北する」

魔理沙の顔が霊樹の元まで移動する。

「この作戦の肝は二つ。『霊樹まで移動する目的を、有利なフィールドに誘い込む為と誤認させる』ということと、『ここまでやったんだから、この後で更に何かあるわけが無い』と思わせること。そういう意味で、霊樹という存在は絶妙だった。魔理沙は恐らく、有利な戦場に引き込むと言う罠に嵌ったと思ったでしょう。強力な弾幕を霊樹を利用して放ったならば尚の事」

そう、故に彼女は『その位置まで移動させ、そこで魔理沙に負けるのが目的だった』などとは露とも思わない。

そこまでやった大がかりな罠が、よもや自分にその先に待っている本当の罠。天狗の里直撃コースご招待への布石でしかないとは、まさに想像の埒外だろう。

そもそも土地勘の無い魔理沙に対して、気付けと言う方が無理である。霊夢辺りならば勘で気付いたのかもしれないが。

「そして霊夢を引き離れたのが、ここで再び生きて来る。魔理沙は霊夢ほどの神がかり的直感力はないから、その霊樹の元から神社へ向かうとすればルートは一つ。真っ直ぐ山を登るのみ。魔理沙のような直線的な思考の持ち主なら尚更ね」

霧雨魔理沙は決して頭の回転は悪くない。むしろかなり早い部類だろう。

魔法という神秘を学び、研鑽する。それは決して頭の回転が鈍い人種には出来まい。魔法というのは頭脳を用いて覚える技術の結晶であるからだ。

しかし魔理沙は同じ魔法使いであるパチュリーやアリスに比べ、頭の良し悪しではなく心理的傾向として、直線的な力押しを好む。

そのような性向の持ち主であるからこそ、ほぼ確実に直行ルートを選ぶ筈だ。

或いはこれが、それこそパチュリーやアリスであったならば、霊夢と合流しようとするか当初のルートに戻ろうとするかもしれない。しかし直線思考故に、魔理沙はそうは考えない。

そして紫は結界を操作する。

魔理沙の顔が神社へ真っ直ぐ向かおうとして しかし天狗の里に引っ掛かった。

「後は魔理沙は天狗の里に突っ込んでしまい、天狗達となし崩しに戦闘突入。結果として彼女は神社へ到着する事は出来なくなる……大卒としてはこんな物かしら」

「成程……」

「……考えたもんだね」

紫がそう締めくくった言葉に、文と諏訪子がそう返す。

両者ともに感心しきりといった様子で頷いており、その様子を見て解説役となつた紫も満足げに頷いた。

ちなみに椛は既に理解の努力を放棄しており、今日の夕飯を考えていた。

そして次の瞬間、山の途中　　八合目辺りで激烈な閃光と轟音が成り響く。

本日二発目となる魔砲。即ち魔理沙の弾幕だ。

「噂をすれば、ね」

その音に紫は余裕たつぷりの胡散臭い笑みを浮かべ、文と椛は音がした方、つまりは天狗の里へと視線を向ける。

とはいえ、流石に文の視力ではここからの視認は不可能だが。

「椛、状況はどうなってるの？」

「んー、今回の件に関して完全に傍観するつもりだったらしい天狗達が、慌てた様子で迎撃に飛び出してるッス。けど皆弾幕慣れしてないッスから、上手いこと纏められて、魔砲で纏めて薙ぎ払われたみたいッスね」

そしてその文からの質問に椛が答える。

その椛が不意に『あ』と驚きの声を口に出し、

「うわ、先日宴会のどさくさで文さんの尻を撫でた大天狗様の家が吹っ飛んだッス」

「ああ、魔理沙さんなんてひどい事を。」

「もつとやれー!!」

「ぶふっ！　ちよっと、少しは隠しなさいよ」

台詞の前半でおざなりに建前を。そして後者で高らかに本音を叫ぶ文に、横の紫が吹き出した。

天狗の里の頭の固い上層部にさんざん苦勞させられてきた文と紫としては、さぞや胸のすくような光景なのだろう。

椀は　苦勞を苦勞と認識していたどころかが怪しいので割愛する。

「丈一と早苗は良い仕事をしてくれたみたいだね」

その様子に苦笑しながらも、諏訪子は神社の屋根を蹴って飛びあがる。

目的地は神奈子が待つている陣地である。博麗の巫女が来る前に戻って、現状を神奈子に話しておくべきだろうと言う判断からだ。

或いは自分達の信徒二人が上げた、予想を超える戦果について話したいからかもしれない。

「それじゃ、私は行くよ。三人とも、本当にありがとう。後で改めてお礼をさせて貰うよ」

「いえいえ、こんな痛快な物が見ただけでも十分よ」

「ぶふー！！　見て文、あの大天狗の頭！！」

「ぶはっ！　ぶははははははは！　アフロに、魔砲でやられてアフロに！　いつも嫌味ばかりのあの大天狗様が！！」

遂に隙間を開いて天狗の里の様子の観戦を始めた紫と、その隙間を通していけ好かない上司のとんでもない姿を見て爆笑する文。

既に状況は終盤も終盤だ。今更隙間で観戦程度した所で、紫がこの件に最初から関わっていたなどと証明する事は誰にも出来ないだろう。

何か言われたら『楽しそうだから隙間で見てただけ』と答えれば良い。紫の普段の姿は、その言葉に十分な説得力を与えるだけの胡

散臭さがあるのだから。

そして楽しそうな三名に苦笑して、諏訪子は急造の陣地で待っている神奈子の所へ戻るべく飛行を開始する。

さて、この話を聞いたら神奈子はどんな顔をするだろうかと、にやにやと楽しそうに笑みながら。

#

「うおお！ 何だっつてんだこの天狗の群れは！ くそうこいつら、どうあつても私を神社まで行かせないつもりだな？ そうは問屋が卸さないぜ！！」

そして魔理沙は隙間を使って観戦されている事など知る余地も無く、天狗の里の中ほどまで切り込みながらも降り注ぐ弾幕を回避し、次々と反撃を放って行く。

西宮相手では対地戦の不慣れと油断故にしてやられたが、その後だからこそ彼女には油断も慢心も無い。ましてや現状は彼女が得意な空対空の弾幕戦だ。

異変解決のプロとしての能力を如何無く発揮し、猛威を振るう霧雨魔理沙。

対する天狗側は山の神社が博麗神社に宣戦布告をした事は知っていたが、まさか魔法使いが里に突っ込んで来るとは露とも思っていなかった為に、おっとり刀での参戦だ。

加えて山の頂点に君臨している期間が長かった分、実戦経験の豊富な天狗は少ない。特に上層部に至っては百年単位で戦闘と呼べる行動を行っていない者も居る。

「そら吹っ飛べエ！ 今度は二本の大盤振る舞いだ！ “恋心”
ダブルスパーク！！」

そして天狗達が二本の魔砲に巻き込まれ、纏めて吹っ飛んで行く。
ついでにこの騒ぎにも関わらず家の中で引き籠っていた某念写が
得意な烏天狗も家ごと吹っ飛んだ。

かくして。

「どけどけえ！ 魔理沙さんのお通りだあ！！」

霧雨魔理沙、まさかの番外段階突入。エクストラステージ

天狗の里での弾幕ごっこは、天狗達にとっては望ましくない事に、
更に加熱して行く事となるのだった。

第十四話：策の裏の策（後書き）

と、言うわけでこんな感じですよ。

西宮丈一、本気の頭脳戦。ちなみに彼にとつての天敵は自分より頭が良い相手（例：紫、永琳、幽々子など）や、策を理不尽に無効化する相手（例：霊夢など）。

それと読み切れない相手（例：椋、早苗、チルノなど）も苦手です。意外と多いな天敵。

今回こうも上手く嵌ったのは、なんだかんだで彼が初見で軽視されていたからですね。警戒されていたら、魔理沙もこうは上手く嵌ってはいけなかったでしょう。

そして次回が第六ステージとなります。

風神録異変、そろそろ終盤に近付いて参りました。

第十五話：神遊び

霊夢が勘に従って辿り着いたそこは、巨大な御柱が並び立ち、どこか神聖な雰囲気を持つ祭壇のような場所であった。

「……やれやれ、凄いわね。何よこの柱の山は」

強力な神気を纏うその場所に、霊夢が思わず嘆息する。

神がかり的勘を持つ彼女とは言え、まさかこれが突貫工事で作られた即席とは思わなかったようである。

良く見ると幾つかの御柱は製作側の慌てを示すように微妙に傾いていたりするのだが、逆にそれがまるで神さびた古戦場のような雰囲気醸し出しているから、世の中何が幸いするか分からない。

「出て来なさい、居るんでしょ？」

「我を呼ぶのはどこの人ぞ」

そしてその神さびた古戦場（即席）の中央にまで進んだ霊夢の呼びかけに応じるように、一人の女性が御柱の上に現れる。

注連縄を背負った深い青色の髪的女性。身に纏う強い神気は、明らかに高位の神の物だ。

八坂神奈子。かつて諏訪の地を侵略した軍神にして八百万の一本柱なのだが、霊夢にはそれは分からない。分かるのは彼女の勘が告げる、『あ、なんかボスっぽい』という内容だけだ。

「アンタがこの神社の神様ね？」

「ああ。此度は失礼したね、博麗の巫女。八坂神奈子だ、見知り置け」

「おお偉そう。レミリアや幽々子、輝夜に萃香なんかを思い出すわ。」

やっぱり異変の黒幕ってのはこんな感じじゃないと」

腕を組んで御柱の上から見下ろし告げる神奈子に、しかし霊夢はどこか安心したように呟いた。

どうにも先の早苗の対応はこれまでの異変の中ではイレギュラーだったため、彼女としては些かペースを崩されていた面があったのだろう。

「まあ何でも良いわ。神社への宣戦布告に関しては、アンタのこの風祝と話をついたしね。後はアンタをブチのめせば全部解決。

アンタ達が奪った私の神社の参拝客も増えて万々歳よ！」

「随分と酷い濡れ衣だな。場所が場所だから、人間の参拝客など幻想郷に入ってから一度も来た覚えは無いぞ」

「うるさいわね。こつちだってここ数ヶ月真つ当な参拝客が来た覚えは無いのよ。誰かに八つ当たりでもしないとやってられないわ」

「話には聞いていたが、大概フリーダムだな博麗の巫女」

霊夢の周囲に陰陽玉が展開される。数に限りがあるが故に、早苗戦では出しもしなかった切り札だ。

これで最終と彼女の勳が告げている。故に彼女は手加減も出し惜しみもしない。早苗戦で消耗を避けたのは、ひとえにその先にもう一戦戦闘があると予見していたから。

逆説、これが最後であれば霊夢が消耗を厭う道理はない。

しかし対する神奈子も、自らの周囲に神気を纏った御柱を何本も浮かせた臨戦態勢。

傲岸不遜に笑みすら浮かべて、腕を組んで仁王立つその姿は、まさしく大和の軍神。戦女神に相応しい威圧感だ。

「博麗の巫女、早苗と戦ってみてどうだった？」

「なによいきなり？ ……でもまあ、そうね。悪い奴じゃ無かったわ。それにまだまだ伸びしろが大きそうだったから、次に戦うと面倒そうね」

「ははっ、そうかそうか、そうだろう！ うちの早苗は多少暴走するのが玉に瑕だが、才はあるし性格も良いしでな」

「親馬鹿って奴ねえ」

呆れる霊夢は知らない。他ならぬ霊夢自身の事を八雲紫が語る時、まるで神奈子と同じような誇らしげな笑みと言葉で語っている事に。ともあれ霊夢の言葉に気を良くした神奈子が腕を掲げ、展開された御柱がそれに応じて霊夢の方へと向けられる。

「そう言うなよ博麗霊夢。娘同然と息子同然の二人が成長を見せてくれたんだ。なれば親代わりとして誇らずにはいられまいさ。それは神でも人でも変わらない。そして神を祀るのは巫女の仕事だろう？ さあ、祀あそんでっておくれよ博麗霊夢。神遊びを始めようじゃないか！」

「残念、私はあなたの巫女じゃないわ。楽園の素敵な巫女相手に遊ばうってんだから、相応程度には粘って見せなさいよ、山の神！」

申し合わせたように同時に動いた両者の間で、御柱と陰陽玉、霊弾とアミレットが同時に炸裂する。

乱れ飛ぶ弾幕、それに伴って吹き荒ぶ暴風。

常人ならば回避はおろか、真つ当に視認できるか否かすらも怪しい速度と密度の弾幕がぶつかり合うそれは、例えるならば天災に等しい。

迂闊に介入できるような物ではないし、そもそも迂闊に触れようものならば微塵に碎かれる威力と密度を持った弾幕。

それはかつて吸血鬼が亡霊の姫が、月の姫が百鬼夜行が異変の最

後で見せた弾幕に負けず劣らずの力と派手さ、そして美しさを持って妖怪の山の頂上で咲き乱れる。即ちこれが異変の最終幕だと、それを見ている何者に対しても平等に告げるように。

かくて風神録異変最後の弾幕　　否、神遊びが開始された。

#

「いやあ、壮観だねえ」

そして主戦場となっっている神さびた古戦場（即席）から離れ、神社の縁側。

そこでは鉄の輪を仕舞った諏訪子が、上機嫌でその弾幕を眺めていた。

神社の上からは文と椀、そして紫の歓声が聞こえてくる。先程までは天狗の里の観戦をしていた彼女達だが、魔理沙がどうやら天狗の里から撤退したらしい今となつては、神奈子と霊夢の弾幕を眺めているようだ。

「まあ、私の出番が無いのは少し不完全燃焼だけど、それはそれほどまでに丈一と早苗が上手くやったって事だから、不満は無いし」

そもそも何故諏訪子が観戦に徹しているのかと言えば、神奈子に事情を説明した後で二人で決めた決めごとのせいだった。

魔理沙と霊夢が来る場合は二対二で丁度良いが、霊夢のみが来るとなつては、まさか二柱で一人にかかるわけにはいくまい。神としての矜持の問題もあるし、力を示すならばやはり一対一（タイムマン）であろうという理由もある。

故に程無くやって来るであろう博麗霊夢に対して挑むのは、神奈子が諏訪子のどちらか片方。

結果として軍神故にややバトルジャンキーの気のある神奈子に、諏訪子が役目を譲った形となる。

とはいえ諏訪子としてもそれに異論は無い。

「なにせこっちも気になってたしね」

視線を弾幕から神社の中へ向ける。

社務所から持つて来た布団を並べて、その上に寝かされているのは西宮と早苗だ。

神奈子が迎撃に出るのが決まった時点で諏訪子は神社に戻り、天狗の里若手による『いけ好かない上司No.1』年間ランキング保持者であった大天狗が、カツラをスターダストレヴアリエで吹き飛ばされたという迷場面を見たせいで、腹筋が壊れるほど笑っていた紫に頼んで隙間を通して二人を回収して貰ったのだ。

「……全く、人間は大きくなるのが早いもんだよ。つい先日までは私より小さい童だったのにね」

寄り添うように眠っている二人は、しかし双方自分の役目をやり遂げた満足げな表情を浮かべていた。

神奈子が上機嫌になる筈だと諏訪子は思う。

この異変において、早苗と西宮は各々が自らに課した役割を全力で果たし切った。彼らは既に童ではなく、神奈子と諏訪子にとって自慢できる風祝と神職見習いだ。

「今はゆっくり休みな。起きたら全部上手くいつてるからさ」

諏訪子は母性を纏った笑みを浮かべながら、自らの血族の末であ

る少女と、その相方の少年を見やる。

そして神社の上から歓声が響くのは同時。

霊夢と神奈子の弾幕戦が、更に華麗さを増し加熱を開始したのだ。

クライマックス
最終幕だ。

「そんじゃま、神奈子が勝つにしろ負けるにしろそろそろっばいしね。だとしたら最後の締めは、どっちにしろ私の仕事だ。行
つて来るよ、早苗、丈一」

笑みを浮かべて諏訪子は神社の縁側を飛び立ち、神さびた古戦場へ向かっていく。

そちらでは今まさに、この異変を締めくくるかのように、一際鮮烈で強烈な弾幕がぶつかり合う所だった。

#

何発避けたか。何発凌いだか。何発防いだか。或いは何発食らったか。

食らった回数は五指で数えられる回数を下回るが、他はいずれも百を下回るまい。

博麗霊夢は肩で息をしながら、眼前の神を睨み付けていた。

陰陽玉は既に全弾撃ち尽くしているし、お祓い棒は折れて吹っ飛んで行った。

何故か巫女服と分離するデザインの袖は、片方だけ外れて飛んで行き、周囲に立ち並ぶ御柱の一つに引っ掛かって所在無さげに風に吹かれている。

服や装備の被害もそうだが、数発食らったダメージも馬鹿にならない。撃墜こそされていらないので弹幕ルー尔的にはセーフだが、撃墜は回避しても自らが受けたダメージは無視できないレベルの物だ。身体能力を霊力でありつたけ強化した上で、結界で防いでも内臓に響く威力の弾幕。そしてそれを扱う本人の能力。いずれも博麗の巫女である霊夢をここまで追い込む程の実力の持ち主だ。

眼前の神とて万能無限ではない。

速度はレミリアが上だろう。技は幽々子が上だろう。耐久力ならば輝夜が上だろう。馬力ならば萃香が上回る。

されどそれら全てのバランスとして見るならば、八坂神奈子はこれまで叩きのめして来た異変の首謀者の中でも最優の一角と霊夢は見た。

無論それはこの周囲の御柱という陣地によって強化された上での能力なのだが、それでも博麗の巫女たる彼女をここまで追い込んだ事実は変わらない。

「やるな、博麗の巫女。……ここまでとは恐れ入る。人の身でここまで出来る奴など、あの平安の時代の鬼才・安倍晴明以外には初めて見たぞ」

「誰よそれ。知らない奴と比較されても嬉しくないわ」

そして対する神奈子の消耗も、既に満身創痍と言つて差し支えない。

背負った注連縄は千切れ、途中で背負った御柱は折れ、服も身体オフショも傷だらけだ。

しかし第三者がこの場に居たとして、双方ボロボロのこの両者を醜いと思う者などいないだろう。

神と人との神遊び。互いに死力を尽くして戦う両者の姿は、傷だ

らけながらも何故か途方もなく美しく尊い印象を他者に与える。
だがその神遊びもそろそろ終幕。双方疲労も武装も、目に見える
負傷も見えない消耗も、そろそろ限界だ。

「楽しかったぞ、博麗の巫女。だがこの異変は私の勝ちで終わらせ
て貰う！」

「冗談じゃないわ。ここで負けたら紫や魔理沙に何を言われるか分
かったもんじゃないからね！」

故に両者が懐から取り出したスペルカードは恐らくこれが最後。
なればこそ互いにそれを必殺と定めて、二人は最後のスペルカー
ド宣言を高らかに叫ぶ。

「『風神様の神徳』！！」

「『“大結界”・博麗弾幕結界』！！」

直後、この異変にて最大最高の二つの弾幕が激突する。

放つ二人の姿が見えなくなるほどの弾の嵐は、まさしく弾の大瀑
布と呼ぶに相応しい。

そして

「 見事」

「当然よ」

両者の弾幕が消えた時、そこに見えたのは崩れ落ちるように地面
に落ちて行く神奈子と、辛うじて自力で空を飛んでいる霊夢の姿だ
った。

そして辛勝に霊夢が息を吐いたのも一瞬。

「って、ちょっと！ 危ないわよ、危ないって！」

霊夢が慌てて叫ぶ、その先に居るのは落下して行く神奈子だ。力の全てを使い果たしたところか、意識すら失っているかもしれない。

頭を下に落下して行く姿を見て霊夢が慌てる。しかし限界寸前は彼女も同様。

飛んで行って拾い上げようにも、身体がその動きに追い付かない。

「ああもう、アンタに何かあったらあの青白巫女に顔向けできないじゃない……!!」

それでも神奈子へ向けて飛ぼうとした霊夢の脳裏に浮かんだのは、彼女に向けて自らの非を認めて頭を下げた酔狂な風祝だった。

幾ら神とは言え、この高さから何の防御もなく頭から落ちてはただでは済むまい。

ならばあの巫女はどんな顔をするか。

思考のみが焦りを覚え、しかし身体はついて行かない。

「だああ、最後まで手間をかけさせるわねこの神社は……!!」

「そいつは済まないね、博麗の巫女」

あわや神奈子が地面に激突かと思っただ刹那、霊夢の奇立ち交じりの叫びに応じるように少女の声がその場に響いた。

落下した神奈子を受け止めながら霊夢の叫びに応じたのは、妙な形の帽子を被った少女。霊夢が知るならばレミリア辺りと外見年齢は近い。つまりは十代の前半がせいぜいの幼子の姿だ。

そんな彼女が大人の女性である神奈子を受け止めた姿は些か不釣り合いだが、少女は意外にも危なげなくそれを為した。

「……誰よアンタ」

そしてその少女を見た霊夢はげんなりとした表情で、しかし油断を一切見せずに問いかける。

何故なら新たに現れたその少女も恐らく神。纏う神気は神奈子に匹敵するが、この少女の場合はどこか禍々しい厄のような物が微量だが混ざっていた。

「神……それも祟り神辺りかしら。ええい、これで終わりだと思っ
てたのに！」

「祟り神で正解。私は洩矢諏訪子、この神社で祀られている二柱のうちの片割れさ。神奈子の相方と思ってくれて良い。それに、これで終わりだと思っていたのも合っているよ」

しかし警戒する霊夢に対して、諏訪子は神奈子を抱えたまま苦笑を浮かべる。

力を示すと言う目的は十全に果たした。ならば満身創痕の巫女を打ち倒す事に、既に彼女は意味を見出さない。

故に諏訪子は、怪訝そうな表情を浮かべる霊夢へ向けて宣言する。

「守矢神社は博麗霊夢への敗北を認める。降参だよ、私達の負けだ」

「……アンタは弾幕^ゃらないの？」

「そっちが消耗から回復したら、楽しそうだとは思っけどね。今この状態でやる意味を私は認めない」

「……回復した後も面倒そうだから嫌よ。魔理沙辺りに頼みなさい。……って言うか魔理沙、こっちに来てないの？」

「来てないよ。天狗の里に突入して大暴れして帰ってった」

「何やってんのよあいつは……」

呆れ果てたという様子で言いながら、霊夢が神奈子を抱える諏訪子の元へ降りて来る。

対する諏訪子は苦笑でそれを迎え、

「悪いね。今回は色々面倒をかけたと思うよ、博麗の巫女」

「霊夢よ。……そうね、悪いと思うなら」

霊夢が言いながら、諏訪子に向けて手を掲げる。

中指を親指にひっかけて、たわめるように力を溜め

「もっと早くその神様拾いに出て来なさいよ！ らしくもなく焦ったじゃないの！！」

「ぎゃぴっ！？」

放たれたのは博麗の巫女渾身のデコピン。

それを額に食らった諏訪子は神らしくも少女らしくもない悲鳴と共に、神奈子を抱えたまま地面にうずくまって痛みを悶えた。

かくて後に風神録異変と呼ばれる異変はここで終わる。

博麗の巫女、博麗霊夢が軍神・八坂神奈子をスペルカードルールの下で撃破した事により、守矢神社側が敗北を宣言した瞬間であった。

そして風神録異変の翌日。

射命丸文が出した文々。新聞の号外により、守矢神社側が今回の件の謝罪も兼ねて盛大な宴会を開くという情報が、幻想郷の有力者たちの元に届く事になる。

第十五話：神遊び（後書き）

と、いうわけで風神録本編は今回で終了。

諏訪子は勝っても負けてもそこで綺麗に異変を止める為の役として待機していました。

今回はエクストラステージ……というか、幻想郷ならではの宴会ですね。

そこまで含めても風神録篇はあと二話くらいの予定。

第十六話：宴会（上）（前書き）

プロットを見る限り宴会だけで上中下に。

様々なキャラとの顔合わせがあるからだと思われませう。

ちなみに宴会に全員は出しませう。っていうか出せませう。それだけで十話とか必要になります。

第十六話：宴会（上）

その日、守矢神社は時ならぬ来客で大賑わいだった。

それもその筈、本日夜から開始される宴会の参加者達が押し掛けて来ているのだ。

名目は霊夢への謝罪を兼ねた宴会だが、実質的には守矢神社が今後幻想郷に馴染んで行く為の挨拶として行われたその宴会。

提案者は神奈子が霊夢相手に十二分な力を見せた事で、内心胸を撫で下ろしていた紫である。

ちなみに提案自体は、異変が終わって霊夢が博麗神社に帰った直後に行われた。

告知が翌日の朝で開始がその夕方という急な宴会であり、当初は神奈子と諏訪子は「告知から開始までもっと日を置くべきでは」と主張したのだが、紫と椋と文というこの異変に深く関わった幻想郷組は揃って言った。

「あら、御二柱はまだまだ幻想郷を分かっていませんわ。ここの住人、宴会には目がありませんのよ？」

「告知から開始まで6時間もあれば、絶対沢山集まるツスよね」

「ええ、大丈夫ですとも。あ、その情報は文々。新聞が出す号外のネタとして使わせて頂きますね。役得として」

結局諏訪子と神奈子は半信半疑ながらも、幻想郷住人達の言葉を採用。

号外として出す関係上、いつの間にか口調が新聞記者モードに戻っていた文は、即座に号外を書きあげて翌朝には幻想郷中に配った。

その結果として　　まずは開始三時間前に、竹林の住人が来た

のが皮切りだった。

「失礼、お邪魔するわね。貴方達が新しく幻想郷に来た神々？ 私
は蓬莱山輝夜、竹林の永遠亭の主と言えば分かるかしら？」

背後に長い銀髪を三つ編みにした従者を従え、挨拶代わりに人
参と笥を持参した竹林の姫。

ちなみに人参と笥の入った籠を背負っていたのは鈴仙・優曇華院・
イナバである。

永遠亭に住んでいるらしき妖怪鬼達を大勢連れてやって来た彼女
達、一見すると土産を持参する辺り礼儀正しいように見えるが、開
始三時間前に来る辺りで既に礼儀もクソもあつたものではない。

「ああ、宜しく頼む。八坂神奈子だ」

「洩矢諏訪子だよ。悪いけどまだ開始前だから、こっちの準備は全
然できてないんだよね」

「お構い無く。こちらでも酒と料理は持参したから勝手に始めさせ
て貰うわ」

そして敷地の一角を占領して、勝手に酒盛りを開始する竹林の住
人達。

まあ神奈子も諏訪子も祭りが大好きな大和の神だ。その手のノリ
は嫌いでは無いし、自分達で持つて来たのを消費する分には文句は
無い。

輝夜やその従者である永琳と挨拶を交わし、まあいいやと勝手な
宴会スタートを看過。輝夜と永琳のペットでもある妖怪鬼の因幡て
ゐの指揮の元、妖怪鬼達が手早く設営作業に入っていく。

開始三時間前にして、早くも一角に宴会場が出来上がった。

その後鈴仙が西宮と早苗に頼まれていた置き薬をついでだから持

参したと、神々と自分の主に断りを入れて神社の社務所に入って程無く。

やって来たのは、日傘を差した銀髪の従者と紅い髪の大陸風の衣装を着た女性を引き連れた、幼い吸血鬼だった。

「ほう、貴様が霊夢と互角にやり合ったと言う神か。私はレミリア・スカーレット。湖畔の紅魔館を統べるヴラド・ツェペシエの末裔だ。宜しく頼む」

「お嬢様、ワインを開けてしましましょう」

「あ、うん。甘口の奴でお願い、咲夜。私辛いの嫌だから。」

神々よ、出来れば此度の宴では、私の前に出す料理は辛子や山葵を抜くように」

偉そうな挨拶の直後に甘口を所望する、カリスマとカリスマブレイクの境界を反復横跳びするかのような挨拶を見せた吸血ロリータ。楽しそうにその世話をする、恐らく人間であろう銀髪の従者という組み合わせ。そして従者が懐から銀時計を取り出し、次の瞬間にはどういいう仕掛けか庭の一角に彼女達用のテーブルと椅子が設置されていた。

常識では考えられないその事象に、二柱が驚きでその目を見開く。

「これは……驚いたな、時間操作か」

「くくく、古き大和の神々すら驚愕させるか。全く、私の従者は出来た従者だよ。あ、ねえねえ美鈴！。クッキー持って来たで

しょ、開けて良い？ ふふ、それでは失礼する、神々よ。勝手に始めさせて貰うが、あちらで竹林の連中も先に始めている事だ。文句はあるまい？ あ、こらー！ 私が行く前に始めてるんじゃないわよ！」

「別に構わんが吸血鬼。お前ちょっとカリスマを出すか引つ込めるかどっちかにしろ」

一度の台詞の中でカリスマのオンオフを三度も切り替えるという離れ業を見せたレミリアに、呆れたような困ったような視線を向ける神奈子。

その言葉にレミリアは、

「ふっ、何を馬鹿な。私は常にカリスマたっぷりで大人の魅力マシマシな吸血鬼だぞ？」

「……ああ、何か分かった。お前は早苗と気が合いそうな気がする」
「ほう、霊夢と戦った巫女……いや、風祝だったか。未熟だが才はあると聞く。後で機会があれば話させて貰おう」

そう言ったレミリアが従者　十六夜咲夜と紅美鈴を引き連れて、咲夜が設営したテールブルへ歩いて行く。

彼女達に気付いた永遠亭の住人達が声をかけ、そこからわいわいと交流が始まっている。

既に宴会は盛り上がり始めていた。

「……これは不味いな。こちらの準備は済んでいないのに、早くも盛り上がり始めてしまっている」

「いやまあ今の対応見てたら、向こうもそんな事気にしなさそうだけどねえ。いやはや、濃い連中が多いわ幻想郷。楽しそうだけどね」

困惑する神奈子と、楽しそうにけるける笑う諏訪子。

とはいえ彼女達とて、さほどの準備を考えていたわけではない。

外界から持ち込んで来た酒の類と、多少のつまみと料理。そして幻想郷では珍しい珍味として、カップラーメンでも面白半分を出してみようかと考えてた程度だ。

幸いにしてつまみや料理の材料自体は、異変が始まる前に西宮が人里で買って来た分があるが、

「丈一も早苗も、まだ傷が癒えていまいに。準備の方は私達も手伝った方が良いのではないか？」

「だけど私ら、面通しの為にもここに居た方が良い気がするんだよねえ。私ら代表だし、今さつきみたいに他の所からの連中が来たら挨拶しないと」

そう困ったように会話を交わす二柱。

神奈子も消耗はあったのだが、人間である二人よりも流石に治りは早い。戦闘行為をするならともかく、普通に動く分には既に申し分ない程度には回復している。

対して社務所の方で料理を作っているであろう西宮と早苗は、弾幕勝負での負傷から未だに完全に回復したとは言い難い状態だ。

加えて早苗は遺憾ながら料理では戦力になるまい。スクランブルエッグからスクランブルダッシュを現出させる負の方向の奇跡である。出来る事と言えば、精々西宮の傍に付けて細々とした些事を手伝えせる程度だ。

客人を待たせるわけにもいかないが、急がせるのは気が咎める。

とはいえ神社にはこれ以上の人員も居ない。

さて参ったと二柱が思った所で、しかし予想外の方向から話は動く。

「すみません、御二柱……ええと、諏訪子様と神奈子様でしたか。

台所と材料をお借りしても構いませんか？」

「む？ ええと、竹林の……」

「鈴仙・優曇華院・イナバです」

どうしたものかと思っていた二柱に横合いから声をかけて来たのは、ブレザー姿の妖怪鬼。より正確に言うならば、二柱は知ら

ないが月兎　である鈴仙だ。

困ったような表情をした彼女に二柱は首を傾げ、

「料理でも作りたいのか？　私らは別に構わんが、丈一と早苗が今使っていた筈だが」

「申し訳ありませんが医者見習いとして、あの二人が怪我人だというのにガチの喧嘩を始めようとしていたので止めさせて頂きました。どうにも見ていられないので、私も手伝わせて頂きたいなと」

「それは……すまないね、鈴仙。迷惑をかけたみたいだ」

「いえ。……ですがあの二人、本当に協力して霊夢と魔理沙と戦ったんですか？　なんか凄い勢いで罵声が飛び交って、ファイティングポーズで向かい合っていましたけど。『情ヶ無用！　戦闘開始！』みたいなノリで」

「えーと……うん、ごめん」

呆れたように言う鈴仙に、二柱は頭を下げるのみである。

西宮丈一、そして東風谷早苗。彼らが互いに認め合う相棒関係なのは二柱には良く分かっていている事実だが、何故それでも喧嘩が尽きないのかだけは彼女達をしても分からない謎であった。

「では御二柱の御了承も得られたんで、私は台所をお借りします。

あ、持って来た人参と筍も使って良いですか？　使い慣れてるんで」

「ああ、構わんよ。むしろすまない、迷惑をかける」

「お気になさらず。重篤な怪我こそ無いとはいえ、怪我人に料理をさせるわけにもいきませんしね」

そう言いながら肩を竦める鈴仙。

そんな彼女を遠くから見る、どこか誇らしげな竹林の医師の表情に気付いたのは、鈴仙当人ではなく諏訪子と神奈子の二柱だった。

「鈴仙は偉いね。良い医者になるよ」

「まだまだですよ。医術に関しては師匠からお叱りを受けてばかりです。ですが料理の腕は少し自信があるので、楽しみにしててください」

そして鈴仙が神社の奥に向かった所で、遠くからそのやり取りを眺めていた永琳が二柱の元に近付いて来た。

くすくすと笑いながら、彼女は二柱に頭を下げる。

「すみません、不肖の弟子が御迷惑を」

「とんでもない。迷惑をかけたのはこちらの方だ、却って申し訳ないくらいだよ」

「ああ、諏訪子の言う通りだ。良いお弟子さんじゃないか」

「そうでしょう?」

お互いに頭を下げあった所で、弟子を褒められておどけた様子で胸を張る永琳。

三者は顔を見合わせて小さく笑った。

「幻想郷か。あんた達みたいな奴らが多いなら、本当に良い場所みたいだね」

「あら、私達が善良かは保証しかねますよ? ですが良い場所なのは事実ですね」

「来て良かった。そう言えるな」

諏訪子と永琳、そして神奈子は和やかに笑い合う。

どうやら守矢神社組と永遠亭は、互いに良い関係を築けそうだった。

一方その頃。

「やーい子供舌！ この日本酒の辛さの良さが分からないなんてま
だまだお子ちゃまね、吸血鬼！」

「何を言うか求婚ブレイカー！ 私は500の歳を重ねた偉大なる
吸血鬼だぞ！」

「プフー！ その程度で私と年齢を競おうなんて、ちゃんちゃらお
かしいわ！ その程度の数、私の年齢で割れば殆どゼロも一緒よ」
「ババア！」

「ぬわんですつてええええええ！！？ 物凄い端的に決りに来たわ
ねこの吸血鬼！」

某吸血鬼と某竹林の姫が、たかが二十年すら生きていない西宮と
早苗の喧嘩と全く同レベルの煽り合いで盛り上がっていた。

咲夜は唯一困ったように溜息を吐いていたが、美鈴や妖怪兎達は
それを肴に酒を開ける始末。

開始予定時刻よりまだ二時間も前だと言つに、既に宴会場の一角
では実に幻想郷の宴会らしいカオスが現出しつつあった。

#

そして鈴仙が料理を早苗達を調理場から追い出して料理を作り始
めて少し経過した頃 具体的には某吸血ロリータと某求婚ブレ
イカーが遂に取っ組み合いの喧嘩になり、『咲夜！ 懲らしめてあ
げなさい！』だの『永琳！ 身分の差を教えてやるのよ！』だの従
者に救援を請うた挙句、その従者二名から『はしゃぎ過ぎ』と説教
されている頃。

神社の中にずるりと空間の裂け目が出来、そこから二名の女性と
一人の少女が降り立った。

「到着、と。宴会は表でやってるのかしら」
「そうみたいね。表の方から良い匂いがするわ」
「……まだ開始時刻の一時以上前なんですけど、やっぱりもう始めてるんですね」

まず裂け目 隙間から神社の廊下に降り立ったのは妖怪の賢者・八雲紫。

その横に立つの薄水色の着物を纏った桃色の髪の女性は、彼女の友人である白玉楼の亡霊の姫・西行寺幽々子。そしてその背後に溜息を吐きながら立つ二本の刀を背負った銀髪の少女は、白玉楼の庭師である魂魄妖夢である。

三者もまた既に神社の前で騒いでいる連中と同様に此度の宴会に参加する為、紫の隙間を使ってやって来たのである。

紫がいきなり神社の中に出た理由として、まずは宴の主催者でもある二柱に挨拶して、幽々子と妖夢を紹介しておこうと考えたのが、あるのだが、

「御二柱も表に居るみたいね。私達もそちらへ向かった方が良いかしら？」

「だから私は普通に表から入ろうって言ったんですよ……これじゃ不法侵入じゃないですか」

紫の言葉に妖夢が溜息を吐く。

幻想郷に数少ない常識人にして苦勞人でもある彼女にとって、見知らぬお宅にいきなり侵入というのは少々気が咎める状況だったよ
うだ。

しかし幽々子はその声に着物の袖で口元を隠しながら上品に笑い、

「いやいや妖夢。不法侵入っていったって廊下じゃない。ギリギリセーフよ」

「絶対にアウトですよ。ああもう、住人の方に見つかったら何と言えば良いか……」

「御二柱は表のようだし、まあ西宮君も早苗さんも話は分かるわ。そんなややこしい事にはならない筈」

そして、紫のその言葉が途絶する。

その原因は廊下に立っている彼女達のすぐ横の襖、その奥から聞こえて来た声だ。

『や、やあん……！ 西宮、どこ触ってるんですか！ 痛い、痛いですって』

『つれない事言うなよ。俺とお前の仲じゃねーか？ なあ』

『あ、やあ……あん！ 痛い、痛いですってば！』

『すぐに良くなる。我慢しろ』

沈黙が、廊下を支配した。

紫と妖夢が顔を真っ赤にして俯き、幽々子が口元を隠したまま『にやあ』としか表現しようがない邪悪な笑みを浮かべ、小声で呟いた。

「あらやだ。ややこしい事になってるわね。まだ日も高いのに」

「な、なななな……」

「あらら、紫ったら顔を真っ赤にしちゃって。初心ね」

「は、はははっ、破廉恥な！」

「妖夢も負けじと顔が真っ赤で可愛いわ。まあ紫から話を聞く限りだと、そう悪くない仲だったみたいだしね。ああ、でも風祝さんは嫌がってるみたいかしら？」

釣られるように紫と妖夢も、顔を真っ赤にしたまま小声で喋る。その努力が実ったのか、或いは幸か不幸か、襖の奥に気付かれた様子は無い。

それを良い事に幽々子は音も無く襖に忍び寄り、襖を小さく開けて中を覗き込もうと

「って、何してるんですか幽々子様!？」

「いやいや妖夢。もし嫌がってる少女が手籠めにされそうな場面だとしたら、ここは颯爽と助けないとね？」

「絶対興味本位でしょう! デバガメ根性でしょう!？」

小声で騒ぐという離れ業を披露する白玉楼主従。

その後ろで紫は顔を真っ赤にして、両手で頬を抑えてオロオロしていた。

妖怪の賢者・八雲紫。弱点は色事らしい。

そしてそんなどうしようもない状況に、横から声。

「あれ? 貴方達、何してるの?」

社務所の方から声をかけて来たのは、台所で料理をしていた鈴仙だ。

ブレザーの上からエプロンを装備し、頭に付けた三角巾からびよこんとへにより耳が飛び出している。

どうやら何かの用事があったて台所からこちらに来たらしい彼女に對し、しかし紫は顔を真っ赤にしてイヤイヤしているだけで、会話が成立しない。

代わりに返答したのは妖夢と幽々子だ。

「いやあの、鈴仙さん、この部屋で、その……」

「風祝さんと信者さんがね〜……ほら、アレよアレ。男女の秘め事？」

「はあ！？ あいつら、私が料理引き受けてやったのに何やってんのよー！！」

言つべき言葉を探して迷った妖夢と対照的に、直球で告げられた幽々子の言葉。

それに鈴仙の眉がっり上がる。

それもその筈。医者見習いである彼女、両者ともに怪我をした身で喧嘩をしていた早苗と西宮を見かねて料理を買って出て、その両者には置き薬の箱を渡して治療するように申しつけたばかりなのだと言つに何をしているのかこいつらは、という怒りは正当な物だろう。

そしてオロオロしている紫と妖夢、そしてどこか楽しそうな幽々子の横を通り抜け、鈴仙は躊躇なく襖に手をかけ、勢いよく開いた。

「人に仕事させて、なあにを盛ってるかこのアホどもおおお！！」

「はい？」

「た、助けて下さい鈴仙さん！ 西宮が痛がる私に無理やり消毒液を塗ろうとー！！」

「そうしろつてその鈴仙さんに言われただろ。ほら、消毒して傷薬塗ればす……ぐに良くなるって」

「凄く楽しそうに迫って来たじゃないですかあああ！ 西宮のドS！ さですとー！！」

そこに居たのは、消毒液の滴るガーゼを手に、どこか楽しそうに早苗ににじりよる西宮。そして彼から逃げるように鈴仙に飛びついて来た早苗だった。

飛びつかれた鈴仙、一瞬驚いたものの状況をすぐに把握する。

つまりは『ああ、勘違いか』、と。

いや、『あらあら、そういう事ね。残念残念』と嘯く幽々子の横で、紫と妖夢は沈黙。そして鈴仙は冷めた目でその両者を見つめる。早苗と西宮は状況を理解できず首を傾げるのみ。ニヤニヤ笑う幽々子と、冷たい目で見つめる鈴仙の前で、境界の賢者と庭師見習いは沈黙する。

沈黙が重い。いや、痛い。

「……………あんたら、そんな勘違いをするなんて……………思春期ね。うん、恥ずかしい事じゃないわ。医者見習いとして保証するから、気にしないで」

「嫌ああああ！　せめて笑ってよ、嘲ってよ！！　そういう冷徹な反応が一番嫌ああああ！！」

「違うんです、私は、その、そういうんじゃないんです鈴仙さああああん！！」

そして状況を理解できない早苗と西宮、そしてにやにやと楽しそうに幽々子の前で、狂乱した紫と妖夢が鈴仙に縋り付いたのだった。

第十六話：宴会（上）（後書き）

お嬢様は紅魔郷の時のカリスマと天則の時のカリスマブレイクを見るに、絶対カリスマのオンオフスイッチがあると思う。

ところでこれ、R - 15タグは必要ですかね？

ご覧の通り単なるミスリードだったんですけど。

第十七話：宴会（中）（前書き）

キャラは全員書いたら随分時間がかかるので、『来てるよ』という設定はあっても小説内では描写されないキャラも居ます。要は賑やかし。

今後出て来る場合もあると思われしますので、ご了承ください。

第十七話：宴会（中）

「じゃあ妖夢はとにかく材料を切ってって！ 西宮は無理しない程度に、自分の作れる料理！」

「はい、分かりました鈴仙さん！」

「別に怪我ったって、料理くらいなら不都合そこまで無いんですけどね」

そこは例えるならば戦場であつた。

守矢神社の社務所に作られた台所　　ちなみに早い段階で必要な物を買ひ揃え、幻想郷仕様の設備になっている　　に立つのは陣頭指揮を取る鈴仙、そしてその補佐である妖夢と西宮だ。

表の方では紅魔館、永遠亭、白玉楼＋マヨヒガという、幻想郷でも屈指の組織の長達が酒を酌み交わしている。恐らく二柱もそこに加わり、親交を深めている事だろう。

加えてぼつぼつと他の幻想郷の住人、つまりは鬼だの騒霊だの色人形遣いだの人里の守護者だの、或いは神奈子や諏訪子以外の八百万の神や、果ては妖怪の山の住人である河童や天狗まで来る始末だ。

天狗は流石に数が少ないが、射命丸が桜を含む若手を数人連れて飲みに来たのである。

曰く、『天狗の里もこれからは徐々に外と交流を始めねばなりませんからな。まあ手始めと言う事で』との事である。彼女は彼女なりの考えがあるのだろう。

ともあれ先の騒動の後、紫が幽々子に宥められて肩を落としたまま表の宴会場に向かい、妖夢が『汚名挽回です！』と間違つた言葉を叫びながら、鈴仙の手伝いを所望。

そして客人にばかり働かせては守矢神社の恥と、結局消毒して薬を塗り終わった所で料理に復帰を宣言した西宮の三名は現在、そんな徐々に規模が大きくなる宴会に対応する為、料理とつまみの作成を行っている最中なのだ。

一応参加者達が各々好き勝手に酒なりつまみなり持って来ているが、盛り上がってくればそれでは足りるまい。

三者は大急ぎで料理に取り掛かる。その後ろで、

「鈴仙さん、私は何をすれば良いですか!？」

「その辺で穴掘ってそれを埋める作業を繰り返して!!」

初手から米を洗剤で洗おうとした早苗が、戦力外通告を受けて立っていた。

#

一方、表の方ではそろそろ本来の開始時刻になろうという頃で

しかし既に宴はかなりの盛り上がりを見せていた。

神奈子や諏訪子も挨拶も兼ねて様々な人妖と酒を酌み交わし、応じる側も盃を高く掲げてそれに応える。

どうやら紫の言う通り、この宴会は守矢神社が幻想郷に対して自らの存在を自己紹介する為、非常に効果的に働いているようだ。起こした異変を肴にこうして酒を飲みかわすのが、幻想郷の流儀なのだろう。

ちなみに提案者にして功労者である八雲紫は、先の勘違いの件で落ち込んだ結果、神社の外壁に向かって三角座りをした挙句に壁に

向かって愚痴を吐いていた。

「ふふふ……ええ、そうよ。悪い？ 大妖怪ともあるうものがあんな恥ずかしい勘違いをして悪いの？ 仕方ないじゃない、なんで消毒液を塗られるだけであんな艶っぽい声を出すのよ。ゆかりん乙女だもん、思春期だもん、勘違いしたって仕方無いじゃない……」

「咲夜ー、あのスキマは何をしてるの？」

「お嬢様、アレは人生の敗北者という奴です。余り直視しない方が良いでしょう。視覚からスキマ菌が感染します」

負のオーラを発しながら壁に話しかける様子たるや、はつきり言っ
て誰も近寄りがたい威容、いや、異様であった。

そしてそんな一部の例外を除いて宴が非常に盛り上がっている頃、

「……開始時刻はそろそろの筈なんだけど、何でもう始まっているよ。しかも主賓である筈の私とかガン無視で」

「おーおー、盛り上がってるじゃないか。どれ、私も混ぜらせて貰おうかな」

守矢神社とは別の意味での、この宴の主役。主賓である博麗霊夢の到着であった。

横には一緒にいて来たのだろう。魔理沙も箒に跨って飛んでいる。

「……って言うか魔理沙、アンタ天狗の里に突っ込んで大暴れして帰っただけじゃない。何で来たのよ」

「おいおい霊夢、宴会に私を呼ばないなんざ、おでんを食べに行つて卵を頼まないようなもんだぜ？」

「私、おでんの卵ってモツサリしてて好きじゃないのよね。大根のが好き」

などと会話をしながら宴会場に降り立った二人に、周囲の酔っ払いどもから歓迎の声が上がる。

特にわざわざ立ち上がってそちらへ向かったのは、この神社の柱である神奈子だ。

「すまないな、博麗。急な宴会だが楽しんで行ってくれ。怪我は大丈夫か？」

「なんとかね。飲んで騒ぐくらいなら問題無いでしょ」

「へえ、アンタがこの神社の神様か。私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ。宜しくな」

「ああ、宜しく頼むよ霧雨。あと正確に言うならば、この神社で祀られているのは私だけではないのだが」

ちらりと神奈子が視線を向けた先では、紅魔館組と一緒に酒を飲んでる諏訪子の姿。

より正確に言うならば、レミリアと諏訪子が互いに絡み酒を行っている状態である。

この両者、互いに幻想郷の少女達の中でも特に外見年齢が低い部類なので、その二人が酒を酌み交わしていると中々に外界基準では背徳的な光景だ。

「崇り神ねえ。あつちの大きい方の神は霊夢とやり合ったそうだけど、貴様は何もしていなかったそうじゃないか。外見も何と言うかチビっこいし……本当に凄い神なのか？」

「んだこらミシヤグジ様舐めるなよ吸血ロリータ！ チビっこいつてんならアンタだってそうじゃないか！」

「な………！ 何を言うかこの蛙娘！ 私を見て分からののか、この立ち昇る大人の色香が………！」

「乳臭さなら立ち昇ってるけどねえ！」

「き、貴様言っちゃならん事を言ったなアアアア！　そこまで言うなら貴様の實力、この気高き夜の女王、レミリア・スカーレットが測ってやるうではないか！！」

そして売り言葉に買い言葉で、神社からやや離れた空へ飛んで行く二人。

程無くして派手な弾幕が飛び交い始めた。

神さびた古戦場（即席）を舞台に、吸血ロリータVSケロケロロリータの対決である。酔っ払いどもが飛び交う弾幕を見て歓声を上げた。

「……まあ、もう一人の神はあんな感じだ」

「あー、まあ、元気で良いんじゃないやね？　レミリアと正面切ってやり合えるなら相当なもんだ。そのうち私もお相手願いたいもんだぜ」

「まあ私に面倒かけないなら何でも良いわ。それじゃ、宴会を楽しませて貰うわよ」

困ったような神奈子の言葉に、魔理沙はからからと笑って、霊夢は興味が無さそうに答える。

そうして挨拶を終えた霊夢と魔理沙が宴会場に入ると、神社の方から元気な声が宴会場に響き渡った。

「皆さん、お料理の追加が出来ましたよー！！」

そう言いながら神社の中から大きな皿と、そこに盛られた料理

鈴仙が作った筍御飯や、筍と人参のピリ辛炒め。並びに西宮が作ったブルスケッタ、冷製パスタなど　　を持って来たのは東風

谷早苗だ。

縁側にテーブルを置き、そこに並べられた料理に宴会参加者達が群がって行く。

ちなみに『追加が出来た』などと言いつつも、彼女は料理自体には一切貢献していない。

ともあれ映画やゲームで良く見る生存者に群がるゾンビの如く、料理に群がる酔っ払いの群れ。

その勢いをニコニコして眺めていた早苗だが、霊夢に気付くと小走りですちらに近付いて行く。

「霊夢さん、来てくれたんですね！」

「タダ飯の機会は逃さないわよ、私は。……随分と宴会は盛り上がってるみたいね」

「ええ、皆さん気の良い人ばかりで……こんなに楽しんでくれると、もてなす側も嬉しいですね！」

「そう、それは良かったわね」

繰り返すようであるが、彼女は料理には一切貢献していない。

「あ、そうだ。霊夢さん、異変が終わったら一つお願いしたい事があつたんです」

「お願いしたい事？ 面倒事じゃないでしょうね」

「ええと、どう取るかは霊夢さん次第ですけど……」

そして、にべもない霊夢の言葉に早苗が苦笑。

しかしそれも一瞬で、彼女は咳払いと共に霊夢に向き直り、

「霊夢さん、私とお友達になって下さい！……」

「……え？」

両手を胸の前で握って、精一杯叫ばれた言葉に、珍しく
常に珍しく、霊夢が驚きを完全に顔に出して硬直した。 非

対する早苗はそのまま前進し、霊夢の手を握り締める。

「風祝と巫女という違いはありますけど、神に仕える身として霊夢さんの戦いぶりに感動したんです！人の身でありながら、あそこまで弾幕ごっこが上手だなんて……いつか私も霊夢さんみたいになりたいんです！！それにあの短いやり取りでしたけど、霊夢さんは良い人だと思いましたし、是非とも私とお友達に！」

「え、あの、ちよつと……」

「おお、こりや珍しいぜ。霊夢が慌てる姿だ」

にやにやと笑った魔理沙が、横合いから『良いんじゃないか？可愛い後輩が出来たみたいで』などとからかうような口調を霊夢に向ける。

対する霊夢はあまりにも明け透けに好意を向けて来る早苗にたじたじであった。

誤解の無いように言うておくが、元々博麗霊夢は他人に好かれ易い。

紫のように彼女を娘同然に想っている者も居るし、魔理沙やレミアなどの彼女を大事な友人と考えている者も多い。

が、いかんせん幻想郷の人妖は割と素直じゃなかったり、持って回った言い回しを好んだりする。

特に歳経た人外はその傾向が強く、加えて言うならば霊夢が好かれ易いのは魔理沙のような例外を除けば何故かそういう歳経た人外が多かった。魔理沙も素直に好意を表す方でもない。

それが何を意味するかと言えば　博麗の巫女という特殊な境遇も相まって、彼女は同世代の少女からこつこつた明け透けな好意を向けられる事に慣れていなかったのだ。

博麗霊夢、珍しく驚いて腰が引けている。

「ちよ、ちよつと落ち着きなさいよ！　いきなり友達になれって……」

「駄目、ですか……？」

「いやいや、酷い奴だなあ霊夢は」

「ああもう、そんな目に見えて落ち込まないでよ！！　魔理沙、何笑ってるのよ！　しばくわよ！？」

早苗を動物に例えるならば、間違いなく犬であろう。

叱られて尻尾を垂れる犬のように、早苗は霊夢の言葉に落ち込んだ様子を見せる。

そして笑う魔理沙に、怒る霊夢。

やはり彼女はどこか八雲紫に似た部分があるのだろうか。壁際で体育座りをしているスキマ妖怪同様、霊夢もどうやら早苗相手だとペースを崩される部分があるようだった。

そしてそんな騒ぎになっている場所に、近付いて来る姿が一人。

長い黒髪を持ち上品に笑う　ただし先程までは品を投げ捨てた罵り合いをレミリアとしていた　その女性の名を、蓬萊山輝夜。

永遠亭の主にして、かの伝承に語られる『かぐや姫』。何人もの貴公子の求婚を断った求婚バスターである。

「随分と慌ててるわね、霊夢。貴方はこういう相手は苦手だったのかしら」

「輝夜、あんたねえ……ややかしい時にわざわざ首突っ込んで来るんじゃないわよ」

「あら、別にややかしい事は無いじゃない。素直な後輩に懐かれて困るクールな先輩、テンプレよテンプレ」

ころころと笑う月の姫に、霊夢は不機嫌そうに鼻を鳴らした。
その横の早苗は急に乱入して来た輝夜に目を白黒させ、

「ええと……」

「はじめまして、山の上の巫女。私は竹林の永遠亭の主、蓬萊山輝夜よ。イナバからも話は聞いていたわ」

「イナバ……あ、鈴仙さんですか。という事は、貴方が竹林のお医者様ですか？」

「それは私の従者の永琳のこと。私は姫だから……そうね、ペットを愛でるのが仕事かしら？」

「非生産階級って奴だな」

「優雅で良いじゃない」

からかうような魔理沙の言葉に、輝夜が楽しそうに笑い声を上げた。

先程までレミリアと煽り合いをしていたとは思えない泰然自若とした態度に、からかっても無駄かと判断した魔理沙が肩を竦める。

そして霊夢は未だ無然とした様子で輝夜を指し、

「ちなみにこいつ、実は外の世界でも物凄く有名人よ。『かぐや姫』って早苗も知ってるでしょ？」

「え？ ええ。えーと、『今は昔』」

思い出すように中空を見ながら、かぐや姫の伝承を呟き始める早苗。

自分から早苗の興味が他所へ逸れた事で一息吐く霊夢に、自分の事を思い出した早苗がどんな反応をするか楽しみにしている輝夜、そして成り行きで見守っている魔理沙。

その三者の前で早苗は、

「『 竹取の翁とかぐや姫ありけり』」

「『ぶふっ!?!』」

「ちよつと待てエエエエエ!?! お爺さん!?! 私が竹取の翁!?!
!?!」

竹取の翁とかぐや姫を組み合わせた、全く新しい昔話を展開した。まさかの竹取の翁!!かぐや姫説。当の本人である輝夜が全力で突っ込みを入れ、横では魔理沙と霊夢が吹き出した。

それを見て自分の間違いに気付いた早苗が、慌てたように訂正する。

「あ、えと、ごめんなさい。なんとなくの大筋は覚えてるんです。

確かかぐや姫がスペースインベーダーだったんですね」

「スペースインベーダー!?! せめて宇宙人とか月人って言うてよ!?! 何その安っぽい光線銃とか持ってそんな単語!?! 『光る、回る、音が出る!?!』みたいな!?!」

ばたばたと腕を振り回して訂正を要求する輝夜に、早苗は困ったように首を傾げる。

輝夜としても、なまじ早苗に悪意やからかいの意図が全く無いだけに、かなり対処に困るようであった。

「……………どうよ。私がペース乱されるのも分かるでしょ?」

「凄いな。霊夢に続き輝夜まで手玉に取るか……………」

そしてそんな輝夜と早苗を見ながら溜息を吐く霊夢に、感心したように頷く魔理沙。

彼女達に構わず、周囲の酔っぱらいの殆どは遠くに見えるロリータVSロリータの弾幕戦に歓声を上げていた。

数少ない例外は弟子を労おうと神社の中に足を向けた月の医師と、カップ麺を奪取する為にその医師にやや遅れて神社に向かった千里眼わんこ。そして未だに壁に話しかけている境界の賢者くらいのものであった。

#

一方、神社の台所では妖夢が必要な材料をほぼ切り終わり、皿にあけた所であった。

それを見た鈴仙が満足げに頷き、

「よし。一通り材料は切り終わったみたいね。料理の方はあんまり大人数だと却ってやり難いし、妖夢は宴会の方を楽しんで来て」

「えっ。良いですよ、まだ手伝えますから」

「手伝って貰おうにも、スペース自体が手狭なのよ。ほら、そっちの主の世話もあるでしょ。こっちは大丈夫だからさ」

「うーん……確かに幽々子様を余り放っておくわけにも……。すいません、お言葉に甘えます」

苦笑しながらも重ねて言う鈴仙の言葉に、妖夢が迷いながらも結局頷く。

彼女は立ち去り際に残った二人に頭を下げ、台所から離れて表の宴会に向かっていく。

残されたのは鈴仙と西宮だ。

「貴方もキツイようなら戻って休んでくれても良いわよ。もし料理が不足したら不足したで、来てる連中で勝手にどうにかするですよ。各々持ち込みもあるみたいだし」

「いや、客人に任せきりというわけにもいかんでしょう。流石に喧嘩さえしなければ、ドクターストップかけられる程の傷でもないでしょうしね」

「まあね。って言うかなんでその怪我であんな喧嘩に発展したのよ……」

呆れたように言う鈴仙。その様子には、彼女らしくもなく余り他者への壁が感じられない。

それもその筈、先程の台所で喧嘩しようとしていた二人へのマジギレと、その後で調味料の場所を聞きに行った所でのスキマ+白玉楼主従の勘違いなどもあって、鈴仙は早苗と西宮に対する評価を『他人』から『手のかかる患者』へとランク変動させていたのだ。

……ランクアップかランクダウンかはその人の判断によるだろう。

ともあれ、医者見習いとしては強い責任感を持つ彼女。

どうやら西宮と早苗に関しては医者と患者として接する事で、逆に垣根が薄れたようである。

妖夢に関しても以前の永夜異変の後で通院していた時に友人関係となったので、彼女は割と医者として付き合った相手には遠慮が無くフランクな性質なのかもしれない。

いや

「大体ね。小さな怪我だからとか思ったら駄目なのよ。きちんと消毒しないと化膿する場合もあるし、そもそも貴方は感染症の恐ろしさという物がね……」

「いやあの、別に甘く見ていたわけじゃ……」

「良いから黙って聞きなさい。薬があるから大丈夫とか思っちゃ駄目なの。その薬を有効に使う為には個々人の日頃からの注意が大事で、究極的には薬は使わないに越した事が無いんだから。師匠の受け売りだけどね」

「えーと……はい」

フランクというか、それを乗り越して世話焼きお姉さんへと変貌した鈴仙。

延々と続く医療知識を交えた彼女の説教に対し、しかし原因が自分の方にあるのは分かっているの、素直に頷くしかない西宮。

そして、彼女が医者を目指す原因となった女性がその場に来たのはそんな時の事だ。

「だから、怪我をした時には最初の処置が重要で

「うどんげ、ちょっと良いかしら？」

「あ、師匠？ どうしたんですか？」

宴会を抜け出して来た八意永琳、弟子を探しに台所に来たものの、並んで料理をしながら患者に説教を続ける弟子を見て苦笑しながら声をかける。

振り返った弟子に対して内心では微笑ましく想いながらも、殊更に敵めしい顔を作り、

「言ってる事は正論だけど、余り言い過ぎても相手が意固地になつたりして逆効果になる場合もあるわ。その彼はきちんとして聞いてくれるみたいだから良いけど。説教も薬と同じ、用法容量は適切に。必要だったらガツンと言わなきゃいけないのは当然だけど」

「う……はい、ごめんなさい、師匠」

そしてしゅんとしたように頭を下げる鈴仙。

頭の上のウサ耳も、心なしか力無く萎れた。

そんな彼女に対して援護射撃をしたのは、横に居た西宮だ。

「申し訳ありません、竹林のお医者様。元はと言えば俺が馬鹿な事

をしたせいで鈴仙さんに説教をさせてしまったのです。むしろ大変
ためになりましたよ」

「あら、聞き分けの良い患者さんね。貴方みたいな人ばかりだった
ら助かるんだけど」

言外に『だから、そう責めないで下さい』と告げられた言葉に、
嬉しそうに永琳は頬に手を当てる。

弟子である鈴仙が医者として患者に慕われているのだ。それが悪
い気になるう筈が無い。

「まあとにかく、怪我人の貴方も、うどんげも。今作っている分が
終わったら料理は切り上げなさいな。必要だったら必要に感じた人
が色々持つて来るだろうし、各々持ち込みもあるし、今作ってる分
が終わったら貴方達も楽しむ側に回りなさい」

「あ、皆さん結構持ち込んでくれたんですね。分かりました、わざ
わざありがとうございます」

「……そうですね。患者が無理しないなら、私が手伝う理由も薄れ
ますし」

そして永琳の言葉に西宮と鈴仙が頷く。

新たな闖入者が来たのは次の瞬間だ。

「ちわーッス！ 西宮君西宮君、『かつぶめん』は無いんスかー！」

「出たな駄犬」

「誰が駄犬ッスか負け犬」

永琳の後ろからぴよこんと顔を出したのは、永琳にやや遅れて宴
会場を抜け出した椀だった。

目的は 先の台詞の通り、彼女がここ数日で嵌ったカップ麺
である。

宴会ついでにあれを食べられないかと思った彼女、直接調理場に交渉にやって来たのだ。

「まああるにはある。……そうだな、幻想郷だと珍味の一種だろうし、折角だからある程度放出しちまうか」

「おお、話が分かるツスね」

「ちよつと待ちなさいよ。カップ麺って外の世界のインスタント食品よね？ 身体に悪いわよ」

カップ麺ばかりあっても仕方ないと考える西宮、折角だから出してしまおうかと思し、椛がそれに嬉しそうに賛同する。

その言葉に横から嘔みついたのは鈴仙だ。

対する椛は頬を膨らませ、それに反発する。

「ぶーぶー。兎さん頭が固いツスよ。たまの宴会だからそういう品が出たって良いじゃないツスかー」

「それにまあ、身体に悪いからって捨てるよりは良いかと。むしろこういふ場で消費させてくれるとありがたいですね。……こんなもん沢山抱え込んでても困るし」

「む……それは確かに。分かったわ。でも食べ過ぎないように」

結局は椛と西宮の言葉を受けて、鈴仙も納得したのだろう。

渋々と言った様子で頷く彼女に、しかし椛はぼそりと呟いた。

「なんかその辺口煩いと、おばーちゃん思い出すツス」

「誰がお婆ちゃんよ。言っておくけど私、幻想郷の住人じゃまだ若い方だと思っわよ」

「それ言っならボクもそうツスよ。まあ流石に西宮君よりは上ツスけど」

「いや人間と比較すんなよ妖怪」

椛の言葉に、先程とは逆に今度は鈴仙が反発。

話題が西宮に飛び、しかし彼は呆れたように返すのみ。

そしてそれらの会話を聞いていた月の頭脳は、ぼそりと呟いた。

「あら、じゃあ西宮君だったわね。貴方は私と同じくらいの歳かしら」

永琳が放ったその爆弾発言に、西宮と鈴仙は「それはない！」と突っ込みそうになるのを全霊を費やして踏みとどまった。

実年齢にしては無理があり過ぎるし、外見年齢にしてももう五歳程度は上に見えるのである。

付き合いが長く永琳の実年齢をある程度知っている鈴仙は特に突っ込みを入れたかったが、全霊の気合いで堪えた。

恐らくは冗談なのだろうが、笑うべきか。スルーすべきか。それともまさか突っ込むべきなのか。

攻略法の見えない『やごころ えーりん十七歳』の言葉に、二者が同様に凍りつく。或いは天真爛漫な早苗辺りならばさりと切り返せるのかもしれないが、なまじ世慣れしている分、西宮と鈴仙は対応に困って硬直してしまう。

その状況を救ったのは、まさかの犬走椛だった。

「あれ、そうだったんすか。じゃあお医者さんよりボクの方が年齢的に先輩ツスね!!」

訂正。更に状況をカオスに巻き込んだのは、やはり犬走椛だった。

満面の笑みで告げられた言葉。それには一切の悪意も何も見えず、

つまりは純粹に本氣と書いてマジだった。

西宮と鈴仙が硬直を通り越して停止し、余りに余りの発言にピタリと止まる。両者の頭脳は完全にオーバーフローする。

そして二人があわや月の頭脳のお怒りかと覚悟を決めた瞬間、

「あら、うふふ……そうね、そうなるかしら。不束な後輩ですが、御鞭撻のほどよろしくお願いしますね、先輩」

「うんうん、良い返事ツス。山関係で困った事があつたらボクに言うツスよ！」

予想の斜め上に天元突破した椀の言葉が、却ってツボに嵌ったのだろうか。

くすくすと笑いながら冗談めかして椀を『先輩』と呼ぶ永琳に、胸を叩いて請け負う誇らしげな椀。

その様子が面白かったのだろう、永琳は更に楽しそうに、口元に手を当てて上品に笑う。

「ええ、お願いしますね先輩。ですがまずは、向こうで宴会を楽しみましょう。二人とも、今作ってる分が終わったらさつきも言ったように宴会を楽しみなさいね？」

「あ、そうツスね。西宮君、後でカップ麺持って来るんすよー。先輩命令ツス！！」

そして椀に先導されるように去って行く月の頭脳。

去り際に聞こえて来た、『あらやだ。私って本当にそれくらい若く見えるのかしら』という心底嬉しそうな呟きに対し、鈴仙と西宮は紳士的にスルーを決め込んだ。

そして二人が去り、彼女達が来る前に火にかけていた鍋が沸騰を始めるまで硬直を続けてから、

「……鈴仙さん。実際あの人、お歳は……？」
「女性に歳を訪ねるのは止めた方が良いわよ。……まあでも多分、私の百倍は軽く超えてると思う……」

何とも言えない空気での会話。

そして鍋が沸騰を通り越して吹き零れるに至って、ようやく二人はのろのろと料理を再開したのだった。

早苗相手にペースをかき回されて疲れた輝夜が、白狼天狗に酌をする永琳という有り得ない光景を見て仰天するのはもう少し後の話であった。

第十七話：宴会（中）（後書き）

後日、天狗の里にて比較的リベラルな立場の大天狗が文と椀を呼んで曰く。

「不本意だが、これからは徐々に我ら天狗も外との交流を始めねばなるまい。その先駆けとして射命丸、犬走。そなたらの持つ人脈を、まずは教えて貰いたい」

その言葉に射命丸と椀は答えて曰く、

「そうですね、一応知人は広域に渡って居ます。何らかの口利きが出来るレベルの友人となると、マヨヒガと守矢神社と言う所でしょうね。椀はどう？」

「守矢の巫女さんとは友達でー、神職見習いの西宮君はボクの弟子ツス。あと、竹林のお医者さんはボクの後輩ツス」

「えっ」

「えっ」

予想の遥か上空にあった椀の人脈に、硬直する射命丸と大天狗だった。

#####

と、いうわけで色々人間関係篇。

早苗も西宮も各々の人間関係を作り始めています。

そして椀はある意味最強キャラだと思えます。誰相手でもペースを乱されないと云う意味において。

ダブルスパイラーで『文は棍を苦手としている』という一文があったから、文が苦手そうな性格にした結果がこれだよ。

第十八話：宴会（下）（前書き）

下だけど終わりじゃ無くなりました。

次回は宴会（終）となります。今回は割とシリアス目に。各々のスタンスについてとか。

第十八話：宴会（下）

西宮と鈴仙が料理を終え、その料理を運び出した時 既に宴会場は完全に出来上がっていた。

あちこちで人妖が酒を酌み交わし、或いは騒ぎ、或いは潰れての無礼講である。

ロリータ同士の弾幕バトルは引き分けに終わり、諏訪子は神奈子の隣で酒を飲んでおり、レミリアは霊夢や早苗、魔理沙の元でやはり酒を飲んでいる。両者ともに心なしかボロボロだが満足げであった。

その代わりと言うように、神さびた古戦場（即席）では他の人妖による弾幕が展開されていた。

先のレミリア・諏訪子戦に勝るとも劣らない絢爛豪華な弾幕。

小柄な影が放つそれは『集束』と『拡散』を軸とした力押し of 弾幕で、もう片方は手にした枝のような物から放つ虹色の弾幕で対抗しているように見える。

共通するのはいずれも異変の首謀者クラスの實力者であると言う事だ。

西宮からすれば初めて見る、幻想郷でも最上位に位置する者同士の弾幕戦。遠くに見えるそれに、思わず目を奪われる。

料理の皿を手を持ったまま、彼は思わず足を止めてその弾幕に見入っていた。

「……すつげえな」

「あれは鬼と……もう片方はウチの姫様ね。宴会ではよく誰かが弾幕やったりするのを肴に飲んだりもするのよ」

「鬼つつーと、まあ日本妖怪の代表ですね。んじゃ、それと張り合

う鈴仙さんのところの姫様って何って話になるんですが」
「……んー、かぐや姫って言って通じる？」

困ったように鈴仙が告げた言葉に、西宮が数秒中空を見るようにして思考を巡らせ、

「昔々あるところに、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり」

「そうそれ」

「ちなみに東風谷に聞くとこの辺から話がワープ進化を開始する気もするんですね。以前あいつ近所の子供相手に桃太郎を話す際に、『お爺さんは山へ人狩りに、お婆さんは川へ干拓に行きました』とか言ってたし」

「干拓って普通海よね。川でやるもんじゃないわよね。って言うかお婆さんがどうでも良くなるくらいに、お爺さんがアグレッシブというか世紀末よね」

「ヒヤッハー奪え奪えーとでも言うようなお爺さんだったのでは」
「医者として言わせてもらえば、恐らくその老人には生涯介護は要らないわね。……姫様相手に変な昔話を披露しないと良いけど、あの風祝さん」

時既に遅し。後のフェスティバル。アフター・ザ・カーニバル。平たく言えば後の祭りであった。

よもや東風谷早苗が先んじてかぐや姫「竹取の翁という新説を語っていたとは夢にも思わない二人、会話しながらも料理を適当にテーブルに並べて行く。

「ウチの姫様って、実はその話に出て来る『かぐや姫』なのよ。あの弾幕はその伝承に出て来る難題を元にしてるの」

「……またブツ飛んだ話になったなあ。神、妖怪、そしてかぐや姫

ですか。何でもありだな幻想郷」

呆れたような西宮の溜息と同時に、料理が並べ終わる。

すぐさま目端が利き、なおかつまだ食べる気のある数名が集まってきた。

「あらあら、色々持って来たみたいだけど……煮物とチーズフォンデュね。兎さんは和食、そちらの信者さんは洋食派かしら」
「幽々子様、がつつかないで下さいよ、はしたない」

真つ先に来た亡霊の姫、西行寺幽々子。

その後ろからついて来た妖夢が呆れたように言うが、幽々子は構わず料理に手を出して御満悦だ。

素手で煮物を掴まんで食べると言う無作法に、妖夢が後ろで渋い顔をしている。

対する鈴仙と西宮は苦笑しながら、

「他の人の分まで食べないで下さいよ」

「まあ、喜んで頂けたなら幸いですけど」

「ええ、美味しいわ。私には妖夢の料理が一番だけど、やっぱりたまには違うタイプの料理を食べないとね」

さりげなく従者自慢を入れる幽々子の言葉に、褒められた妖夢が顔を赤くする。

そんな従者を横目で見ながら幽々子は笑い、宴会場の二箇所を順に指差した。

「まあ、貴方達もお疲れ様ね。永遠亭の薬師さんはあちら、風祝さんはあちらに居るわよ。もう料理の追加は要らないだろうから、楽しんでらっしゃいな」

「ええ、ありがたく　　って、あの。何で師匠がカップ麺食べてる白狼天狗に酌をしてるんですか。何あのカオス。ぶっちゃけ力関係おかしいでしょう。横のてゐがドン引きってどういうレベルよアレ」

「薬師さん、若い子扱いされて舞い上がってるわね。そういう意味で、白狼天狗の子は大した策士と言えるのかしら。……愚者が転じて賢者が如き結果を引き寄せる。そういう意味では、得がたい才の持ち主とも言えるけど」

煮物を摘まんだ指を、ぺろりとどこか艶めいた動作で舐めながら、幽々子が飄々と笑う。

対する鈴仙は嫌そうな顔だ。今から自分があのカオスに踏み込まねばならない事を考えたからだろう。

或いは遠くで弾幕戦をしている輝夜も、あのカオスに巻き込まれるのを嫌がって弾幕戦に逃げたのかもしれない。

「……まあ、嫌ですけど私は向こうに戻ります。西宮君、飲みすぎないように」

「了解です、ドクター鈴仙」
「宜しい」

ドクターと呼ばれた鈴仙が、嬉しそうに、かつ僅かに照れたような笑みを浮かべて永遠亭のメンバー（+椛）が酒盛りをしている方へ戻って行く。

それを見送ってから、西宮は白玉楼主従に一礼。

「それでは俺もこれで失礼致します。西行寺様も魂魄嬢も、どうか楽しんで行って下さい」

「本当に礼儀正しい子ね。相手に応じて使い分けている、要領の良い子と言っべきかしら」

その一礼に対し、幽々子は僅かな笑みと共に言葉を返す。礼儀正しさを評価している一方で、しかしその口調と表情にはさして相手を褒めるような色は含まれていない。むしろ僅かに眉根を寄せる事で、否定的な感情すらその顔には浮かんでいる。

そして西宮が早苗の方へ向かうのを待って放たれた言葉は、明らかな否定要素を含んでいた。

「けど、その要領の良さが仇になる事もある。天狗や紫のように賢しさを美德とする相手には好かれるでしょうが、反面それを小賢しいと断じる相手からの心象は悪くなるわ。そうね、幻想郷の上位者の中では、鬼や吸血鬼、あとは花畑の妖怪辺りが危ないかしら」

「……幽々子様、それ本人に言っただけでしょうよ」
「いやいや妖夢、別に私は賢しさが悪いとは言っていないわよ。今はまだ、言った所で混乱するだけでしょし、賢者が幻想郷で疎まれているわけでもないしね。でも賢しいのと小賢しいのは別で、彼は未だにその境界線上に立っているわ」

幽々子は呟きながらも、再度煮物を手で摘まむ。
背後の妖夢が諦めたような溜息を吐いた。

「んー、美味し。……それで、えっとね。小賢しさと賢さの境界は曖昧だけど、私はそれはどれだけ他者を利せるかによって思っているわ。器の大小と言い換えても良いわね。自分を利する為だけに知恵を使う者は小賢しく、その過程で他者を想い得る器があれば賢者。故に賢者は慕われ、小賢しい者は嫌われる。……まあ、私見だけだね」

「その論で言うならば、天狗の里・射命丸さん達、そして自分が所

属する守矢神社の三つを利する策を出した西宮さんは、賢者に該当するのではありませんか？」

「だから私も断定はしていないのよ。言ったでしょ、『境界線上』なの。幻想郷基準で見れば些か過度なくらいに目上を立てる彼の言動は、ともすれば強者に媚びる姿勢になりかねない。外の世界にありがちな処世術で、そして彼自身もそういつた事は必要な事と考えている節があるわ。それを悪い考えとは言わないけど、行き過ぎれば信を失う。彼が守矢神社の外交交渉の窓口に成り得る立場だといふのを考えると、それは好ましくないのよね。」

そのまま指を舐め、幽々子は次にチーズフォンデュに目を付ける。小さく切られたフランスパンをチーズに浸し、嬉しそうに口に運び、

「もぐ……あら、洋酒に合いそうね。ん、ごほん。まあ、要はバランスよ。霊夢や魔理沙と違い、彼は決して強くない。故にまずは他者に礼儀を以て話す姿勢は決して悪くないわ。何の力や裏付けも無いのに、いきなり慣れ慣れしく話す輩よりは好印象ね。ただ、彼は良くも悪くも外の世界の感覚に染まり過ぎている。」

「……それがつまり、彼に感じる『小賢しさ』ですか」

「ええ。そこから先、幻想郷で真に信頼を得るにはもつと別の何かが必要。つまりは彼はこの幻想郷の住人達から本当の意味で友誼を築き、信頼を勝ち得うるのか。一人や二人じゃなく、もつと大勢から。つまりは幻想郷に受け入れられるのか。それが出来れば賢人となり得、出来なければ小才子で終わるでしょうね。」

「手厳しいですね」

「でも事実よ」

呟く幽々子の視線は宴会場の一角。

風祝たる東風谷早苗が居る場所と、そこへ向かう西宮の後ろ姿を

捉えている。

「さて、どうなるのかしらね？ 個人的にはどちらに転んでも面白い と言いたい所だけど、紫はこの神社を随分好いてるみたいだし……」

「幽々子様的にはどうですか？」

「保留ね。こんなすぐに結論なんか出せやしないわよ。ただ、悪い感じはしないわ。少し無骨な軍神様も、幼そうに見えて割と腹黒い一面がありそうな祟り神様も、天真爛漫な風祝さんも、良くも悪くも賢しげな信者さんも」

言って幽々子は、小さく笑う。

紫は幻想郷のバランスを考えて、外の世界から神々を引き込んで来たそうだが 随分とまた、信者二人まで含めて面白そうな連中を引き当てたものだと思いつながら。

そして彼女は背後に控える半人前の従者に声をかける。

「 妖夢」

「はい」

「貴方の判断でこの神社に関わり、必要だと思えば東風谷さんと西宮君に手を貸してあげなさい。彼女達も幻想郷には色々不慣れだろうしね」

「心得ました。ただ、その場合の幽々子様のお世話は……」

「白玉楼には他にもお手伝いの幽霊は居るから大丈夫よ。別段こっちに付きつきりになれってわけでもないしね。要は気にかけておいてあげなさい程度の話でしかないわ」

「そう言う事でしたら承知いたしました。……やはり先程の基準で言うならば、幽々子様は『賢者』ですね」

『結局この神社の皆さんの事を考えてるんですから』と笑う妖夢

に、しかし幽々子は頷かない。

薄く笑うだけで答える幽々子は、先の基準で言うならば自分はおくまで『小賢しい』存在でしかないと考えている。

何故ならば守矢神社の人々と妖夢が関わることの真の目的は、神社の手助けなどではなく

「結局のところ、そこ関わった事で可愛い妖夢の成長の糧になるのではないか。その目的なんですものね」

「……え？」

「なんでもないわ。それより妖夢、この煮物、味が染みてて美味しいわよ。貴方も食べて御覧なさいな」

そして桜の姫は笑いながら、従者の口元に煮物を押し付ける。

慌てて『自分で食べられます！』と騒ぐ彼女を見ながら、幽々子は思う。

偉そうな事を言ってしまったが、自分こそが『小賢しい小才子』にしか過ぎないのだと。

何故なら自分は、常に自分が本当に好きな人々の為に動き、その為に他を利用する事も辞さない悪い女なのだから。そう内心で咳きながら。

#

「あ、西宮ー！ 料理は終わってたんですか？」

「一応な」

そして幽々子と妖夢に見送られて早苗の元にやって来た西宮。

彼に一番最初に気付いたのは、当の早苗であった。歩いて来る西

宮に手を振る彼女の横には霊夢が座り、霊夢を挟んで早苗の逆隣にはレミリアが腰掛けている。

霊夢を挟んでレミリアと早苗も楽しそうに歓談している辺り、割と相性は悪くないらしい。

そして霊夢とは逆隣の早苗の横に座って、日本酒の入ったコップを傾けていた魔理沙が西宮に声をかけた。

「おう、西宮じゃないか。やってくれたなこの野郎、お前の作戦で私は天狗の里に突っ込まされたんだって？ 覚えてやがれよ」

「明日までな。っていうか俺まだお前に撃たれた部分が痛むんだが。そっちこそ覚えてやがれよこの野郎」

「今晚までな」

互いに言い合い、シニカルな笑みを浮かべ合う魔理沙と西宮。

元々サバサバした性格の魔理沙だ。恨みを引き摺るつもりは無いようで、その笑いには悪意も敵意も見えない。そこは西宮も同様である。

そして彼は早苗の横に座っている霊夢とその横のレミリアに向き直り、丁重に礼をする。

「……失礼致しました。博麗の巫女様、紅魔館のレミリア・スカレット様におきましては御機嫌麗しゅう」

「きもっ」

「西宮、どうしたんですか？ 頭でも打ちましたか？」

「おいお前、私に対する態度と霊夢やレミリアに対する態度が違い過ぎるだろ！」

対する反応は、概ね不評だった。

幽々子の懸念、早くも大当たりである。幻想郷きつての重要人物

である霊夢、並びに紅魔館の主であるレミリア。その両者が相手故に、まずは礼儀正しく頭を下げた西宮。結果はご覧の有様であった。

当の片割れである霊夢からは「きもっ」の三文字で全否定。

早苗からは真剣な目で心配され、魔理沙からはブーイングだ。

一連の反応を受けた西宮は、がっくりと肩を落としながら呟いた。

「……いや、殆ど初対面のよーなもんですし、かの『博麗の巫女』
や『紅魔館の主』相手に失礼があったら不味いかと思っただんですが
ね……」

「早苗や魔理沙から聞いてた印象と違い過ぎるわよ」

「ちゅーか私相手には初対面からタメ口だったのはどうなるんだ、
オイ」

そして霊夢と魔理沙からの酷評に、西宮が顔を手で覆って天を仰ぐ。

「……どんな印象が話されてたんですか、博麗様。あと霧雨、お前は俺との初対面がどんな邂逅だったか忘れたとは言わせねえぞ」
「様付けは要らないわよ。ぶっちゃけ慣れてないし。……あとまあ、聞いてた内容は……口が悪くて頭が回るけど弱っちい奴？」
「殆ど忘れてたっつの、その後のエイプキラーの印象が強すぎて」
「ロクな事言われてませんな。あと霧雨、その話はそこでストップ
だ」

『エイプキラーって何ですか？』とでも言わんばかりの顔を西宮と魔理沙に向けて来た早苗^{エイプキラー}。

彼女からの追及を逸らす為に西宮は魔理沙を口止めし、魔理沙は貸しになるとでも考えたのか、肩を竦めてそれを了承した。

ちなみに霊夢は元々、エイプキラー云々の話には興味が無かった

のだろう。会話内容に興味を示した様子は無い。

そして魔理沙が沈黙した事以上に、そのエイプキラーの話題を横から断ち切る声が響く。

西宮が来てから今まで沈黙を保っていた紅魔館の主、レミリア・スカーレットだ。

「つまらんな」

冷めた言葉と冷めた目が西宮に向けられる。

唐突なその言葉と態度に困惑したのは、当の西宮と早苗、そして横で話を聞いていた魔理沙だ。

その中で一番復帰と反応が一番早かったのは、レミリアとの付き合いが長い魔理沙である。

「どうしたんだよレミリア。さっきまでご機嫌に霊夢に抱きついてカリスマブレイクしてウザがられていたじゃないか。何だ、何か機嫌を損ねるような事でもあったのか？」

「機嫌を損ねる事？ 決まっているだろう、その男だ」

鼻を鳴らすような小馬鹿にした笑いと共に、レミリアは西宮を睨む。

『見る』ではなく『睨む』視線は、軽い怒りと失望が混ざっていた。

「正直な、私は期待していたのだよ。早苗は興味深い奴だ。好ましいと言っても良い。未だ未熟でありながらも霊夢に正面から立ち向かう胆力、勝てぬまでも足止めを為す実力、そして飾らず正面から相手と向かい合う心根。いずれも私からすれば好ましいと言える」

だが、と一拍を置き、レミリアは西宮を指し示す。

「その相棒という男がどのようなものかと思えば、私がここに来る前に外の世界で散々見て来た人種と同様の対応だ。露骨に強者に媚びるその姿勢、実にくだらん」

「おい、止めるよレミリア。確かに幻想郷じゃ少ない対応だが、別に礼儀正しいのが悪いわけじゃないだろ」

「かもな。だが咲夜は外の世界で、そういう強者に媚び、しかし弱者に強く出る人種のせいで紅魔館まで流れ着いたのだ。時間を操る能力以外は単なる幼子にしか過ぎなかった人間が、その能力のせいだけで吸血鬼の館にだ。その男の対応は、そういう人種を思い出させる」

「あんた意外と従者想いよね」

「うるさい黙れ。今ちよつと真面目な話をしてるんだ」

霊夢が横から呟いた言葉に、レミリアが顔を赤くして反論を返す。そんな彼女に横から食ってかかったのは早苗だ。

「レミリアさん、訂正して下さい。西宮はそんな事はしません！」

「そうか？ 言葉だけなら何とでも言える。或いはそいつがお前やその主である神に従っているのも、それが奴にとって都合が良いからに過ぎないかも知れんぞ？」

「違います。だって、外の世界では守矢神社への信仰も潰える寸前で、諏訪子様も神奈子様も殆どの力を失っておられました。私も霊力を使う事も空を飛ぶ事も出来ない、ただの小娘でしかなかったんです。だというのに西宮は私と一緒に御二柱の為に尽力してくれていました」

レミリアに反論する早苗の言葉に熱が入る。

自らの相棒を貶された事に、強い憤りを感じているのだろう。

強い視線と共に身を乗り出すようにして語る早苗に、彼女とレミアの間に挟まれる形になっている霊夢がのけぞった。

「私が失敗したら、一緒に謝ってくれました。私が変な子だと虐められていたら、私を守ってくれました。私が泣いている時には、泣き止むまで手を握っていてくれました！」

外では空回っただけで何の取り柄も無かった私と、ずっと一緒に居てくれました！
訂正して下さい、レミアさん！」

肩を怒らせ叫ばれたその言葉に、レミアは一瞬だけきよとんとした表情を返した後、肩を竦めて『降参』とでも言うように両手を上げた。

「……分かった分かった、そこまで言うか。悪かったよ、確かに第一印象だけで悪く言い過ぎた。気高き夜の王のやるべき事では無かったな。外の世界での嫌な事を思い出して、少々頭に血が上っていたようだ。早苗にもその男にも謝罪しよう」

「ってどうか私を挟んでそんな面倒そうな会話しないでよ。レミアア、あんた従者大事なのも良いけど初対面の相手に食ってかかるんじゃない。あと早苗、私に乗りかかるようにして惚気ないでっば」

未だのけぞったポーズのままの博麗の巫女が言った言葉に、レミアと早苗が『あっ』とでも言うような表情を浮かべ、慌てて初期位置に座り直す。

その両者を見て霊夢は溜息を吐き、言われた当人ながらも横で傍観していた西宮に向き直る。

「んで、言われた当人としてはどう？ 今のは正直、レミアが悪かったと思うけど」

「お構い無く。どうやらレミア様の従者が外で色々あったみたい

ですしね。……つか、これが原因で関係こじれるのは嫌なんで、無かった事で」

「分かった、私に非がある。無かった事にしてくれるならば、それはそれで助かる。 だが」

そしてレミリアは自らの非を認める発言をしながらも、西宮を鋭い目で睨みつける。

「やはり私は外の人間は好かん。私達のような幻想の住人を追いやるのはまだ理解できる。だが同じ人間を排斥する思考は理解できない。早苗は外の人間のような雰囲気は薄いが、お前は外の雰囲気をも未だに色濃く纏っている。良くも悪くもだ。それを好く者も居るし、私のように嫌う者も居る。それは覚えておけ」

「……みたいです。気をつけます」

そして睨まれた西宮は、賢しげな態度がレミリアの怒りに触れた事を自覚しているのだろう。

崩した敬語で肩を竦めるように応じ、それを見たレミリアが鼻を鳴らす。

「ふん、やはり賢しげだな。だが、もう一つ謝罪だ。私の睨みに怯まなかった点は評価する。少なくとも、臆病者ではないようだ」

「だろーな。それにレミリア。こいつ賢しげなのは表面だけで、根っこの行動理念は馬鹿丸出しだぞ。今回の異変で私と対峙した時に切った啖呵がだなあ」

「オフレコつつつてたる霧雨エ!!!?」

横合いから魔理沙が言った言葉に、西宮が思わず叫んだ。

それもその筈、魔理沙相手に今回の異変で西宮が切った啖呵

それは即ち、かつて二柱と出会った時に受けた最初の神託であり、

『早苗を泣かせない』という彼の行動の軸だ。

異変でテンションが上がっていたとはいえ、自分を鼓舞する意味もあつたとはいえ、迂闊に吼えるべきでは無かつたと内心で思う西宮。

しかし魔理沙は、これが先の異変で嵌められた反撃の好機とでも思ったのだろう。にやりと邪悪な笑みを浮かべてそれに返す。

「良いじゃないか、レミリア相手に誤解解いてやろうってんだ。むしろ感謝しろよ、なあ西宮」

「何だ魔理沙。この男、何かそんな言つのを拒むほどの恥ずかしい理由で戦つてたのか？」

「ああ、それはだな……つと、ここで話すと煩そうだ。少し離れて話をしよう。安心しろ、西宮。流石に話題に出すのは今回が

最初で最後だ。まあ仕返しと思え」

「分かつた。ではな、三人とも」

「ちょ、おま……待てエエエエエ！？」

止める西宮に構わず、箒に跨つて飛び去る魔理沙。そして魔理沙に追従するレミリア。

流石に両者ともに射命丸には劣るが、幻想郷の中でもトップクラスの飛行速度を持つ二人だ。

西宮が追い掛けようにも、その姿は瞬く間に遠くに離れて行つてしまった。

「なによ、なんか恥ずかしい理由でもあつたの？」

「……何も聞かないで下さい、俺の心が折れます」

「あつそ」

がつくりと肩を落とす西宮。

一応聞いたものの、特に興味は無かつたらしくあっさり引き下が

った霊夢。

その両者の横で、早苗が小さく首を傾げていた。

いずれ彼女が西宮と魔理沙の会話内容を知る事があるのか否か。それは魔理沙の気分次第であった。

第十八話：宴会（下）（後書き）

ちなみに魔理沙から話を聞いた後のレミリアの感想。

「ごめん、私が悪かった。あの男、凄い馬鹿なのかもしれない」

と、まあこんな感じで。マイナス印象は未だありますが、大分打ち消されたかもしれませぬ。

今後の幻想郷での彼らを書くにあたって、各々の組織の長のスタンスを全員分出そうとしたらこんな感じに。話が長く&説明臭くて申し訳ありません。

ですが、今後に向けた問題点を示す話が必要なーと。

この小説の幽々子様は、仲の良い友人や大好きな従者を最優先して、他には割と淡泊な人です。なまじ自己評価が低い分、一番策謀家としては怖いタイプかもしれませぬ。

レミリアはやや子供っぽい感情論な部分が大きいですけど、従者や家族・友人を大事にしている印象が。

西宮のスタンスって、レミリアや萃香や勇儀、幽香などには受けが悪いと思うんですね。

特にフラグ建築スキルがあるわけでもないのに、相性が悪い相手には嫌われます。そこから先で友人になれるかどうかは今後次第。それこそ幽々子が言ったように、それでも信頼を得て友誼を築けるかどうか、西宮にとっての今後のターニングポイントとなるのではないのでしょうか。

第十九話：西宮と早苗と射命丸（前書き）

タイトルはやっぱり『宴会（終）』にはせずに、この形に。
タイトル通りの三者について。
嗚呼、宴会長かった。

第十九話：西宮と早苗と射命丸

さて、レミリアと西宮や早苗の間に諍いこそ起こったものの、それはさしたる禍根を残さず終わった。

それ以外には酔いどれ同士の喧嘩から弾幕ごっこへのコンボなどは何度か発生したものの、大きな問題は起こらずに宴会は進んみ、神奈子や諏訪子は多くの人妖と酒を酌み交わし、親交を得る事に成功していた。

ちなみに来ている比率は少女や女性が多いが、河童や天狗や他の妖怪・八百万の神の中には男性も含まれていた。そうでない場合

即ち宴会場が外見上うら若き女性ばかりだった場合、西宮は宴会場に出る前に逃げ帰っていただろう。

誰も好んでガールズトークオンリーのど真ん中に突っ込んで行くとは思えない。

ともあれ、これは宴会だ。

宴会である以上、主要な飲み物は酒である。

そして紅魔館組がワインを持ちこんでいたが、宴会で消費される酒の基本は日本酒。つまりは度数の強い酒だ。

「東風谷って酒に弱いですからね。間違っても日本酒とか飲ませないで下さい」

「へえ」

故に西宮は前もって早苗の横に座る霊夢に警告しておいた。

東風谷早苗はいわゆる下戸だ。外の世界で父が戯れ半分で飲ませたビールを一缶も消費しないうちに酔っぱらう彼女、間違っても日本酒など飲ませられまい。

しかし、先んじて警告しておいたのが間違いだった。

「うへへ〜……じょういちー、飲んでまふか？」

「誰だアアアア！ こいつに酒飲ませた馬鹿はアアアア！！」

宴会の途中で抜け出し、厠に向かった西宮。

しかし厠から戻った彼が見たのは、赤ら顔で彼に絡んで来る風祝の姿だった。

そして西宮の叫びを聞いた霊夢が小さく頷き、

「ごめん、酒に弱いつて言うからどんくらいのもんか試してみようと、酒入ったコップ渡したらこんななつたわ」

「試すな！ 俺は何のためにあなたに警告したんだ！？」

「あなたも話し方が崩れて来たわね。まあそっちの方が気楽でいいけど」

叫ぶ西宮。しかし霊夢相手に力押しで詰め寄った所で柳に風だ。

『それじゃあ面倒事は任せる』とでも言いたげに、軽く席を立つ博麗の巫女。
しよあくのこんげん

「んじゃ私、適当に誰か他の奴と飲んで来るから後よろしく。……あれ？ 紫じゃない、あいつ壁に向かって体育座りして何やってるの？」

「おおおおおい！ 全放置ですか！？ この酔っ払い放置して俺に押し付けて行くの！？」

「元々あなたの管轄のようなもんでしょ。頑張りなさい」

そしてぶよぶよと浮いて紫の方へ向かう霊夢。

行かせるまいと西宮が慌てて手を伸ばすが、

「うへへー……にゃんか気分がいいれすねえ」

「掴むなああああ！ あ、クソ、完全に逃げられた！ 博麗、博麗ちよつとお前無視すんな！！」

既に敬語も完全に抜けた罵声を飛ばす西宮だが、腰に抱きつくようにして彼をホールドする早苗が彼の霊夢への追走、或いは離脱を許さなかった。

その手には空になったコップ。即ち、コップ一杯の日本酒を飲んだと言っ事だろう。

「……急性アル中とか大丈夫なんだろうな。いざとなったら鈴仙さんやそのお師匠様に頼むか。鈴仙さんのお師匠様は相当な名医だって聞くし、どうにかなる……か？」

内心で霊夢に向かって中指を立てながら、呻くように呟く。

無論永琳は名医どころか不死の妙薬まで作り得るレベルの医師であるのだが、流石に彼はそこまでは知らないのです、彼女への信頼も疑問形である。

ともあれ逃げた霊夢に内心で悪罵を向けながらも、腰に抱きついて来ている早苗が少々暑苦しいので引き剥がす事にする西宮。

剥がされた早苗は『うへー』という些か少女としてどうかと思う声と共に、力の抜けた笑みを浮かべている。

「……お前普段からアホ面晒して生きてるのに、今は更に三割増しでアホ面だな」

「だれがアホ面でふか！」

「ううむ、反撃も力が無いし。どうしたエイプキラー、必殺のコン

「グパンチは何処行った」

腕をぐるぐる振り回してパンチして来る早苗に対し、その頭を掴んで押しのける事で対処する。

早苗は別段背が低いというわけでもないが、特別長身でもない。対する西宮は現代男子高校生にしてもそれなりの長身だ。リーチが違う。

結果として頭を抑えられれば、早苗の腕は西宮に届かなくなる。

少し知恵を絞ればもっと攻撃手段がある気もするのだが、どうやら現状の酔いどれ早苗さんには攻撃手段変更という概念は無いらしい。

頭を抑えられながらぶんぶんと腕を振り回す御姿。これが現人神と言われて信じる人は少数派だろう。

「……もうこれ、社務所の布団に放り込んだ方が良いんじゃないかなあ。普段から残念な奴が、酔っぱらっていつも以上に残念になってるよ」

「あやや、風祝さんは潰れるのがお早い事で。もしかして酒が駄目な人でしたか？」

そしてその駄風祝と化した早苗の頭を掴んで押しのけている彼に、横合いから声がかかる。

一本足の高下駄に、烏の濡れ羽色の漆黒の髪。文花帖という表紙が付いた取材メモを胸ポケットに入れたまま歩いて来るのは、烏天狗の新聞記者にて今回の一連の事件の功労者の一人でもある射命丸文だ。

横合いから声をかけて来た彼女に西宮は視線を向け、頷き、

「ええ、こいつ所謂下戸です。ついでに言うと外の世界では二十

歳未満の飲酒は違法なんですよ。俺がこいつの親父さんの晩酌相手をしてたのも、実は違法です」

「なっ！？ なんとという悪法……！ 外の世界はそこまで腐り切っていたのですか……！」

驚愕し、身を震わせる射命丸。恐らく本人的には義憤なのだろう。天狗は鬼ほどではないが酒好きで知られる妖怪あり、彼女もその例外ではないらしい。そんな彼女には二十歳未満の飲酒を禁ずる法律など、信じられない悪法だったようだ。

胸ポケットから文花帖を取り出し、羽ペンで何事かを書き綴り始める。特集でも組む心算なのだろうか。

西宮の内心では、これでこの反応をするならば、かつてアメリカで行われた禁酒法についての話をしたら彼女がどんな反応をするのかという興味が湧く。流石に今は早苗が眼前で腕を振り回している状況をどうにかする方が先決なので、放置したが。

「分かりますよ、西宮さん。外の世界は悪しき帝国が酒を独占する為にそのような法を作り、民衆は酒を求めるレジスタンスとなっているんですね……！！」

「……………ええと、まあ、御想像にお任せします」

しかし敢えて訂正まではしない西宮である。

内心で彼女がこの問題について書く記事がどうなるのかに興味があつたからであつた。

ともあれ熱くなっていた事に気付いたのだろう、射命丸がそこで咳払いを挟む。

「失礼しました。……………西宮さんはその悪法の中で敢然と酒を嗜む正義の体現者だったんですね」

「別にそんな大層なもんでもありませんでしたが。こいつの親父さんと飲む程度で、ここまで大規模な宴会も初めてですしね。……飲みながら将棋とかも良くやった物です」

「将棋ですか。河童のにとりと、その親友であるウチの椀が良く対戦してますね。確か先日は　　椀の桂馬が命を賭けた特攻戦術で自爆を敢行。愛する香車への最後の台詞を呟きながら、敵の角と金を巻き添えに閃光の中に消えたとか。結果的に桂馬に仕込まれていた炸薬のせいで、盤面壊れてドローゲームだったそうですが」

「色々おかしいですよ。絶対それ色々おかしいですよ」

「椀にとりですよ？　おかしくならないわけがないじゃないですか。マップ兵器が将棋に搭載される魔改造ルールですよ、彼女たち以外には理解不能です」

胸を張って射命丸が言った言葉に、西宮が早苗を抑えていない方の手で軽く自らの顔を覆った。

川城にとりという河童については彼は知らなかったが、椀の親友という時点で色々とお察しである。

「……じょういちはお父さんと良くのんできましたよね」

そして西宮に頭を抑えられていた早苗が、彼と射命丸の会話を聞いてぼつりと呟く。

いつの間にか腕を振り回すのを止めて、俯きがちに呟かれた言葉。俯いたまま、瞳にじわりと涙が浮かぶ。

「お父さん、お母さん、げんきかなあ……」

「あ……すまん、無神経な会話だった」

酒の力もあるのだろう。外の家族を思い出してくすぐすとしゃくり上げる彼女に、西宮は困ったように言葉を返す。

射命丸は溜息を吐いて、西宮の背を後ろから押した。

「うわ!?!」

「ほら、謝るより先に慰め方があるでしょ。女の子の扱いについて分かってないわね」

記者ではなく個人としての口調で呟かれた言葉を受けながら、押された西宮はたたらを踏みながら僅かに前進。

しゃくり上げる早苗と至近距離で向かい合う事になる。

早苗はそのまま何も言わず、彼の服を掴み、胸に顔を埋めるようにしてぐずり始めた。

「……あー……俺が泣かしてりや世話無えよ、ったく」

「泣かせた自覚があるなら、泣き止むまで付き合ってあげなさいよ」

ぐずる早苗の背中を撫でる西宮に、呆れたように言う射命丸。

しかし彼女の言とは裏腹に、背中を撫でられて安心したのか、早苗の身体からすぐにぐにやりと力が抜ける。

慌てて支える西宮の胸で、早苗はすうすうと寝息を立てていた。

「……寝ましたが」

「あら無防備」

涙の痕が残る寝顔を見ながら、残った二人は言葉を交わす。

このまま放置するわけにもいかないので、西宮は早苗の背と膝裏に手を回し、抱き上げた。

「射命丸さん、神社の社務所に続く扉開けて貰えませんか？」

「ええ、分かりました。　　すいません、風祝さんが寝ちゃったので寢室に放り込んできますねー!」

射命丸が宴会の中心部の方へ声をあげる。

聞いているのかどうか怪しい酔っ払い達の声がそれに応じるが、少なくとも諏訪子と神奈子という責任者二人はこちらを見て頷いていたので、途中退席も問題あるまいと二人は判断。

射命丸が先行して戸を開け、早苗を抱きかかえた西宮がそれに続く。

そして神社に入り、入って来た戸を閉めた辺りで射命丸が呟いた。

「貴方達は外の世界に家族を残して来たの？」

「そうなりますね。以前御二柱に話を聞いた時に、どの辺まで事情を理解していますか？」

「貴方達の外での事情にはその時は興味無かったからね。早苗さんが風祝で、貴方が平信者にして神職見習い。二人して御二柱について来たって事くらいしか」

大荷物さなえを運ぶ西宮のペースに合わせるようにして、並んで歩きながら射命丸が眠る早苗の頬をつつく。

早苗は一瞬寝苦しそうに眉を顰めるが、目覚める様子は無い。

それを確認した上で、西宮は内心で思考を整理する。

レミリアは彼が外の世界の空気を色濃く纏っていると言いつ、早苗はその空気が薄いと言っていた。

しかし外への未練はその逆だ。早苗が色濃く、西宮は薄い。

そもそも早苗は外に残した両親を忘れて生きられるほど、情が薄い人間ではない。

幻想郷に来てからの狂騒のような毎日で押し流されていたが、心のどこかで引つ掛かっていたのだろう。

故に外の話題、特に家族の話は早苗が居れば出来るまい。

外の話題は彼女の心に郷愁を引き起こす。先の会話で迂闊にも西宮が口に出し、彼女を泣かせてしまったように。

だが深く寝入っている今ならば問題無いと西宮は判断。

話す相手を選ぶ内容ではあるが、横を歩く烏天狗は信頼できる。

いや、信頼したいという気持ちも西宮の中にはあった。

八雲紫が多くの天狗の中から彼女を呼び、彼女に請い、彼女はそれに応じた。

つまりはこの神社の為に骨を折ってくれた八雲紫が信頼している人物であると同時に、彼女自身もこの神社の為に尽力してくれたのだ。

無論各々の目的はあったのだろうが、それでも彼女達が行った行為に対して守矢側が恩を感じないで良いという理屈にはなるまい。

それらが西宮が彼女を信頼したいと思った所以だ。

或いは彼自身、誰かに話を聞いて貰いたいという意図も無自覚に持っていたのかもしれない。

「正確に言うならば、御二柱は俺も東風谷も連れて来る心算は無かったようです。ただ、東風谷に関しては外の世界からこちらへ来る過程で力を借りる必要があったため、御二柱は東風谷にだけ事情を語って協力を求めた」

角を曲がり、足を止める。

射命丸がその動きから察して、西宮が足を止めたすぐ横の襖を開けた。

「しかし東風谷は、幼い頃から自身の両親と同様に慕っていた御二

柱を、力を失いかけている御二柱だけで幻想の地に送り出すのよしとしなかった。故に自分もついて行くと宣言し　　後事、つまりは奴の家族と外の神社については俺に託す心算だったそうです」「だけど、貴方はここに来てるわよね？」

「それが事故だったんです。御二柱とこいつが幻想郷に来る為、外の世界で最後と呼べる奇跡を行使した瞬間　　俺は偶然、その範圍内に踏み込んでしまっていた」

襖の奥にあったのは、早苗の部屋だ。

パジャマと下着が敷きっぱなしの蒲団の上に脱ぎ捨てられているのを見て、西宮と射命丸が双方共に顔を顰める。

「結果として俺までこっちに来てしまい、逆に向こうの神社は

東風谷の両親は、俺も東風谷も居ない状態で残されてしまった」

「だからこの子は外の世界の御両親が心配ってわけね」

「恐らくは」

射命丸が下着とパジャマを拾い集め、丁寧に畳んで部屋の隅に置く。

この辺り、彼女は意外と几帳面なようだ。

そして西宮はそれで空いた布団の上に、早苗を寝かせた。

「その件については八雲様が、守矢神社が異変を起こす際の交換条件として、『外の世界に残された神社と東風谷の両親へのケア』を出して下さいました。しかし異変において逆に八雲様や射命丸さんにも迷惑をかける結果になった以上、その条件をこちらから再度お願いしても良いのかどうか……」

「貴方、この子　　早苗ちゃんは大事？」

「ええ」

「だったら頼めば良いじゃない。私や紫への迷惑よりも、この子の

事を優先しなさいよ」

そして両者は、眠る早苗を見るようにその横に座る。

西宮は正座、射命丸は足を崩した女の子座り。

両者ともに会話を継続しながら、しかし互いの顔は見ずに早苗の寝顔を眺めている。

「外面の関係もあるから、あんまり気軽に外の世界と繋ぎを取ることはできない。余り気軽にこの子の為に外と行き来してしまうと、『こいつばかりずるい』という意見も出かねないからね。でも、あの御人好しなら無碍にはしない筈よ。元はと言えばあいつが御二柱を誘わなければ、貴方もこの子も幻想郷に来る事は無かっただろうしね」

寝顔を見て小さく笑いながら、そこまで言った所で不意に何かに気付いたように射命丸が横目で視線を西宮に向ける。

「そういえば、貴方の家族は？」

「東風谷の家が俺の家族のようなもんでしたね」

「……そう」

心なしか強い語調で言われた言葉。

それに対し、射命丸は追求せずに言葉を嚙んだ。

西宮は思わず強い口調で言ってしまった言葉に、しかし恐らく分かっているように追求を止めた彼女に感謝する。

「この子を見てると信じられないわ。何でこの子、貴方を置いて行くこととしたのかしら。どう見ても、お互い憎からず思っているじゃない。それが恋慕か友誼か家族の情かは、私には分からない
いえ、多分貴方達も分かっているんだらうけど」

「そうですね、実際どうなんでしょうか？」

そして詩歌でも歌うかのような口調で、どこか期待するように告げられた言葉に、しかし西宮は照れるでも怒るでもなく、静かに首を傾げる。

「まあ、友誼はあります。家族の情も確実にあります。加えてライバル関係みたいな物も互いに持ってますし、恋慕も　こっちに
来てから気付きましたけど、多分、無いとは言いません」

「あら意外。最後の部分、自覚はあるんだ」
「薄っすらですけどね」

苦笑する西宮に対し、射命丸も僅かに笑いを返して早苗を見やる。目の端に涙の痕を残す風祝は、蒲団の上で安らかな寝息を立てていた。

「多分この子も似たような物よ。千年生きた女の勘だけどね」

「下手な根拠よりも説得力があつて怖いですね。　それで、早苗が俺を置いて行った理由ですけど」

「何か推測でも？」

「推測というか、こいつは御二柱と同じくらい御両親が好きだったってだけです。だから御二柱の方は自分が行き、俺の自意識過剰で無ければ相棒と呼べる程度には信頼してくれていた俺に、後事を託そうとした」

「成程、自分の感情は全て無視して　　か。損な子ね」
「ええ」

ともすれば、半身とも言える存在を欠いたままこちらへ来た彼女は、早い段階で精神的に潰れていた可能性すらある。

そう危惧しながら呟く射命丸に対し、頷いた西宮が早苗の目の端

に浮かぶ涙の痕を指で拭う。
むずがるように早苗が身じろぎした。

「 ですが、だからこそ。俺はこいつを放っておけないんだと思います」

「 おお熱い熱い……とでも言うべきかしらね。あんまりにも熱いんで、焼き鳥になる前に退散しましょう」

その両者の姿を見た射命丸が、いつもの韜晦するような口調で言いながら立ち上がる。

音も立てずに身を翻し、襖を開けてそれを潜り、去り際に彼女は肩越しに西宮に笑いかけた。

「 レミリアには絡まれてみたいだけだね。確かに貴方は思考や行動に外の世界の色が濃い。だけど反面、根の部分で妖怪相手にすら怯まずに、弱いながらも持てる力の限りを尽くそうとする姿は、遙か昔の大和の人間を思い出させる姿でもある。そう、私達妖怪を退治してくれようと来た、愚かしくも愛おしい人間を」

「 ……褒めているんですか？」

「褒めているのよ。好ましいと、愛おしいとすら言って良い。ああ、別に惚れた腫れたって意味じゃないわよ？　ん、もしかしたら期待した？」

「無いと言いませんけどね。美人にそう言われて悪い気はしません」

「あら、ありがとう。御世辞でも嬉しいわ……って、話が逸れたわね」

肩越しに振り向いたまま咳払いを一つして、

「 故に、私は今回少しだけ世話を焼いてあげる。紫に後で話

を振っておいてあげるし、会話次第じゃ早苗ちゃんの御両親へのケアを急ぐようにけしかけても良い」

「……それは」

破格だ。故に西宮は思わず口ごもる。

射命丸文は好ましい人種であるとかれまでの会話で感じていた西宮だが、しかし半面非常に計算高い相手であるとも見ている。故に悩む。果たして素直に受けて良いのかと。

しかしそんな彼女に対し、しかし彼女は笑って曰く、

「乙女の涙は条理と計算を覆すのが必定よ。泣いてる女の子とそれを助けたい男の子が居たら、横から世話を焼いてあげるのも年長者の権利つてもものでしょ」

「 申し訳ありません。そして、感謝いたします」
「宜しい」

その言葉を最後に、射命丸はそのまま襖の向こうに消えて行った。それを見送った西宮が思うのは、今の部分で悩んでしまう辺り、確かに自身は外の世界のレミリアが嫌うような人種に近い面があると言う事。それは今後、幻想郷で生きようと思うならば最優先で直さねばならない点だろう。

そして

「役者が違った、か」

桜が先輩と慕う烏天狗が、自分が思っていたよりもずっと懐の深い人物だと言う事。

自分も要精進かと苦笑しながら、寝ている早苗の髪を撫でる。

しかしそんな西宮へ向けて、襖の向こう 恐らく少し進んだ

廊下の先から、烏天狗が声を張り上げて来た。

「あつ、そうだ。早苗ちゃんと行くところまで行ったら特集組むから教えてね！ 何なら今襲つても、私の新聞的には全然OKだから」
「最後に落とさないで下さい！！」

しかし結局のところ、彼女の根っこは自由奔放でゴシップ好きな烏天狗なのかもしれない。なかった。

第十九話：西宮と早苗と射命丸（後書き）

宴会篇は今回で終了。

そして次回、今回の文や西宮の会話からつながる、風神録篇のラストエピソードです。

立場的に射命丸はこんな感じに。

西宮と早苗からすれば、良い姉貴分になってくれるような気がします。気を抜くとスツパ抜かれそうですが。

第二十話：東方西風遊戯、これにて開幕し候（前書き）

早苗の両親に対する描写が薄く、台詞も殆ど無いのはわざとです。どのような外見と口調の御両親かは、読者の方の想像にお任せというわけで。

ちなみに藍様に関しての過去設定は捏造。割と二次では良く見る設定ですけどね。

第二十話：東方西風遊戯、これにて開幕し候

結論から言うと、八雲紫もまた西宮とは役者が違ったと言ってしまつて良いだろう。

彼女は西宮が気にしていた今回の異変において被つた迷惑など露ほども気にする事無く、既に外の守矢神社に対する対処を始めていたのだ。

「まあ正確には異変が始まるもつと前からだけど　黙っていたのは申し訳ありませんでしたわ。射命丸から聞いたけど、早苗さんがそこまで気にしていたなんてね」

と、言うのは宴会の翌朝、守矢神社を改めて訪れた紫の言葉だ。守矢神社の本殿にて守矢勢と向かい合うように座り、彼女の訪問を受けて集まつた守矢の住人である二柱と二人を前に軽く頭を下げる。

それを受けて二柱もまた紫に、そして早苗に頭を下げる。

「いや、すまない。私達も目先の事に手一杯で、そちらに気を回す余裕が無かつた。　いや、言い訳にしかならんな。早苗の内心に気付くべきは、私達であるべきだつたらうに」

「力を取り戻して浮かれてたのかもねえ。ごめんよ、早苗」

「そんな……御二柱も紫さんも、気にしないで下さい。私がそう振る舞つてただけなんですから……」

「御三方が下手を打つたというより、今回に限っては早苗が上手く内心を外に見せなかつた、というべきかも知れませんか」

そして早苗の言葉を補強するように西宮が肩を竦め、しかし一瞬後には表情を正して紫に向き直る。

彼がこの会谈用に全員分用意した最高級の玉露に、横の早苗が気持ちを落ち着けるように口を付けた。

「それで 大変申し訳ありませんが、八雲様。早速ですが外の現状はどうなっているか伺っても宜しいですか？」

「ええ、勿論ですわ。平たく言えば」

そして早苗が茶を口に含んだ直後、紫が満面の笑みと共に言葉の水素爆弾を投下する。

「こちらに飛んだ筈の神社は向こうでは現存しており、早苗さんと西宮君は駆け落ちした事になっております」「ぶふう!？」

次の瞬間、早苗が口に含んだ玉露は緑色の噴霧と化し、レスラーの毒霧もかくやという勢いで八雲紫の顔面に襲い掛かった。

西宮は正座の状態から前に崩れ落ちるように、形容し難いポーズを晒す。

頭が地面にぶつかった時、『ゴン』という大変良い音が響き渡った。

#

「ごめんなさい！ 本っ当に申し訳ありませんでした紫さん！」

「い、いえ…… 大丈夫よ、うん」

数分後。

玉露まみれになった紫の顔を蛙と蛇の絵の付いたハンカチで拭き

ながら、早苗は全力で頭を下げていた。

紫側も非が無いわけではない。面白い反応が返ってくるだろうと言う理由で結論から伝えたのがこの結果と考えると、早苗が茶を口に含む前に言うべきだったとも言えるだろう。

いや、まさか花の女子高生が悪役レスラーのように口からジェット噴射をカマすという事態がそもそも想定外だったか。ともあれ

「八雲様、何がどうなってそんな話になったかをお教え願えますか？ 願えますね？」

正座のまま眉間に皺をよせて、西宮が紫ににじり寄る。
対する紫は頬をヒクつかせながら頷き、

「え、ええ。勿論よ。だから落ち着きなさい？ いいえ、落ち着いて」

「大丈夫です紫様。俺は今、かつてポンペイを粉碎したヴェスヴィオ火山の火砕流と同じくらい冷静です」

「例えの意図が良く分からないけど、混乱していると落ち着いていないのだけは伝わって来たわ……というかね、神社に関しては藍に頑張って貰ったのよ」

詰め寄る西宮の顔の前に指を一本立てて制し、紫は語る。

残った片手で隙間から扇子を取り出し、それで口元を隠してにやりと笑う姿は、胡散臭い隙間妖怪そのものだ。

「そもそも、何故先の異変の中で私は式神である藍を使わなかったと思う？ まあ、霊夢や魔理沙に私の関与を知られたくないというのはあったけど、それ以上に藍は外の世界で一つ仕事をさせていたの。狐らしくね」

「……ああ、なるほど！ 化かしたわけだね」
「その通りですわ」

そして守矢勢の中で、真っ先に納得したように頷いたのは諏訪子だ。

他の三名は困惑の表情を浮かべ、諏訪子と紫を交互に見る。

頷いた拍子に落ちそうになった奇抜なデザインの帽子を手で押さえながら、彼女は紫の解説を引き継ぐように語り出す。

「要はさ。こつちに持って来ちゃった神社を幻術とかで『ある』ように見せかけているんじゃないの？ その間に、偽の守矢神社を作り上げるとかかな。後は幻術で作った神社と偽の神社を入れ換えれば、神社の消失に関しては誤魔化しが効くんじゃない？ 幻術って言ったら狐の十八番でしょ」

「中正解ですわ。流石に入れ換える心算の神社を一から作るのは骨が折れますので、外の世界の廃棄された神社を元に改造中ですわね」

藍が

「何でも藍様ですか。大丈夫ですかそれ」

式任せな紫に、流石に西宮が突っ込みを入れる。

しかし紫はどこ吹く風で、

「大丈夫よ。あの子はかつては大陸で人間騙して傾国の悪女を二、三回やらかした挙句、流石に向こうに居られなくなって、日本に来た後も似たような事やって殺生石に封じられた筋金入りよ？ 騙しは御手の物。最近は随分丸くなったけど、昔はそりゃもうお転婆だったわよ」

「今凄く知りたくもない歴史の隠された事実を知った気がします。中国史と日本史的な意味で」

「殺生石？ 何でしたっけそれ。なんか三丁目の田島さんの御婆さ

んが、強盗相手に投げ付けて危うく息の根止めそうになった漬物石でしたっけ」

「殺生するのに使う石って意味じゃないからな。つか、御歳八十で漬物石投擲とか、あの婆さん絶対介護要らんな」

「なにそれこわい。ゆかりんこわい」

仮に外の世界に出ても、三丁目の田島さんとやらには絶対に近付かないようにしよう。そう決意した境界の賢者だった。

ともあれ話の筋は単純だ。

まず外で事件に対するケアをするに当たって最大の問題になるのは、『神社が消失した』という事。

西宮と早苗が行方不明になった程度ならば、二、三日程度は家出程度の言い訳で誤魔化せる。しかし神社はそうはいかない。確実に大騒ぎだ。

故に紫は真つ先に藍を派遣し、神社が『在る』という幻をその場に訪れた人間に見せる為の結界を張った。視覚のみならず触角まで騙す特別製だ。

幻想入り二日目に西宮が人里で藍と遭遇した段階で、実はその処置は既に終わっていたと言うのだから、藍の有能さが伺い知れる。

「ん、ごほん。それでまあ、神社に対するケアはそれで良いとして、次は貴方達の友人など　　つまりは貴方達二人を知る人達へのケアなんだけど」

「ああ、何か凄い説を浸透させてくれたそうですね、八雲様」

「本当ですよ。私と西宮が駆け落ちだなんて」

呆れたように言う西宮と早苗。彼らは外の世界では行方不明扱いになるだろう。

しかし彼らに対しての一般人の反応だが、これに関しては紫も藍も予想外の結論が、既に外の世界の彼らの友人の間で囁かされていたのだ。

それは即ち

「私も藍も、殆ど何もしていないわよ？」

「え？」

「へ？」

「貴方達二人が同時に行方不明っただけで、既に貴方達の友人の間で駆け落ち説が圧倒的な支持を集めてたし」

「……何故にッ!？」

「ど、どうしてですか!？」

「いや、何故って言われても私は貴方達の外の世界での言動とか知らないし……」

即ち、駆け落ち説。

神社に対するケアは初日に藍が行った為、『西宮と早苗がいきなり行方不明になった』とだけしか認識されなくなった守矢神社の幻想入り。

それは即ち、駆け落ちとして周囲の人々に受け入れられていたのだ。

これに関しては、彼ら二人の自業自得と言うしかあるまい。

登下校は一緒。西宮は早苗の実家である神社に入り浸り。弁当は二人分西宮が用意する。早苗から西宮への無防備な対応。西宮から早苗への時々見せる優しさ。

彼らと付き合いのある学友達が駆け落ち説を唱えるのも無理もあるまい。

藍と紫がやったのは、その噂を補強するような証拠を二、三用意した程度だ。

「まあとにかくそんな感じで、外の世界での神社と貴方達に関する扱いは概ねそうなってるわ。一般人相手には、ね」

「となると、例外が居るわけだ」

そして胡散臭い笑みを浮かべながらの紫の言葉に、神奈子がどこか神妙に頷きながら呟いた。

対する紫は早苗に視線を送り、ゆっくりと頷きを返す。

「ええ、その通りですわ八坂さん。早苗さんの御両親には、真実を伝えてあります」

「……っ!」

紫の言葉に早苗の身体がビクリと震える。

それを横目で見ながら、西宮が呟いた。

「親不孝をした自覚はあるみてーだな」

「……ええ」

その言葉にはオブラートに包むような婉曲さは無い。

ある意味そういう面では、彼は彼女に甘くは無い。失敗は失敗として認めただ上で、そこから先へ進むフオローをするのが早苗の相棒としての彼の在り方だ。

対する早苗の返答は、彼女らしくなく静かだった。

「紫さん……お父さんとお母さんは、なんて言っていましたか?」

「そうねえ。物凄く心配していたわよ? あとまあ、実際に力を使って見せたのが大きいだろうけど、私達のような幻想の存在を受け入れる度量は、流石に貴方の親で、西宮君の親同然の存在ね」

胡散臭い笑みを浮かべたまま、紫が扇子を持った手を水平に伸ばす。

扇子の軌道に沿うように、空間に線が引かれ　そこにありとあらゆる物理法則を無視して、空間が『開く』。

無数の瞳を内包する謎の空間、『隙間』。それを操作する事が隙間妖怪と呼ばれる彼女の能力であり、その能力は彼女以外の何者も為し得ない事を可能とする物でもある。

「まあ、そこから先は　」

そう。

幻想郷で唯一、彼女だけが幻想郷の外と中とを容易く往来する事を可能とさせる。

それは彼女自身であろうとも、他の誰かであろうとも。

「　本人達で話し合ってみたら？」

「……え？」

そして満面の笑みで告げられた言葉と共に、隙間の中から出て来たのは一組の中年の男女。

神職らしき服装をした男性と、彼に寄り添うように立っている女性。

彼らを見た早苗は呆然とした声を発し、対する二人は隙間から出るや否や、早苗の姿を見て感極まったように声を上擦らせる。

「早苗……!!」

「早苗、良かった……」

そしてその言葉を　自らを呼ぶ両親の声を聞いた早苗は、呆然とした表情からくしゃりと顔を歪ませる。

堪えるように唇を噛み締め、しかし堪え切れずに瞳に涙が浮かび、零れて行く。

その背を、不意に後ろから諏訪子が押した。

「行ってきな、早苗」

「あ……」

押された早苗が座っていた状態から、のろのろと前に進みながら立ち上がる。

同じように彼女の両親も、ゆっくりと彼女へ向けて歩き始めた。

一息に駆け寄らないのは、まるでこれが夢か幻か　それこそ幻想ではないかと疑っているからか。

しかしそれも数秒。

そう遠くもない距離を両者は詰め終わり、早苗とその両親の手が互いに触れ合った瞬間、

「　お父さん、お母さんっ！！」

「早苗！！」

「ごめんね、ごめんね早苗……！！」

三人は弾かれたように抱き合い、涙を零しながら再会を喜び合う。紫は音を立てないようにゆっくりと立ち上がり、二柱と西宮に目配せ。それを受けた三名も、各々苦笑したり肩を竦めたり、あるいは貰い泣きをしそうになりながら席を立つ。

ちなみに順に諏訪子、西宮、神奈子であった。

そして紫とその三名は抱き合う家族を残し、本殿を出る。

すぐさまぐすつと鼻を噤って、神奈子が紫の手を取って頭を下げた。

「すまない、八雲……！　ここまでして貰うとは、最早どう感謝して良いのか分からない程だ」

「大した事ではありません、とは言いませんわ。幻想郷の存在を外に知られたくない以上、外の人間に幻想郷の存在を知らせるのは好ましくありませんからね。早苗さんの御両親に関しても、本当はここまでする心算はありませんでした」

「記憶の境界でも操って、早苗の事を忘れさせる心算だった？」

「ええ、その辺りが落とし所だと思っていましたわ。ですが流石、守矢の神主とその妻と言うべきかしら。記憶を消す前に一度、早苗さんの親がどのような人が話してみたかった。故に私は彼らの前に隙間を使って現れたのですが　」

その時の事を思い出して、紫は小さく笑う。

突如現れた不気味な力を使う謎の人物相手に、守矢神社の神主夫妻がまず聞いたのは『お前は誰だ』でも『何をしに来た』でもない。『早苗と丈一を知っているか』である。

恐らく早苗と西宮が行方不明になって程無くのタイミングで現れた紫に、事件との何らかの関連性を感じ取ったのだろう。　　だとしても、怪しいどころの騒ぎではない相手にいきなりそれだ。肝の太さは流石に早苗の両親である。

そして娘と息子同然の相手を何よりも想うその対応は、紫にとつて好ましい物だった。

故に彼女は彼らに事情を説明し、自らの存在と幻想郷、そして早苗と西宮がそこに居る事実を語って聞かせた。

かくて東風谷夫妻は事情を聞き終わり、紫に告げる。

『自分達は親として失格である』、と。

目を丸くする紫に対し、彼らが告げた事は『早苗が幼い頃に語つ

た二柱の存在を、子供の絵空事と決めつけ、笑い飛ばしてしまった』
という事実だった。

或いは自分達がそれを信じる努力をしていれば、早苗は幻想郷に行く前に自分達に相談を持ちかけてくれたのではないか。

或いは自分達が早苗の様子に気付いていれば。或いは自分達もつと真剣に彼女に向かい合っていたら。

東風谷夫妻が語った内容はそのような後悔であり、故に彼らは紫に懇願した。

早苗に会わせて欲しい、と。

「
なんとというか、情にほだされたのかもしれないね。無論、
外の世界で幻想郷の存在を話さないようにする事など、幾つも条件は付けましたわ。藍が得意な妖術で、幻想郷について話を出来ないように強制をかける事も条件の内。そこまですれば、まあ彼ら自身の人柄も信用に値する物に思えましたし、幻想郷の存在が外に漏れるとは考えられないでしょう」

無論それは面倒な事である。

紫からすれば、さっさと記憶の境界を弄ってしまうのが一番手っ取り早い。

だが、その面倒を享受しても早苗と両親を再会させてあげても良いかと、紫は思ってしまった。

彼らは紫や幻想郷という、幻想の存在を認めた。

二柱について幻想郷に行くという娘の決断をも、紫から事情を聞いた上で認めていた。

しかし娘に対して真剣に向き合いきれなかった自分達を、娘の事情を察しきれなかった自分達を、娘が幻想郷に行く前に気付けなかった自分達を、ただ悔やむ。

結局のところ、そんな彼らと　そして幻想郷で両親を想って泣いた早苗の姿を見て、情にほだされた。

この件に関する紫の行動理由は、そこに集約されるのだろう。

「……八雲。後で私達も、早苗の両親と話す機会を貰えるか？」

「ええ。丸一日程度は許しましょう。流石にそれ以上の滞在は、幻想郷の管理者として許せませんけどね。それに、今回は特別

サービス。あんまりこのような事を繰り返しては、他への示しが付きません。それは分かった上でお願いします」

「分かつてるよ。ただ、早苗を巻き込んだのは私達の事情だからね。やっぱり一度、両親に謝っておくのが筋でしょ」

「まあ確かに、そうですね。でもそこら辺は貴方達に任せますわ。私は明日のこの時間にでも、もう一度やって来ます。その時に東風谷夫妻を境界の外へお返ししますが」

ちらりと紫が西宮に目を向ける。

「　自らの意思で来た早苗さんはともかく、西宮君は事故で巻き込まれたような物。望むならば、ついでに外の世界にお帰しても構わないわ。無論、その場合は東風谷夫妻と同じ程度の処置は取らせて貰うけど」

「東風谷はこっちに残るんでしょう？」

「ええ。彼女は自分の意思でこちらに来るのを選んだ。そうである以上、そう易々と向こうに帰すわけにはいかない。境界の管理者としての、それはルールよ」

「成程。　ならば俺の返答は決まってるような物でしょう」

「そうね。愚問だったかしら」

西宮の返答に対し、紫は小さく笑ってそれに応じる。

そのまま自らの眼前に境界を開き、彼女は西宮達の眼前から去って行った。

それを見送り、諏訪子が呟く。

「大きな借りが出来ちゃったねえ」

「そうだな。或いはそこまで計算の上なのかもしれないが、だとしてもこれは大きな借りだ。そうそう返し切れないほどに、な」

本殿の中から漏れ聞こえる会話は、早苗と両親が互いに詫び合っている事を伝えて来る。

早苗は自らの短慮と親不孝を。両親は自分達が早苗を理解し切れずにいなかっただけを。

それを聞きながら、彼らは足を社務所に向けた。

「まあ、まずは親子水入らずで話させてあげましょう。俺や御二柱が東風谷の御両親に話をするのはその後で」

「私なら、まずは『誰だお前ら』とか言われそうだけどね。向こうじゃ見えてなかったし」

「俺が言いましたよね、それ。あの時は本当に失礼しました。しかしぶっちゃけ誰かと思いましたが、マジで」

「まあ流石に、今回はあの時と比べて事情の説明が出来ている分は楽だろう。丈一の事は完全突発事故だったしな……」

思い出して苦笑する三人。

そして

#

「では、皆様。これが最後ですので、心残りの無いようにお願いしますわ」

そして、翌日 守矢神社の前。

そう宣言する紫が開いた隙間の前に、東風谷夫妻と早苗、そして西宮と二柱が立っていた。

東風谷夫妻と、幻想郷の守矢神社に残る者達の別れの時だ。

昨日は多くの事を話したと、西宮は思う。

神奈子と諏訪子は早苗を連れて来てしまった事を夫妻に詫び、しかし夫妻も神を祀る身でありながら神に気付きすらしなかった自らの不甲斐なさを詫びた。

西宮自身は夫妻から、娘をくれぐれも宜しく頼むと念を押された。まるで娘を嫁に出す両親である。否、或いは本人達は殆どその心算だったのかもしれない。外では駆け落ち説が流れている事でもあるし。

早苗の父は晩酌相手にして将棋の相手でもあった西宮が居なくなる事を残念がっても居た。

『娘と息子が一度に離れて行くのは寂しいものだ』という言葉に、不覚にも涙腺が緩みかけたのは彼だけの秘密である。

早苗と両親が一番長く語り合い、そして昨晩は三人そろって同じ布団で語り明かしていた。

そして今、或いはこれが今生の別れである可能性が高いのも気付いているのだろう。

「お父さん、お母さん……今まで本当にありがとう」

隙間に入らんとする両親に、早苗は涙を堪えながら、必死に笑み

を向けていた。

これが今生の別れになるなら、故にこそ笑顔で。
それが彼女が出した結論のようだ。

「不甲斐ない神で済まなかった。早苗の事は任せてくれ」
「早苗に不自由させないよう、私達も頑張るからさ」

二柱は夫妻へと安心させるように言葉をかけている。
無論それは言葉だけの物ではなく、紛れもない本音で本気だろう。
彼女達にとっても早苗は娘のようなものだから。

「今まで本当にありがとうございました。俺にとっては貴方
達が本当の両親のようなものでした」

そして西宮は、夫妻へ深々と頭を下げた。
それら一連の言葉を受け、夫妻は二柱へ重ねて娘と息子を頼むと
頭を下げ、早苗と西宮を最後にもう一度だけ強く抱きしめ、そ
して別れの言葉と共に、外の世界へと続く隙間へ入って行き、程無
くしてその隙間が消え去った。

「……………う、ああ……………ぐずっ……………!!」
「ああ、クソ……………行っちゃったか」

そこが限界だったのだろう。早苗が嗚咽と共に涙を流し、崩れ落
ちる。

西宮もその横でごしごしと袖で目を拭い、空を見上げる。

「……………諏訪子。私達は本当に、神失格かもしれんな」
「ああ、全くだよ。自分らを信じてくれた信者、その親子の間を割
くなんて神様失格どころの騒ぎじゃない。だけど、だからこそ……………」

幻想郷でのこれからの生活で、あの二人にこっちに来て良かったと思わせるほどに幸せにしてやろうじゃないか」

二柱がその二人の姿を見て、これからの幻想郷での暮らしへ決意を新たにすする。

そして

「ええ。八坂神奈子さん、洩矢諏訪子さん。東風谷早苗さん、西宮丈一君。幻想郷は貴方達を受け入れましょう」

そして守矢一家のその姿を、優しく微笑みながら見守る賢者がそう告げる。

両手を広げ、温かく微笑み、境界を司る優しき賢者は宣言する。まるでこれが始まりだとも言うように。

「改めまして、忘れ去られし者達が集う地へようこそいらっしやいました。私は境界の管理者として貴方達を歓迎しましょう。さあ

」

そう。これにて開幕は終幕。^{プロローグ}_{おわり}

「ようこそ幻想の地へ。幻想郷は全てを受け入れますわ」

東方西風遊戯。正しくこれより、開幕し候。

第二十話：東方西風遊戯、これにて開幕し候（後書き）

長かった　　そして難産だった風神録篇のエピローグ。
そしてこれがプロローグの終わりとなります。

次は緋想天　　の前に、彼らの幻想郷での生活を描く日常篇で
すね。

長いプロローグでしたが、今後もお付き合いの程宜しくお願い致
します。

とりあえず今回まででシリアス書き疲れたんで、次回はギャグを
書こう……。。

第二十一話：愉快過ぎる忘れ傘（上）（前書き）

日常篇スタート。一発目の題材は題名の通りのお方です。

星蓮船組の中で数少ない、星蓮船開始前から幻想郷に居るっぽいお方。

早苗とは二次創作での絡みも多いですね。

小傘は人を驚かして空腹を満たす事も出来るけど、普通のご飯で空腹を満たす事も出来る感じで。

第二十一話：愉快過ぎる忘れ傘（上）

後に風神録異変と語られる異変　　より正確に言うならば、異変というよりも守矢神社が博麗神社に吹っ掛けた喧嘩が終了し、数日が経過した。

早苗と西宮は各々が布教活動をしたり、それぞれに出来た友人と交友関係を深めたりといった日々を送る中、とある一つの事件に遭遇する。

それは一人の少女が守矢神社を訪れた事が始まりだった。

「うう……おなか空いたよう」

へろへろと力無い様子で浮遊しながら守矢神社へ向かうは、水色の髪とオッドアイ、そして紫色の大きな唐傘を持つ一人の少女だ。ただし、持っている唐傘はただの唐傘ではなく、無論それを持つ少女もただの少女ではない。

唐傘に付属しているのは一つ目と口、そしてべろんと飛び出す長い舌。その唐傘を持つこの少女、名を多々良小傘と言い、いわゆる付喪神の一種　『からかさお化け』であった。

そして人を食う妖怪ではないものの、人を驚かす妖怪ではある彼女。

人食い妖怪が人を食べて腹を満たすように、彼女は人を驚かす事で空腹を満たすという特性を持っていた。

便利であろう。食料要らずであろう。しかし彼女はここしばらく、人の驚きではなく山で拾った木の実を齧る事で空腹を紛らわせていた。

それもその筈。彼女は致命的なまでに人を驚かすのが下手な妖怪であった。

大昔ならば良いかもしれない。しかし現代、それも妖怪が平然と闊歩するこの幻想郷で、昼間に真正面から近付いて『うらめしや！ おどろけ！』と元気に叫ぶ少女に驚く輩が、果たしてどれほどいるであろうか？ 正直言つと昔でもあんまり居なかった。

故に彼女は随分と長い事、人間を驚かして腹を満たした事は無い。驚かそうとした人間に何故か食料を恵まれたり、特に御老人などには人気が高い小傘であるが、そうやって人に頼つてばかりでは仮にも妖怪としての矜持が廃る。

なればこそ、彼女は今日もこうして人を驚かそうと努力を続けているのだ。

努力の前に『無駄な』という三文字を幻視する者も多かるうが。

「……山の上の神社には、外から来たばかりの人間がいるって聞いたし……きつと驚いてくれる筈。わちき頑張れっ！！」

えいえいおーと拳を振り上げ、小傘は未だに先の魔理沙による天狗の里襲撃事件の被害から復旧が終わっておらず、警備がザルな妖怪の山を上って行くのだった。

#

その日も山の頂上の守矢神社では、弾幕戦が繰り広げられていた。

「少しかマシになったツスねえ。でもまだまだ！ 無駄無駄無駄無駄アッて所ツス！！」

「くっそ、この駄犬が……！」

神社の前で戦^やり合っているのは二つの影。

『の』の字に形成された弾幕をバラ撒きながら接近する椛と、近接しようとする彼女を突き離そうと霊弾で抵抗する西宮だ。

互いに放つ弾幕の数比は、椛が七とすれば西宮は三がせいぜいだ。それが即ち、両者の間に存在する純然たる馬力^{パワー}の差でもある。

これでも来た当初に比べれば随分抗戦出来るようになったのだが、それでも勝負の天秤は常に椛の方に傾いている。

魔理沙を相手にした時と違い、『勝負に負けても大局的に勝てばいい』とかいう話ではなく、純粋な訓練だ。変に策を巡らす余裕も意味も無い分、勝負は純然たる地力の勝負。

そこでは未だ、西宮が椛に勝てる目は存在していない。

結局弾幕に気を取られて西宮が椛の姿を見失った次の瞬間に、彼女は弾幕の影に隠れて地を這うような超低空から懐に飛び込み、

「必殺う！ 天狗剣Vの字斬りッス！！」

「げぶはっ！？」

訓練用の木刀を、早苗から借りた漫画を見て覚えた技名を叫びつつ容赦の欠片も無く西宮の身体に叩き込んだ事で、この日の訓練は終了と相成った。

縁側に座って眺めていた、今日の分の布教活動を終えて帰って来ていた早苗が手を上げて宣言する。

「勝負あり！ 勝者椛さん！」

「あいあーむ あ ちゃんぴょーん！ ……ん？」

「どうかしましたか？」

そして両手を上げ、発音がおかしい外来語を叫ぶ山の千里眼。テレグノシス

しかしその喜びの動作が不意に止まる。

鳩尾を強打されてのたうち回る西宮の苦悶の声をBGMに、早苗の疑問の声を聞きながら椀は麓の方角を向いて目を細める。

「勝負に気を取られて気付いてなかったツスけど、誰かがこっちに向かって来てるツスね。紫色のでっかい傘を持った女の子ツス。もう随分近いツスよ」

「女の子？ 参拝客の人かなあ」

椀の言葉に早苗が小さく首を傾げながら、西宮の苦悶の声をBGMに思考する。

果たして人里で布教活動をした時にそのような少女は居ただろうか。

或いは二柱が妖怪の山付近で勧誘した信者かもしれない。

そしてそうやって彼女が思考していると、確かに椀が言う通り大きな唐傘を手にした少女が、変にふらふらとした飛び方で守矢神社の前に西宮の苦悶の声をBGMに到着した。

そのまま彼女はふらふらと早苗に近付いて来て、

「う、うらめしやく！ 妖怪だぞー、おどろけー！！」

顔を真っ赤にして必死な様子で両手を掲げ、威嚇のようなポーズと共にそう告げたのだった。

『なにこれかわいい』。

東風谷早苗、多々良小傘と初遭遇時の第一印象はそれであった。

#

「……成程。人を驚かす妖怪なのに、なかなか人を脅かせないと」
「難儀なもんツスね」

「うう……幻想入りしたばかりの外の人間にすら驚いて貰えないなんて、わちきって駄目な子なんだ。……あ、この雑炊美味しい」
「お前らその会話の前に俺に言う事あるよな？ ガチ放置した拳句に強制復活させてメシ作らせた俺に対して何か言う事あるよな？」

そして数十分後。

西宮も含めて彼ら四人は、神社の縁側で並んでいた。

小傘の前には西宮が作った雑炊があり、彼女は会話をしながらぱくぱくとそれを食べている。

早苗が驚かないと気づき、空きつ腹を抱えて泣きそうになってしまった小傘を見て、椀と早苗が慌てて西宮を叩き起こして対処をさせようとしたのが始まりだ。

鳩尾が痛いままに左右の手を掴まれて、NASAに連行されるリトルグレイのような感じで小傘の前に引っ立てられた西宮。

早苗曰く、『な、何かお困りだったら守矢神社の代表として話を聞きましょう！』西宮が『である。』

事情を理解する努力すらせず、全力で解決を瀕死の相方に投げた早苗の姿は、いっそ神々しいまでに潔かった。

そしてぐすぐすとぐずりながら小傘が言った、『おなか空いた』の言葉を聞き、西宮がふらふらしながら昨日の夕飯の余りで雑炊を作って提供。今に至る。

ちなみにその過程で彼は小傘に事情を問い、左右の椀と早苗も含めて、彼らは小傘の名前と悩みを聞くに至った次第である。

「そうツスね……西宮君」

「おう」

そして『お前ら俺に何か言う事あるだろ』アピールをする西宮に、椀が向き直って一言。

「ボクの分は無いんスカ？」

「帰れよ駄犬。むしろ家に帰るんじゃないかと土に還れ」

西宮は中指を立てたハンドサインでそれに応じ、椀は何か間違っただかと首を傾げる。

そんな心温まる言葉の弾幕を聞きながら、早苗はふと思いついた事を小傘に聞いていた。

「小傘さん」

「……なに？ この雑炊はわちきのだよ？」

「いえ、そうじゃなくて。もし私が貴方の悩みを解決する事が出来たなら、貴方は守矢神社を信仰して下さいますか？」

「え……」

そして言われた言葉に小傘が雑炊を食べながら思考する。数秒の思考を経て『雑炊が美味しい』という結論に至った小傘、力強く頷いて、

「この雑炊美味しいね」

「そうでしょう？ 西宮の料理は絶品ですよ」

「お前ら放置しておいたら光の速さで脱線を始めな」

いきなり話をすつ飛ばした小傘と、即座に流されかけた早苗。その二人に横合いから西宮の突っ込みが入る。

彼は大きくこれ見よがしに溜息を吐き、

「多々良だったか。見ての通りウチは神社で、しかも外から来たばかりで信仰を集めている真っ最中だ。こいつはお前の手助けをする事で信仰を集めたいらしい」

「手助けって……わちきでも人を驚かせるようになるの？」

「生憎そこまでは保証しかねる。俺はその駄犬にボコられた拳句に料理まで作らされたんで、体力的に限界なんでとりあえず休みたいから手助けはしかねるが……」

「西宮、貴方は外道ですか！ こんな可愛らしい子の悩みを聞いておきながら、寝るのを優先で放置するなんて」

「手伝っても良いけど、その場合俺は今日の夕飯を作るのを放棄するからな」

「小傘さん、西宮は疲れているので今は休ませてあげましょう。大丈夫、私が貴方の力になります！」

胸を叩いて請け負う早苗。

直前までの西宮との会話を見ると、間違っても頼もしくは映らないであろうその姿が、しかし

「さ、早苗……！ わちきの為に、ありがとう……！」

しかし、天然系唐傘お化けである多々良小傘には、どういう脳内化学反応の結果かは知らないが、とても頼もしそうに見えた模様である。

拳を胸の前で握って早苗を見つめるその視線は、まるで神を見るような視線だった。

いや、早苗は一応現人神なので間違つては居ないのだが。

「ふつ、早苗さんだけに良いカツコはさせないツスよ……。ぶつちやけ今、魔理沙さんの襲撃の影響で山の警備隊が実質機能してないツスからね。ボクも今は暇ツスから、手を貸すツス」

「椀さん、貴方は……貴方こそ天狗の鑑です！」

「ふふ、そんなに褒められると照れるツスよ」

「あ、ありがとう！ 二人とも、本当にありがとう……！！！」

「いける……このメンバーならやれる！ 友情、努力、勝利……今なら負ける気がしません！ もう何も怖くない！！！」

そして明らかに暇つぶしの為に手を貸す事を宣言する椀。

早苗と小傘はそんな駄犬の手を握り、感激もあらわに叫ぶ三馬鹿娘。

そんな三人を見ながら

「とりあえず夕飯時には全員戻ってこいよ。人数分作っておくから」

西宮は既に突っ込みの努力を放棄し、椀との模擬戦でダメージを受けた身体を癒す為に自室に戻って眠りに向かうのだった。

或いはこの時、彼がもう少し真剣に事態を受け止めていれば後にあのような悲劇は起こらなかったのかも知れない。

多々良小傘改造計画。

彼女が人を驚かせるようになる為に、早苗、椀、小傘の三馬鹿娘の出陣であった。

第二十一話：愉快過ぎる忘れ傘（上）（後書き）

後書き短期連載計画：

早苗さんが外の世界の学校で受けたテストに対して、西宮君とドクター鈴仙がコメントを返すだけの企画です。

基本的に一話一問。

後書きで企画を行う事に対し、何か問題点などあれば言って下さい。

問1・化学

Q・硫化鉄は何と何が化合してできる物質ですか？

西宮回答・Fe（鉄）とS（硫黄）

早苗回答・一步を引ける余裕と決して引かぬ志

西宮「どう考えても反物質です。本当にありがとございました」

鈴仙「硫化鉄なのに鉄すら出て来ないのね……」

西宮「あいつを高校に入れるのに、俺がどれだけ苦労したか……」

第二十二話：愉快過ぎる忘れ傘（下）

「まず認めなくてはいけないのは、小傘さんには単独で状況を打破する程の戦力が無いという事です。戦術論の話になりますが、戦力的に劣る状況で目的を達するには奇襲と罠なのです」

「うん。良く分からないけど早苗って頭良いんだね」

トリオ・DE・馬鹿もとい早苗、小傘、椀の三人は神社の縁側に腰掛け、西宮が寝る前に置いて行ってくれたお茶と煎餅を肴に作戦会議を開いていた。

司会進行役は早苗。外の世界でPC版三国志をやらせたところ、まさかの袁術に敗北する曹操という奇跡を披露した、常識に囚われない戦術家である彼女の見識に期待が集まる。

分からない人の為に平易に例えると雑魚妖精に敗北する霊夢でも想像して貰えれば分かり易からう。或いはドラキーに敗北する魔王バラモスか。

ちなみにその手のゲームは性格が出る。

他の守矢勢がやった場合は、西宮は内政を重視して自領土の内政値をマックスまで上げて黄金楽土を築き上げ、神奈子は軍勢を整えモンゴル騎馬民族の如き侵略国家を作り出し、諏訪子は謀略戦で他の国を陥れる有様であった。

そして奇跡の軍略家、東風谷早苗。彼女が思い出したのはゲームをしながらの自らの相棒と、仕える軍神の会話である。

「聞け、丈一。本来であれば敵より圧倒的な大軍を擁し、装備と兵站を整え、指揮を系統立て、情報を十分に集めた上で戦うのが常道である。しかしそれが出来ぬならば、罠と奇襲が少ない戦力で目的

を達成する為の有効な手段になると心得よ』

『神奈子様ってRPGやらせると、確実にレベルを上げまくってから戦うタイプですよね』

『軍神に負けは許されん。勝てる状況を作り出してから戦うのが仕事である』

重々しく頷く神奈子の前で、しかし西宮がコントローラーを握っているゲームは三国志ではなく早苗が持っていたスパロボだった。

あのゲームに限って言えば戦争に重要なのは神奈子が言ったような事よりも、気合と勇気と愛と友情である。精神論は物理を凌駕するのだ。

それはともかく
閑話休題。

早苗は奇襲と罠という言葉を出しながら、自らの所見を眼前の二人に述べた。

「つまりは、相手を驚かすという事も奇襲と罠に尽きると思われます。奇襲も罠も相手の裏を突いたら勝ちだって西宮と神奈子様も言っていました」

「あー、あの二人だったら言いそうッスね。んじゃ具体案は？」

「私に考えられる罠と言えば、落とし穴の底に竹槍を置くくらいですが……」

「や、止めようよ！ 驚く前に死んじゃうよ！！」

物騒極まりない早苗の言葉に、流石に小傘が慌てた様子で訂正を要求する。

その言葉に椀も頷き、

「竹槍には糞尿をまぶしておく、傷口の治療が難しくなって殺傷性が上がるッスよ」

「追求するのはそこじゃないよ！ 意外性を考えようよ！！」

「じゃあ竹槍抜いて糞尿残して、落とし穴の底に糞尿を敷き詰める
感じでどうですか？」

「それ、単なる肥溜じゃないかな……」

突っ込みながら小傘は考える。

糞尿と竹槍はともかくとして、一理はあると。

正面から勝負を挑むばかりが戦術ではない。奇襲　　そう、正
面から声をかける以外にも脅かす手段はあるのではないか。

そう、時代は意外性。まさに目から鱗である。

忘れ傘の付喪神、多々良小傘。この結論に辿り着くまで、妖怪と
しての発生から軽く百年程度を必要としていた。

「殺傷性は可能な限りパージするとして、意外性を重視するのは良
いかも」

「ではその方向で。後は小傘さん、今時『うらめしやー』は無いで
すよ。些か古典的に過ぎると言わざるを得ません。古典を否定する
わけではありませんが、時代は常に先へと進む潮流のような物。過
去の常識に拘り過ぎてはいけませんよ？」

「う……じゃあ早苗、どんな掛け声が良いと思う？」

「そうですね……新たな必殺の脅かし方を考えるにあたって、必殺
技ならば愛を叫ぶのは必須でしょう。とりあえずアモーレと叫んで
おけば」

「アモーレ……！！」

イタリア語で『愛』を意味する単語を力強く呟く純和製の唐傘お
化け。

既にこの時点で大分どうしようもない予感がする光景だが、そこ
に椀が更に一石を投じる。

「ボクは古典を大事にしたいツスねー。折角小傘さんは唐傘お化けなんスから、古典を大事にしたワビサビも欲しい所ツス」

「じゃあ実際の驚かし方の古典という事で、こんにやくでも使いますか」

「それだよ……！」

「流石ツス、早苗さん！ その発想力……！」

お化け屋敷の古典、こんにやく。

相手の首筋にぴとりとくつつける事で、敵の驚愕の感情を引き出す魔法のアイテムである。

食べると美味しい。

「あつ。でも、わちきは昔こんにやくで人間を驚かそうとしたけど上手いかなかったよ？」

「使い方次第ですよ。古典的にこんにやくをペタリと付けて驚かそうとするから上手いかないのです。そう、古典であるこんにやくを用いて、新たな地平の開闢を目指すのです」

「具体的には」

「全力でぶつければ相手驚くんじゃ不是吗かね？」

「それツス！」

「その発想は無かったよ！ それならきつと相手も驚くね！」

確かに驚くだろうが、その使用方法でこんにやくである必要性はあるのか。

そのような真つ当な突っ込みをする人材は、現在社務所の奥でプツ倒れるように眠りに落ちていた。

かくしてアモーレの雄叫びと共にこんにやくをぶつけて来る、全く新しい唐傘お化けの誕生である。

境界の賢者や月の医師ですら想像の埒外であろう生命体が、今こ

ここに生まれたのだ。

トリオ・DE・バカはやり遂げたような表情で互いに頷き合い、

「じゃあ早速、こんにやくを相手にぶつける特訓を開始しないといけないッスね」

「そうだね。弾幕とはわけが違って、手で投げる必要性があるから……上手くいくかなあ」

「大丈夫ですよ、私が教えます。私、学校　こちらで言う所の寺小屋で行われたソフトボール大会で、一年C組を優勝に導いた女です。　全弾デッドボールで敵チームが居なくなったため、繰り上げ優勝って感じてでしたが」

当てるのは得意なんですよねー、などと笑う早苗。

未だに彼らが居なくなつた高校で語り継がれる、『東風谷七伝説』の一つである『曲がる死球』である。

逃げるバッターを追尾するカーブ、フォーク、シンカーなどなど。狙つてもこつはいくまいという精度と角度を以て存分に人体急所に突き刺さるボールは、翌年以降の女子球技大会からソフトボールの項目を消し去るだけの破壊力を持っていた。

そしてそんな早苗に残りの二名は尊敬の目を向ける。

「早苗！　わちきはこの神社に来て、早苗と椛に相談して本当に良かったよ……！　絶対この神社を信仰するから……！」

「恐るべしは守矢の巫女つて所ッスね……ふっ、このボクともあるうものが、心の底から尊敬してしまうとは……」

「ふふ、大したことはありません」

ぼよんと胸を張る早苗。ちなみに胸部戦闘力では早苗>椛>小傘

である。

しかしそうして胸を張る早苗に対して、小傘がしょぼんとした様子で呟いた。

「……あ、でも……食べ物で粗末にしちゃいけないって、昔言われた事があるよ」

「あ……確かに食べ物を使い捨ての投げ武器にするのは不味いかもしれませんか」

「ボクに考えがあるッス」

浮上した新たな問題に、どうしたものかと悩む小傘と早苗。

そこに椀が手を掲げる。

彼女は『私に考えがある』という台詞が失敗フラグであるどころの司令官のように、自信ありげに声を上げた。

「紐でも手元と繋いで、回収可能にしとけばいいんじゃないッスかね？」

「……それだっ！！」

かくて方向性を完全に決めた三人は行動を開始する。

文の家の氷室から勝手にこんにやくを拝借し、河童のにとりの手を借りてこんにやくと小傘の手元を結ぶ強靱なワイヤーを用意し、椀がコネを持つ竹林の天才医師からこんにやくの腐敗を防ぐための防腐剤を仕入れ、早苗の指導の元で大昔のスポ根漫画もかくやというノリで小傘がこんにやく投擲の練習をする。

そしてその一週間後

#

その日、上白沢慧音は人里と竹林を結ぶ道を歩いていた。時刻は黄昏を過ぎうす暗くなつて来た夜道を、灯りの入った提灯を片手に足早に人里へ向かう。

「いかなな、遅くなつてしまったか」

彼女は今、竹林にある友人　藤原妹紅という少女の家に行つて来た帰りであつた。

本来であれば日が落ちる前に人里に帰る心算であつたが、生憎と話しこんだ結果、少々予定の時刻をオーバーしてしまつたようである。

しかし彼女に焦りは無い。元より半人半獣、正確に言うなれば半ばが神獣の血を引いている彼女は、それなりには腕が立つし、夜目も利く。野良妖怪程度に襲われた所で怖くは無い。

故に彼女は、道行く先に佇む妖怪少女の事もさして気にはしなかつた。

紫色の大きな唐傘を持った妖怪　正確に言うならば付喪神。人里にて人を驚かそうと頑張つていたものの、結局成功せず泣いて帰るような無害な少女だつた筈だと慧音の優秀な頭脳は記憶している。

「やあ。確か人里でたまに見る付喪神だつたな。また人里で人を驚かすのに失敗したのか？」

「うっん。今からわちきは貴方を驚かすの。覚悟して貰つよ、人里の守護者」

「……なんだと？」

そして距離が近づいた所で、慧音は自分から少女　　多々良小傘に声をかけた。

しかし返ってきたのは爛々と輝く戦意の瞳

慧音へ向き直った小傘の表情は決意に燃え、明確な戦意を伝えて来ていた。

どういう心算かと、慧音は内心で首を傾げる。

目の前の少女は決して好戦的な妖怪ではない。むしろ臆病で、尚且つ他人を脅かそうと頑張るが、それ以上の危害を加える事を積極的に嫌がるような人物だった筈だ。

だが彼女も妖怪。

何か思う所があったのかと、慧音は内心で小傘への警戒ランクを一段階上げる。

距離を保ったまま、いつでも動けるような半身の姿勢を取り、彼女は小傘に向かい合った。

「……何の心算かは知らんが、それは私と戦う心算だという事で良いのか？」

「うん。　　人里の守護者、つまりは人里で一番厄介な貴方を驚かす事で、わちきはきつと人を脅かす唐傘お化けとして真に生まれ変われるんだ……!!」

そして小傘が懐から取り出したスペルカードを宣言する。

「“傘符”　　こんにやく特急ナイトカーニバル!!」

「……は？」

そして湖畔の吸血鬼もかくやという狂った命名のスペルカードを叫ぶと同時。

小傘は弾幕を放つでもなく、一本足から高々と振りかぶり、

「アモーレ!!!」

愛を叫びながらその手に握ったこんにやくを全力で投擲した。

さて。

多々良小傘は華奢な少女であるが、妖怪である。

そして妖怪は総じて単純な身体能力ならば人間よりも遙か格上だ。霊力や魔力で強化すれば霊夢や早苗、魔理沙などの人間でも一時的にその身体能力を手に入れる事は出来るが、この場合の問題は小傘が一般的な外の世界の人間よりも高い身体能力を持っていた事。

豪快なオーバースローから放たれた長方形のこんにやくは、風を切る轟音と共に外の世界で言うプロ野球選手が放つストレート並の速度で慧音の顔面に迫ったのだ。

「ん何イイイイ!!?」

しかし慧音もまた、半分は人外。

顔面に迫ったこんにやくを、投げられたブツが慮外の物体であったが故に一瞬硬直したが、辛うじて回避する。

これが弾幕であればもう少し余裕を持って回避したのだろうか、流石にこんにやくが弾幕ごっこで投げられるとは、知識と歴史の半獣を以てしても予想外であった。

そしてこんにやくの全力投擲自体が予想外ならば、続く事象もまた予想の埒外。

辛うじて回避に成功した彼女の目線の先で、こんにやくを投げた小傘が何かを全力で引き絞るような動作をした次の瞬間、慧音の後

頭部に湿った柔らかい何かが高速でぶつかる強烈な衝撃が走ったのだ。

「なん、だと……!?!」

ボクシングで言うラビットパンチ。

後頭部を直撃する衝撃で脳が揺らされ、慧音の身体がぐらりと傾ぐ。

その瞬間、時刻が時刻の薄暗闇故に見え辛かった物　慧音の顔の横を走る、こんにやくに繋がったワイヤーが目に入る。

避けられた直後にこんにやくに繋がるワイヤーを全力で引き寄せて、慧音の後頭部にこんにやくを直撃させた。

くらくらと揺れ、暗闇に落ちて行く意識の中　慧音はその事実には驚愕していた。

別に弾幕勝負に使う弾幕の規定は無い。

それこそ陰陽玉から霊弾、レーザー、果ては投石ですら弾幕として認められるだろう。

しかしだからと言ってこんにやくを投げ、更にそれをワイヤーで繋いで疑似的に誘導弾にするとは、完全に思考の埒外。斜め上だ。

というか。

「何故、こんにやく……」

その言葉を最後に、上白沢慧音の意識は闇に沈んだ。そして

「や、やった!　この人凄く驚いてたよ!　やった、わちきやった

んだ！ わちきでも人を驚かせるんだー！！」

この瞬間、多々良小傘は『アモーレと叫びながらこんにやくを投げて直撃させれば人は驚く』という勝利の方程式を確信した。後に更にこんにやく投擲を極めて猛威を振るう、『アモーレからかさこんにやくお化け』多々良小傘の誕生の瞬間だった。

或いは西宮が寝ずに話に付き合っていたら、こうはならなかったのかもしれない。

東風谷早苗 “奇跡を起こす程度の能力”を持つ、山の上の巫女。

彼女の能力が巻き起こした、傍迷惑な負の方向の奇跡であった。

第二十二話：愉快過ぎる忘れ傘（下）（後書き）

アモーレ。

小傘まさかのワープ進化。きっと星蓮船では弾幕の中にこんなにやぐが混ざって飛んできます。

ちなみに予想外過ぎて硬直してしまっただけで、本気でやり合えば慧音VS小傘は九割以上が慧音の勝ちです。満月なら十割。

#

早苗さんテスト問題

感想で頂いた問題は次回以降に。面白い回答が中々出て来ませんでした。

問2・数学

Q・ $2x + y \parallel 5$ $x + 2y \parallel 4$ これを満たすxとyを求めなさい

西宮回答・ $x \parallel 2$ $y \parallel 1$

早苗回答・西宮の回答と一緒にお願いします

西宮「当人曰く、『何も思い付かなかった時の最後の手段』」

鈴仙「最後までもやらないわよ」

西宮「流石に先生も愕然としたらしい。常識に囚われない辺りは流石だが」

鈴仙「テスト回答は常識で考えましょっしょ…」

第二十三話・河童と携帯電話（前書き）

忙しかったため、数日間が空きました。

まあ流石に毎日更新は厳しくなってきたので、ペースは少し落とそうかと考えています。

ご了承ください。

第二十三話：河童と携帯電話

「河童が好きかもしれないわね、そういうの」

「……この携帯ですか？ 型落ちですけど」

「こつちじゃ十分に凄い技術の固まりよ」

「河童とか光学迷彩まで作ってるのに、なんで携帯が珍重されるのかが分からねえ……」

話の始まりは、神社の社務所で家計簿を付けていた西宮からであった。

正確にはその作業を襖を開けたままやっていたので、廊下を通りかかった射命丸が、西宮が置きっぱなしにしていた携帯電話を見かけたのが始まりだった。

殆ど着の身着のままで幻想入りした西宮丈一。数少ない私物の一つがこの携帯電話であった。

とはいえとくに充電が切れた以上、完全なる無用の長物と化しているのだが。

「んじゃー河童にでもあげた方が喜ばれますかね。社務所に置きっぱなしの電子機器、可能なら動かせるようにしたいですし、そもそもこの携帯は仮に充電出来たとしても、大したモン入ってませんし……アプリも何も入れてない上に、学友からのメールもロクな内容無いしなあ」

「めえる？ ……ああ、その小箱でやり取りできる手紙の事よね？ 私が来た件とかまで含めて、そういう道具があれば便利なんだけど」

やれやれと肩を竦める射命丸。

明らかに新聞記者モードではない口調からも分かる通り、彼女が

今回ここに来たのは記者としてではなく天狗としての仕事の為である。

山の妖怪以外の守矢神社の信者が、妖怪の山の山頂にある神社に参拝に来た場合の対応についてだ。

なるべく山に他所者を入れたくない天狗と、参拝者は欲しい守矢。結局交渉は諏訪子&神奈子VS天狗連合という、幻想入り初日に近い構図で行われた。

知恵で見れば諏訪子や神奈子にも認められる西宮だが、力は弱く経験も浅い。実力主義者で弱者を見下す傾向のある老練な天狗上層部に対する交渉は向いた役ではないと判断され、そちらの対応には関わっていなかった。

ちなみに今回射命丸が来たのは、纏まった交渉内容を元に天狗の里で作成された契約書類を渡しに来ただけである。

先の一件で発言力は上がったが、天狗の中では未だ非主流派である彼女。

流石に山の方向性を決めるような大型交渉には関わっていないなかったらしい。本人自身、関わろうとする性向ではないのもあるだろう。

「まあ、そういうやり取りではメールは便利ですね。送るのは一瞬ですし、文章としても保存される。あ、お聞きしますが交渉内容はどうなりました？」

「参拝用のルートを作って、そこから外れたら容赦なく排除。ただし、参拝ルートを通る限りは天狗や他の山の妖怪は参拝者に手出しをしないって所ね。まあこんなもんでしょ」

肩を竦めて言う射命丸には、特に悪感情も感じられない。

天狗の里側からは苦い譲歩と見られているのだろうが、彼女自身は先の異変の結果を見るに、必要な変化と断じている。とても

言う所か。

「まあ、射命丸さんにそう言っただけなら助かります。所でこの携帯なんですけど、河童に持って行けば幾許かの貸しにはなりませんか？　そうでなくとも、河童との繋がりは持っておきたいので」「ん？　まあ喜んでくれるとは思わ。けど良いの？　友人からの何だっけ。『めえる』も入ってるんじゃないの？」

「まあ、ロクでもない話ばかりしてましたけどね。それはそれで楽しい思い出ではありません。　　ペットボトルロケットによる生徒指導室狙撃計画とか」

「何か良く分からないけど、物騒な話なのは直感で察したわ。何やっつてんのよあんたら」

「いえまあ、色々」と

肩を竦める西宮文一。外の世界にて、セクハラやら何やらで生徒の評判が最悪だった生徒指導の教師に対して、各クラスの代表で共謀して西宮を参謀長として行われた一大反攻作戦だった。

文化祭の出し物として行われたペットボトルロケットを利用し、生徒指導室に撃ち込むその作戦。

責任分散の目的で発射をたまたま来賓で来ていたお偉いさんにやらせ、尚且つ片付けの為に生徒が生徒指導室内に入る事で『何故か』その教師のセクハラの証拠物件が見つかるという、中々に大掛かりな策謀　　もとい、不幸な事件であった。

「平たく言っただけじゃ……そうですね。天狗の里で例えると、立場を利用して女の子に卑猥な事をしようとする大天狗様の家に、事故に見せかけて天魔様の手で弾幕ブチ込ませて、片付けという名目で押し入って失脚の証拠物件を押収するような」

「その作戦貰った」

「……ええと、詳しくは効かないでおきます」

口の端を上げてにやりと笑う射命丸に、西宮がそつと目を逸らした。

そしてその二週間後、とある大天狗が天狗の里内部で失脚する騒動が発生する事となるのだが、西宮はそんな事については全く知らない。知らないのだ。知らないってば。

ともあれ西宮は気を取り直して笑みを浮かべ、

「まあ色々と思い出はありますが、この携帯に入っているのが全てではありません。それにこのままでは、どの道中身に入ってる思い出を見れもしませんし、河童の所に持って行くという選択自体は悪くないかと」

「成程ね。……うーん、良い作戦を教えて貰った礼として、紹介くらいはしてあげますか」

「……その作戦を何に使うのかは俺の前では言わないで下さいね。巻き込まれたくないんで」

「はいはい。……作戦に使うのは十尺玉で良いかな。天魔様辺りの行動が何かのきっかけとなって奴の家で炸裂するように色々と練らないと。彼奴の誅殺なら、天狗や河童でも沢山協力してくれる女の子居るだろうし」

「何そのテロ。どうやって十尺玉を用意するんですか」

「昨今の天狗の緩みぶりを考え、避難訓練とかどう？ 十尺玉地上爆破避難訓練。花火と避難訓練を組み合わせた全く新しい出し物なんだけど、花火の保管中につっかり天魔様が着火させてドカンとかよしこの方向性で行こう」

まさかの十尺玉地上爆破避難訓練フラグである。

余程恨みを買っているのだろうか。いきなり家に十尺玉を叩き込まれ、その惨状から生き残っても恐らくセクハラの証拠が出て来て失脚するのであろうその天狗には、西宮も流石に同情を禁じ得なか

った。

ともあれそんな会話の後、西宮は射命丸が知っている河童の住処を紹介して貰い、翌日の朝からその河童の元へと出向いて行く事になった。

手土産は分解して貰っても構わない携帯電話。そして念の為、紹介があるとはいえ失礼にならないように、人里で買い置きして置いた煎餅である。

そして翌日。

そうしてその河童の家を訪れた西宮の前に広がっていた光景は

「へぐう……」

「……死んでるうウウウウ！!?」

『河城にとりの機械工房』と書かれた、河の支流の先にある庵。その前で壊れた人形のようなポーズで地面に転がる、作業着のような服を着てリュックサックを背負った河童の少女。河城にとりの姿だった。

#

結論から言うと、当然だがにとりは死んでいなかった。

「やー、助かったよ盟友。いやいや、研究に夢中になっちゃってて

ね。三日くらい食事してなかったから、なんか家の外に出た途端にクラッって来てさー」

「はあ……まあとりあえず、これでも食って落ち着いて下さい」

どうやら機械弄りに夢中になっていたらしいにとり。

寝食を削って没頭していたのは良いが、ちよつと気分転換に家を出た瞬間に疲労と空腹でぶっ倒れてしまったらしい。

あの後慌てた西宮が助け起こして事情を聞き、今は彼女の家の一室にて、ベッドに寝かされたにとりに西宮が勝手に台所を使って作ったお粥を差し出している状況だ。

差し出された梅粥に、にとりは頬を綻ばせる。

「おお！ ありがとう盟友、気が利くね。良いお嫁さんになれるよ」

「……まず俺は男なので嫁に行くのはまず無理です。あと、台所が中々悲惨な有様でしたので、河童殿自身もお嫁に行けるように料理修業などを積むべきかと」

「ありや、こりや一本取られたね」

西宮が皮肉を返すも、にとりは快活に笑うのみ。

元より彼女は多少臆病な面はあるが、明るく好奇心の強い気性の持ち主だ。明るさと臆病さは矛盾せずに同居するものである。

そして美味そうに梅粥をかき込むにとりに、西宮は溜息。

河童に繋ぎを作る目的での訪問であったのだが、それは成功したのかどうなのか。

少なくとも研究の為に三日断食を決行するような相手だ。迂闊に携帯を渡したならば、今度はもう一度倒れるまで研究を続行しかない。

仕方ないから携帯を渡すのは取り止めて、とりあえずは顔の繋ぎ

と、後々に外の道具を提供する用意があると告げる程度で良いだろうと、内心で思考を取りまとめる。

「さて、河童殿」

「にとりで良いよ、盟友。私は河城にとり。敬語も要らない。私別に偉くないしね」

「……ではにとりと。俺は西宮丈一、知ってるかもしれないけど山の上の神社の人間だ」

「ああ、うん。話には聞いてるよ。天狗様は色々大慌てみたいだね」

あの時は私もエライ目にあつたなあと、一瞬だけにとりがハイライトの消えた瞳で遠くを見る。

「……何かあつたのか？」

「えーと、巫女と魔法使いに襲われて文さんに吹っ飛ばされて、パンツ丸出しで木の枝に引つかかる羽目になった。六時間くらい」

「異変の原因だった神社の者として、心から謝罪します」

流石に（実年齢はともかくとして）年若い少女には過酷な事件だったと判断した西宮が、即座に土下座の勢いで頭を下げた。

パンツ丸出しで六時間とか、厳しいにも程があつた。

しかしここが会話の切り込み所か。

そう判断して、お粥を啜るにとりに向けて西宮は重ねて言葉をかける。

「その面も含めて、まあ河童に話を通しておきたい。今後も同じ山の住人になる事だし、技術職相手に繋がりがあつて困る事は無いしな」

「ふーむ？ あ、盟友……えと、丈一で良いかな？ 丈一がここに

来たのって、その辺が目当て？」

「ああ。まあ他にも手土産があるっちゃあるんだが、今この状況で渡すのは俺の倫理観の問題もあるんで止めておく。……所で盟友って何だ？」

「河童は人間を昔から見守って来たのさ。影ながらこっそりと、ずつとね。だから河童は人間を盟友だと思ってる」

「へえ……」

胸を張るにとりだが、西宮は内心で『それってストーカーじゃね？』などと身も蓋も無い思考をしていた。

ともあれそこは置くとしても、技術職との繋がりには西宮としても本当に悪くない。

西宮丈一、東風谷早苗の二名は完全な現代っ子だ。江戸時代が、良くて明治初期レベルが精々の幻想郷の文化に辟易する事もある。特に顕著なのが、家電製品の有無だ。

テレビなどの娯楽用品は無視するにしても、現代では当然の如く家にある洗濯機、給湯器、冷蔵庫などが、こちらの世界には存在しない。

そして洗濯機と給湯器、冷蔵庫を含め、外の世界時代に社務所に置かれていた幾つかの電化製品は、完全沈黙状態で幻想郷にまで持ち込まれているのだ。

毎日の家事を担当する身としては、可能ならば使えるようにしたい。使えないなら使えないで、早々に処分したいのが西宮の考えだ。

「では盟友にとり。少し機械関係で河童のお前さんに聞きたい事があつたんだが、大丈夫か？」

「ん、特に問題は無いよ」

「OK。実は山の神社には外の世界から持ち込まれた機械が幾つか

あるわけだが、幻想郷では使えないんでな。可能ならばそれを使えるようにしたい。或いは無理なら無理で、相応の対価で引き取って貰いたい」

「外の機械？ …… 完璧でかい！？ 壊れかけとか、バラでとか、古い奴とかなら時々魔法の森近くの古道具屋に売ってるって話だけど……」

反応は上々。

食いついて来たにとりに、西宮は笑みを浮かべて、

「完璧だ。それに加えて、冷蔵庫に至っては前のが壊れて、外の世界で最新のに買い替えただけだから……その辺の管理は概ね俺の仕事だったし」

「最新式……！！」

「仕切り板を外せば人が入れるくらいの大きさだが、開発チームの間で中に入って涼むのが流行って危うく凍死者が出そうになり、人が入ると軽快にオクラホマミキサの警告音を鳴らしてくれる謎機能が付与されている点まで含めて色々とし過ぎるがな」

「いや、素晴らしい。素晴らしいよ。その開発チームの気持ちは私にはよく分かる。それじゃあ早速その機械類を
「はいストップ」

うんうんと頷いたにとりが素早くベッドから立ち上がり　ろう

とした所で、西宮の手が肩を抑えて、立ち上がるのを止めた。

止められたにとりは不満そうな表情だ。

「何するのさ丈一。私に機械類を見て欲しくて来たんじゃないの？」

「その心算だったんだが、ぶっ倒れるまで研究してた最後の奴にそんなもん見せてみる。またぶっ倒れるまで続けるに決まってるから

な。とりあえず一日ゆっくり休んで貰って、話はそれからだ」

「……むう」

言われて頬を膨らませるにとりは、まるで西宮よりも二、三歳下の少女のようだ。

少なくとも年上の妖怪には見えまい。

可愛らしく頬を膨らませて拗ねる彼女の頭を西宮は微笑まじげに撫で、

「まあギブ・アンド・テイクだ。俺としても調べてる最中に倒れられたら面倒だし、ある程度体調を復帰してから来て貰いたい」

「拷問だよ……調べたい機械があるのが分かっているのに足止めとか」

「そう言うなよ。ちゃんと休んでから来てくれるなら、ボーナスを上げてもいい」

「ボーナス？」

「神社にある機械は神社の所有だけど、それとは別に俺が持っている機械があつてな。体調を整えてから来てくれるならば、そっちは完全に研究用として進呈しよう」

「マジで!？」

そして自身の携帯電話を研究用として提供する事に決定した西宮。その言葉を聞いたにとりは目を輝かせて、

「だったらこうしちゃいられないや! 今日はいっさり休んで、明日にでも神社に行けばいいんだよね?」

「ああ。神社の風祝と御二柱には俺から話を通しておく」

「おっけー。それじゃ丈一、私は寝るからお粥の食器は片付けてってね」

「……良い根性してるな、お前」

図々しい要求に半眼で返す西宮だが、にとりは言われた通り身体を休ませようと、既に布団を被ってしまっている。

程無く聞こえて来た寢息に彼は溜息を吐き、

「……まあ、ついでだ。今日の予定は何も無かったし、軽く片付けでもしてやりますか」

散らかった台所などの片づけをする事に決め、その部屋を後にしたのだった。

神社にこまめに入入りするようになったにとり。

彼女の話聞き、二柱が山のエネルギー革命などという事を思い付くのは、しばし先の話である。

それよりも先に出て来た変化は、どちらかと言えば早苗と西宮に大きな影響を及ぼした。

#

にとりがはその後、頻繁に神社に出入りするようになった。

当初の彼女は社務所の機械類をキラキラとした目で眺めており、それらを調べられる喜びに天に上らんばかりであったが、今は流石に大分落ち着いている。

最新式　つまりは色々メインディッシュと難しい機械の詰まっているオクラホマミキサー機能付きの冷蔵庫を後回しに、今は他の機械の分析調査を行っている段階だ。

元々出入りが多かった椀とは親友と呼べる間柄であったし、早苗

とも随分仲が良くなつたらしい。

時々機械に夢中になつて帰りが遅くなると、早苗の部屋に泊まつてガールズトークに花を咲かせているようだ。

そして西宮の携帯電話は彼女用の研究資料として提供されたのだが

「おーい、丈一。この『ケイタイデンワ』だっけ？ 少しでも復旧できたよー」

「マジでか！？ 上げえな河童」

「いや、以前魔法の森近くの古道具屋で売つた『デンチ』つていう外の世界の道具を繋いで、電力を少し供給してみただけなんだけどね。まあ一回動いてる状態を見た方が私としても今後いろいろやり易いから」

そして彼女が神社に出入りするようになってから一週間後の夕方、西宮と早苗が休憩がてら縁側で並んで茶を啜っていると、にとりが携帯を手に飛んで来た。

それを聞いた早苗が目を丸くし、

「え、携帯使えるようになったんですか？ メールや通話もできます？」

「いや、基地局も何も無いから無理だろ」

「ちえつ。また寝る前に西宮に電話をかける事が出来るようになると思つたのにー」

「お前携帯買ったばかりの時に毎晩のように俺にかけて来て、電話代で御両親にめっちゃ説教食らつたの覚えてるか？」

「覚えてますよ。だから無料通話が出来るとな契約に変えたんじゃないですか」

「あはは、仲が良いねー二人とも。ところで」

ところで。

西宮が射命丸に言っていたのは誇張でも韜晦でもなんでもない。本当に友人との「ロクでもない話」がメールとして多くやり取りされており、携帯の復旧作業をしたにとりはそれを目にする機会があつたというだけの事。

故に彼女は、無自覚に爆弾発言を投下する。

「 丈一のメールの中にあつた、『研修旅行女湯遠隔望遠作戦』
つていつたい何？」

「……あ」

「へえ……」

結局西宮と早苗は行く事もなく幻想郷に来たのだが、高校の研修旅行の折に女湯を覗く作戦を彼の友人が立て、西宮に作戦面での助力を請うメールを送って来ていたのだ。

削除されずに残っていたそれをにとりが発見してしまい、それを今この場で口に出してしまった。

話にすればそれだけなのだが、効果は覲面であつた。

西宮が転がるようにして早苗から距離を取り、早苗は西宮の頭が一瞬前まであつた場所を狙ってノーモーションからの掌底を叩き込む。

「あつぶね……!!」

「チツ……避けましたか」

そして冷や汗を流しながら立ち上がる西宮へ、早苗は満面の笑みを向ける。

無論それは親愛の情から来た物などではない。笑みとは本来攻撃的な物とどこかの誰かが言っていたように、早苗のこの笑みもまた

攻撃的な意図で作られたものである。

「……西宮。私、ちょっと貴方にお話をしなければいけないようです」

「待て、落ち着け東風谷。これは罠だ。俺にそんなメールを送つて来やがったパンツ奉行（渾名）の罠だ」

「でも丈一、このメールの返信で早苗が入ってない時間ならって事で協力と参加を了承してるよね」

「河童アアアアアアアア！！」

携帯電話を操作しながら無自覚に自分を売ったにとり対して、西宮が叫びをあげる。

対する早苗は笑顔のまま、

「……西宮、選んで下さい。Please select die or dead」

「何で英語！？ それどっちにしる死んでるよね!？」

「 問答無用!! 」

そして始まる弾幕ごっこ。

西宮が逃げ、早苗が追う。

それを見送る形となった元凶はその様子にきよとんとした表情を浮かべ、

「……まあ、仲が良いのは良い事だよね」

そう結論付けて肩を竦めた。

後に天狗の里で十尺玉が炸裂して、大天狗が罷免される一週間ほど前。

そして地底と地上の間で起こる『地霊殿異変』に向けた、最も広

義の意味での『始まり』が起こった頃の話であった。

第二十三話：河童と携帯電話（後書き）

後の地霊殿 正確には二柱がその裏で暗躍をする切っ掛けの切っ掛けのお話です。書いておかねばと思ったので。

そして大天狗様南無。

パンツ奉行は以前の番外編で出て来た西宮のモブ友人です。

……それと地霊殿の前に緋想天で悩んでいるのですが。

西宮の「気質」って何でしょうね？

良い案が出なくて出なくて。何か面白い案があれば教えて下さい。

#

早苗さんテスト問題

問3・音楽

Q・次の符号の読みを答えなさい。「ff」

西宮回答・フォルティッシモ

早苗回答・ファイナルファンタジー

パンツ奉行（仮名）回答・ファイナルファイト

西宮「ファイナルファンタジーって、『ファイナル』ってついてるくせに既に13まで行ったよな。14？ ははは、何を言ってるんだお前は」

鈴仙「……いや、私が聞きたいわよ。何を言ってるのよあんたは」

西宮「ちなみにファイナルファイトは俺も良くやったな。ドラム缶から黄金を錬金する裏技から、コーディーの錬金術師などと呼んだものだ」

鈴仙「ごめん、話の半分も理解できない……」

第二十四話・湖畔の紅魔館（上）（前書き）

今回から上中下で紅魔館篇。

とはいえ、まだ紅魔館に到着すらしませんけど。

第二十四話：湖畔の紅魔館（上）

図書とは知識の塊である。

「んー、だからさ。悪いけど少しばかり、使いばしりを頼まれてくれないかな？」

「俺が？ まあ良いけど、どこに何の用でだ？ にとり」

そこに内包された先人の知識は、人や妖怪が何かを為す時に大きな助けとなるだろう。

少なくとも無からの試行錯誤に比べ、格段に段階を飛ばせることは間違いない。

「紅魔館にさ、大図書館があるんだよ。そこで工学関係の本があれば……ほら、水力発電だったて文ーや早苗の知識だと、水車作る程度が関の山だったじゃん。そこから何がどうなって電気になるかとかはさっぱりだったでしょ」

「一応俺の場合、抵抗とか色々までは言えるんで東風谷よりは少しかマシだけどな。そこだけは主張しておく」

「まあそうなんだけどさ。五十歩百歩だよな」

故にこの時、河城にとりが選んだのは先人の知識に頼る事だった。紅魔館にあるという大図書館。そこにならば技術的な側面から自分のやろうとしている事。当座の機械を動かし得る電力を得る為に、まず試みようとしている水力発電。の為の情報を集める為、西宮にそこへの出向を願ったのだ。

だが西宮としては、紅魔館は余り相性が良い場所とは思えない。当主であるレミリアと些少なながらも争いがあったのが最大の要因

だ。

「……つーか五十歩百歩って言うなら、俺じゃなくて東風谷行かせればいいじゃねーか」

「本を借りて来ればそれでも良いんだけど、持ち出し禁止だった場合を考えるとね。丈一、早苗に『専門書を読んで、必要な情報を吟味し、メモして持ち帰る』って作業が出来ると思う？」

「すまん俺が悪かった」

しかしレミアに気に入られていた早苗を送り込むという案は、この段階で完全に却下と相成った。

にとりも友人相手に地味に酷い。技術職である分、その辺に関しては現実的なようだ。

「参考までにお前さんの親友である椀は？」

「ある意味早苗より酷く、途中で全く別の方向に走り出すと思うな。水車建設や水力発電についての資料を求める筈が、明日からできるブートキャンプとかについて調べて来ても私は驚かない」

そして親友相手の評価はもっと辛かった。

或いは実体験に基づいた評価かもしれない。

お互い斜め上の思考形態を持つ極上の天然を相棒・親友として持つ関係だ。

互いにその辺の苦勞で感じる所でもあったのか、同時に『お前も大変だな』とでも言うような視線を交わして溜息を吐く。

両者の差は、にとりの方は技術面が絡めば暴走して、椀以上の大惨事を引き起こすという事くらいか。

将棋盤爆破事件は西宮も射命丸から聞いており、記憶に新しい。

「まあ何にせよ、俺以外に適材が居ないってのは分かった。まさか射命丸さんや御二柱に頼むわけにもいかんしな」

「そだね。私はこれでも人見知りする方だから……ここは頼むよ、丈一」

「へーい」

かくして。

湖畔の紅魔館。そう呼ばれる館に向けて西宮丈一が出向く事になったのは、そろそろ幻想入りから三週間余りが経過しようという頃。天狗の里にて十尺玉が炸裂し、大天狗が一名罷免される直前の出来事だった。

#

紅魔館 レミリア・スカーレットが統べる館であり、スペル

カードルールの導入後に最も早く異変を起こした勢力でもある。

運命を操る吸血鬼、全ての物を破壊する能力を持つ妹吸血鬼。七曜を統べる魔女に、時を操るメイド。東洋武術とその流れを汲む気を使う門番に、魔女の使い魔である小悪魔、更には多くの妖精メイドを擁するここは、幻想郷でも有数の勢力の一つと言えるだろう。

その中の魔女と使い魔が棲む図書館を目的に神社を出た西宮。

自分がレミリアに好かれていない事も鑑みて、事によれば多少面倒な交渉になる可能性もあると考えての出立だった。

だが世の中はままならぬ物。

相応の苦難を覚悟して出立した西宮は、しかし最悪の予想を越える事態に遭遇していた。

「ふはははー！　ここはサイキョーの妖精であるアタイの縄張りだー！　えーと、ここを通りたくば……なんだっけ、大ちゃん」

「えー？　知らないよ、決めごととか何も無かったでしょ……」

「えーと、うーんと、それじゃあ……」

そう、まさかの現地到着前のトラブルである。が、これに関しては西宮の読みが甘かったと言えるだろう。

そもそも紅魔館は、またの名を“湖畔の館”などとも呼ばれ、妖精が多く生息する霧の湖に面した立地をしている。

その霧の湖についての対策を何も考えずに来た西宮の方が、この場合迂闊と言えば迂闊だ。

そして現在、霧の湖の上を飛ぶ彼の前に居るのは、一組の妖精だ。背中に氷の翼を生やした十歳程度の外見の青髪の少女と、その横でおろおろしている透明な羽根を生やした緑の髪の少女。

紅魔館に向かおうとした西宮の前に、恐らく妨害の意図で飛び出して来た二人の妖精なのだ。

「えーと、アレだよ。ここを通りたくば、西の塔に居る賢者オゲレツから二つに折れた勇者の剣の片割れを貰って来て、伝説の鍛冶屋の元を訪ねて家出した息子を探してあげて、勇者の剣を修理して貰え！」

「難易度たけーなオイ。っていつか賢者の名前もっ少し考えろよ」

何が誇らしいのかビシツと指を指して来る青髪少女に呆れ顔を向ける西宮。

しかし彼に対して応じたのは、青髪ではなくその影に隠れるようにして浮遊している緑髪の少女だ。

「すみません……私達、霧の湖付近に住んでる妖精なんですけど……。貴方が飛んでるのを発見したチルノちゃんが少しテンション上がっちゃったみたいで……」

「ああいや、御丁寧にどうも。って、チルノ……？ 氷精チルノか……！」

「ふっ、アタイの名前も知られるようになったわね。流石はサイキョーのアタイ」

「まあな。幻想郷縁起は見せて貰ってるし」

そして緑髪の妖精の言葉から、西宮は眼前の少女の正体を確信する。

西宮は元々この手の情報収集には熱心な方だ。自身の力量が然程ではないのも弁えている。

故に幻想郷内で危険な場所・危険な人妖を書き記している幻想郷縁起を、人里に出向いた時に阿求に頼んで見せて貰っていたのだ。阿求側も自身が書いた物が役立つならと、喜んで西宮を迎え入れた。

ちなみにその喜びの約半分が、西宮がまた外界のお菓子を持って行った事に依るものだというのは、阿求本人だけの秘密であった。

ともあれチルノという名前の眼前の妖精に関しては、西宮は幻想郷縁起からその知識だけは既に得ていた。

頭が少々残念ながらも、妖精としては破格 異常とすら言うて良い程の力を持つ妖精。

しかしその力に対して、彼女と遭遇した時の対処方法として幻想郷縁起に書かれていたのは、何かしらのなぞなぞ等の問題を出して注意を逸らせばいいという単純な物だった。

「それじゃ、最強の妖精に聞くぞ」

故に西宮が選択するのは、マニュアルに従った出題とその後の逃走。

チルノの隣の緑髪の妖精が、『またか』とでも言うような呆れと安堵の混ざった表情を見せた。

妖精にしては珍しく気弱で常識的らしい彼女。チルノが他者に無駄に喧嘩をふっかけるよりは、してやられる形でも穏便に終わればそれが一番とでも考えているのだろう。

だが、しかし。

「 n が3以上の自然数の時、 x の n 乗 $+$ y の n 乗 $=z$ の n 乗となる三つの自然数が存在しない事を証明、あるいは反証せよ」

「……？ 何だか良く分からないけど、賢者マルコメの所に行かずにここを通りたくば、アタイと勝負して貰うよ！」

「……え？ あの、それって……なぞなぞなんですか？ あとチルノちゃん、賢者の名前変わってる」

西宮の出した質問を完全スルーして話を進めようとするチルノ。

横の緑髪の妖精 大妖精は困惑した様子で目を彷徨わせている。

対する西宮は幻想郷縁起に載っていた対処法が間違っていたかと眉を顰めるが これは明らかに西宮が悪かった。何を血迷って妖精相手にフェルマーの最終定理を問うたのか。

フェルマーの最終定理とは、フランスの数学者ピエール・ド・フェルマーが残した一つの定理の事だ。その後360年間もの長きに渡り証明も反証も出来なかった、数学史上に残る難問である。

或いは八雲藍や八雲紫、八意永琳辺りの理系頭脳派ならば分かり易く纏めた上で解説などをしれくれそうな気もするが、相手はチルノである。

平たく言えば、そう。チルノは『これが問題である』と認識できなかったのだ。

「チツ……なぜなぞを出せば考えに手一杯になって、その間に逃げられるって聞いてただけだな」

重ねて言うが間違っても『なぜなぞ』の範疇ではない。360年間解き明かされなかった人類史に残る難問である。

ちなみに西宮は分かるのかと言われれば、実はあんまり分からなかったりする。

ともあれ斯様なすれ違いの結果

「それじゃ、行くよ！アタイが勝ったらあんたを子分にしてやる！」

「やれやれ、自分勝手な子供理論だな。妖精らしいっちゃらしいけどよ」

困った時は弾幕で決める。

幻想郷では最も一般的な決闘方法あそびかたにて、両者は湖上で対峙する事と相成ったのだった。

「……が、がーんばれ……。二人とも怪我しないでねー」

……こそこそと離れて応援を開始した大妖精をギャラリーとして。

#

「ぶえつくし!!」

「あ、大丈夫ですか？ こっちに来て焚き火に当たって下さい。今温かいお茶も淹れますね」

「……お願いします」

そしてその一時間後。

西宮は人生の敗者へと華麗なクラスチェンジを遂げ、湖畔にて大妖精が熾した焚き火に当たっていた。

友達が迷惑をかけたとも思っているのだろう。大妖精は甲斐甲斐しく西宮の世話を焼いている。

悪くは無かった。

本来の勝率を語るならば、そう言ってしまうって良いだろう。

チルノは確かに妖精としては破格の能力を持っているが、さりとて弹幕勝負での実力は幻想郷内で見ると決して高い方ではない。西宮の身近に居る相手で言えば、椛の方が恐らく上。

西宮自身が先の異変とその後積んだ経験まで含めて考えれば、そう悪くない勝負になる筈だったのだ。

「やはりアタイの弹幕は最強だったわね……まさかこんな心理効果があるなんて、このアタイの目をしても見切れなかったわ」

「くっそ、騙された……あんな、あんな馬鹿な弹幕に……」

しかし終わってみれば、焚き火から離れて無傷で胸を張るチルノと焚き火の前で凍えている西宮という、完全にチルノの圧勝と呼べる結果となっていた。

その原因は一つ。

チルノが放った必勝の弹幕と、それに対する西宮の対応だ。

彼女の代名詞とも言える『アイシクルフォール - e a s y - 』。

それは左右に放った氷弾を中央に向けて集束させるような形で飛ばすスペルカードなのだ。その実態は何故か眼前がから空きの安全地帯となる、何を考えて作ったのか小一時間かけて聞きたいスペルなのである。

だが、それを見た西宮の思考は少し違った。

「絶対さー、あの正面安置は罠だと思ったんだよ。あそこに飛び込んだ瞬間、重ねて弾幕が飛んで来ると思ってたんだよ。クソ、ありもしねえ罠を警戒し過ぎた……」

がくりと落ち込む西宮はその言葉の通り、その露骨すぎる安全地帯を、露骨すぎるが故に罠と判断してしまったのだ。

結果として安全地帯を危険と判断してしまった西宮は、安全地帯に入らないよう注意しながら弾幕勝負に挑み、一瞬安全地帯に入りそうになって慌てて危険地帯に離脱しようとして撃墜されたのだ。そして霧の湖に墜落した彼を慌てて大妖精が拾い、今に至る。

「西宮さんでしたっけ。……考えすぎちゃいましたね」

「恥ずかしくて死ぬるレベルだな。……幻想郷縁起に書いてあるチルノの情報を考えれば、そんな策など無いと分かりそうなもんなの」

「地味に酷い事言ってますね……」

会話しながら濡れた服の裾を絞り、水を落とす。

霧の湖は透明度が高く、そのまま飲めそうな質である事が幸いか生活汚水などで汚染された外の湖だった場合、大分辛い事になっていただろう。精神的に。

「チルノと……大妖精だったよな。お前ら普段から、この湖を通る

相手に喧嘩売ってるのか？」

「え？ いや別に。今日はたまたま」

「いつもは友達と遊んだり、色々ですね。……以前私もチルノちゃんも、ここを通って紅魔館に行こうとした巫女さんに撃墜されて痛い目を見てますし、普段はあんまりこういう事はしてません。」

あ、お茶淹れましたよ」

「どうも。……はあ、俺が運悪かっただけって事かよコンチクショウ」

溜息を吐いた西宮が、大妖精から受け取ったお茶に手を付ける。

恐らく花を使ったのであろう、香味の強い茶だが、しかし中々に彼好みの味だった。

「……美味しい」

「気に入って頂けたようで何よりです。まあ、ご迷惑をおかけしたお詫びですね」

「ふっ、流石大ちゃん。子分への慰労も欠かさないなんて。子分、大ちゃんに感謝しなさいよ。あとアタイにも！」

「はっはっは。あんまり舐めた口利いてると泣かすぞ親分」

焚き火を囲んで笑顔のまま言葉を交わす親分チルノと子分にしみゃ。

苦笑しながら大妖精が冷やしたお茶をチルノに渡し、西宮に目を向ける。

「ここを通るって事は、西宮さんもいつぞやの巫女さんと同じく紅魔館に御用事ですか？」

「ああ。正確には紅魔館にあるっていう図書館にだな」

「……うーん」

そして西宮の用事・目的を聞いた大妖精が困ったように首を傾げ、

「今日は止めておいた方が良くないかと思えます」

「……湖渡ってる途中でケチがついたからか？」

「それに関しては本当にごめんなさい。でも、そうじゃなくて」

思い出すように大妖精は目を瞑る。

数秒の間を置き、何かあるのかといぶかしむ西宮に対して、彼女は告げた。

「今、紅魔館は非常警戒態勢にある。先程門番の美鈴さんがそう言っていたんです」

それは事態の混迷を告げる言葉だった。

第二十四話：湖畔の紅魔館（上）（後書き）

アイシクルフォール - easy - の正面安置を畏と判断したのは、作者後輩にやらせた時の実話だったりします。

閑話其の貳：一方その頃（前書き）

友人からの要望で書かされる事になった、早苗サイドからの西宮への感情についての番外編です。

西宮が紅魔館に行っている頃の話とお考えください。
ごくごく短め。3500文字くらいですね。

閑話其の貳：一方その頃

さて、西宮が紅魔館に向かっていた頃。

正確には紅魔館に向かう途中にチルノに撃墜されていた頃。

彼の相棒であるところの東風谷早苗は人里で分社の建設に勤しんでいた。

守矢神社の信仰が広まった結果、人里に分社を建設してくれないかという意見が、人里の側から出た結果である。嬉々として里に来た早苗は、早速里の広場に守矢の分社を建設していた。

持ち込んだ材料を使って小さな社を作り上げ、何故か服本体とは分離するデザインである袖で額の汗を拭う早苗。

それを見て横で広場に設置された長椅子ベンチに腰掛けながら見学していた阿求が、くすくすと笑いながら早苗に冷えた水の入ったコップを差しだした。

「お疲れ様です。これ、よければどうぞ」

「わぁ、ありがとうございます。……こういう作業って本当は西宮の方が上手いんですけどね」

「西宮さんですか。先日も幻想郷縁起を読みにいらしてましたけど

……お二人は幼馴染なんですよね？」

「ええ、そうですよ？」

作業が終わり、一息ついた早苗も阿求が座るベンチへ移動する。

コップの中の水を一息で飲み干し、『ぶはぁ！』と親父臭い声を上げ、

「付き合い自体はそろそろ十年ですね。……あ、十年越えたかな？」

「成程。……しかし今回の異変を幻想郷縁起に書こうにも、お二人

に関する情報はかなり錯綜しているんですね。正確にはお二人の間柄に関する情報が、ですけど」

「今回の件も書かれるんですか？」

「ええ。守矢神社は間違いなく幻想郷のパワーバランスの一角を担う事になる立場にありますからね。その神社が表舞台に立ったあの異変については、当然知る限りを書き記しておくべきでしょう。それで最近では可能な限り多くの人に、あの異変　　そうですね、風神録異変とでも名付けましょうか」

「今決めるんですか」

「割とそんな物ですよ。異変の名称は分かり易ければ特に制約もありませんしね。　　ともあれ、その風神録異変について多くの人が妖に聞いてはいるのですが、貴方達の間柄に関しては意見がバラバラなので」

溜息を吐いて、阿求は横に座る早苗を見やる。

幻想郷縁起　　それは幻想郷に住まう人々が安全に暮らせるようにと書かれている、歴史書にして注意書きだ。

幻想郷の危険な場所、危険な相手について記して注意を促すのと同時に、幻想郷で起こった大きな異変についても調査の上で記されることになる。

当然、今回の風神録異変も調査対象だ。

結果、異変の経緯やその目的、そして神社に住まう神々と信者達の人となりについてはある程度の情報が既に阿求の元に集まっていた。

人里によく来る早苗と、稗田家に丁重に挨拶に来ていた西宮に関しては、実際に会った事もあるから尚更だ。

しかしその過程で阿求を悩ませたのが、その二名の間柄である。人によっては『最悪に仲が悪いように見えた』という人も居たし、

かと言って人によつては『ただのバカップル』と呼ぶ人も居る。

果たしてどちらが正しいのか。

稗田の当主として幻想郷縁起に正しい情報を記すという理由が四割。その四割で建前をコーティングし、残り六割は乙女らしき恋話コイバナチへの好奇心で、阿求は早苗に問いかける。

「実際のところ、お二人はどのような関係なのですか？」

「そりゃ私も興味があるな」

そして同時に、上から二人に声がかかる。

見上げた二人の目に映ったのは、白と黒のエプロンドレスのような衣装に身を包んだ白黒の魔女　霧雨魔理沙だ。

箒に跨り飛んでいる彼女が、頭上から声をかけて来たのだ。

「魔理沙さん、こんにちは。どうしたんですか？」

「んや、何か見慣れないもんが広場に作られていて、その横で見知った顔が話し合ってるもんだからな。何の話をしてるのかと思って近寄ってみたら、また面白い話をしてるじゃないか。聞かせるよ、早苗。実際どうなんだ？」

「……うーん……相棒、という表現が一番しっくり来ると思いますが。毎日のように喧嘩もしますけど」

しかし阿求に続いて魔理沙にも同様に問われながら、早苗は困ったように眉根に皺を寄せるのみ。

嘘や照れから来る誤魔化化ではない。ただ西宮との間の関係を表現する明確な定義を、これまで考えて来なかったという事だろう。

故に続いて悩みながら語られたのは関係の定義というより、現状に対する再確認だ。

「仲は……悪いのかな？　悪くないと思いたいですけど。……今日

もお弁当作ってくれましたし」

「……思いのほか、家庭的ですね」

「早苗が出来ないから俺が出来るようになったとかボヤいてたけどな」

「私だってやればできるんですよ。やらないだけです」

阿求と魔理沙の言葉に少し拗ねたように早苗が言いながら、分社建設用の道具と一緒に持ってきていた鞆から弁当箱を取り出した。

どこか慧音の帽子に似たデザインのそれを開けると、中は鳥そぼろ御飯を軸とした彩り豊かな和風弁当だ。

「あら美味しそう」

「あげませんよ。西宮のお弁当は私のです」

「あーはいはい。……その反応見るに、お前は西宮の事は嫌ってないんだな」

「そりゃまあ。嫌いだったら、こんなに長く組んでませんよ。……なんですかそのにやにや笑い」

物欲しげに指を咥えて弁当をガン見する阿求から、弁当を庇うようにする早苗。

その様子を見ながら魔理沙が笑う。

彼女としては風神録異変の折に西宮という少年の「軸」を彼自身の口から聞いていたのもあり、その相棒である早苗側の感情に興味があつたのだろう。

にやにやとした笑みは非常に楽しそうであり、それを見た早苗が不本意そうに頬を膨らませる。

「外の世界に居た時にも、そういう笑いをする友達と似たような話をした記憶があります。私達に何を期待してるんですか、貴方達は」

「何って、そりゃ、なあ？」

「私に振るんですか。私は幻想郷縁起の編纂者として、必要な情報を得たいだけですよ」

「阿求お前そりや卑怯だろ」

「最初に私に振ったのは魔理沙さんじゃないですか」

責任の押し付け合いを開始する阿求と魔理沙。

その醜い争いを横目で見ながら、早苗はぼつりと呟くように、本人すら意識せずに言葉を零した。

「……どうであろうと、私は西宮が居てくれてほつとしているんです」

「……早苗？」

「あ、ごめんなさい。……いえ、関係を無理に定義しなくても、私はいつが居てくれて助かってるんだという、それだけです。友人とか、相棒とか、その……仮に恋人とか。そういう定義のあるなしに関わらず、私はいつが居てくれて嬉しいんです」

呟きに反応した魔理沙に、早苗は苦笑しながら言葉を続ける。

「本当は外の世界に居て貰って、外の神社と私の両親を頼む筈だったんですけどね。色々あって、外の両親と神社の心配も無くなって、そしたらやっぱりあいつが居てくれて良かったなあって思うんです。私色々好きに動けるのは、あいつが後ろで支えてくれてるって安心感があるからです」

「……な、なるほど」

「先日の異変の時にも、私が責任を感じていた時に背中を押してくれたのは西宮でした。……結局魔理沙さん相手に取った作戦を考えたのもあいつでしたな」

「……してやられたよな。御馳走様つてところだぜ」

「でも、不安になる時もあるんですよ。私はほら、今言った通り

頼ってばかりで……私から何か返せたことってあるのかなー、って」

本人としては色恋沙汰の話という意図はないのだろう。

苦笑しながら語る早苗の表情に、その手の話題ゆえの高揚や照れは見受けられない。

どちらかと言えば聞いている阿求の方がドキドキと胸を高鳴らせており、魔理沙は内心で『ああ、こいつらやっぱり似た者同士かも』という結論をほぼ確定していた。

「……まあ、私から西宮への感情と言えば、こんな感じでしょうかね。阿求さんや魔理沙さんが望んでるような、色恋沙汰の甘い関係ってわけじゃなくて申し訳ないんですけど」

「ああ、本気で言ってる辺りお前凄いよ……無自覚なんだな」

「へ？」

乾いた笑いを浮かべる魔理沙。

そして阿求は良い笑顔でベンチから立ち上がった。

「大変たためになる話が聞けました、ありがとうございます」

「あ、いえ。少しでも幻想郷縁起のお役に立てたなら嬉しいんですが……役に立つたんですか？」

「ええ、個人的には。それでは気分が乗ってるうちに幻想郷縁起の編纂を始めますので、これにて！」

早苗と魔理沙に一礼し、鼻歌を歌いながら自宅への道を歩き始める阿求。

それを見送りながら、白黒は青白へ投げ遣りに言葉を放った。

「……私は知らないからな」

「へ？ 何がですか？」

「幻想郷縁起に何を書かれてもってことだ。……警告はしたぞ」

幻想郷縁起。

それは稗田家代々から伝わる知識から作り上げられた、知識と知恵の結晶である。

唯一の難点は、割と編纂者の主観が強く混入している事だろう。

後に脳内の乙女回路を暴走させた阿求が、早苗と西宮の関係について割と有る事無い事を想像で書いてしまい、早苗にとっちめられる。

後にいう『稗田・東風谷の乱』の序章であった。

閑話其の貳：一方その頃（後書き）

ちなみに『稗田・東風谷の乱』についてストーリーにする気は「
ざいません」。

早苗さん、自分の感情がどういふ種類の物なのか割と無自覚。

第二十五話：湖畔の紅魔館（中）（前書き）

紅魔館篇中編。

ヒロイン空気回とも言います。

レミリアとフランの関係については、二次界隈の仲良し姉妹的なイメージ先行で決めさせて頂きました。ご了承ください。

第二十五話：湖畔の紅魔館（中）

「紅い」。

それが第一印象であり、第二印象は「デカイ」とでも言う所か。即ちそれが西宮丈一が湖畔の紅魔館に抱いた印象だった。

「へー、ここが紅魔館か。この距離からでも分かるデカさと紅さだな」

「そうよ！ 凄いでしょ」

「何でチルノちゃんが偉そうにしてるのか、私分らないよ」

先の敗北から暫し後。

チルノと大妖精によって成り行きで案内されながら、西宮は紅魔館に到着していた。

正確には湖を抜け、紅魔館を視認する位置に到着したというべきか。

湖上空を飛行する三名の視線の先には紅魔館。
そして

「……あれ？ なんか紅魔館の前に何か無いか？」

「あれは……テントみたいですね。その周りに大勢のメイド妖精が居ます。紅魔館の住人の皆さんじゃないでしょうか？」

紅魔館の前には難民キャンプよろしくテントが張られ、その周囲には多くの妖精メイド達がたむろしていた。

いや、正確には妖精メイドの数が多いだけで、妖精メイドじゃない者も見受けられる。

西宮の知っている限りではレミリアらしき小柄な影と、その横に

日傘を持って立つ十六夜咲夜。

そして宝石のような羽根を持つ金髪の少女が、レミリアと寄り添うようにして日傘の影に隠れて日光を凌いでいる。

その近くには中国の人民服に近い衣装を着た長い赤髪の女性、そして紫色の髪にローブとパジャマの中間のような衣服を着た小柄な少女、司書服を纏い悪魔の羽根を持つ赤毛の女性などが集まっている。

「……知らん顔ばつかなー」

「私達はある程度は知ってますけど……珍しいなあ。紅霧異変の後から多少は出歩くようになったって聞いていたけど、フランさんがこんな昼間から外に出てるなんて」

「フラン？」

「フランドール・スカーレットさん。レミリアさんの妹様で、キラキラした羽根を持った女の子です」

「ああ、幻想郷縁起で見たけど……かなり怖い子なんじゃないのかわかる？」

「情緒不安定だったって話ですけど、紅霧異変後は大分落ち着いているみたいですよ……変に挑発しなければ大丈夫だと思いますよ」

フランドール・スカーレット。悪魔の妹とも呼ばれ、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』という、こと『火力』の一点で見れば幻想郷でも一、二を争う程の能力を持つ少女である。

紅霧異変までは紅魔館の地下で過ごしていたが、異変を機に外の世界に興味を持って、最近は少しずつながら出歩くようになったという。

噂では紅霧異変事態がレミリアがフランに外の世界に興味を持たせ、精神的な成長を促す為に仕組んだ異変という噂もあるがそれについては本人含め、関係者全員が肯定も否定もしていないため、断言は憚られる。

ただ二つ確かなのは、レミリアがフランを溺愛している事。
そして情緒不安定だったフランが紅霧異変後は随分と落ち着き、
紅魔館から外に出るようになり始めたという事だ。

ともあれそんな彼女達の元へ、西宮と妖精二人は降りて行く。
途中で彼らに気付いたのだろう。日傘の影でレミリアが嫌そうな
顔を見せ、その横のフランがきよとんとした表情を浮かべた。
そのレミリアの元へ降りた西宮は慇懃に一礼し、

「失礼。御機嫌麗しゅう、レミリアお嬢様」

「これが麗しく見えるならお前の目は節穴だな。決ってやるうか？」
「社交辞令ですよ。察して下さい」

そのやり取りに周囲の面々も敵ではないと判断したのだろう。
チャイナドレスの女性　　紅美鈴は視線だけで咲夜に「誰？」
と尋ね、咲夜が小声で応答している。美鈴は宴会の場で西宮を目に
する機会が無かつたらしい。

紫髪の少女、パチュリー・ノーレッジは無関心。その横の小悪魔
は、こてんと首を傾げている。

そしてレミリアの横のフランはというと無邪気な表情で、

「お姉様、この人誰？　あ、チルノと大ちゃん、こんにちは！」
「うん、こんにちはフラン！」
「こんにちはー」

和やかに挨拶を交わすフラン&妖精二人。どうやら友人関係であ
るらしい。

それを横目で見つつ、レミリアが肩を竦める。

「フラン、この男は山の上の神社の住人だ。少しばかり外の世界の匂いが濃いから、余り関わらないように」

「山の上の神社？ 霊夢の神社じゃなくて？」

「ああ。閑古鳥が絶賛大フィーバー中の博麗神社に比べると信仰を集めているみたいだな」

霊夢が聞いたら夢想封印確実な評価である。

ともあれレミリアのその評価を聞いたフランは興味深げに西宮に視線を向け、

「はじめまして！ 私、フランドール・スカーレット。お姉様の妹やっています！」

「お初にお目にかかります、フランドール様。西宮丈一、守矢神社の神職見習いです」

「おい誰に断ってフランにコナかけてるんだ殺すぞ。お前には早苗が居るだろうが。泣かせないように頑張るんだろう？」

「挨拶しただけでこれですか、レミリア様。っーかやっぱ霧雨から聞いてたのかコンチクショウ」

ガクリと肩を落とす西宮に、レミリアは勝ち誇った表情を向ける。横で話を聞いていたフランや咲夜にも理解不能なやり取り。両者は互いに顔を見合わせる。

しかし実態は何の事は無い、魔理沙が風神録異変の中で聞いた西宮の言葉をレミリアに伝えただけの事である。

そしてにやにやと笑いながら、レミリアは更に西宮を追い込みにかかる。

「早苗を放っておいて良いのか？ あれほどの器量良しだ。人里の人間どもも黙っていない」

「良いんですよ、あいつは性格残念だから大抵の男はその後逃げて

行きますし。……つか、この話題止めませんかレミリア様。俺の負けで良いですから」

「ふふふ、そうかそうか私の勝ちだな。……あれ、勝ったら何か良い事あるんだっけ？」

「レミリア様のカリスマが大変上がりました」

「やったー！」

適当極まりない西宮の賞賛に両手を挙げてレミリアが喜ぶ。

咲夜やフランは嬉しそうなレミリアの様子に顔を綻ばせているが、大妖精や美鈴は少し可哀そうな物を見る目でレミリアを見ており、パチュリーに至っては視線すら向けていなかった。

チルノは知り合いがメイド妖精の中に居るらしく、メイド妖精の中にいつの間にか紛れ込んでしまっている。

「　　ところで」

そして、周囲の反応を一通り見た所で、西宮は最大の疑問を口にする。

即ち今のこの状況そのものについて、だ。

「今はまだ昼だと言うのに、吸血鬼のお二人まで含めて皆さんここで何をなさっているんですか？」

「

ええと、それは……」

その言葉に言い淀んだのは美鈴だ。

レミリアと西宮のやり取りを黙って聞いていた彼女だが、困ったように進み出て西宮に一礼する。

「　　っと、すいません。私は紅魔館の門番、紅美鈴と申します。西宮

さんですね、以後お見知りおきを」

「あ、はい。紅さん……で宜しいですか？」

「そっちは呼ばれ慣れていないので美鈴でお願いします」

苦笑した美鈴だが、すぐに表情を引き締める。

横目で見るのは紅魔館の門 否、その先にある紅魔館その

ものだ。

「今、この紅魔館は未曾有の危機に立たされています。強大な敵が館内に侵入し、辛うじて一人も欠ける事無く脱出できましたが……ここから先どうしようかと悩んでいた所です」

「ちよつと美鈴、こいつにそんな事を教えなくても良いじゃない」「外の世界の方なのでしょう？ 私達が知らない良い解決策を持っているかもしれないじゃないですか」

「本当ですか!？」

事情を説明しようとする美鈴に対し、嫌そうな顔をしてレミリアが止めようとする。

しかし反論をする美鈴の言葉に、激しい反応を見せたのは日傘を保持していた咲夜だ。

叫びながら日傘を放り出して、西宮の両手を握る有様である。

慌ててフランが日傘をキャッチして、彼女とレミリアは事無きを得た。流星に即死はしないものの、吸血鬼が日光を浴びるととても痛いのである。

だが咲夜は自分が引き起こしかけた大惨事に気付きもせずに、

「貴方はあの悪魔を退治する方法を知っているのですか!？」

「あの悪魔つてどの悪魔ですか!？ というかメイドさん必死すぎます近い近い！ レミリア様こっち睨まないで！ 俺から近付いてるわけじゃないから!!!」

身を押し付ける程の勢いで迫る咲夜に、彼女を従者として溺愛しているレミリアが鋭い視線を西宮に向ける。

無論彼が言う通り、思い切り冤罪である。この場合責められるべきは、身を押し付けるようにしている咲夜であろう。

冷静で瀟洒な彼女らしくない振る舞いに、周囲の皆が　　これまで無関心であったパチュリーまでもが何事かと視線を向ける。

しかし咲夜はそれらの視線に気付かず、必死の形相で西宮に縋り付く。

「お願いします、どうか紅魔館を、私達を助けて下さい……!!」

「あの、全然話が見えないんですけど……誰か冷静な方、説明お願いします」

「……いやその、出たんですよ」

「出たって何がですか、美鈴さん？」

そして困り果てた西宮へと、美鈴が再度説明の言葉を向ける。

さて、どう説明した物かと彼女が困ったように視線を彷徨させた

刹那

「つきゃあああああああああああああああああああああああああああああ
あああ!!」

絹を裂くような少女の悲鳴が、屋敷の方から聞こえて来た。

その場の全員が視線を向けた先、テントの周辺　　その中でも

紅魔館に近い場所から、慌てて妖精メイド達が逃げ出すのが見えた。

何事かと思つた西宮の目に映つたのは、屋敷から出て来てテントに向かつて飛んで来る一匹の黒光りする掌より小さいサイズの蟲

「　　って、ゴキブリ？」
「いやああああ！！？」

西宮が『それ』の名前を口に出した瞬間、咲夜が絶叫と共に逃げ出した。

時を止めるのも忘れての完全な敗走である。

レミリアとフランは抱き合うようにしてしゃがみガード。『フラン、私がついてるから……！』『お姉様……！』などといった寸劇が聞こえてくる。

パチュリーは自分と小悪魔の周囲にガチで魔法の障壁を張り、妖精メイドの中に混ざって大妖精も慌てて逃げ出し　　そんな中で動いたのは三名。

「てい」
「ちよいな」
「ほいっと」

西宮がゴキブリに手を向けて霊弾を発射し、それを避けて飛んだゴキブリをチルノが氷漬けにし、氷漬けになったゴキブリを美鈴が軽く弾き飛ばしたのだ。

あっさりと撃退された『悪魔』に、周囲で怯えていた面々が『もう大丈夫なのか』とでも言うような視線を向けて来る。

それらの視線を受け、チルノは胸を張り、西宮と美鈴が溜息を吐いた。

「あたいつたらサイキョーね！」
「……あの、美鈴さん。もしかしてこのゴキブリが屋敷から皆さんが退去した原因ですか？」

「ええ。……妖精メイドが何かの卵だと思って持ち込んで孵化させようとしたのが、ゴキブリの卵だったらしくて」

「うわぁ……」

だいさんじ
事情を聞いた西宮の表情が嫌そうなる。

どうやら紅魔館の面々は黒光りする油虫に嫌悪感を隠せない面々ばかりだったらしく、この結果と相成ったようだ。

「……つか、たかがゴキブリじゃないですか。多少気持ち悪くても危険は然程無いじゃないですか。何でほぼ全滅なんですか。もう少し対処できる人は居るでしょうに」

「無理よ！ あれが羽根を広げて顔面めがけて飛んで来る恐怖って言ったら……」

「弾幕よりマシでしょうが」

「一回慌てて弾幕で迎撃したら、慣性の法則で残骸が顔に飛んで来て『べちよっ』ってなったのよ！ 私はもう二度とゴキブリとなんて戦わない！！」

「わ、私は能力で破壊したら色々飛び散って……うっ、思い出したら気分が……」

吸血鬼姉妹は抱きしめ合いながらゴキブリへの恐怖を語り、

「ごめんなさいごめんなさいゆるしてくださいやだやだやだ」

完全で瀟洒なメイド長はレースのパンティ丸出しで地面にしゃがみ込んで、完全も瀟洒も投げ捨てる勢いで頭を抱えて許しを請い、

「……私は嫌よ？」

「パチユリー様、実は虫とか駄目ですよ。クールそうな対応してまずけど、さっきの障壁とか思わず引くくらいにガチでしたし」

「小悪魔、余計な事を言わないの」

図書館組も戦力にならないらしい。

ゴキブリ相手に真つ当な対処能力を持つのは、紅魔館の住人では美鈴だけ。

その美鈴は頭を掻きながら苦笑する。

「と、いう状況です。まあ非常事態というか何というか……」

「あー……理解しました」

平和な ただし概ねの紅魔館住人にとっては必死な 事

情に溜息を吐く西宮。

脳内で考え得る対処法を検討しつつ、視線を向けるのはレミリアに対してだ。

見られたレミリアが何事かと首を傾げるのに対して、彼は苦笑交じりに言葉を投げる。

苦笑の原因は単純至極。馬鹿にしたわけでも何でもなく、平和だと思つると同時に、自分を遙かに越えた能力を持つ筈の吸血鬼の意外な弱点を可愛らしいと思つたに過ぎない。

……恐らくレミリアが聞いたら、問答無用で殴られるだろう感想だが。

「確かに美鈴さんの言う通り、案はあります」

「本当か!？」

「ええ。ただし、紅魔館の大きさが大きいです。多少永遠亭に借りを作る可能性もありますが」

「……詳しく説明して貰おうか。可否はそれから考える」

「外の世界の道具で、こういう虫対策があるんですよ。家屋全体を殺虫する強烈な奴なんです。通常の一軒家で使う奴しか無いので数が足りません。薬剤関係の物となるので、永遠亭に持って行けば複製して貰えるのではないかと」

「確かにあのスペース薬師ならば、サンプルさえあれば鼻歌交じりにやってのけるだろうが……うつむ」

懊悩するレミリア。どうやら西宮の言葉に光を見出しつつも、紅魔館の主として他所に借りを作る事を厭っているようだ。

しかしそれも数秒。パンツ丸出しで震える従者と、このままでは本だけ持って家を出て行きかねない親友と、怯える妹と自分が虫に感じる恐怖心。これらの要素を勘案して、レミリアは西宮へと嫌そうな視線を向け直した。

「……分かった、案があるならそれで頼もう。それで何が望みだ？」

「おや、永遠亭に対してではなく俺にですか」

「どうせここに来たのも何か目的があつての事だろう」

「良くお分かりで」

彼女としては永遠亭に対するのと同様に、西宮へも借りを作りたくないのだろう。彼に関しては外の世界の匂いが濃い人間と断じているから尚更だ。

なるべく早くに借りを完済しておきたい。その意図が見え隠れする質問に、しかし彼は対して悪感情も抱かずに頷きを返す。

少なくともレミリア・スカーレットは陰湿な性質の持ち主ではない。

嫌いなら嫌いとは真面目から告げる、良くも悪くも直線的な性向の持ち主だ。裏でこそそこそ動かれるより余程好感が持てる。

「図書館の入館許可と、可能ならば持ち出し許可を」

「それは私の領分では無いな……パチエ、どう？」

「物に依るわ。……何の本を探しているの？」

そして話を振られたパチユリーが、西宮へと視線を向ける。
眠そうな半眼で上目遣いに見るそれは、人によれば睨まれているようにも感じるだろう。

しかし彼女にとつてはそれが普通の視線である事は、多少なりとも付き合ひのある相手ならば誰もが知っている。

つまりは知らない西宮は睨まれているのかと思ひ僅かに怯んだわけだが、それを見て溜飲を下げたらしいレミアアが喉を鳴らすような笑い声を上げた。

「くくく……そう構えるな。あれがパチエの普通の視線だ。別に睨んでいるわけではない」

「……うるさいわね、レミイ」

「あー……失礼しました。えーと、パチエ様……ですか？」

「パチエは愛称。それで私を呼んで良いのはレミイだけよ。……私はパチユリー・ノーレッジ。魔法使いね」

「あ、それは重ね重ね失礼しました、ノーレッジ様」

「気を付けてくれれば別に良いわ。……それで、西宮丈一だったかしら。何の本を探しているの？」

「実は――」

西宮はにとりから頼まれ、技術関連の書物を探している事を説明した。

それを聞いたパチユリーは横の小悪魔に確認を取り、些少なからそれに関連すると思われる蔵書がある事を確認し、西宮へと返事を返す。

「魔導書とかなら持ち出しは許可しなかったけど、それなら良いわ。屋敷の中に蔓延っている黒い悪魔をどうにかしてくれるなら、今後も入館と……魔法に関わらない本の貸し出しは許可してあげる」

「随分と譲歩したわね、パチエ」

「レミイには寝て起きたら眼前に黒い悪魔が居た恐怖は分からないわ……」

どうやら彼女も彼女で色々あったらしい。無表情に近い表情ながらも、頬には一筋の汗が流れている。

ともあれ目的達成の為の約束を得られた西宮は満足げに頷いた。

「交渉は成立ですね。それでは一旦神社に戻って、その後に一度永遠亭に向かいます。暫しお待たせしますが、ご容赦を」

「ああ。なるべく早く頼む」

「後は……美鈴さん、下準備として食料類は外に運び出して置いて貰えますか？ その中にゴキブリが混ざってないかは確認を……必要ならばチルノに一度凍らせて貰って下さい。凍らせればゴキブリは流石に死にます」

「分かりました。……ねえチルノ、飴ちゃんあげるから少し手伝って貰って良い？」

「良いよー。あ、でも大ちゃんの方も頂戴」

最強の妖精は値崩れレベルの格安報酬で手伝いに同意した。

余りの安さに横で見っていたパチュリーが溜息を吐く。

「……所で、どんな手段を用いるんですか？」

「私も気になるわね」

そして作戦実行の為に紅魔館前のキャンプ地を飛び立とうとした西宮にかけられた、美鈴とレミリアの声。

それに応じるように、彼女達以外の面々も気になるらしく、周囲から視線が向けられる。

それらの視線を受けながら、西宮は少しだけ得意げに指を立てて見せた。

「バルサンです」

#

バルサンという道具がある。

くん煙剤と呼ばれるタイプの殺虫剤であり、殺虫成分の強い煙を噴き上げ、それを部屋の隅々まで行き渡らせる事によって虫を退治するという物だ。

外の世界では良く使われる道具であり、それは守矢神社でも例外ではなかった。

早苗はゴキブリを見かけたら伝家の宝刀 という名の丸めた新聞紙 で撃墜する程度には平気なのだが、いかんせん彼女の父親が虫が駄目な人だったため、よくバルサンのお世話になっていたのだ。

社務所の棚にも2、3の在庫があつたのを確認していた西宮、それを永遠亭に持ち込んで紅魔館で使う分だけ複製して貰う心算である。

「帰ったぞー」

「おー、盟友。どうだった？」

「交渉は成立したけど、少しゴタゴタしててな。図書館に入れるようになるまで最悪数日かかるから、適当に機械でも弄りながら待っててくれ」

そして神社の縁側に着地した西宮に、縁側で携帯電話を分解していたにとりが声をかけてくる。

それに軽く応じながら社務所に入り、棚にあったバルサンを全部持って行くこうとした所で、早苗の部屋から声が聞こえて来た。

「良いですか小傘さん。『うらめしやー』が時代遅れになったように、『アモーレ』もまたいずれ時代の波に飲まれていくでしょう。それを防ぐためには、アモーレに続く新たな言葉を今のうちから考えておくことです」

「なるほど！ 早苗って凄いな。今から先を見据えてるんだ」

「ふふふ、幾ら本当のこととはいえ、そんなに褒められると照れますね。……さて、それではアモーレはイタリア語ですので、次は英語を勉強してみましようか。……一緒に英語の勉強を……いえ、トウギヤザーに英語のスタディーをします」

「と、トウギヤザーに英語のスタディー!？」

「イエス。小傘さんにマイセルフの英語フォースをティーチしてあげます！」

そして西宮は何も聞かなかつた事にしてその場を通り過ぎた。

誰だつて見えている地雷を自分から踏みには行きたくないのである。

いや、彼の友人であるパンツ奉行などは、外の世界で『見えている地雷』と呼ばれるゲームへ向けて嬉々として特攻するクソゲームイスターであつたが。

「さて、チルノと美鈴さんが向こうの準備を整えてくれてる間に来るかね」

バルサンは殺虫成分をバラ撒く関係上、食料や食器、人が口に入る物などを置いたまま行つのは好ましくない。

その辺に対する対応を虫が平気な二人に頼んで来たのだが、果たしてその間に西宮の用事が終わるのかどうか。

「……流石にあの難民キャンプで何日も生活をさせるような事はしたくねーな。ちよつと急ぐか」

そして西宮はバルサンの複製化を目指し、一路永遠亭へと足を向けたのだった。

第二十五話：湖畔の紅魔館（中）（後書き）

早苗さんの英語の成績は、赤点の1〜5点上を平行飛行という素
晴らしい点数だったようです。

華扇が可愛らしくて仕方ありません。

あと東方ちえむぶれむが面白すぎます。早苗さんは弱いけどな！

（．．．）

番外：幻想郷縁起のとあるページ（前書き）

阿求が幻想郷縁起に書こうとした、西宮の項目について。

ちよつとネタが出たので思わず。

ちなみにこれに関しては、空ノ鎖さんの『とある神主の幻想録』の「欄外、『幻想郷縁起 - とある項 - 』」を参考にさせていただきました。

番外：幻想郷縁起のとあるページ

賢しい平神職

西宮丈一 Joichi Nishimiya

職業 神職見習い(*1)

能力 無し

住んでいる場所 守矢神社

? ? ?

外の世界から幻想郷に来た守矢神社の神職見習い。

どうやら正確には来る予定は無かったらしいが、偶発的ミスで神社の神々が連れて来てしまったらしい。(*2)

本人は帰る意思は無いらしく、神社の一員としてよくあちこちに
出向いている。

神社においては山の中の事は神々が、山の外の事は彼と風祝がと
いうように役割分担されているようで、主に山の外への対外折衝は
彼が担当している。

風祝の東風谷早苗とは仲が良いやら悪いやら、周囲の人々はその
関係に多くの注目を払っている。(*3)

§ 性格 §

幻想郷には珍しい程に礼儀正しく目上を立てるが、地の部分は口が悪く他者をからかう事を好む。(＊4)

また、妖怪の賢者や竹林の薬師には劣るものの、人間にしてはかなりの切れ者である。風神録異変では“あの”霧雨魔理沙を出し抜き、脱落させるといふ快拳を為した。

良くも悪くも賢しい性格であり、本人の力は然程強くない事と相まって、『小賢しい』と評される事もある。(＊5)

賢しさを美德とする相手には受けがいいが、そうでない相手には受けが悪い。

中々に面倒そうな御仁である。

§ 能力 §

幻想郷縁起に書かれる人妖としては非常に珍しく、能力らしい能力は無い。

妖怪の賢者や他の智者に聞いても無いとの証言だったので、隠しているという事も無く、本当に固有の能力は無いのだろう。

敢えて言うならば良く回る頭が武器か。

巫女や風祝には劣るが人間にしては基礎霊力が高く、良い妖怪退治屋になれる可能性はある。(＊6)

§ 日常 §

基本的には神社の雑務をこなしているので、あちこちに出向いて

いる事が多い。

ただ、神社の家事については彼が取り仕切っているので、夕方にも行けば会う事は出来るだろう。

攻撃的な性格ではないので、用事があれば順を追って話せば聞いてくれる筈だ。

人里に買い物に来る事も多いので、里で見かけた人も多いだろう。
(*7)

風祝が料理が駄目な分得意になったと言っただけあって、料理の腕はかなりの物。

紅魔館のメイドには劣るが、それでも家庭料理としてはかなりの水準を保っているらしい。(*8)

§ 風祝との関係 §

どうやら外の世界時代から、十年來の幼馴染であつたらしい。

事あるごとに喧嘩をする光景が見られるので一見すると非常に仲が悪いが、その実互いに憎からず思っているのではないかというのが大勢の意見だ。(*9)

文々。新聞では彼らの関係についての特集を組んでおり、こつこつた話が大好きな少女達を中心に飛躍的に部数を伸ばしている。(*10)

基本的には暴走気味の風祝を彼が止めるといった事が多いようだが、風祝曰く『西宮が居るから私は安心して突っ走れるんです』との事なので、彼の存在自体が彼女の暴走を後押ししている側面が強い気がする。(*11)

また、風祝側も彼を全面的に信頼しており、異変の折などは彼の

指示を受けて動いていたようだ。

ただし彼女側は頼ってばかりだという事にコンプレックスがあるらしく、聞き取り調査中に筆者はどうすれば彼に何かを返せるのかという甘酸っぱい相談を受けた。(＊12)

総じて言えば幻想郷の少女達の格好の娯楽であり、今後のさらなる進展が望まれる。(＊13)

(＊1) 『あるばいと』と言うらしい。丁稚奉公のような物だったのだろうか。

(＊2) 当人は巻き込まれて良かったと語っている。

(＊3) 当然私でもある。

(＊4) 私は見た事が無い。一度見てみたい気もする。

(＊5) 吸血鬼や鬼など、強さを至上とする種族からの評判。

(＊6) でもまだまだ哨戒天狗にも負けるらしい。

(＊7) 巫女や魔法使いと違って、ちゃんとした社会生活を送っている。

(＊8) 外の世界の料理も作ってくれるらしい。

(＊9) 私含む。

(＊10) 私も購読を始めた。

(＊11) でも頼られている彼もまんざらでない様子である。

(＊12) 接吻でもしてあげれば良いのではないだろうか。

(＊13) 当然私も望んでいる。

番外：幻想郷縁起のとあるページ（後書き）

この後、阿求は顔を真っ赤にした早苗に襲撃をされました。

第二十六話：湖畔の紅魔館（下）（前書き）

遅くなりました、申し訳ありません。

緋想天開始前に、『気質』の扱いについて多少オリジナルという
か独自解釈な部分があると思います。

今のうちにお詫び申し上げておきます。

第二十六話：湖畔の紅魔館（下）

「全く、面倒事ね……こりゃ私も紅魔館の図書館に入る許可を貰わないと、流石に割に合わないわ」

「医学書目当てですか？」

「そっちも無いでもないけど、医学関係に関しては多分こっちのが紅魔館より充実してると思うわ。師匠っていう最高の教師も居るしね。どちらかというと、月関係の書物目当てかな」

西宮が神社を飛び立ってから数時間後。

日も沈みかけた黄昏時に、西宮は鈴仙と連れ立って紅魔館へと飛んでいた。

両者が持つのは大きな風呂敷。西宮が永遠亭に持ち込んだバルサンの薬剤を解析し、僅か数十分で永琳が処方してくれた簡易型バルサンセットだ。

曰く、『御免なさいね。珍しい物だったから、つついじくり調べちゃって処方が遅くなったわ』との事。

どうやら月にはその手の害虫は生息しておらず、それゆえにこの手の殺虫剤が生まれる事も無かったのだろう。

しかし僅か数十分で解析・処方を終えて遅いとは何事か。

西宮、図らずして永琳の底知れない能力の一端を感じた時だった。

ちなみに永琳は薬は専門だが、工学的な事は 恐らく出来な

い事はないだろうが 専門外なので、バルサンの缶の機構の再

現は早々に諦められた。

薬剤を現地で容器に叩き込んで反応させ、煙が出る前に速攻で避難という原始的な手法が採用される事と相成っている。

そして使う対象はただでさえ大きい上に、内部が咲夜の能力によって拡張されている紅魔館だ。

その為、永琳が処方した薬の量はかなり多く、平たく言えば西宮一人では持ち切れない量になったため、鈴仙も彼に同行する事になった。というのが現状だ。

「師匠も何で私にこんな仕事を命じたのかなあ」

「永遠亭としても紅魔館に貸しを作っておくのは悪くないと判断したんじゃないですかね」

「あー、政治的判断って奴？ 私そういう駄目なのよね」

「或いは自分の弟子に経験を積ませたかったとか」

「……ゴキブリ退治の経験と医者って関係あるの？」

鈴仙は不満たらたらという様子で頬を膨らませながら飛んでいる。医者を目指して勉強しているだけあって、基本的には理知的な彼女のそんな珍しい様子に、西宮の口から思わず笑い声が漏れた。

それに対して横を飛ぶ鈴仙が睨むような目を向けて来たので、やや慌てて西宮は話題を変える。

「ところで鈴仙さんは虫とか平気なんですか？ このバルサン設置する段になって、実は駄目ですと言われても困るんですが」

「まあ普通って所じゃない？ いきなり飛んで来たら驚くけど、悲鳴上げて逃げ出す程じゃないわ」

「それは重畳。頼りにさせて貰います」

最悪のパターンはこのまま鈴仙を連れて行って、鈴仙も虫が駄目だという事だろう。

その場合、バルサンの設置において戦力となるのは実質的に美鈴と西宮だけになる。

チルノも虫は平気だが、彼女に危険な薬剤の扱いを任せたいと思

う者はそう多くはあるまい。

大惨事への特急券に成り得るバッドエンドへの一本道である。

一応一番の最適解として、咲夜に時を止めて設置作業を行って貰えばと思わなくもないが、紅魔館で最もゴキブリを怖がっていたのは彼女であった。

最悪の場合は時が止まった中でゴキブリを見た瞬間『きゆう』と可愛らしい悲鳴と共に気絶しかねない。

「しかしゴキブリで大騒ぎって事を考えると、幻想郷って平和ですよね」

「そうは言うけどね。あの手の病原菌を媒介にする生き物は医者見習いとしては馬鹿にならないんだけどね。マラリアだって蚊が媒介でしょ？」

「……成程、確かに」

「そういった意味で、ゴキブリ大発生は私としても放っておけないわけよ。……面倒だけどね」

そんな会話をしながら飛ぶ事暫し。

二人の目線の先に紅魔館と、その前にあるキャンプ地が見えてくる。

相変わらず陣幕よろしく張られたテントの周辺に、わらわらと妖精メイドが群がっている状態だ。

中に混ざってレミリアや美鈴、チルノの姿も確認出来る。

「……ホントに難民キャンプ状態ね」

「あれ、何人が居ねえ。テントの中か？ ……まあ何にせよ、あのまま何日も待たせるのも気が引けますしね。永琳さんが早急に処方してくれて、本当に助かりました」

「まあそれは確かに。それじゃ、実際に設置をするのは美鈴と私と

貴方よね。美鈴に説明お願い。私はレミリアに注意事項を説明して来るから」

「あいさ」

飛びながら役割分担を決め、西宮は上空から見えた美鈴の元に、鈴仙はレミリアの元へ飛んで行く。

気付いたレミリアが鈴仙に対応を開始するのを遠目に見ながら、西宮は美鈴の横へ降り立った。

「どうも、美鈴さん。お待たせしました」

「いえいえ。その様子だと永遠亭で薬は出して貰えたようですね」

「一応は。実際に仕掛けるのは俺と美鈴さんと鈴仙さんになると思います。本来であれば時間を止められるという十六夜さんが適任なんでしょうが……」

「あ、駄目です。時間停止中に咲夜さんがゴキブリを見た瞬間、シヨックで時間停止が解けます」

「……存外簡単に攻略できるな、時間停止」

果たしてどこまで苦手なのか。

この問題に関して言えば完全と瀟洒を投げ捨てているメイド長に溜息が止まらない西宮だった。

「っていつかその十六夜さん含め、結構居ない人がいますね。テナトの中ですか？」

「いえ……妹様とパチュリー様、そして咲夜さんと小悪魔ちゃんは、大ちゃんの家で集団疎開しています」

「集団疎開で……つか妖精ってそんな大勢訪れられる家とか持つてるもんなんですか」

「光の三妖精とか大ちゃんとか、持つてる人は持つてるみたいですね。まあ珍しい部類でしょうけど」

どうやらレミリアを除き、紅魔館の住人は殆ど避難したらしい。居ても役に立たないどころか、却って邪魔なので彼的には別良いのだが。

例外は意外と冷静だった小悪魔くらいだろうか。

「ちなみにレミリア様はなんで残ってるんですか？」

「部外者相手に当主である自分が弱味を見せたら舐められるからだと思いますよ。それに、部下に嫌な事を押し付けるのに安全な場所に逃げるのが嫌だとも」

「……へえ」

美鈴の言葉を聞き、西宮は鈴仙から説明を受けているレミリアに視線を向ける。

几帳面な鈴仙から化学薬品についての詳細な説明をしているようだが

「……ああ、もう。小難しいな。とりあえず奴らを殲滅する効果があるなら私はそれで良いよ」

「あのねえ？ 自分の屋敷で使うもんでしょ！ どんな化学薬品でどのような効能があつてどのような成分なのかくらい覚えておきなさいよ！」

「覚えた覚えた。だからもう良いだろう」

「……じゃあ言ってみなさい。バルサンは何と何を反応させるの？」

「……決して引かぬ志と、一步を引ける余裕」

「どこをどう考えても反物質じゃない」

きゃんきゃんと声を上げる鈴仙に対し、煩そうにあしらおうとするレミリア。

その様子を見ながら門番と平信者の二人は苦笑する。

「あれでも良い主君なんですよ。ちょっと子供っぽいですけどね」
「楽しそうな職場で何よりですよ。さて、それじゃあこっちも説明を開始しますか」

そして西宮は美鈴へとバルサンの使い方方の説明を開始する。
その向こうで鈴仙が覚える気の無いレミリア相手にきゃんきゃんと説教を続けていた。

#

「……紅魔館が燃えている……。悪は滅んだのね、流石あたいたい」
「燃えてねえよ。ただの煙だよ。お前何もしてねえよ親分」
「でも実際、凄い光景ねコレ……」

数時間後、夜半になった紅魔館の前。

意外とバイタリテイのあるメイド妖精たちが組み上げたキャンプファイアーの灯りに照らされながら、チルノと西宮、そしてレミリアは煙を上げる紅魔館を眺めていた。

無論西宮が突っ込んだ通り、燃えているわけではない。

内部に充満したバルサンの煙が漏れ出て来ているだけ。なのだが、『これでもか、これでもか、えいえい』というくらい大量のバルサンを投入したが為に傍目にはかなりの煙が紅魔館から噴き上がっているように見える。

まるで『長く苦しい戦いだっただけ……』とでも言いたげに腕を組みながら仁王立ちで紅魔館を眺めるチルノ。

ちなみに彼女はバルサン設置の間は警戒要員として外に残っていた為、仕事らしい仕事はしていなかった。

どちらかと言うと長く苦しい戦いだったのは西宮と美鈴と鈴仙である。

「……奇襲の如く頭上から降って来た時には驚いたなあ」

「止める想像させるなあ!!」

その西宮が呟いた言葉に、横のレミリアが耳を抑えてしゃがみガードする。

だが何にせよ、この分ならば今日中に浄化は完了するだろう。

中で朽ちているだろう黒い悪魔の遺体の処理、並びにバルサンの薬剤が気になるようならば雑巾がけなどの対応は必要かもしれないが、最大の問題は終わったと言って良い。

鈴仙などは少し遠くで、全然説明を聞く気が無かったレミリアについての愚痴を美鈴に漏らしている。

とはいえ外の世界からバルサンを持ちこんだ西宮も鈴仙ほどの知識を持って運用していたわけではなく、これに関してはレミリアが注意事項を聞く義務を怠ったのが半分、鈴仙が過度に細かい所まで説明しようとしたのが半分と言えるだろう。

「にとりももう家に帰ってるだろうし、俺の用事は明日以降で良いかもしれませぬ。つーか疲れた。この状態から本とか探したくない」

「ああ、帰れ帰れ。私も何が悲しくてお前と一緒に並んで煙を吐く紅魔館を眺めてるのかと、500年に及ぶ人生に疑問を抱いてた所だ」

「そうですねか吸血ロリータ。500年生きてる割にゴキブリは駄目なんですね」

「うるさい黙れ。たかが二十年も生きていない分際であれが平気な人間の方が私からすれば分からね」

そして嫌そうな表情をしたレミリアが西宮の方を振り向き驚きに目を見開いた。

「……ん？ おい西宮丈一。お前どうした。なんか気化してないか？」

「気化？ 何を言ってるんですかレミリア様」

「いや、なんか良く見たらお前から変な霧みたいなのが立ち昇っているように見えるんだが」

「霧……？ って、何かレミリア様からもそれっぽい物が見えますよ？ 割とくつきりと」

「マジでか。……何だこれは。今現在向こうで毒ガスで虐殺されているゴキブリの呪いか？ なあ西宮丈一、お前の神社はお祓いとかしてるのだろうか。マジ怖い」

「吸血鬼が神社にお祓い頼みに来るとか超シユールう……」

呆れ顔で言いながらも、西宮とレミリアは周囲に視線を彷徨わせる。

見れば 夜間で視覚が悪かった上にバルサンで大騒ぎしていて気付かなかつたが、美鈴やチルノに鈴仙をはじめ、妖精メイドまで含む全ての人妖の身体から薄らとした霧が立ち昇っている。

今日の昼までは確実に無かった現象だ。

「……見た所一番出るのがレミリア様。続いて鈴仙さんか美鈴さん。その下が親分と俺で……妖精メイドは集まっているから見える程度で、バラバラに歩いてたら見えないほどにしか出ていない？」

「それは私が一番ゴキブリに呪われているという事か。どうしよう怖い一人でトイレに行けない」

「ゴキブリから離れて下さい吸血ロリータ。……これは純粹に力が強い人妖ほど大きな『何か』を立ち昇らせている……のか？」

首を傾げながら疑問を口に出す西宮。

ゴキブリの呪いに怯えてしゃがみガードを開始したレミリアを放置し、少し離れた場所に居る美鈴と鈴仙の元へ歩いて行く。

「だからね、薬剤という物は使い方次第で」

「あの、ちよつと良いですかねお二人とも。……何かこの辺の人妖から、妙な霧みたいなのが立ち昇ってませんか？」

「霧？ ……あ、ホントだ。何よコレ」

「これは……」

かけられた言葉に愚痴を中断した鈴仙が気持ち悪そうに自分から立ち昇る『何か』を見て呻く。

しかし美鈴はそれを見た瞬間、僅かに目を見開いた。

明らかに何か知っている反応。それに対して西宮と鈴仙の二人が視線を向ける。

「何か心当たりでもあるの？」

「心当たりと言うか……これは『気質』ですね。直接の害のあるような物じゃないですが……」

「『気質』？」

「ええ」

西宮と鈴仙の疑問符に美鈴が頷く。

「気質とは本来その人妖が持っている『属性』のような物です。その人物の在り方や思考などで変わるので必ずしも一生固定ではありませんけどね。私は気を使う程度の能力を持っていますから、多少

は知識があるのですが……何なんでしょうね、これ。気質が立ち昇るような事って普段はまず無いような」

「……ちなみにその気質が立ち昇る事による不具合とかは？」

「気質はしばしば天候に影響を与えます。今はまだ影響が無いようですが、ある程度以上に気質が立ち昇ると……その立ち昇った気質の影響を受けて天候が変わる危険がありますね。よくその人が居ると雨ばかり降る『雨男』とか居るでしょう？ それは気質の影響ですよ」

「天候、ねえ？ ……あ、その気質が立ち昇った事によって、元となる人妖に対する影響とかは？」

「んー……これくらいなら影響無さそうですけどね。……何か立ち昇ってるせいでくれんぼの時に見つきり易くなるとか」

「妖精や子供以外は困らないわね。天候が変わる事の方が問題ですよ」

そして三者は色々と意見を戦わせるが、生憎とこの時点では彼らの持っている情報が少な過ぎた。

結局のところ現状では直接的な問題には発展せず、また具体的な実害が出るまでに対策を考えれば良いやと言わんばかりに、西宮が疲れから、美鈴が生来の呑気さから、鈴仙が興味の無さからそう決定したのも大きい。

天界でとある天人が起こしたこの異変が異変と認知され、状況が動き出すには今しばらくの時間が必要であった。

しかしこの時、既に後に言う緋想天異変は始まっていたのだ。

第二十六話：湖畔の紅魔館（下）（後書き）

紅魔館イベントはあっさり気味で終了。

どちらかと言うと西宮と紅魔組の接点を作るのと、緋想天の前振りが目的でした。ゴキブリでいつまでも引つ張っても仕方ない

というより、似てるエピソードを別所で見かけてしまったので早めにゴキブリ篇は打ち切り。

緋想天ストーリーは皆好き勝手に各々の目的の為に動いている群像劇っぽくて好きですが、それが西宮と言う異分子の介入でどうなるのかは、もう少し々お待ち下さい。

第二十七話：震源地は博麗神社（前書き）

大変お待たせいたしました、申し訳ありません。

……え、誰も待ってない？

（・・・・・）シヨボーン

第二十七話：震源地は博麗神社

平たく言えばタイミングを逃していたと言えるだろう。だとしても義理を欠いていたのには変わるまいが。

「中々行くタイミングが掴めなかったよな」

「霊夢さんには悪い事してしまいましたね」

西宮丈一と東風谷早苗の二人は、並んで幻想郷の空を飛んでいた。この二人が一緒に行動する事はさほど珍しくは無い。

風神録異変後は早苗が布教を、西宮が対外折衝をという形で役割が分化してきた為に以前ほどではないが、それでも三、四回出掛けるとすればその中の一回くらいは二人一緒に外に出る。

珍しいのはどちらかと言えば、この二人の行く先だろう。

二人が飛んで行く先にあるのは、幻想郷と外の世界の境界博麗神社だ。

先の風神録異変からこれまで約二十日、早苗は人里などで霊夢とは幾度も顔を合わせる機会があったものの、中々博麗神社へ挨拶に行く機会が無かったのだ。

『一度二人で来て賽銭を入れる』とは霊夢が風神録異変の最中に早苗に言った言葉だったが、そのの履行までにこれほど時間がかかっつては、不義理と言われても已むを得まい。

そう結論付けた二人は、早苗が賽銭を、西宮が食料を差し入れとして持って来ていた。

要は遅れた分はオマケを付けるから許して貰おう精神だ。

ちなみに先の紅魔館の折から、未だに気質の流出は続いている。

飛んでいる二人の姿を良く見れば、確かに両者の身体から薄い靄のようなものが立ち昇っているのが見えるだろう。流れ出る気質は早苗の方がやや強く、西宮の方がやや弱い。

西宮はある程度この件に注意を払っており、行く先々で話を聞き回っているが、解決に繋がる情報が無いのが現状だ。

だがその調査とて無駄ではない。少なくとも、恐らくこの異変の最初期から真つ当な調査を地道に続けていた西宮は、幻想郷の住人の中でもかなりこの異変に関する情報を持っていると言えるだろう。その結果　美鈴の言う通り、気質の流出によって体調を崩した人が居るなどと言う話は未だ出ていない。

では彼や美鈴、鈴仙が懸念していたように農作物に被害が出るかと言えば、幻想郷の住人は彼らが考えていたよりも遥かにしぶとく、凶太かった。

何と彼ら、人里に話を聞きに行った西宮が気質に関する情報を伝えるや否や集会を開き、作物の育成に良さそうな気質を立ち昇らせている人間を可能な限り農業地付近で仕事させるように手配してしまっただ。

その結果、ほどよい雨と朗らかな晴天に恵まれた田畑は、例年よりもすくすくと育っていた。

農家の方々大感謝である。幻想郷の住人は流石であった。

「……さて、博麗ならこの異変について何か知ってるかな」

「んー、望み薄だと思えますけど。紫さんが霊夢さんは基本的に尻を蹴飛ばされるまで動かないって言ってましたし」

「あの性格だしなあ」

異変解決のスペシャリストである霊夢だが、初動が激烈に遅いの
が最大の欠点である。

加えて深刻さの欠片も無い異変だ。彼女の気質がどんなものは分らないが、余程変な天候でもない限り平然と過ごしている可能性が高い。

「ま、話を聞ければ儲けもんどだけ考えておくか」

「私的には好きですけどね、この異変。私の気質、神奈子様や諏訪子様と言わせれば『凧』らしいですよ。なかなか快適な気質です」

「いいねお前は。俺の場合はどうにも方向が安定しない風が吹くっただけであ」

他愛も無い会話を交わしながら空を飛ぶ二人。

それに気付いたのは早苗だった。

「……ん？」

「どうした、東風谷。拾い食いでましたのが今になって効いて来たか？」

「失敬な。ちゃんと3秒ルールは守ってます」

「否定する所が違うぞ馬鹿野郎」

「いや、そんな事はどうでも良いんですよ。それより今、揺れませんでした？」

「あ？ 揺れ？」

早苗の言葉に西宮は周囲を見回す。

揺れ　つまりは地震だろう。しかし、それを示すような様子は周囲に無い。

空中に飛んでいるのだから、地震が起きたとてそれを身体で感じられる筈は無いのだが、それを差し引いても周囲に地震の痕跡のよな物は無い。

より正確に言うならば、地面を見下ろしてみても木々が倒れているだの何だのと言った分かり易い痕跡が見えなかったのだ。

「……いや、周り見てみるよ。そういう事があつたつて光景じゃなくね？」

「うーん……なんか向かう先の方が一瞬揺れたように見えたんですけど」

「向かう先つてーと、博麗神社か？ 揺れたつーより、誰かが変なスペカでも使った余波がそれっぽく見えたんじゃねえかね」

「そうですかね……？」

分かり易い痕跡が無い故に、早苗の論を『勘違い』と切り捨てる西宮。

しかし彼はすぐにその切り捨てを撤回する事になる。

何故ならばそれから僅か数分後。彼らが到着した晴天の博麗神社で、凄まじい光景を見たからだ。

「私の、私の神社と素敵な御賽銭箱……」

そこには樂園の素敵な巫女などは既におらず、例えるならば「orz」の三文字で表現する事が出来る紅白の少女と、完全に倒壊した 恐らく神社であつたのだからう建物だけがあつたのだから。

#

「どうなつてんだこりゃ……」

「地震が来たのよ。大きな地震が……」

無闇やたらに燦々と照る太陽の下で、崩壊した博麗神社前に降り立った早苗と西宮。

西宮が呆然とした様子で呟いた言葉に、振り向きもしないまま霊夢が答えた。

そしてその言葉に早苗が反応する。

「やっぱり地震があったんじゃないですか、西宮」

「いや待てよ。さつき俺らが居た地点は間違いなく揺れてなかった。少なくともこんな、建物が倒壊するレベルの揺れは無かった筈だ。なのになんだって博麗神社だけ　って、原因究明は後回しだ。博麗、立てるか？」

「え、あ、うん……あれ、あんた達いつ来たの？」

「さっきの返事は無意識かよ……重症だな。まあ無理もないが」

西宮が近付いて肩を叩くと、漸くのろのろと霊夢が振り向いた。

元々があまり感情を表に出さない霊夢だが、それを考慮しても彼女の表情はまるで能面だ。

さしもの博麗の巫女と云えど、自分が長年暮らした家が倒壊したショックというのは大きいのだろう。

そう判断した西宮は、霊夢の腕を掴んでやや強引に立ち上がらせる。

「とにかく事情は分らんが、第二波などがある危険もある。とにかく少し移動するぞ。神社の中に、どうしても持って行かないとならないような貴重品は？」

「あ、え、無い……と、思う。博麗の巫女に受け継がれてるのは、技術と神社と陰陽玉くらいだし……」

「陰陽玉は？」

「……持ってる」

「よし、分かった。とりあえずこの場を離れるぞ」

地震とはマントル対流とプレート運動によって起こる、地球の表面を覆う岩板プレートの動きとその反発運動などで起こる大地の揺れだ。

地震大国日本に生まれただけあって、西宮はその仕組みと怖さ、並びに地震が起こった時に為さねばならないことを、外の世界基準の知識とは言え、ある程度正確に把握していた。

だが、それに従って速やかに安全な場所へ移動しようとしたのだが

「ちょよ、ちょっと待ってよ！」

霊夢が西宮の腕を振り払う。

そう、西宮の行動自体は知識としては正しかったが、目の前で住む家を失った少女に対しては少々配慮に欠けていたとも言えるだろう。

結果として無機的とも言えるマニュアルに沿った判断は、当の被災者である霊夢の反発と言う結果を招いてしまう。

呆然としていた霊夢の表情に、崩れた我が家から遠ざけられる事に対する感情的な反感が浮かび上がる。

彼女は強かに振り払われた腕に走った痛み在眉を顰める西宮へと指を突き付け、声を荒げる。

「何でそんな事をあんたに指示されないといけないのよ！　ここは私の神社よ！」

「……そうだな」

「巫女が神社から離れてどうするのよ！　馬鹿じゃないの!？」

「……おい、落ち着け博麗」

「神社が、な、無くなっちゃったって……私の神社なんだから……」

しかしその威勢も、一分と持たずに露と消える。

指した指はプルプルと震え、何かを堪えるように口元は強く引き締められている。

博麗霊夢は、およそ人としては異端の人間性の持ち主だ。

人や物への執着が薄く、全てに対して平等。それゆえの人と妖怪の間に立つ調律者としての、博麗の巫女である。

しかしそれとて、完全に全てへ執着が無いわけではない。そうだとすれば、人でも妖怪でもないただの機械だ。

他者と比べて極端に薄いが、彼女にも執着はある。長く付き合えば人にも物にも愛着を持つ。だからこそ友人関係などという物も成り立つし、彼女はなんだかんだ言いつつも紫を慕い、魔理沙を親友と認めているのだ。

そして感情とて無論ある。表に出すのが苦手だが、意外と年相応に甘い物が好きだったり、勝手に先代から受け継いだ巫女服を可愛く改造したりという少女らしさも持っている。

前言を繰り返そう。

博麗霊夢はおよそ人としては異端の人間性の持ち主だ。その能力も、ただの人が持つには大きすぎる。

しかしそれでも、確かに彼女はまだ十代の半ばを過ぎたばかりの少女なのだ。

「……………私の、神社あ……………」

長年住んだ 彼女にとっては友人や先代の巫女、親代わりであつた紫などの思い出の詰まった神社。

それが目の前で、しかもいきなり倒壊した事のショックたるや如何ほどか。

口元から言葉が零れるのと同時に、目の端からは涙が零れる。後はもう言葉にならず。

ぐすぐすと年相応の泣き顔を見せる霊夢を前に、狼狽したのは西宮だ。

「あ、えーと……お、おい、博麗？」

博麗霊夢 博麗の巫女。

およそ西宮の知る限り、超然と泰然が服を着て歩いているような少女であった。

故に神社が無くなった事に対しても過度の執着は示すまいと、まずはこの場からの避難を主張した西宮だったが、生憎それは悪手だったと言えるだろう。配慮が足りなかったとも言える。

過度に冷静な西宮の対応は霊夢の勘気を誘い、凶らずも彼女が滅多に見せない少女らしさが悪い形で表に出た形になってしまったのだから。

しかし狼狽する彼に対する救いの手は、意外にもすぐ後ろから差しのべられた。

「ああもう、昔から貴方は女の子を慰めるスキルが全く上達していませんね」

「……東風谷？」

「……大丈夫、大丈夫ですよ霊夢さん。私がついていますから」

狼狽するだけの西宮の横を通り過ぎ、霊夢に近付いた早苗が、泣きじゃくる彼女を抱きしめたのだ。

外と幻想郷との生活習慣の差か、歳はそう変わらないだろうに早苗の方がやや背が高く、結果として小柄な霊夢は早苗に抱きすくめ

られる形となる。

「霊夢さん、まずはここから離れましょう。また地震が来るかもし
れませんが、それで霊夢さんが怪我をしちゃったりしたら大変ですも
の。大丈夫です、後で一緒に戻って来ましょう」

「……………」
「神社が直るまで、私の神社に住んでくれて構いませんから。それ
に、紫様も霊夢さんが困っているのを知ったらすぐに駆け付けて来
てくれます。……………ね？」

「……………うん」

感情的になっっている相手に対して、理性論は時として反発を呼ぶ。
そういう意味では全く無力どころか足手まといな西宮とは対照的
な早苗の言葉に、意外にも素直に霊夢は頷いた。

その様子を見ていた西宮が、大きく溜息を吐いた。

「すまん、東風谷。助かった。……………博麗も、すまん。配慮が欠けて
いた」

「……………良いわよ。ああもう、恥ずかしい所を見られたわ」

早苗の胸で泣いて、ある程度冷静さも戻ったか。

抱きすくめられたまま、『ぐすり』と鼻を嚙りあげながらの言葉
ではあるが、霊夢の言葉はいつもの彼女の空気を取り戻しつつあっ
た。

「とにかく東風谷が言う通り、まずはうちの神社に移動するぞ。こ
の不自然な地震については、これから考える」

「……………分かったわ。不自然だったって言うけど、これ自然現象じゃ
ないの？」

「違うな。明らかに範囲がおかしい」

西宮が言いながら地面を蹴って空に飛び上がり、早苗と霊夢もそれに続く。

これまで早苗と西宮が飛んで来たルートを逆走し、向かう先は守矢神社だ。

「……出来そうな奴、やりそうな奴。どちらにしろ知っている限りでもそう多くはないな。特に後者は皆無に等しい」

「私に恨みを持つてる妖怪とかつて線は？」

「無いとは言わんが、やらかした後に幻想郷中から報復を受ける事が確定しているからな。これだけの力がありながら、それが分からんアホがそうそう居るとは思えないし、思いたくない」

頭の中で考え得る可能性をシミュレートしながら、西宮は溜息を吐く。

不確定要素が多過ぎる。現状で結論を出すのは危険だ。

そう判断しながら、横目で霊夢の方へと振り返る。

「まあ、その辺はどうにか調べてみる。そっちはどうにかするから、お前は神社に着いたら休めよ。精神的に結構きてるだろ」

「……………まあね。みつともないとこ見せたわ、ホント。私の泣き顔知ってる奴なんて、紫と魔理沙くらいしか居なかつた筈なのに」

「それも西宮がトドメ刺した形ですからね。ああいう場面での気遣いが足りてないですよ、西宮」

「言葉も無えよ。あれは本気で悪かつた」

「こら、その一言で済むと思ってるんですか。昔から貴方はですねえ……………」

「昔からこうだったの？ 苦労するわね、早苗」

降参とでも言うように両手を上げる西宮の後方で、霊夢と早苗がきやいきやいとガールズトークに移行し始める。

それを後ろに聞きながら、西宮はふと自分の身体から漏れ出る『氣質』に目をやっていた。

「『氣質』の異変と、この妙な地震。……関連性はあるのかね」

彼が呟いたその言葉の正誤が分かるまで、この異変は今しばらくの時間を必要とする事となる。

第二十八話：動きだす人々（前書き）

群像劇って難しいですね。

第二十八話：動きだす人々

「妖夢、妖夢。見て御覧なさい、美味しそうだと思わない？」

「幽々子様……一体何をなさっているんですか」

「何って、雪の有効活用よ」

博麗神社が倒壊して少し経過した、冥界の白玉楼。

恐らく地震で家が倒壊した霊夢を除けば、最もこの異変で苦労している人物がそこに居た。

名を魂魄妖夢。気質が天候に現れるという異変の結果、主が降らせ続ける雪を延々とスコップで雪かきし続けるという、剣士の本質とは程遠い業務を続けている少女であった。

幸か不幸か紅魔館黒い悪魔襲撃事件以降に人里で西宮と会う機会があり、聞き取り調査をされたついでに気質の異変については聞き及んでいた妖夢だが、原因が分かったからと何の慰めにもなりはしない。

雪にも負けないほど白いたおやかな手で、雪を集めてお椀に盛ってシロップをかけている主を意識的に視界に入れないようにしつつ、妖夢はいつもの刀は部屋に置き、その代わりにスコップでざっくざっくと雪を排除していく。

「んー、甘い。甘くて冷たくて美味しいわあ。氷精が紫にでも頼まないと、中々こうというのは食べられないものねえ。妖夢もどうかしら？」

「結構です。私はここ数日朝から晩まで雪かきをしている関係上、雪はもう見るだけで嫌になって来ています」

幸いにして冥界に咲いている植物は、普通の生きている植物とは

一味違う植物の幽霊だ。

西行妖　　については幽霊なのかそうでないのか、そもそも真つ当な植物と呼んで良いのかすら怪しいレベルの存在なので除外するが。

ともあれそれ故に庭の植物もたかが数日の雪ごときでどうにかなるほどヤワではないが、だからといって雪に埋もれさせていて良いとも思えない。

そんな生真面目な妖夢の性格も相まって、先の言葉通り彼女はここ最近毎日毎日雪かきを続けていた。

或いは途中からは単なる意地になっているのかもしれないが。

「よよよ、私の気質が降らせた雪をそんなに嫌うなんて……。妖夢は私が嫌いなものね」

「誰もそうは言っていないませんってば。雪もこんなに纏めて降らなければ嫌いじゃないですし……。ああ、でもそろそろ本気で嫌になってきた」

スコップを雪に刺して、彼女は深々と溜息を吐いた。

嘘泣きしている主に関してはいつもの事なので別に良いのだが、終わりの見えない作業と言うのはなかなか精神的にキツイ物がある。

或いは精神鍛錬としては良いのかもしれないが、だからといってこの状況を喜べるほどには彼女はマゾヒスティックでも前向きでもない。

そして本気で嫌気がさしたという様子の妖夢に対し、幽々子が可愛らしく小首を傾げ、

「そんなに嫌なら止めれば良いのに」

「止めればって……嫌ですよ、確かに幽々子様を斬り捨てれば止まるんでしょうけど、流石に私も雪を止める為だけに幽々子様を斬り捨てようとは思いません」

真顔で従者が告げた言葉に、流石の幽々子もがくりと肩を落とす。流石は魂魄妖夢。基本的に物事の解決手段は『斬る』から始まる、幻想郷が誇る脳筋系サムライガールである。

「……………ごめん、今の発言は流石に私でも予想外だったわ。いやいや妖夢、そうじゃなくてね？　これが異変なら、異変の黒幕が居る筈でしょ？」

「……………はっ!？」

「かなり考えないと分からない事なの……？　ねえ妖夢、私、真面目に時々貴方が心配になるわ……………」

予想以上に現状に対する思考が足りていなかった妖夢に、少し真面目に心配そうな視線を送る幽々子。

そんな幽々子へ、妖夢は強い尊敬を宿した視線を向けて来る。

「幽々子様、その慧眼感服致しました。成程、確かにこれが異変ならば、首謀者がどこかに居る筈……!」

「うん、まあ、いつ気付くかと思って言わなかった私も悪かったわ……………」

「しかし、残念ですが私がここを離れてはこの雪は誰が……………」
「でもこのまま雪かきしてばかりって言うのも、無限ループみたいで不毛よねえ。異変の黒幕さえどうにかすれば、今は夏なんだから雪くらい勝手に溶けるんじゃないの？」

「……………なるほど。つまり黒幕を切って捨てれば全ては解決するんですね!」

そしてこの苦行からの脱出口を見出した妖夢が、幽々子へと頭を下げて臣下の礼の形を取る。

「幽々子様！ この魂魄妖夢、早急に異変の首謀者を斬り捨て、この異変を解決して来たいと思います！」

「ええ、そうしないさいな。ただ、少し急いだ方がいいかもしれないわね。」

「……どうしてですか？」

「いえいえ、こっちの話よ。」

臣下の礼から発された妖夢の言葉に鷹揚に頷く幽々子。

その顔に浮かぶのは苦笑の形だが、『急いだ方がいい』と言った幽々子の真意を察せないまま、妖夢は首を傾げる。

対する幽々子も別に詳しく説明するつもりは無いようで、蝶の文様が描かれた扇子を開くと、それで優雅に口元を隠し、

「それじゃ、妖夢。気を付けて行ってらっしゃいな。吉報を期待してるわよ。」

「はっ！ 畏まりました、幽々子様！」

そして妖夢が傍らの地面に刺した長物を抜き、それを手にして空へと飛び立っていく。

目的地は地上だろう。冥界よりもそちらの方が格段に情報は集めやすい。
が

「いやいや妖夢？ ちょっと妖夢。待ちなさい妖夢。貴方、スコップで何をしに行く心算なの？」

いつもの刀を部屋に置きっぱなしなのを忘れ、横にあった

スコップを片手にカツ飛んで行く従者サムライガールへ向けて、幽々子は珍しくかなり本気で呆れた声をかけたのだった。

#

「ふう」

妖夢が改めていつもの二刀を手に飛び立ったのを見送ってから、幽々子は縁側で軽く溜息を吐いていた。

彼女の愛しい半人前従者は、真面目なのだが時々致命的なボケをかますのが玉に瑕だ。

故にこそその半人前なのだろうが、時々可愛らしいを通り越して心配になる。

そして雪が止んだ白玉楼にて、幽々子は先程まで妖夢が頑張って雪かきをしていた辺りを見やった。

「……ちよつと遊び過ぎたかしらね？」

そう、妖夢が出て行くまで深々と降り注いでいた雪は、既に完全に振る事を止めていた。

これが意味する事は何か。

雪は幽々子の気質ではなく、妖夢の気質だった？

否だ。そうであるならば人里に出向いた時などに、妖夢の周囲には雪が降っていた筈。

彼女の気質は蒼天であり、この雪は幽々子の気質である。否、あったと言っべきだろう。先程までは雪の気質だった彼女の気質は、今は既に別の物に変わっていたのだ。

「んー、次はどんな天候にしてみようかしら。もうあまり長く遊べそうにないしね。」

気質はあくまで『氣』の質だ。

それは生まれてから死ぬまで不変ではなく、当人の性格の変化などから気質もまた変化する。

とはいえそれは『不変ではない』程度の話であり、『三つ子の魂百まで』という言葉もあるくらいに、身に付けた気質はそうそう変化する物ではない。

故にこの場合、自らの心境一つで気質を変えられる幽々子が慮外であり例外、つまりは規格外と言うべきである。

固有の能力も無しに自らの精神一つでそのような荒業を鼻歌交じりにやってのけた彼女は、しかし反省の意を込めて誰も聞いていない独り言を紡いでいく。

「まさか神社に直接攻撃とはねえ。今は寝てるみたいだけど、紫が起きたら速攻で終わらせられるわ。ブチ切れて奴かしらねえ。あらやだ、怖い怖い」

本来であれば幽々子は妖夢が自らの意思でこの異変を解決に行くのを望んでいた。

妖夢にとつては良い成長の機会になるだろうという考えからだ。雪という気質も、妖夢がこの天気を嫌ってさっさと異変を解決に行きたくなるように仕向ける為を選んでに過ぎない。

まあ妖夢が真面目というか、一度方向性を決めたら他に考えがいかない思考の持ち主だったため、彼女は延々と雪かきをしているだけに終始していたのだが。

しかし妖夢が自発的に動くのを待っていていられなくなったのは、つい数時間前。

地上で妙な気質の動きがあったと思ったら、博麗神社が地震で潰されたのだ。

こうなれば八雲紫が黙って居まい。妖夢に関わらせる間も無く、霊夢を娘のように溺愛している大賢者が異変を解決してしまうだろう。

故に幽々子は妖夢に完全に自発的に行かせるというのを諦め、自らの言葉で異変の解決に行くように誘導したわけなのだが

「まあ、流石に博麗神社を潰すのは洒落になってないわねえ。どうするのかしら、あの子。古い馴染みとはいえ、流石に紫が黙っていないわよ」

そう言って眉を顰める幽々子の目には、神社が潰れるまでは楽しむだけだった状況を憂う光が僅かながらに浮かんでいた。

#

一方その頃、神社の倒壊について知っていたのは幽々子だけではない。

烏天狗の射命丸もまた、早期に神社の倒壊について知った人物である。

「と、言う事は霊夢は山の神社の方に避難したわけね」

「そっすねー。早苗さんと西宮君が連れて来たのを見たッスよ」

「……そう。まずは良かった、と言うべきかしらね」

彼女は現在、天狗の里のはずれにある自宅にて、哨戒天狗である
椛から情報を得ていた。

情報内容は神社倒壊後の巫女の動向であり、たまたま早苗と西宮
が霊夢を連れて来た所を目撃していた椛から得た霊夢の安否の情報
に、安堵の溜息を吐く射命丸。

博麗神社は幻想郷の要の一つだが、神社の崩壊だけで速攻でどう
にかなる程度に甘い結界を組むような八雲紫ではない。

故に神社の崩壊は致命傷ではない。そもそも博麗の巫女は仕事柄
妖怪に狙われる事も多く、その関係で神社が破壊された事も霊夢以
前の博麗の巫女の時代には稀にあった。

問題は、この地震と神社倒壊が原因で博麗霊夢が亡くなった場合、
心情的にも実務的にも、色々な面で不味い。不味過ぎる。

実務面では次の巫女が選ばれるまでの、調律者の不在による幻想
郷のパワーバランスの不安定化。並びにスペルカードルールが巫女
が居なくても定着するか否かといった不安だ。

紅魔郷異変がスペルカードルールを用いた初めての異変であった
事からも分かるように、スペルカードルールが制定されたのはごく
最近　　というより、霊夢の代になってからの話であり、その
制定には霊夢と紫が非常に大きく関わっている。

制定者にして第一人者。

そんな霊夢がスペルカードルールの制定から然程時間が経過して
いないというのに死去してしまうのはかなり不味い。

幻想郷というごく狭いこの世界で力を持った妖怪たちが好
き勝手に暴れては、幻想郷はすぐに荒廃してしまうだろう。しかし
何もせずに茫洋と生きているだけでは、妖怪としての本分は満たせ

ない。それは生きていたのではなく、死んでいないだけだ。

その点スペルカードルールは、ある程度の制限が加わった事で幻想郷と言う世界自体を危険に晒す事なく妖怪が暴れられ、そして暴れる妖怪相手に人間が対等の立場で戦いを挑める。

バランス調整とガス抜き、二重の意味で非常に上手いルールだ。

故にこそ、その定着前に第一人者が死んでしまうというのは何より痛い。

昨今の普及ぶりを見るにすぐ廃れる物とも思えないが、スペルカードルールに対して痛い打撃になるのは間違いないだろう。

そして心情面としては言えば、今代の博麗の巫女である霊夢はなんだかんだで慕われる娘だ。

彼女が死んでしまうのは、射命丸としても非常に悲しい。

「……まあとりあえず、無事なら無事で良かった……という所かしら。紫がどういう反応するのか、今からちょっと楽しみなような怖いようになって所だけだ」

「文さんはこの異変には動かないんスか？」

「あー、私はあんまり好きな天候にならなかつたから、嫌といえば嫌なんだけどね。わざわざ解決に動くほどでもなかつたし、こうなつたら紫が動くだろうから、別に自分から動かなくても良いかなつて。まあ、情報があれば確かに嬉しいし、新聞用に倒壊した博麗神社の写真は撮りに行くけどね」

そしてその上で、霊夢が無事ならば後はどうにでもなるかと射命丸は結論。

とりあえずは外に出る度に風雨になる自らの気質に陰鬱とした気分になりつつも、大スクープなのは確かなので写真を撮る為に博麗

神社に向かう事にする。

その背に向けて、ぱたぱたと尻尾を振りながら椀が声をかけた。

「情報があれば嬉しいってんなら、西宮君が元々結構調べ回ってたみたいツスね。ちょっと文さんが博麗神社行ってる間に、ボクが聞いてくツスか？」

「んー、そうね。お願いするわ」

かくて烏天狗の射命丸文と、その部下の犬走椀も動き出す。

最終的に自分達がこの異変に対し、どのような立場になるかも知らないまま。

#

「はあ……」

そしてこちらも同刻。

晴れた空に強い風と雨という、いわゆる『晴嵐』の天候に晒されながら、竹林をとぼとぼと歩いている月兔が一人いた。

へにより耳が風になびき、ブレザーのスカートが手で抑えて居なければ大変けしからん事になってしまふ事に溜息を吐く少女、鈴仙・優曇華院・イナバ。

本来であればこの竹林の奥にある永遠亭にて師の元で薬学の勉強をしている時間の筈の彼女が、何故明らかにしょぼくれた様子で歩いているのか。

その理由は単純にして、酷く馬鹿馬鹿しい理由だ。

「姫の我儘。気まぐれ。引き籠り。求婚バスター。他には、ええと……」

愚痴愚痴と永遠亭の主の事を罵りながら歩いている鈴仙。

その原因はその罵詈雑言の一番目と二番目の通り、主の我儘が原因であった。

曰く、『この妙な気質の異変について、暇だから調べて来て』とのこと。

師匠に渡された薬学の本を読んでいた鈴仙、暇なのは貴方であつて私じゃないと叫びたかつたのだが、そこで世慣れしている性格が災いしたのだろう。

目上の要請を断れず苦勞するという、日本産どころか地球産ではない月兔なのに現代日本のサラリーマンを彷彿とさせる優柔不断さで、結局その話に頷いてしまった鈴仙。

師匠である八意永琳に『姫から仕事を申しつけられたので出掛けて来ます』と泣く泣く告げ、全く調査のアテどころかノウハウすら無く、それどころか雨具や弁当も無いまま出掛けた鈴仙。手荷物は出がけに師匠に渡された栄養剤の瓶が数本だけだった。

「効き目は保証するけど強すぎるから、何本も飲むと最悪爆発する……。何を入れたらそんなトンデモな栄養剤が出来上がるんですか、師匠……」

ジョリー・ロジャーの如き髑髏が描かれた、見るだに健康に悪い栄養ドリンクの瓶を見て、更に溜息を吐く鈴仙。

優しくも厳しい理想の師匠の最大の欠点は、時々知的好奇心の赴くままに妙な物を作る癖だった。

「それに調査って言っても、霊夢や魔理沙みたいにノウハウがある

わけじゃないし……どうせ姫様だって本気で期待しているわけでもないだろうし……。どっか風雨を凌げる場所に少しお邪魔させて貰おうかなあ。」

そして鈴仙・優曇華院・イナバ。この時点で異変調査に対する熱意はゼロどころかマイナスに突入していた。

調査を開始する前から全力でサボる方向に思考を傾け、しかし財布すら持って来ていない自分の現状に気付いて頭を抱える。

「……人里の茶屋とか考えたけど、お金が無いか……世知辛いわね、全く」

彼女はどうしたものかと思考を開始する。

そもそも鈴仙は人付き合いが得意なタイプでも、交友関係が広いタイプでもない。

神社の宴会などから顔見知りはそこそこいるが、こういう時に休ませると言って上がり込めるレベルの友人の心当たりは多くは無いのだ。

「あつ、そうだ。守矢神社なら……」

そして思い付いたのは、彼女にとって手のかかる患者でもある山の上の神社の人間二人。

宴会の時には色々世話を焼いたり手伝いもした身であるので、雨宿りに上がり込んでも気の咎めは少ない。

まあ、貸しを返してもらおうと思って雨宿りに行かせて貰おう。

「そうと決まれば、早速行動ね。いつまでも雨風に当たっていると、流石に身体に良くないし……」

今が夏だという事、人間よりは格段に丈夫な月兎である事があつても、無駄に風雨に身体を晒すのは医学上とてもじゃないが褒められた事ではない。

そう結論付け、鈴仙は晴嵐の天候を引き連れて、守矢神社へと飛び立って行ったのだった。

第二十八話：動きだす人々（後書き）

作中で鈴仙が言ってる栄養ドリンク「国土無双の薬です。

知ってる人が多いとは思いますが、緋想天で使えるスペルカードであり、自身の攻撃力・防御力を強化する効果があります。

効果は三本目まで累積しますが、四本目を飲むと何故か爆発します（自分はダメージ無し。敵にぶつけると大ダメージ）。

本当に永琳は何を入れてこの薬を作ったのでしょうか。謎です。

第二十九話：守矢組＋、出撃（前書き）

神奈子様の気質は捏造です。

永琳や輝夜、フランなど天則出演してない勢は、基本的に気質に関してはお力して書くか捏造させて頂く事になると思います。大人の事情とお思い下さい。

輝夜辺りは『天候：永夜（常に夜になる）』とかそれっぽい気もしますけどね。あ、その場合永遠亭の人参畑が大変だ。

第二十九話：守矢組＋、出撃

「……鈴仙さん？ 置き薬の売上回収はまだ先じゃなかったでしたっけ？」

「別件よ。少し上がらせて貰っても って、珍しいわね。霊夢、何でここに来たの？」

「私からすれば、あんたが一人で永遠亭から外に出向く方が珍しいけど。どうしたのよ、鈴仙」

西宮と早苗が霊夢を連れて守矢神社に戻ってきたのと、とある来客の到来は奇しくも同時だった。

びしょ濡れになった鈴仙・優曇華院・イナバその人と、西宮・早苗・霊夢のトリオがほぼ同時に神社の前に到着したのである。

はて何用かと首を傾げる西宮へと鈴仙が返し、その鈴仙と霊夢は互いに出歩くのが珍しい人種である相手が守矢神社に来た事を訝がる。

元来からして鈴仙は非アクティブ派であるし、霊夢も用事も無いのに神社の外に出向くような性格はしていない。

「私は姫様から無理難題を押し付けられて、避難場所にここに来させて貰ったの。割と個人的な付き合いがあるしね。そっちは？」

「……私は」

そして溜息交じりに鈴仙が言った言葉に対して、霊夢が倒壊した神社を思い出したのか言い淀む。

無関心で冷静な霊夢らしからぬ反応に鈴仙が首を傾げるが、彼女が何か言う前に西宮が割り込んだ。

「鈴仙さん、申し訳ないんですがその件に関しては俺が説明します。……東風谷、博麗を客用の寝室に案内してくれ」

「あ、はい。分かりました。鈴仙さん、すいませんが急ぎますので、御挨拶も満足にできず申し訳ありませんが、御用向きは西宮にお願います」

「……悪いわね」

「なんの。まあとりあえず休めよ、博麗。話はそれからだ」

そして早苗は鈴仙に一礼して、霊夢を連れて社務所に入っていく。去っていく二人を見送り、守矢神社の前に残されたのは西宮と鈴仙だ。

こてんと首を傾げ、一拍遅れてへによりとウサ耳も垂れさせながら、鈴仙が西宮に声をかける。

「……何があつたの？」

「博麗神社が局所的な地震で潰れました。俺と東風谷は潰れた神社の前で呆然としてた博麗を保護して連れ帰って来た所です」

「へえ、神社が　　つて、ええ!？」

その言葉に鈴仙が驚愕、愕然といった面持ちで声を上げる。

無理もあるまい。博麗神社は幻想郷の要の一つだ。それが潰れるなど、穏やかな話とは言い難い。

「流石に博麗もかなり参ったみたいで、少し揉めた結果ですがとりあえず東風谷についていて貰って、ウチの神社で休んで貰う事になりました。八雲様がいればもう少し話が早かったのでしょうか」

「紫は……うん、まあ能力的には比類無いだろうけど、眠りが深いのがねえ」

八雲紫。幻想郷においても最強格の能力・妖力・知力を兼ね備え

る妖怪の賢者。

一見すると酷く胡散臭いが、その実は律義で優しく情に篤い人柄の持ち主だ。

幻想郷の大物達からの信頼も厚く、風神録異変では反目に近い状態であった天狗も、八雲だけは敵に回すべきではないと判断していた程だ。

およそ考え得る限りで万能と言える彼女の問題点は二つ。

一つ目は話し方や態度の胡散臭さも比類無く、非常に誤解され易い事。

二つ目は非常に眠りが深く、冬季には冬眠と称して余程の事例が無い限り月単位で引き籠り、そうでない時期も一度眠ると非常に長時間起きて来ない事である。

橙の住処でもあるマヨヒガに居れば話は早いのだが、そうじゃない場所で寝ていた場合、式神である藍を発見する以外に接触の仕様が無いのだ。

「それで、鈴仙さんは避難場所と言っていましたか」

「まあねー。姫から無理難題を押し付けられたんだけど、私の気質って外出に向いてないから嫌になっちゃって。ここで休ませて貰えないかなー、って」

「ああ、成程……。確かにウチの神社はそういう面で楽ですよ。神奈子様と諏訪子様の気質が相殺しあって、非常に過ごし易いです」

この異変、気質は基本的に霊力・妖力の強い者の気質ほど表に出やすい。

例えば永遠亭では永琳や輝夜の気質が天候に現れる事が大半になっているし、白玉楼は幽々子の影響で雪景色だった。

そして守矢神社はどうかと言えば、諏訪子の気質である『梅雨』と神奈子の気質である『日照り』が相殺して、適度な日光と適度な

雨という実に過ごし易い気候になっているのだ。

鈴仙も決して弱い妖怪ではないが、二柱を相手として比較するには流石に弱い。

彼女の気質である『晴嵐』が表に出る事は、ここに居る限り然程無いだろう。

そう判断して安堵の声を上げる鈴仙だったが、

「じゃあ、俺は少し出て来ますから、滞在云々に関しては神奈子様が諏訪子様に言っして下さい。本殿にいらっしゃると思いますので」

「……え」

続く西宮の言葉に顔を青くする。

そう、彼女としては西宮と早苗に貸しがあるから休憩場所を選んでというのであって、守矢神社そのもの、より正確に言うならば神奈子と諏訪子に貸しがあるわけではない。

ある意味西宮よりも現代日本人らしい精神性を持つ鈴仙が、貸しがあるわけでもない別の組織のトップ相手に『ちよいと休憩場所にさせて貰えますか』という、一種図々しい要求を出来るかどうか。

答えは否だ。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ 取り次いで頂戴よ、私は御二柱相手にツテとか全然無いのに！」

「大丈夫ですよ、別に『休ませてくれ』程度で腹を立てる方々でもありませんし、宴会で顔合わせくらいはしたんでしょ？」

「無理、絶対無理！ 何かやらかして姫や師匠に迷惑かけたらと思うと、今から胃に穴があきそうになるのよ！」

「……胃腸薬をお勧めします。ウチの薬箱にありますので、勝手に探して飲んで下さいね。場所は分かります？」

「私が設置したんだもん、分かるに決まってるでしょうが！？」

ていうかそれウチの薬じゃない！」

「効き目抜群でしょう？　じゃあこれで解決ですね、俺はもう行きませんで」

「効き目？　当然じゃない、師匠の薬だからね！　……って、違う違う！」

敬愛する師匠の薬を引き合いに出されて胸を張る鈴仙だったが、一瞬後に我に返って慌てて西宮に向き直る。

飛び去ろうとしていた西宮の腕を引つ掴む彼女は地味に必死だ。

『兎は寂しいと死ぬ』と良く言われるが、彼女の場合目上の人妖の前に放り出されても死ぬらしい。主に胃が。

「そんなに急いでどこに行くのよ。神社が潰れたって言ってたけど、それと関係があるの？」

「ええ、まあ犯人探しに。　少々腹が立ちましたんで」

「腹が立ったって……」

「あー、いや。少し愚痴になりますけど聞いて貰えますか？」

「……良いわ。カウンセリングも医者役割か」

腕を掴まれたまま地を蹴って飛び始めた西宮に、遂に鈴仙も観念したのでろう。

溜息を吐きながら、彼に追従するように神社から離れるルートで飛び始める。

先行する西宮は振り向かず、平坦な調子で言葉を紡ぐ。

「俺、博麗ってぶつちやけ化物の一種だと思ってたんですよ。人の身で神奈子様と渡り合い、人間と妖怪の調停という役割をこなし、これまでに数多の異変を解決して来た、人にして人にあらざるモノみたいな物だと」

「その割にはタメ口だったじゃない」

「……何ででしょうね。奴の雰囲気見ると、敬語で話すのも馬鹿らしくなったからかもしれないけど」

溜息を吐きながら、飛行速度は緩めずに言葉を続ける。
対する鈴仙は要領を得ない彼の言葉に首を傾げながら、腕を掴んだまま追従する。

「まあとにかく、俺は博麗の事をそう見ていたんですよ。だから、今回神社を無くして呆然としている博麗に、配慮の欠片も無い実務最優先の言葉とか吐いちまって……泣かれました」

「泣いた……って、あの霊夢が!？」

「ええ。泣かせちまったんですよ、あの博麗を。 だから」

そして振り返る西宮の表情は、いつもの温厚そうな糸目ではなく、両目を開いた据わった表情だ。

早苗がいれば苦笑交じりに断言しただろう。

彼は今、確実に怒っている。しかもその対象は事件を起こした黒幕もそうだが、

「何よりもまず泣かせた自分に腹が立つから、この件に関してはとにかく、やれる事からやって行きます。まずはこの事件を起こした黒幕を探す。そこから先は　まあ、その時考えましょう」

「……危険じゃない？　博麗神社に喧嘩売るような相手が黒幕よ？」
「勝ち目が無い相手に喧嘩売るのが嫌なら、俺は先の異変で霧雨相手に立ち回ってませんよ」

そして一切の躊躇無くそう返した西宮に対し、鈴仙は一人の少女の面影を幻視した。

男女の別こそあれ、彼の雰囲気は彼女が良く知る一人の少女に良く似ていたのだ。

「……成程。あー、紫や文が貴方を實力以上に評価してる理由がよく分かったわ。貴方って表面上は今の外の人間に近いけど、根っこは昔の外の人間ね、こりゃ。頑固で負けず嫌いで肝の太い、大昔の大和の間人。私はその時代の和知知らないけど、姫や師匠が嬉しそうに妹紅の事をそう話していたっけ」

魔理沙と風神録異変で対峙した時に近いだろう、据わった目で返す西宮の言葉に、ここに至って鈴仙は完全に説得を諦めた。

と、言うより彼女が感じた今の西宮に良く似た雰囲気を持つ少女を思い出したと言った方が正解か。

藤原妹紅。

蓬莱山輝夜の宿敵、と一言で表現して良いのかも良く分からない少女。

大昔に蓬莱の薬を飲んでから、それこそ千年以上輝夜を探し続けて来た筋金入りの頑固者だ。

となれば説得は無理。

かと言って神々に『チヨリーツス、ちょっと永遠亭追い出されて来たのでここで休ませて下さい。ウィツシュ!』などと言える度胸は無い以上、現状での鈴仙の選択肢は西宮に付き合う事の一択となる。

「……まあ、元々姫様から与えられた仕事も異変の犯人探しだったしなあ。あーあ、結局真面目に仕事する事になるなんて……」

「ついて来てくれるんですか？ まあ俺としては助かりますけど」

「早苗は霊夢についてるみたいだし、神々二柱相手に話を通すとか私の胃が死ぬわ。だったらこっちの方がなんぼかマシよ」

そして諦めた鈴仙が西宮に追従するのを止め、速度を上げて横に並ぶ。

「それで？　まずはどこに向かうの？」

「恐らくあの地震は、この気質の異変の延長線上にあります。ならば」

すっ、と西宮が前方を指し示す。

まだ遙か遠いが、うっすらと霧に覆われた湖の遠景が確認できた。

「“気質”のプロフェッショナル、美鈴さんに話を聞きに行ってみましょう。駄目なら駄目で、図書館の蔵書から何か知識が得られるかもしれません」

「なるほど、まずは紅魔館か。妥当な線ね、付き合いましょう」

かくて、鈴仙と西宮の二人は紅魔館へと進路を取る。

理詰めで物事を考えるこの行動が、実は本命から遠ざかっている事に、彼らはまだ気付いていない。

紅魔館へ向けて空を飛ぶ彼らから立ち上った気質は、上へ向かっている。

妖怪の山の頂上にある守矢神社、その更に上　“天界”と呼ばれる天人の住まう領域へ。

#

「どうだった、早苗？　霊夢の様子は」

「はい、どうやら落ち着いた様子で……今は客間の布団でお休みに

なっています」

「そうか。……八雲に安定した連絡手段があれば良いのだがな」

「まあ無い物ねだりだね。まずは博麗の巫女を保護できただけで良しとしようよ」

そして西宮と鈴仙が飛び去って暫し。

守矢神社の本殿に入って来た早苗は、そこで待っていた神奈子と諏訪子に現状を報告していた。

流石に博麗の巫女も、目の前で神社が潰れたショックは大きかったのだろう。

早苗の言葉通り、霊夢は今守矢神社の社務所にある客間で、布団に包まって眠っている。

「狙いは神社だったのか霊夢だったのか……まあ、どちらでも構わん。八雲には借りがあからな。もし次の攻撃対象にこの神社が選ばれたとしても、私が居る限り霊夢に手出しはさせんよ」

そして神奈子は早苗からの報告を聞き、鼻を鳴らして胡坐をかく。どこからでも来るが良いとでも言わんばかりの態度は、流石に数多の戦を潜りぬけた軍神だ。

しかしその横の諏訪子は懸念がある様子で、自信満々といった様子の神奈子の態度に口を挟む。

「けどその場合、神奈子と　念の為、私も神社に残る事になるね。幻想郷の住人、それも異変の首謀者クラスには私達と同格程度の実力者も居る。万全を期すなら私も残るべきだ」

「そうだな。……丈一は異変について調べに行ってしまったが……」
「私も調査に行きます！　霊夢さんの神社を壊すような人は、私自

からお説教してあげます!」

「……やっぱりそうなるよねえ」

諏訪子が懸念が当たったとばかりに肩を竦める。

眼前の風祝、そして見習い神職の少年は、積極的にこの件に対して関わる姿勢だ。

弾幕ルールに則った異変ならばそれでも良いのかもしれないが、相手は神社への直接攻撃なんぞをやらかすような手合いである。

スペルカード・弾幕に則って行動してくれるかどうか、そしてそんな相手に対する調査をやらせて良いのか。

それを懸念する諏訪子であったが、しかし今度は諏訪子に対して神奈子が横から口を挟む。

「……早苗が行きたいならば行かせてやるのも親心だろう。少なくとも、早苗と丈一は前の異変では我らの予想を越えた働きを見せた。既に一人前の風祝と神職だ。そして一人前の相手に過保護になるのは、褒められた事ではないだろう?」

「……むう。まあ確かにそうんだけどさ」

諏訪子はやや納得がいかない様子でありながらも、神奈子の言葉に理を認める。

確かに過保護に過ぎてもまた、早苗や西宮の為にはなるまい。

「けど、このまま一人で送り出すのもね。誰かあと一人くらい供がいれば」

「チーッス! 神奈子様諏訪子様風祝さんあと負け犬居るツスカー!?」

そして一人で早苗を送り出す事に対する懸念を重ねて口に出す諏

訪子の言葉に、今度は横の諏訪子からではなく、神社の前の方から横やりが入った。

元気な、ただし冷静に考えるとかなり無礼な声。

このような言葉を満面の笑顔と共に言いながら、入室の許可も待たずに飛び込んで来て床を転げ回り、檜の床を堪能するようなおバカさんは幻想郷広しとはいえ一人しか居ない。

「ヒヤッハー！ 檜の香りっス、癒されるっスー」

「……犬走か。どうした？」

「あ、神奈子様チーッス。えっと、今現在起きている異変に関して、西宮君が結構情報を集めてた筈ッスから聞きに来た所ッス」

呆れた様子の神奈子の言葉に、転げ回りながら器用に顔だけを神奈子に向けて椀が返事を返す。

その椀を見て、早苗がこてんと首を傾げた。

「えっと、諏訪子様。誰かと一緒に行けば問題無いんですよ？」

「……いや、まあ、確かにそう言ったけど……」

「じゃあ椀さん、西宮は今出掛けていますけど、後でお話させますんで少し私に付き合っただけで貰えませんか？」

「『かつぶめん』一個で手を打つッス」

『オイ、幾らなんでもコイツはねーだろ』とでも言いたげな表情の諏訪子の前で、値崩れレベルの格安で交渉が纏まった。

用事の内容を聞く前に快諾した椀をお供に、やる気満々の早苗は早くも本殿を飛び出さんばかりの状態だ。

「それでは諏訪子様、神奈子様。風祝の早苗、出撃いたします！」

「……まあ、なんだ。調査に行くのは構わんが無理はするなよ、早苗、犬走」

「調査？ 何の調査ツスか？ 大天狗様の禪の色？」
「いいえ、違います。実は」

そして言うべき言葉が見当たらないまま二人を見送る形となった
諏訪子。

本殿の前で、飛び立ちながら会話をしている二人の声が徐々に遠
ざかっていく。

がつくりと肩を落とす諏訪子に対して、神奈子が鷹揚に笑いなが
ら声をかけた。

「過保護だな、諏訪子」

「神奈子がこういう問題に関しては放任主義過ぎるんだよ！」

そして、意外と苦労性な祟り神の叫びが、守矢神社の本殿に響き
渡ったのだった。

#

そして、そんな叫びなど露知らず。

「ふむふむ、事情は分かったツス。それでまずはどこへ向かうん
スか？」

「人里、永遠亭、紅魔館、白玉楼……そこら辺は西宮に任せておけ
ば、情報収集に抜かりは無いと思うんです。だから私は、それらで
はない場所で、ある程度事情通そうな方が居る場所を巡ってみよう
かと」

「事情通そうな……となると、ある程度以上の年月を経た大妖怪っ
て事ツスか？」

「そうなりますね。どこか心当たりはありますか？」

「だったら多少危ないツスけど　『太陽の畑』なんてどうツスカね？　文さんの話ではアルティメット・サディステイック・クリーチャーが居る危険地帯って話なんスけど」

「アルティメット・サディステイック……？　なんでですかそれ？」
「さあ？　文さんは昔にも何度か会ったことのある妖怪らしくて、花の異変の時も色々と思痴ってたツスけど。それによると　」

早苗と椀の体当たり情報収集は、いきなりハードモードな場所への特攻を開始しようとしていた。

#

太陽の畑。

幻想郷の中でも『風光明媚』という点においては最上位に入るであろう、向日葵の花が咲き乱れる草原であるそこは、同時に危険度でも最上位の一角として数えられていた。

結果としてそうそう人も妖怪も足を踏み入れないその場所が、幻想郷でも最上位の危険地帯とされる理由は一つ。そこに住む一人の妖怪の力と性質故の物である。

風見幽香。

肩にかかる程度の長さの緑の髪と、白いブラウスによく映える赤いチェックのベストとスカート、そして大きな日傘が特徴である花の妖怪。

幻想郷縁起で唯一無二の『人間友好度：最悪』と表記された妖怪であるも、人里などに顔を出した際の彼女は極めて紳士的だ。

長く生きた大妖怪である彼女は基本的に落ち着いた性格をしており、若い妖怪に比べると余程人間に友好的とも言える。

そんな彼女が『人間友好度：最悪』と表記される理由が、この太陽の畑だ。

さて、向日葵と言うのは人間にとって極めて有用な植物だ。種は食用になり、種から精製すれば油も取れる。特に基本的な生活技術が江戸時代レベルの幻想郷において、油は有効な商売源だ。つまりは上手くすれば非常に金になる可能性を秘めた花なのだ。

そして以前、とある人間がそんな『金の成る花』である向日葵が咲き乱れるこの地に目を付けた。

要は自らの金銭欲を満たす為にこの地を手に入れようと、妖怪退治屋などを連れてこの地を制圧しようとしたその男は　しかし自らが愛する花をそのような事に使おうとされた事に激怒した幽香によって血祭りにはげられた。

彼が太陽の畑に住む妖怪、つまりは幽香を退治する為に雇った妖怪退治屋も同様だ。

更に怒りの赴くままに幽香が人里に逆侵攻をかけようとして、当時の博麗の巫女、並びに八雲紫と激突。人的被害こそ件の男と妖怪退治屋以外には無かったものの、人里付近で繰り広げられた激戦は、人里の人間に『太陽の畑の大妖怪』の存在を恐怖と共に強く刻みつけた。

その一件以来、風見幽香の存在は幻想郷の人間に恐れられる妖怪となつたわけだ。

また、それ以来人間がこの太陽の畑に近づく事を嫌った幽香は、殊更に人間に恐れられるような態度を取る事が多くなり、その結果が『人間友好度：最悪』と書かれた幻想郷縁起というわけだ。

「
」
「
」
「
」
「
」
「
」
「
」

しかし先にも書いたとおり、この地に踏み入らなければ風見幽香はむしろ紳士的な妖怪だ。そして長年彼女がここに居座っていることから、周囲もそれを概ね理解している。

件の一件以来積極的に太陽の畑に踏み込もうという愚か者は極端に減り、それでも花の異変の折には何人かやって来たが彼女はおおむね平穏な日々を送っていた。

今日もまた、気質の異変などお構いなしに花に水をやっていた幽香は、何に煩わされる事も無くご機嫌であった。晴れの気質を持つ彼女にとつて、水やりさえどうにかすれば、この異変はむしろ歓迎すべき物だ。

「~~~~~ あら？」

『 助けて！ 』

しかしその平穏は不意に破られる。

この地に咲く向日葵が、彼女にSOSを送って来たのだ。

風見幽香の能力は『花を操る程度の能力』であり、その内容には花との意思疎通も含まれる。

それは基本的に戦闘に向かない、純粋な戦闘に於いてはオマケ程度にしかない能力だが、索敵に関してはかなり有用な能力だ。

特にこの太陽の畑に侵入者があった場合、向日葵の花がすぐに彼女に侵入者の存在を知らせてくれる。

そして今、幽香に向けて放たれているSOSもまた太陽の畑への侵入者を知らせる物であったが、しかしその内容は今までに無いくらい切羽詰まっていた。

それこそ、これほどまでに切羽詰まったSOSを聞くのは件の人間による太陽の畑侵攻事件以来である。

『助けて！ 変な人がいる！ 変な人が何かしている！』

「 落ち着きなさい。何をしているか分かる？」

『分からない！ 分からない！ 怖い！ 怖い！』

「その人は貴方達に危害を加えて来てる？」

『そうじゃない、けど何をされてるのか分からない。怖い！』

別段妖怪化したわけでもない草花との意思疎通は、単語主体の極めてたどたどしい物だ。

しかしその送られて来る言葉から、幽香は太陽の焔に侵入した何者かが、これまで向日葵の花々が見た事も無い『何か』をしていると判断する。

「……何の心算が分からないけど、私の花に手を出したらタダじゃ済まさないわよ……！」

そして地を蹴り、そのSOSがあった方向へ飛翔する幽香。

握り締めた日傘の柄が、みしりと音を立てる。

彼女は基本的には紳士的なのだが、花に関する事となると沸点が低いというのが、彼女を古くから知る人妖の共通見解だ。

そしてほぼ戦闘態勢で現地に着した幽香が見た物は、しかし、

「良いですよー！ 超良いですよー！ もうちょっとこう、艶をイメージした感じで、ハイこっち向いて微笑んでー！」

様々な角度から向日葵を携帯電話のカメラ機能で激写する青白巫女、もとい東風谷早苗。

キレキレの動きで向日葵の周囲を回り、マジンガーZのストラップが付いた女子高生らしからぬ無骨な携帯で、地べたを這うような

というか実際這いながら　ローアングルからや、スタイリッシュなポーズで横顔（早苗談）を写すようなアングルで。パシャパシャと撮影音を響かせながら、ありもしない向日葵の『腰のくびれ』や『はにかむ笑顔』、拳句の果てに『悩殺ポーズ』などを要求しながら写真をとりまくっている。

「桜さんちよつと5cm横に移動して下さい。レフ板ちよつと掲げてー」

「ういーッス！　はい、モデルさんもカメラマンさんもノってるッスねー。はい、モデルさんちよつと胸の谷間を寄せて上げるようにー！」

「お、良いですねー。ちよつと過激な夏の魅力って奴ですねー！」

更にその情景のカオスを加速するかのようにレフ板を両手で掲げ、光量補正で撮影をサポートする白狼天狗の姿。

一体彼女達の目には何が映っているのだろうかと心配になる妄言を吐きながら、キレキレの動きで立ち回りつつ激写を続ける巫女と天狗。

大妖怪、風見幽香。

まさかの未知との遭遇であった。

「……………なんなの、これ……………」

向日葵は何をされているのか分からないとSOSを送って来ていたが、幽香をしても何をしているのかが全く分からない。

悪意は無いように見えるが、それ以外の人としても妖怪としても失っっちゃいけない何かも一緒に無くなっている気がする光景である。

見えない夏モデルの砂浜にて、架空の水着を脳内で捏造しながら、向日葵のはにかむ顔を幻視しつつ激写を続ける馬鹿A、そして馬鹿

B。

なまじ悪意じゃないのが透けて見えるだけにそれがカオスを助長し、幽香の腰も若干引けている。

太陽の畑への侵入者に対して『あの』風見幽香が怯むという、有り得ない光景が続く事暫し。

ようやく我に帰った幽香が馬鹿一人に対して声をかけたのは、十分の長きの後となったのだった。

#

「やー、どなたかは知りませんが、驚かせたようで本当に申し訳ありませんでした。別用で来たんですけどあんまりにも綺麗な向日葵だったんで、写真だけでも西宮や御二柱に撮って行ってあげようと思っただんですが……」

「どうせなら可能な限り綺麗に撮っていこうって話になったんスよねー。そしたらなんかテンション上がっちゃったんスよ。文々。新聞の撮影用に持たされてたまんまの折りたたみのレフ板とか出しちゃったぐらいにして」

「でもおかげで良い写真が撮れました。お騒がせして申し訳ありませんでした、美人のお姉さん」

「あ、いえ、うん……せめて次からはもう少し、その、何をしているか分かる感じをお願い」

さて、声をかけた幽香に対して、馬鹿Aと馬鹿Bの反応は上記のとおりである。

何をしているのかと声をかけたところ、あまりにもあっけらかんとした反応が返って来た物だから、幽香側としては最初から崩れて

いたペースが更に崩壊させられた状態だ。

がつくりと肩を落としながら、しかし幽香は眼前の馬鹿二人に対し、精一杯の抵抗として嫌味を返す。

「全く、お騒がせだこと。放っておいたらテンション上がり過ぎて、向日葵を引っ抜いて持ち帰りそうな勢いだったわね」

まあそんな事をしたら殺すけど、などと口の中だけで呟いた幽香。

或いは少しでも肯定するような事を眼前の二人が言った瞬間、そこから脅して追い返す心算だったのかもしれない。

しかしそんな彼女に対し、早苗はビシリと指を突き付ける。

「何て事を言うんですか！ 確かに綺麗な向日葵ですが、故にこそそのような事は無作法です！」

「……………」

ぶんすかという擬音が付きそうに頬を膨らませた彼女は、思わずきよとんとする幽香へと指を突き付けたまま前進。

相対的に、幽香がやや身をのけぞらせるような形になる。

「美しいから、愛してるからこそ手を出さない。そんな愛し方もあるのです！ えーと、なんでしたっけ椀さん！」

「『イエス、ロリータ。ノータッチ』？」

「そう、それです！」

「いやいやいやいや」

早苗が熱く語る花の愛で方が途端に胡散臭くなりかけた所で、慌てて幽香が口を挟む。

しかし口を挟んだ彼女の表情は、完全に毒気が抜かれていた。

初手で崩壊させられていたペースが、崩壊どころか完璧に消滅させられた形だ。

溜息を吐きながら両手を上げ、幽香は口では目の前の二人には敵わない事を認めるように頂垂れた。

「確かに私が悪かったわ。冗談よ、うん。っていうかそれをされたら私が怒るわ」

「そうでしたか、失礼しました。貴方も『イエス、ロリータ。ノータッチ』の心が分かる人なんですね！」

「それは違うから。絶対に違うから。　　って言うか貴方達、何しに来たの？　ここは太陽の畑と言って……」

「はい。風見幽香さん……という、怖い妖怪の方がいらっしやるんですよね？　ですが大妖怪の方なので、物知りな方でもあると伺っています」

幽香が先程から抱いていた疑問を口に出すと、それに答えたのは早苗だ。

確かに歳経た大妖怪は大抵は世の中の事に詳しく、知識が多い。幽香もまた、率先して知識を溜めこむような、所謂知者・賢者型の性格ではないものの、長年の経験からそれなりの知識はある。

そしてぎゅっと握りしめた大幣を胸に、早苗は強い意志を秘めた目で幽香に向きあう。

「私達はこの異変に関する情報を集めているんです。人里、紅魔館、永遠亭、白玉楼　　そういった『行き易い』場所に関しては私の相棒が既に行っている筈ですから……。だから私は情報収集が難しそうですが、大妖怪の方に話が聞けるかも知れないここにやっ来てんです」

「成程、この異変について、ねえ」

そして恐らく自分が風見幽香だと気付いていないのである。少女の言葉に、幽香は納得したように頷いた。

気質と天候の異変。下手すれば農耕などに大被害が出る異変ではあるものの、強かな幻想郷の住人の立ち回りもあり、誰もこれまで解決に動いていなかった異変だ。

動くのはてつきり霊夢辺りかと思っていたのだが、それより先に動いた目の前の少女　　青と白の巫女に、幽香は苦笑を顔に浮かべる。

情報を聞く相手に関する情報を持たずに飛び込んで来る。馬鹿と紙一重の無謀さだが、というか先の言動を考えると紛れも無い紙一重の向こう側にブツ飛んだ特級の馬鹿だが　　裏表の無い真っ直ぐさと、花を大事に思う心は幽香にとって好ましい物だった。

「貴方、その格好から察するに……巫女よね？　博麗神社以外の神社が山の上に来たって話だけど、その巫女　　か」

「えーと、正確には風祝と言っんですけど」
「要は巫女の亜種でしょ？　あ、そう言えば名前をまだ名乗ってなかったわね」

そして幽香は、にこりと笑みを浮かべて目の前の少女に告げる。

「はじめまして、猪突猛進な巫女さん。私は風見幽香。貴方達が探していた、花の妖怪よ」

その言葉に椀と早苗は驚愕の表情を浮かべ、同時に叫ぶ。

「貴方が文さんの言っていた、アルティマアドバンスクワイアチャー究極加虐生命体!？」

「うっそ!?　文さん酒の席で『ゴリラみたいな腕力馬鹿』って言ったツスから、もっとこう、世紀末霸者的な人かと!？」

「詐欺ですよ!　私、この花畑にラオウが居る事を覚悟きたいして来てた

のに！　こ、黒王号は！？　黒王号だけでも居ませんか！？」

ベキリと音をたてて、幽香の手に握られた日傘の柄が折れたのは次の瞬間だった。

同時に射命丸文の身に、死亡フラグが立った瞬間でもある。

☐　あのカラス、次に会ったら殺す』。

言葉には出さずとも、全身から旧知の烏天狗への殺意を立ち昇らせる花の大妖怪だった。

第二十九話：守矢組＋、出撃（後書き）

鈴仙・西宮組。とりあえず紅魔館へ情報収集に出向く。

早苗・椛組。西宮がこれまで情報収集をしていない場所を探そうとして、まずは太陽の畑へ。

原作緋想天とは違うルートになりますが、色々と考え中。

ちなみに前回の幽々子の発言から察している方もいらっしゃるでしょうが、ボスは天子『だけ』ではない予定です。

あと、妖夢が持ち出したスコップは先端がプラスチック製の雪かきスコップですので、あのまま出撃していたら斬れる物など何も無い有様だったと思われます。

閑話其の参：彼と彼女の外の世界時代（前書き）

オチ無し、ヤマ無しの日常話です。

短めに4000字ほど。

なんとなく思い付いたので、彼と彼女の外の世界でのストーリー！。

まあ閑話ってやつです。彼らの高校がフリーダムなのは気にしない方向で。

閑話其の参：彼と彼女の外の世界時代

外の世界時代の守矢神社において、家事全般・それに伴う設備関係全般に関する決定権を持っているのは、早苗の母であった。

これは大抵の世帯でそうであろう。家の中の事、特に家事に関しては男女平等が叫ばれる現代においても、女性の立場が圧倒的に強い。

外でブイブイ言わせている大企業の重役であるお父さんが、休日には『掃除の邪魔だから出てけ』と掃除機持った嫁さんに追い出されるような物である。

しかし守矢神社の場合、決定権一位は早苗の母であるも、第二位に関しては他と事情が違った。

守矢神社における家事全般の決定権第二位を持つのは、何故か神社の住人ですらない西宮丈一だったのだ。

「と、いうわけでおばさんに頼まれたんで、神社の社務所に設置するエアコン買いに行くぞ」

「……何でその用件のメールが私の携帯じゃなくて西宮の携帯に入るんでしょ……?」

「家事に関する信頼度の差だな」

そしてその結果、早苗の母から全権委任を受けた西宮丈一は、とある秋の日の学校帰りに家電量販店へ向かう事となった。

やや着崩した学校指定の制服の西宮の横で、女子の学校指定ブレザーをきつちりと着た早苗が釈然としない様子で首を傾げている。

しかし十年来の付き合いから、早苗の母は既に家事全般に関しては浮世離れした実の娘より、現実的かつ器用な娘の相棒を頼る事

になっていた。

そもそもが西宮の料理や家事の師匠が早苗の母である。

幼い頃から守矢神社に通い詰める中で、諏訪子や神奈子を祀る本殿をもっとしつかりと掃除したくて早苗の母に効率的な掃除の方法を聞いたのが始まりだった。

余談だが、その時には諏訪子と神奈子が感動の余りに涙を流したとか流していないとか。ちなみに早苗は今でも掃除とかは苦手だ。料理とかはもつと苦手である。スクランブルエッグからスクランブルダッシュを作り出す、負の方向の奇跡の巫女だ。

ともあれその件を切っ掛けに家事全般に関して早苗の母から手ほどきを受けた西宮を、師である早苗の母は全面的に信頼していた。

その結果、今回家電製品の買い替えにあたって、全権委任役として家電量販店に向かう事になった西宮である。

早苗はその横でぶーたれた表情で、学生鞆を手に歩いている。

「私だって色々選びたいのに……。某社の最新型全天候エアコンとか、広告で見たくなくてたんですよ。冷房、暖房、湿気取りなどの基本機能に加えて、簡易型AIによる『お任せ』という完全ラウンドによる突発的空調機能。素敵だと思いませんか？」

「それって確か、本当にお任せ過ぎて冬に冷房ガンガンかけたり夏場にヒーター爆熱させたりするアホ機能だろ。勢いだけで開発部が付けた機能がオミットされないまま製品化されてしまったのが丸見えだぞ」

「いやいや、その自分勝手さがまるで生きてるようだとかで、ペットを飼えない家庭の方や一人暮らしの方に好評なんだとか」

「電化製品に人格を見出してどうする……。今回は燃費が良くて安い商品を探すのが目的だからな。余り変な事するなよ」

トンデモな家電製品を欲しがる早苗の言葉に、呆れたように西宮が溜息を吐く。

この二人が買い物に行くと、概ねこんな感じの会話がいつだろうと交わされるのだ。

目的から逸れて変な物を買おうとする早苗と、ブレーキ役の西宮という構図である。

かなり後の話となるのだが、幻想入りした後もそれは変わらない。

早苗の母が、諏訪子が、神奈子が早苗に財布を握らせない理由であった。

しかし当の早苗は納得いかないようで、『ぶんぶん』とでも擬音が付きそうな顔で、

「ぶんぶん！」

マジで言った。

女子高生がする動作としては如何な物かと、横の西宮が顔を抑えて天を仰ぐ。

「……家電量販店での用事が終わったら、クレープ奢ってやるから駅前に来たクレープ屋、行きたいって言ってたろ」

「良いんですかっ！？ やったあ！」

そして食い物で一瞬で機嫌が直る。

安定のチヨロさである。横を歩く西宮が、『コイツ食い物に釣られて誘拐されたりしねーだろうな』と不安になるレベルだ。

「西宮は何を食べますか？ 私、アイスとかカスタードとか生クリームとか全部盛りの奴にするつもりですけど」

「俺の金だから遠慮しろよ馬鹿野郎。……そうだな、チョコクリーム辺りで良いか」

「一口食べさせて下さいよう。私のも一口あげますから」

「お前それで毎回大口開けて思い切り食うからな……」

肩を竦め、しかし言葉とは裏腹に嫌そうな様子はまるで無い西宮が歩いて行き、その後ろを小走りに早苗が追う。

何の事は無い、いつもの光景。

幻想入りする前の彼らにとっての外の世界の日常の「コマである

#

筈だった。

女心と秋の空。秋の天気は変わり易い。

西宮と早苗が会話を交わしていた段階では綺麗な秋晴れだった空は、彼らが家電量販店で買い物を買って済ませて配達を頼み終わった段階で、『これでもか、これでもか、えいえい』と言わんばかりの豪雨に姿を変えていた。

生憎と天気予報が『大雨注意報』を出したのは昼過ぎの話。

早苗と西宮が学校に向かった段階で、傘を用意しろというのは酷な話であった。

天気予報をしてもイマイチ予測しきれなかった、女心もびっくりの変わりようを見せる秋の天気である。

「……あーあー、どーすんだコレ。傘無えよ」

「西宮、気合いで突破しましょう。ここからクレープ屋まで走れば10分とかかりません」

「帰る事を考えるよ。何でこの天気でクレープ優先なんだよ。どんだけ食いたいんだよお前」

家電量販店の中から、二人は窓越しに外の天気を眺めている。

夕方の家電量販店は、彼らのように学校や仕事の帰りに寄ったまま大雨に見舞われた人々が多く見受けられた。

売り物のテレビから流れているニュースを見ると、この急な豪雨で浸水した建物などについての話題が出ていた。

地方局のニュースが映しているのは早苗と西宮にとっては見覚えのある学校であり、

「×市立第一高校では、浸水に対して生徒達が独自にポンプ排水、土嚢を築く、バケツリレー、泳ぐ、飲むなどの対策を取っており」

「……浸水か。こりゃ学校、明日は休みかねえ？」

「だったら良いんですけどね」

「まーな」

興味なさげな西宮の言葉に、早苗が返し、彼もまたそれを否定する事無く頷いた。

守矢神社の風祝と神職見習いだ。彼らにとって、学校もまあ大切な日常ではあるが、守矢神社関係の事柄の方が優先度が高い。

その神社に関しては高台の上にある立地だ。浸水の心配はあるまい。

土砂災害などに関しては

神の加護に期待しよう。

「とりあえずおばさんにメール打っておくぞ。天候見て行動するか

ら、いつ帰れるかは分からないってな」

「まあ神社も開店休業でしょうけどね、この天気だと」

やや型落ちの携帯電話　　後に河童のにとりの手に渡るそれで

早苗の母にメールを打つ西宮。

その横で、早苗は見るとも無しに地方局のニュースを続けて見ていた。

水泳部の連中が増水したプールで楽しそうに泳いでいる、彼らの高校のニュースは既に終わりだ。

続いて画面に映っているのは駅周辺の情景で

「……あ」

「どした？　メールはもう打ったが、何かおばさんに伝えておく事でもあつたか？」

「西宮、大変です！　今ニュースの画面にちらっと映ったんですけど、件のクレープ屋の閉店時間まであと30分くらいしかありませんよ！！」

「あー、じゃあ諦める。傘も無いしこの天気だし、明日以降にでもするんだな」

この世の終わりとも言いあげな顔で主張する彼女に対し、やれやれとでも言いたげに窓の外を見ている西宮。

やる気の見られないその彼の腕を、しかし早苗はガシリと掴む。

「……おい？」

「西宮、駄目なんです。私、もう耐えられません。我慢できないんです」

胡乱げに早苗を見る西宮に対し、彼女は西宮を掴んでいない方の手を胸の前で握り、切なげに頬を赤らめ主張する。

これがベッドの上などであればR - 18突入へのフラグとなる台詞なのだろうが、ここは家電量販店であり、尚且つ言っている当人が極上の天然である東風谷早苗その人だ。
間違っても、そのように色気のある話ではない。

その証拠に彼女は良く育った胸の前で手を握ったまま、西宮へと熱く主張する。

「私は　私の舌と胃はもうクレープを食べるモードに入ってるんです！　今更お預けなんて我慢出来ると思いますか！？」

「俺が知るか！？　そんなに食いたければ向かいのコンビニでクレープアイスでも買って食べ！」

「いいえ、我慢できません。自分のクレープを食べ、西宮のクレープを一口頂く所までが今日の私の予定であり、その履行は絶対です。守矢の風祝としての神託です」

「んな俗な神託があるかポケ東風谷！？」

そして真つ当な突っ込みは当然の如く聞きいれられず。

「軍神、建御名方命を祀る風祝、東風谷早苗の名に於いて！　突撃です、西宮！　クレープ屋の閉店まであと30分！　うおおおおお おおおおおー！」

「ちよ、ま、うおわああああああ！？」

西宮の手を引いたまま家電量販店を飛び出した東風谷早苗は、そのまま雨の中を突破してクレープ屋へと走り出す。

猛々しく突撃を吼えるその姿はまさに軍神に仕える風祝として相応しい物だったが、年頃の女子高生としてはちよつと不適切なくらい雄々しかった。

そして結局びしょ濡れになりながらも目的地にたどり着き、自らが注文した全部盛りのクレープを食べ、西宮の分のクレープも美味しそうに一口頂戴した早苗は翌日

#

「……せ、折角学校が休みなのに、こんな、こんな……!!」
「雨の中走り回った上に、殊更冷たいアイス入りのクレープなんか食うからそうなるんだよ。ほら、口開ける。お粥出来たぞ」

学校が休校となり、多くの学生が喜ぶ中。

東風谷早苗は前日のヤンチャっぷりが祟り、見事に風邪を引いて寝込んでいた。

熱を出して布団の中で寝込んでいる早苗の横で、西宮は呆れ顔で世話を焼き、それを見た神々が人知れず苦笑をする。

これもまた、外の世界でも守矢神社の日常の一部なのだった。

第三十話：小野塚先生の気質診断（前書き）

小野塚先生の気質診断に関しては、割と捏造です。

使える部分は緋想天の小町ストーリーから取って来たんですけど、他の部分に関しては捏造設定をお許しください。

第三十話：小野塚先生の気質診断

「……なんで、ついて、来たんですか……。ぶっちゃけ邪魔かもしれません、鈴子さん……」

「……うっさい。あんたの気質で少しは無効化できると思ったのに……」

一方その頃。

西宮と鈴仙は順調に調査を進めて紅魔館へ到着　　などと言う事は無く。

晴嵐の気候が為に濡れた服で強風の中を飛んだ結果、発生した気化熱により体温を奪われた事による寒気に歯をガタガタさせながら、途切れ途切れに会話をするのももどかしく、人里の茶屋で温かいお茶を飲んで身体を温めていた。

ちなみに主に西宮が、である。鈴仙はまだ平気そうだが、これは種族的な体力・体質差によるものである。ガタガタ震える西宮を横目で見ながら茶を啜る鈴仙には、まだ若干の余裕が見受けられた。

さて、この異変は当人の霊力・妖力などの力の強さと放出される気質の量が、ほぼ正比例する関係にある。

つまりは神奈子・諏訪子の居る守矢神社では鈴仙の『晴嵐』は現出しなかったが、そこを離れるとどうなるか。

西宮と鈴仙の気質のうち、強い方がより多く現出する事となる。つまりは鈴仙のそれ、『晴嵐』だ。

結果として彼らは、暴風と雨に見舞われる『晴嵐』の気候の中で、山から紅魔館へ向かう途中にある人里にまで飛んで来たのだ。

体力方面で見ると人間よりも格段に頑丈な鈴仙はまだしも、西宮の方はガチで風雨に体温を奪われており、このまま人里をスルーして

紅魔館まで直で行った場合は相当不味い事になりそうだったのもある。

最悪の場合は体温が奪われ濡れた服で霧の湖上空でチルノに遭遇とか、どんな死亡フラグだ。

「あー、畜生寒い……おじさん、お茶もう一杯下さい。熱めで」

「私にあんみつをお願いします」

「あいよー」

このままでは異変の解決どころか、紅魔館への到着すら怪しい。

最悪、『濡れた服』＋『低体温』＋『チルノ』という即死コンボに遭遇する可能性すらあるのだ。

そう判断した西宮と鈴仙は、ひとまず人里に寄って準備を整えることにした。

人里ならば多くの人、時々妖怪が集まる関係上、気質も雑多だ。

塵も積もれば山となる。鈴仙が幻想郷の中でも強い部類に居る妖怪とは言え、異変の首謀者のような最上位格ではない限り、この人里で個人の気質が顕現する事は少ない。

結果、普通に夏らしい適度な陽気に見舞われている人里にて、西宮の回復を待っている二人である。

まあ鈴仙としては、西宮の金を当てこんで茶屋で茶が出来るから別に良いのだが。

奇しくも以前初めて西宮と早苗の二人に遭遇した茶屋にて、特製のおあんみつに舌鼓を打つ鈴仙。

ぼかぼかとした陽気に当てられて程良く温い日向にある席に、彼らは二人並んで座っている。

早苗と西宮が座った場合は肩がくっつくほどの近くで互いの注文

した物を食い合うのだが、鈴仙と西宮と言つ組み合わせで座るとある程度の間を置いて座る辺り、距離感と言つ物がよく現れている。

そして横からの声は鈴仙があんみつの器を空にし、西宮が温かい茶を三杯飲んで辛うじて復調した頃に来た。

「おや、珍しい。竹林の兎じゃないかい。今日は逢引デートかい？」

「その声は」

横合いから不意にかけられた、快活な女性の声。

そちらを見やる鈴仙の目に映ったのは、大鎌を肩に担いだ和装の女性の姿だ。

赤い髪に明るい笑み。姐御肌、という言葉が似合うだろう。スタイルの良さと長身も相まって、鈴仙の横から彼女を見た西宮は、『モデルのようだ』という印象をまず抱いた。

そんな西宮の感想など露知らず、鈴仙はこれ見よがしに大きく溜息。

「三途のサボマイスタじゃない。違うわよ、姫から押し付けられたお仕事の途中で、横の彼は単なる同行者ね。そう言えば貴方と上司は守矢の神社が来た時の宴会には来てなかったっけ」

「多分あたいはうちのボスに説教されてた頃合いじゃないかね。天狗の号外は見たんだけどさ。　つと、つて事はそっちの彼が守矢の見習い神職か」

「お初にお目にかかります。……その大鎌と今の会話から察するに、幻想郷縁起にも載っていらした小野塚小町さんとお見受けします。守矢神社見習い神職、西宮丈一と申します」

そして一連の会話と、稗田家で読んだ幻想郷縁起の知識から、ある程度相手の正体を当て推量していた西宮が頭を下げる。

その様子に小町が楽しそうに笑い、許可も得ずに茶屋の席、鈴仙の横に座って呵々と笑った。

「へえ、なるほど。聞いてた通り頭も回るし、珍しいくらいに礼儀正しいね。外の世界の処世術ってやつかい」

「概ねそのような物です。自分の実力も自分で理解していますし」

「ふむふむ、謙虚だね。いやはや、天狗の号外くらいしか件の神社に関する情報は無くてね。いやあ、気にはなっていたんだけど、この神社の関係者に遭遇できるとは。仕事はサボるもんだよ」

「……閻魔に怒られても知らないわよ」

「はっは！ いつもの事じゃないか」

陽気に笑う小町の横から、鬱陶しげに鈴仙が返す。

しかし小町は悪びれずに流し、茶屋の店主に醤油団子などを注文していた。

その彼女に鈴仙を挟んだ位置から西宮が声をかける。

「小野塚さんは何の用事でこちらに？」

「ん？ うーん、まあ物見遊山かね。あとサボり。……ま、今は妙な異変の真つ最中だからね。気質の異変、気質とは即ち幽霊、或いは靈魂って事さ。つまり、そいつの周りの天気を見れば死後の姿が分かるってね。まあ小町さんの出張死後診断って所だよ。悪い結果が出たなら、良くするように今後精進する事だね。気質は不変じゃないんだからさ」

「……上司が時々やってる出張説教と同じような事を……」

「あー、言われてみりゃ結果論的には同じかね？ あ、いや。映姫様は休みの日にやってて、あたいは仕事をサボってやってるからね。結構違うよ」

「自慢にならない事を堂々と……」

呆れ声で鈴仙が指摘するが、今日ばかりは彼女も小町の事をとやかく言えまい。

そもそも彼女が守矢神社まで出向いた理由は、『姫から言いつけられた仕事をサボるため』だった筈である。

しかしそんな事はおくびにも出さず、鈴仙は呆れた声で指摘し、呆れた表情で小町を見やる。

事情を知りながらも『お前が言うな』と言わない辺り、西宮はどこぞの竜宮の使いの如く空気を読んでいた。

そして鈴仙の指摘に対し、小町は気にした風も無く陽気な笑みを浮かべている。

このように懐が深く、明け透けな江戸っ子気質なのが小野塚小町という女性の魅力であろう。

「まあ良いじゃないか。ここで会ったのも何かの縁だ。どうだい、あんたらの気質も診断してやろう。お代は特別に醤油団子で良いよ」

「しかも金取るの？」

「駄目かい？」

しかしその気質は同時に困った点でもある、というのが鈴仙の、そして恐らく小町の上司である四季映姫・ヤマザナドウの持つ共通認識だ。

小野塚小町と言うこの女性、いかんせんサボタージュ癖などの困った点があるのだが、それでも気風が良く情に篤い江戸っ子気質と生来の話し上手のお陰で妙な愛嬌と魅力があり、どうにも嫌い切れない性格をしているのだ。

映姫などとしても説教はするものの、結局それだけで許してしまう
う　この辺りも人徳と言う物だろうか。

鈴仙としてもからからと笑う小町に対してどうにも悪い印象を抱

けず、溜息を吐きながら横の西宮に視線を投げる。

判断は任せる、という意味表示だ。

この場で財布を持つていない鈴仙からすれば常識的な判断とも言えるし、責任の丸投げをしたとも言える。

そして視線での意思表示に気付いた西宮は肩を竦め、

「団子程度で良いならば破格でしょう。『数を指定して無いから、今後一生食べ放題』などとも言われない限りは」

「その発想は無かったよ。でも確かに数は指定していなかったし、もう一皿頼んじゃおうか」

遠回しな了承の言葉を得た小町は、悪戯気に笑むと追加の醤油団子を店主へと注文する。

溜息を吐く鈴仙と苦笑する西宮。つまりは遠回しな了承だ。

注文を終えた小町は、その二者へと上機嫌の笑顔で向き直る。

「悪いね、それじゃあ早速始めようか。まずは鈴仙、あなたの氣質が発現するとどんな天候になるんだい？」

「私は『晴嵐』って奴ね。空は晴れてるんだけど、天候は嵐。外出には向いていないから嫌になるわ」

「ふむふむ。まず、晴嵐にも伴ってる『雨』ってのは恵みの一種だ。強すぎれば所謂ヤンデレの気がある事になるが、多少ならばいわゆる優しさを持つていているって事になるね。その点、氣質の中にその属性を持つてるあなたが医者を目指すってのは悪くないよ」

「え？ えへへ、そう？」

そして始まる、小野塚先生の出張氣質診断。

いきなり褒められた鈴仙は先程までの呆れた表情はどこへやら、嬉しそうに頬を緩める。

それだけ彼女にとって医者になるといふのは大きな目標なのだろう。

「しかし」

だが、小町は緩んだ様子の鈴仙を戒めるように、人差し指を立てた右手を突き付ける。

「風つてのは心のバランスが悪い者の気質に現れ易い天候だ。相手によつて態度を変えたりする性質は、揺らぎ易さの裏返し。世渡りは上手いが反面心の病にも侵され易い。要はお前さんは中途半端に世渡り上手だけど、真面目すぎて精神的なプレッシャーに弱いんじゃないかな？」

「うっ」

思い当たる節があるのだろう。一転してきつい言葉を言われた鈴仙は、頬を引き攣らせる。

それを見た小町は逆に、少し安堵したように頬を緩めた。

「うん、自覚症状があるなら良いさ。自覚が無いのが一番不味いからね。そして、嵐であろうと空は晴れ。つまり、医者を目指すという現在の生き方に、迷いは特に無いという事。大いに結構じゃないか。自分の欠点を理解した上で、無理せずやっていくと良さ。欠点を差し引いても、あんたは医者に向いてると思うよ。ただし思い詰め過ぎないように」

「……はい」

総評を受けた鈴仙がへによりと耳を揺らしながら頷いた。

どうやら自覚症状含めて、小町の診断に一定の納得を見たのだろう。

流石は『魂』に最も深く関わる職業である死神、それも三途の渡し守と言う事か。

「大当たりみたいですね」

「豆腐メンタルなのは自覚症状あるのよね……うう、分かっちゃいるんだけどなあ」

西宮がかけた声に、がっくりと頂垂れた鈴仙が力無く応じる。

その様子に、しかしそれを見る小町の表情は満足げだ。

ただしそれは鈴仙を言葉で打ちのめした事に対する満足ではなく、むしろどこか優しげな表情ですらある。

「映姫様が気にかけてたよ。花の異変で説教した中で、真面目に聞いてたのは庭師とあんたと記者くらい。その中で一番深刻だったのがあんだだつてね」

「……三人にしか聞かれなかったのね、説教」

「聞いても忘れる奴とか聞き流す奴とか恣意的に曲解する奴とか、まあ色々居たらしいよ。まあそれはともかく、あんたの話だ」

そこまで話したところで、ちらりと小町は西宮に視線を送る。

悩むような表情を僅かに見せた彼女に西宮は一つ頷き、

「俺は席を外しましょうか？」

「……あー、ホント聡いね。気を使わせちゃったかい。花の異変の説教に関しては色々と内面に関わる話だからね。いや、わざわざ外さなくて良いよ。内面に関わる事は省こう。要はハツチャケ

て言つと、ただでさえ真面目な上にメンタル弱い兎さんが説教で更に追い込まれて潰れやしないかと心配してたのさ、うちの優しい閻魔様は」

「……物凄いきざっくりと略されたわね、私の悩みとか業とか色々……」

…」

立ち上がりかけた西宮を手で制しての小町の言葉に、鈴仙がウサ耳をいつも以上にへによりと力無く垂れさせ、肩を落とす。

そんな彼女の背中を小町は軽く叩き、

「いや、悪い悪い。まあ今のお前さんは良い傾向だつて事さ。罪と向き合うことは必要だけど、後ろばかり向いてもどうしようもない。前向きに進もうと頑張るのは大事だよ、潰れない程度にね」

「……うんまあ、ありがとう。閻魔様にもお礼を言っておいて。私、てつきり怖いばかりの人だと思ってたんだけどね」

「とんでもない。あの人ほど優しい閻魔をあたいは知らんね。まあ甘くするばかりが優しさじゃないつて事さ。さて、次は、と」

どこか誇らしげに肩を竦めた小町は、ぐんによりと落ち込んでいる鈴仙から視線を外す。

言うべき事は言ったという事だろう。続いて視線を向けられたのは、小町に制されて座り直したばかりの西宮だ。

「西宮丈一だったね。名前と苗字、どっちで呼ばれたい？」

「お好きな方で結構です。特に拘りはありませんので」

「んじゃ、西宮。あんたの気質は？」

そう問われて、西宮は横でぐんによりしている鈴仙を放置して、そこで初めて疑問を抱く。

鈴仙の場合は『晴嵐』の一言で済んだが、彼の場合はイマイチその天候の正体が掴み難いのだ。

幾度か現出した事はあったが、決まって風が吹いていた。つまりは風に関わる天候なのは間違いないだろうが、

「……安定しないんですよね」

「ん？」

「風が吹くんですが、安定しないんです。東から西へ吹いていたと思えば、それが凧いで、少ししてから今度は西から東に吹くみたいな」

「……ふうむ。風はさつき言った通り、心のバランスが悪い者の氣質に現れ易い天候だ。世渡り上手の象徴でもある」

「心のバランスに関しては知りませんが、後者は自覚がありますね」「で、凧はその逆。『不変』や『マイペース』を意味する天候だね。揺らぎなく自分のペースを守るような、マイペースな連中が持つ属性だ」

「……相反してませんか？ 風と凧」

「……してるねえ」

そして首を傾げながらの西宮の言葉に、小町もまた首を傾げる。彼女の知識にある気質と天候の関係からすれば、非常にレアな組み合わせだ。

数秒迷った末に、小町はおずおずと口を開く。

「……お前さん、実は二重人格だとか」

「ありません」

「……えー。じゃあ何なんだろうねえ？」

「確かに二面性のある性格はしてると思うけどね。社交的で相手によって対応を変える世渡り上手な表の部分のと、頑固で熱血な地の部分と」

そろって首を傾げる二人の間、ぐんによりしている鈴仙がその状態のまま声を上げる。

それを聞いた小町がにやりと笑い、西宮に視線を向けた。

「へえ。如才無さそうに見えるけど、根っこの部分でそういう性格してるんだ？」

「この異変について調査する理由を聞いて初めて分かったんだけどね……」

「待てコラ鈴仙さん。妙な事を言いふらさんで貰えますか」

「ふーんだ。巻き込まれた腹いせよ」

当然の如くぐんにより状態の鈴仙へと当の西宮から突っ込みが入るが、鈴仙はぐんによりとしたまま反論。

その両者の言葉を聞きながら、しかし小町は更に首を傾げる。

「気質として現出するのは、その人妖の根の部分なんだよねえ。例えば熱血漢みたいな奴は『熱気』とか熱に関する属性を持つ事が多いけど……」

「別段熱くも涼しくもなりません」

「……本気で意味分からんね。なんなんだろ、お前さんの気質」

「さあ……？」

結局そのまま暫く小町は首を傾げていたものの、結論を出す前に頼んでいた醤油団子が来てしまう。

彼女の前に二皿置かれたそれを見て、腰を上げたのは西宮だ。

「まあ、分からん物をいつまでも首を傾げていても仕方ないでしょう。俺の相棒が『凧』ですんで、凧の気質が聞けたりしたのも面白かったですし、そろそろ俺らはお暇します」

「あー……そっか、異変を調べてるんだっけ？ 引きとめちまったように悪かったね。更には診断するよみたいに偉そうな事を言っておいて、こんな尻切れトンボな終わり方で二重に申し訳ないよ」

「十分に興味深かったですよ。それじゃ、醤油団子の代金ですね」

そして西宮が財布から出した醤油団子二皿の代金を、しかし小町は半分だけ受け取って残りを彼に押し返した。

きよとんとする西宮へと小町は苦笑を浮かべ、

「二人分の診断で二皿。けど、一人分しか診断できなかったから一皿分さね。もしあなたの気質の正体が分かったら、その時はもう一皿奢っておくれよ」

「なるほど。そりゃ確かに、俺としても面白そうです」

両者ともにどこか楽しげに笑みを交わす。

話好きな小町は幻想郷の新しい住人である西宮と、また話してみたいと思つた事が原因だろう。イマイチ正体の分からなかった気質への興味云々を除いても、鈴仙と小町の会話の折に見せた細かな気遣いなどは評価が高い。

西宮としても、小野塚小町と言う人物との会話は中々面白い物だったと言える。

サボタージユの泰斗などと幻想郷縁起にも書かれている彼女だが、その実態は前情報で得ていた印象とは異なり、姐御肌でありながらも理知的で他人を気遣える大人の女性のそれだ。話していて得る物も多く、何より会話自体を盛り上げる術を心得ている。

神社の一員としても幻想郷の住人との交遊は深めておくべきだろうし、西宮側もこの提案は歓迎すべき物だった。

「それでは、またの機会に会いましょう。さ、いつまでぐん

にやりしてるんですか。行きますよ鈴仙さん」

「……はい」

そして西宮に促されてのろのろと立ち上がる鈴仙は、なんかちよぐんたしゅ

つと駄目な女性だった。

その駄目なねーちゃん化が進行している鈴仙と西宮に、茶と団子を手にした小町が思い出したように声をかける。

「そついえば異変の調査って話だけど、あんたらはどこへ向かってるんだい？」

「まずは紅魔館へ行こうかと。『気』を扱う美鈴さんに聞けば目新しい情報があるかもしれませんし、あそこには多くの蔵書が収められた大図書館もあります」

「ああ、なるほど。でも少し気を付けた方が良くもね」
「……何か気になる事でも？」

僅かに眉を顰めながらの小町の言葉に、西宮が問い返す。
対する小町は『いやまあ』と一拍置き、

「さつきちよつと話に出たじゃないか、庭師」

「はい。魂魄妖夢さん、ですよね」

「そいつがね。ちよつと紅魔館に連れ込まれたみたいで」

「……は？」

「いや、ここに来る前にも庭師相手に気質診断をやつてね。それが終わった辺りで紅魔館のメイドが突然やって来て、『あ、じゃあ次の容疑者役は貴方で良いわ』とか言つて庭師を連れてつちまったのさ」

「容疑者役つて……何してるんですか、十六夜さんは」

「さてねえ？ ま、どうせあの館のお嬢様の我儘とか思い付きじゃないかな？」

「どこの組織も上の我儘に下が苦勞するのね……良く分かるわ」

めくるめく厄介事の子感に顔を顰める西宮。

その横で鈴仙が、組織の下っ端らしい一方的な共感シンパシーを咲夜に送っ

ていた。

#

そして同刻。

紅魔館の大図書館では

「ちよつと、何なんですか？　なんか無理やり連れて来られたんですけど」

「あー、こらこら。私語は慎みたまえ　なんてな。なに、何の事は無い犯人探しだよ、魂魄妖夢。お前は元々、先の春の異変で天候を狂わせた事があつただろう？　まあ、あれは天候は副産物に過ぎなかつたようだがな」

「……もしかして、この天候がおかしくなる異変についてですか？」

安楽椅子に座っているのはこの図書館の主　ではなく、図書館の主である親友から安楽椅子を奪い取ったレミリア・スカーレット。

対するはその前に所在なさげに立つ魂魄妖夢という構図で、押し問答が展開されていた。

ちなみに妖夢を連れて来た咲夜は既に居ない。或いは次の『容疑者役』を探しに行ったのかもしれない。

「確かに以前の異変は幽々子様の指示で春を集めましたし、その実行犯は私です。しかし、今回の件に関しては冤罪ですよ」

「犯人は皆そう言ふと思うのだがな。口だけなら何とでも言える」

「……言ってくれますね」

そして挑発するようなレミリアの言葉に、礼儀正しいが決して気の長い方ではない妖夢の目に戦意が宿る。

所在なさげに立つ姿から一変、自然な動作で刀に手をかけつつ、やや前傾に身体をたわめたその姿は、一瞬後には間合いを詰めて斬りかかれる戦闘態勢だ。

「それを言うなら、貴方だって霧を出して気象を滅茶苦茶にした事があつたそうじゃない。容疑者って言うならそっちも同じよ」
「……ほう、言ってくれる」

そして敬語ではなく彼女本来の少女らしい口調で、しかし挑発となる言葉を返す妖夢。

その言葉に対し、レミリアは椅子から床に降り立つ事で応ずる。妖夢と違って特に構えは必要ないが、こちらもまた一瞬後に切りかかられても即応出来る。つまりは戦闘態勢に他ならない。

即ち双方戦意あり。

更には妖夢は先述の通り決して気の長い方ではなく、レミリアはそれ以上に気が短い。

つまりはこういう状況で両者の意見が真正面から対立した場合、そしてこの場が幻想郷である以上、ここから先にやる事は一つ。

「夜符」

「人符」

続く瞬間に互いにスペルカードを掲げ、

「デーモンキングクレイドル！」

「現世斬！」

奇しくも両者共に突進技での激突から、紅魔館大図書館での戦闘は始まった。

「ちょ、レミイ！ 何してるのよ、本が大変な事に げぼがはごぶつはあ！？」

「パチユリー様！？ パチユリー様が少女として吐いちゃいけないレベルの悲鳴と共にお倒れに！？ パチユリー様ああああ！！？」

……当事者の片割れの親友にして、この大図書館の本来の主人の気管支に多大なダメージを与えながら。

突如として始まった戦闘に慌てて叫んだ拍子に喘息の発作を起したパチユリー・ノーレッジ。

丘に打ち上げられたイキの悪い秋刀魚のようにのたうち回るパチユリーの横で小悪魔が叫ぶその背景で、縦横無尽に駆け回る妖夢とレミリアの戦いは続いていた。

第三十話：小野塚先生の気質診断（後書き）

江戸っ子気質なこまつちゃん可愛いです。

閑話其の四：彼と彼女の体育祭・前半（前書き）

この学校はフィクションです。

現在の学校、学生、教員、田島の婆さん、物理法則、常識には一切関係がありません。

というか書く切っ掛けが書け麻雀で始まった番外編です。

その辺りをご了承のうえ、ご覧ください。

ちなみに外伝に出る西宮・早苗の外の世界時代の友人については渾名以外の名前を設定する心算も本編に出す心算もありません。悪しからずお願い致します。

閑話其の四：彼と彼女の体育祭・前半

時は本編より少々遡る。

場所は守矢神社の程近く。つまりは山の頂上近くの川沿い、この妖怪の山の上から下までを流れる川の、いわゆる川の源流に近い場所にて一組の男女が何やら作業をしていた。

男の方は長身と糸目が特徴のYシャツジーンズ姿の少年、西宮丈一。

その横には青髪を短めのツインテールに纏め、いつものポケットが多く付いた薄水色の作業着のような服を着ている河城にとり。

そして両者の前にあるのは、流れる水の流れを利用して動く、いわゆる水車と呼ばれる物だ。

ただしただの水車と違い、色々とゴテゴテとした機械やコードが繋がっている。

外の世界の科学知識に長けた者ならば、多少無駄が多いが原動機・発電機の類だと判断出来るだろう。そう、些か不格好で非効率な部分もあるが、これが紅魔館の大図書館の本で得た外の世界の知識を元に、にとりが組み上げた水力発電機だ。

「盟友、そっちのドライバー取って。プラスの奴」

「おう」

そして水車改め水力発電機の取り付け作業は、にとりに西宮がドライバーを渡し、そのドライバーでネジを締めたにとりが長く息を吐いた所で終わりと相成った。

紅魔館の図書館から本を借りて来て、それから読み込みと実践という突貫作業であったものの、概ね満足いく物が出来たらしい。

にとりの表情は僅かな疲労を滲ませながらも満足げだ。

「おーし、出来た。とりあえず仮組みだからあんまり生み出せる電力は高くないけど、これで神社に電力が供給される筈だよ」

「……紅魔館から本を借りて来て、まだ二日だぞ。すげえな河童」
「えへへ、もつと褒めてくれて良いんだよ？ 盟友」

そして西宮の呆れ交じりの賞賛に、にとりが嬉しそうに笑みを返す。

『褒めて褒めて』とでも言わんばかりの笑顔に苦笑し、帽子越しにとりの頭を撫でる西宮。

撫でられたにとりは、こそばゆげに眼を細める。

「それじゃ、ちゃんと電気が供給されてるか調べる為にも神社に戻るか。夕飯も食べて行くだろ？」

「うん！ 盟友の料理、美味しいんだよねえ」

「そりゃよかった。何が食いたい？ 希望は聞くぞ」

「え？ えーと、きゅうりのスティックサラダ」

「……また料理人の腕に影響され難い注文だな……」

そんな会話を交わしながら、西宮にとりが地面を蹴って空へと飛び上がる。

向かう先は守矢神社だ。

そして二人が飛び去った後に、ずるりと音を立てて水車の横の空間に裂け目が出来る。

無数の目が蠢く不気味な空間　スキマ。

こんな物を扱える人妖は、幻想郷広しといえど一人しか居ない。

当然の如くそこからゆつたりとした動きで出て来たのは、妖怪の

賢者である八雲紫だ。

彼女は作り上げられた水力発電機を見て、苦笑する。

「……過度な外の技術の持ち込みは止めて欲しいんだけどね。まあ、河童は大量生産とかはしない変な技術屋気質だから大丈夫でしょうけど」

発電機や電化製品というのは外の文化だ。

それらの急激な流入が幻想郷に及ぼすであろう変化を考えると、幻想郷の管理者である八雲紫としては余り好ましい物ではない。

しかしそこまで含めても、先の呟きの通り河童はあくまで『技術屋』だ。

新しい物を作るのは好きだが、一度作り終わった物にはあまり興味が向かない上に、技術を広めるといった概念が薄い。外の世界のような大量生産など、考えもしないだろう。

つまりは外の世界の文化が流入して来ても、河童と言うファクタを挟んだ結果、外の世界のような文明の進化は遂げないだろうという事だ。

楽観ではなく事実として、これくらいなら放置しておいても構わないと紫は判断。

水力発電機をポンと音を立てて軽く叩く。

「まあ少し様子見かしらね。大量生産とかを考えていないか、少し見に行ってみようかしら」

そして結論を出した紫は再びスキマを開き、そのスキマに踏み込んでその場から移動。

移動先は先程西宮とにとりが向かった守矢神社その場所だ。

後に八雲紫は語る。

『あそこで放置しておいた方が、私の精神安定的には良かったのか
もしれない』

と。

#

紫がスキマを抜けると、そこは守矢神社の社務所の縁側だった。
恐らく信者となった山の妖怪辺りが整形・贈呈したのだろう。幻
想郷に来たばかりの時は何も無かった縁側の前の地面は、松の木や
庭石で彩られた落ち着いた和風の庭に姿を変えていた。

自身の預かり知らない所でも幻想郷に受け入れられ始めている守
矢神社に、僅かに頬を緩める紫。

そのままついと視線を彷徨わせると、縁側の障子の向こうから声
がする。

「おお、テレビが動きましたよにとりさん！ 凄いです、早速なん
か見ましよう！ えーと、今時間って何が放送されてましたっけ」
「幻想郷にはテレビ局とか無えから落ち着け東風谷。……復旧した
のは良いけどゲームするかDVD見るかくらいしか使い道ねーんじ
やねーかこれ」

「あ、そう言えば近所のレンタル屋から借りて来てたDVDどうし
ましょ？ 幻想入りする前に返しに行くの、すっかり忘れてたんで
すけど。っていうか幻想入りする前から延滞三日くらいだったよう

な……」

「遠回しに言うが、最低だなお前」

聞こえて来た声は西宮と早苗の物だろう。

彼らが幻想郷に来てからまだ日は浅いが、既に『いつもの事』と
感じるようになって来た風祝と見習い神職の言い争いだ。

いつもながら元気だと思いつつも、紫は障子の向こうに声をかけ
る。

「お二人とも。楽しそうなところ悪いけれど、入っても良いかしら
?」

「あ、はい。えーと、この声は紫さんですね。今ちょっとDVDプ
レーヤーの接続中ですんで、入場はセルフでお願いしまーす」

「……お前本当に八雲様が偉い妖怪だと理解してるか?」

中からそんな会話が聞こえてきた直後、西宮が恭しい動作で中か
ら障子を開いた。

友達感覚とは言わないまでも、せいぜい学校の先輩や先生に対す
るレベルの敬意の早苗に対し、西宮の方はこの辺りは真面目で、先
の風神録異変の顛末もあって神奈子や諏訪子に匹敵するレベルの敬
意を紫に払っている節がある。

彼は庭に居る紫に丁寧に一礼し、

「お待たせいたしました、八雲様。本日はどのような御用向きでし
ようか?」

「そうね。今貴方達が弄っている、外の世界の電化製品に興味があ
るから 正確には、幻想郷内で電力を自給してそれを使おうと
している事に興味があつて、かしら」

「不味い事だったでしょうか?」

「いいえ、大々的に広めたり商売の種にしない限りは構わないわ。一応その辺、貴方達と発電機を作った河童に言っておいた方がいいと思っただのよ」

紫の言葉に西宮は得心したとでも言うように頷いた。

と、言うより電化製品の話題になった直後に「不味い事だったか」という懸念を真っ先に口に出した辺り、彼もある程度は「もしかしたら不味いのかも」という認識は持っていたという事だろう。

とはいえ、それでもとりに頼んで電力供給の手段を模索していたという事からも分かるように、彼はこれまで神社の電化製品について紫が何も言及していなかった事から、過剰に気を回し過ぎなくとも大丈夫なのではないかと考えていた。

実際紫としても個人使用ならば煩く言う心算は無い。

そして縁側をくぐり社務所の一室へと足を踏み入れた紫の前に居るのは、床に座り込んでテレビとDVDプレーヤーの説明書らしき紙を前に首を傾げている早苗だ。

いつもの風祝の装束に身を包み、しかし手の持つのは大幣ではなくコードと説明書。

既に目が『?』マークな辺り、こういう作業は苦手なようだ。数秒考えた辺りで頬をふくらませ、紫の横に立つ西宮へと向き直る。

「西宮、やってくださいよ。貴方の方がこういうのは得意でしょう」「お前に客人の相手が過不足無く出来るってんならやってやるよ。っていうかまず挨拶だろ」

「あ、失礼しました。紫さん、ようこそ守矢神社へ！ 大したお構いも出来ませんが、どうぞゆっくりして行って下さい」

「ええ、そうさせて貰うわ。DVD、か。外の世界でも結構新しい道具よね」

「はい！ 先々代の風祝であるうちの祖母なんか、生前に『早苗、レンタル屋さんに返す時にはちゃんと巻き戻してから返しなさいね』とか言ってくれたりしましたね」

「あの婆さん、ビデオとDVDの区別がついてなかったからな……」
「可愛らしいお婆さんじゃない」

しみじみと語る二人の様子に、紫はこころごとく笑う。

彼女自身は境界を操る能力で外に出る事も多いので、幻想郷には極めて数少ない、外の世界の現代技術にも詳しい妖怪だ。

それゆえビデオとDVDの違いも分かっているのです、そのお婆さんのある種可愛らしい勘違いが面白かった。

「まあ同じ婆さんでも、三丁目の田島の婆さんはコピーガードを突破する方法を覚えて、色々と法的に不味い領域に手を出していたが」
「あのお婆さん、ブライントタッチどころか自作パソコンの組み上げ、ホームページ構築、サーバーとセキュリティの確保に、表沙汰には出来ませんがハッキングまで出来ますからね……」
「なにそれ怖い」

そして続いて話題に出たのは三丁目の田島のお婆さん。

以前は漬物石を泥棒に投げ付けて撃退した、御町内のラスボスである。

『マジ怖い、なにそのお婆さん』と腰が引ける紫。

彼女自身は境界を操る能力で外に出る事も多いので、幻想郷には極めて数少ない、外の世界の現代技術にも詳しい妖怪だ。

それゆえパソコンのなんたるかも分かっているのです、そのお婆さんのある種とんでもないスペックが恐ろしかった。

「盟友ー。神奈子様と諏訪子様から、『これで試してみる』って言われてDVD貰って来たよー」

そこで社務所の中からその三者の元へと声がかかる。

紫が来る前に『DVDプレーヤーが動くかどうか確かめたいから、神奈子様か諏訪子様辺りになんか借りて来てくれ』と西宮に言われたにとりである。

何を隠そう、外の世界では殆どの人間から姿が見えなかった神奈子と諏訪子。

神様として何かする事があるわけでもなく、早苗や西宮に頼んでよくDVD鑑賞などをやっていたのだ。

もつともそのせいで当の早苗と西宮は、早苗の両親に『誰も見ていないのにテレビをつけるな』と怒られたりしたものだ。

ともあれその結果として、早苗や西宮に頼んで幾つものDVDを溜めこんでいた諏訪子と神奈子。

彼女達の元へ西宮に頼まれたにとりが赴き、神奈子と諏訪子が彼女にDVDを渡したというのが顛末だ。

そして、部屋に入って来たにとりは紫の姿を見て少し腰が引ける。

「あれ？ ……えと、お客さん？ は、はじめましてー」

「お前ホントに人見知りなんだな。俺の時はそうでもなかったのに」
「盟友の時はぶっ倒れてる所を救助された上に、珍しい機械もくれたしね」

そんな会話を聞き、腰の引けたにとりを見て紫は微笑。

口元を扇子で隠した胡散臭い笑みを浮かべながら、にとりにこやかに声をかける。

「はじめまして、河童さん。私は八雲紫と申しますわ」

「あ、どうもご丁寧に。河童の河城にとりで　　って、ええ！？
八雲紫！？　境界の大賢者様！？」

「ええ。貴方の作った発電機の事で少しお話がありますの。

ええ、少し」

「ひゅい?!」

元より根は小心者のにとり。

得体の知れない（にとり主観）笑みを浮かべる大妖怪相手に震えあがるが、そこに割り込んだのは早苗だ。

青白の風祝はぶんすかと頬を膨らませて、

「紫さん、あんまりにとりさんを驚かさないで下さい」

「あら、驚かしたつもりは無いんですけど。……私、そんなに怖いかしら」

「だったら傷つくわー、と言いながら頬を膨らませる、八雲紫17歳（自己申告）。

その様子に幾らか恐怖から復帰したにとりが、それでも早苗の後ろに隠れるようにしながらおずおずと声をかける。

「え、ええと……境界の大賢者様が私に、というより私の機械に何かご用でしょうか……」

「そうね。貴方が作った発電機についてだけど、貴方はあれを量産しようとかいう考えはある？」

「え？　……つ、作らなきゃ駄目なんですか？　一度作った物をもう一度作るのとかは好きじゃないんですけど……」

「逆よ、逆。でもその様子なら大丈夫そうね。余りああいっただ物を広められる事の方を懸念していたから。脅かして御免なさいね」

「い、いえ。なら良かったです、はい」

紫の安堵したような言葉に、紫以上に安堵するにとり。そして友好的ではない事態になる可能性を考慮して居た分、こちらも安堵した様子の西宮。

その三者の様子を尻目に、早苗はがちゃがちゃとテレビとDVDレコーダーを弄くり回していた。

「あ、繋がった。これで大丈夫なんじゃないですかね？」

「……お前本当にマイペースを崩さんな」

「良いじゃないですか、西宮。それよりにとりさん、動きましたよ！」

そしてあくまでペースを崩さない早苗の様子に呆れる西宮。

対する早苗は『それがどうした』とんばかりに胸を張り、ようやく動いたDVDプレーヤーを指差してみせる。

にとりはそれを見て大妖怪の前だというのも忘れて目を輝かせ、

「おおー！ これにこのDVDっていう円盤を入れれば、映像が見れるんだね？」

「ああ。それじゃ、試しに神奈子様と諏訪子様から借りた奴でも入れてみるか。けど、これって何のDVDだ……？」

にとりが持っているディスクは無地の物で、いわゆる市販のDVD-RWなどと呼ばれる物だ。

つまりはテレビで放映された内容を録画したか、自分達で撮った何かを保存しているかのどちらかだろう。

首を傾げながらもDVDをプレーヤーにセットする西宮。

その背後で早苗、にとりがわくわくした様子で起動を待ち、紫もここまで来た以上興味本位で見て行くつもりなのだろう。口元を扇子で隠しながら、DVDの起動を待っていた。

そして『動かすぞ』という西宮の言葉の後、数秒の読み込み時間を置いて、テレビ画面が切り替わる。

そこに映し出されたのは、整地されたグラウンドとその中でわいわいがやがやと騒ぐジャージ姿の多くの若者の姿。

『 それでは只今より、 ×市立第一高校体育祭を始めます！』

「あれ？ これですか」

「あー、これが」

そして、その映像を見た早苗と西宮が納得の声を上げる。

その両者へと紫とにとりが視線を送り、それに気付いた西宮が頷きを返す。

「これ、俺らが最後に参加した体育祭ですよ」

「学校 こっちで言えば寺小屋の、ですね。懐かしいなあ」

「あああら。誰が撮影しているのかしら」

「学校の新聞部が小銭稼ぎでやって、毎年希望者に売ってるんですよ。新聞部なのに映像媒体ってどうなのって気もしますけどね」

肩を竦める西宮の横で、にとりの目はキラキラと輝いている。

鮮明に映像を映し出すDVDとテレビ。未知の技術であるそれに感動しているのだろう。

横目でそれを微笑ましげに見守る紫。

どうやら境界の大賢者にとって、懸念していた問題 外の世

界の技術に関する問題は何事も無く終わりそうだった。

その代わりに。

『 それでは開会の挨拶を 』

『ふはははあ！ 残念だったな第一放送部！ これよりこの大会の運営は我ら第二放送部が頂くぞ！ 者ども、かかれえ！！』

いかにもな悪役笑いと共に、パラタタタという軽快な発射音。

『ギヤー』だの『やられたー』だのという悲鳴が放送機材から流れ、カメラの周囲の学生たちからは、

『おー、今年も始まったかあ』

『あ、第一放送部は伏兵を配置してみたいだぞ。ギリースーツを着た伏兵隊が花壇から飛び出してきた』

『つて、それにキレた園芸部が参戦したぞ。良いぞもつとやれー！！』

などといった、呑気極まりない野次がDVDに収録されている。

早苗と西宮は平然と画面を見ており、にとりは映像と音声そのものに感動している中、

「つて、ちよつと待って！？ 何コレ！？ 何この騒ぎ！？」

只一人、妖怪の賢者のみが画面に映っている光景に疑問の声を上げた。

「え？ 何の事は無い開会式の光景ですよ」

「まあ他の学校に比べると度外れてフリーダムなのは事実だろ。…：つかやベエな俺も。今八雲様が突っ込むまで、危うく平然と流す所だった……」

「『度外れてフリーダム』の一言で済みますの！？ ねえ、なにやってるのあの放送部とやらの人達！？ なんか鉄砲持ち出してない！？」

「ああ、エアガンです。ウチの高校、方向性の違いとかで第一放送

部と第二放送部があつて、イベントの度に進行役をやる権利を奪い合つて大騒ぎするんですよ」

「大騒ぎつて一言で済ませて良いのかしら、これは……」

慄然とした様子で画面を眺める紫の目線の先、第一放送部と第二放送部、そして園芸部の三つ巴の戦いが続いている運営本部が移されている画面では、周囲の学生たちがわいわいがやがやと遠くの乱闘を見物していた。

果たしてこれは色々な意味で大丈夫なのか。

そう思考する紫の耳に届く声があつた。

「あー、こりゃ駄目じゃね？ えー、はい。第一放送部と第二放送部の決着がつきそうにないので、ここから先は生徒会が司会進行を担当しまーつす。んじゃまず何？ あ、うん。開会の挨拶？ んじや選手代表出て来てー」

「ハイ！ 選手代表、赤組総司令官の東風谷早苗です！」

「なんか出て来たわよ！？ この酷いカオスの中に知ってる顔が出て来た！」

「皆さん、守矢神社は今日も皆さんの信仰を待っています。興味のある人は山の上にある守矢神社まで。恋愛成就、子孫繁栄、商売繁盛、豊作豊穰、なんでもお待ちしていますよ！！」

「選手代表の挨拶しなさいよ！」

画面に出てきて台に上つたジャージ姿の、今より少しだけ髪が短い東風谷早苗せんしゅだいはひょうに、紫が連続で声を荒げて突っ込みを入れる。

それが聞こえたわけではないだろうが、画面の中の今より少しだけ幼く見える早苗が首をかしげる。

「……えっと、何か運営本部から「さつさと代表挨拶をしろ」と書かれたスケッチブックを向けられていますね。分かりました。我々参

加者一同はスポーツマンシップを乗っ取り、いかなる手段を用いても勝ちに行く事を誓います!」

「スポーツマンシップを乗っ取ってどうするのよ!? しかもこれスポーツマンシップに喧嘩売ってるでしょ!？」

「んー、凄いなこのDVDって。妖怪の賢者様も大興奮だよ」

「この反応は明らかにDVDそのものの性能じゃなくて、中身の映像に収められている大問題な光景についてだと思っが……」

ぜえはあと肩で息をする紫に同情げな視線を向ける西宮。

にとりは内容には頓着せずに楽しんでいるようであり、早苗はにこやかな笑みを浮かべて「懐かしいですねー」等と言いなながら画面に見入っている。

彼は周囲からのフォローは期待できないと判断。頂垂れる紫の肩をポンと叩く。

「八雲様」

「……に、西宮君。大丈夫なの、あの開会式？」

「まあ、多少問題はありますが……」

目を伏せ、やれやれとでも言うように首を振る西宮。

その仕草が示す感情は、端的に言えば「処置無し」とでも言うような物だ。

どういう意味かと視線で問う紫に対して西宮は冷静に答える。

「あれで心が折れていては、この先もちませんよ?」

『運営本部よりお知らせです、運営本部よりお知らせです。白組のラグビー部の皆さん、スクラム組んで赤組の選手入場の妨害をするのは止めて下さい! 繰り返しします、白組ラグビー部の皆さん

ええいもう良い、制圧部隊、ゴー!……!』

そして西宮の言葉を補強するようにして流れて来たテレビ画面からの言葉と、画面に映るスクラムを組んで選手入場の妨害をするラグビー部と、その制圧に動き出した白ラン装備の運営本部部隊。

その光景を見て、八雲紫の脳内で『常識』という言葉が音を立てて崩れ落ち、それと同期するようにして紫本人もその場につくりと深く頂垂れたのだった。

閑話其の四：彼と彼女の体育祭・前半（後書き）

後編に続きます。

なんだこの外の世界体育祭篇。

書け麻雀なんてやるもんじゃないですね。皆も気を付けよう！

あ、ちなみに書けマージャンで勝者三名が出したキーワードは、『学校』『パンチだロボ！』『ミスターカツアゲ』。
なにをしると。

閑話其の五：彼と彼女の体育祭・後編（前書き）

この学校はフィクションです。

現在の学校、学生、教員、田島の婆さん、物理法則、常識には一切関係がありません。

というか書く切っ掛けが書け麻雀で始まった番外編です。

その辺りをご了承のうえ、ご覧ください。

ちなみに外伝に出る西宮・早苗の外の世界時代の友人については渾名以外の名前を設定する心算も本編に出す心算もありません。悪しからずお願い致します。

閑話其の五：彼と彼女の体育祭・後編

脱出のタイミングを逃した。

今現在の八雲紫の状態を端的に言い表すならば、こう表現出来るだろう。

早苗と西宮の高校の体育祭。DVDに収められていたその内容のトンデモぶりに気が付いた時点で撤退すべきだったのだろうが、思わず突っ込みを入れている間に脱出のタイミングを完全に逃した。結果として今もこの狂った体育祭のDVDを見る事になっているというのは、八雲紫一生の不覚と言えるだろう。

平安の都が出来る遙か前より生きている八雲紫。

今でこそ妖怪の賢者と呼ばれている彼女だが、当然その長い生の中には失敗や挫折もあった。

特にこの幻想郷を作るといふ大事業においては、多くの苦難が待ち受けていた。

それ故に流石に人生トップの苦境とは言わないが、それでもこの現状は軽く十指に入る苦境だった。

物理的な危険はともかく、常識の崩壊的な意味で。

『狩り物競争』で、他組の生徒を襲ってゴールまで連行しようとするモヒカンジャージの群れ。ヒヤッハーと叫ぶな。お前らはどこの世紀末の住人だ。

『ホーガン投げ』では何の恨みがあるのか、アメリカの某プロレスラーの形をした像を投げて飛距離を測る始末。全国のハルク・ホーガンさん本当に申し訳ありませんでした。

『阿波踊りリレー』も酷かった。BGMに合わせて阿波踊りしつつ走るという競技なのだが、しかし時折BGMが途切れた時には走るのを止めて各々スタイリッシュなポーズで芸術点をアピールせねばならないのだ。

阿波踊りをしながら走っていた集団が、次の瞬間にはJ〇J〇立ちの群れ。酷い光景であった。ちなみに阿波踊りをせず普通に走っていたと見なされた場合、実行委員に懲罰部屋に連行されて耐久阿波踊りの刑に処されるという。

『パン食い競争』ではパンを守る強大な守護者へと果敢に立ち向かう選手たちの友情、愛する女との別れ、裏切り、そして絆と再集結、その他諸々のスペクタクルストーリー。最終的にはパンの存在とか皆が忘れ、演劇部のきまぐれで適当に屋上に降臨した黒幕を倒しに屋上へ向けて参加者たちが一斉に駆け出した所で強制的にジャンプ式打ち切りとなった。

ちなみにラスボスの素材は昨年の文化祭で演劇部が演じた『マツチヨ売りの少女』で使われた舞台セットの再利用である。

一介のマツチ売りであった少女がボデイビルに目覚め、筋肉言語を極めながら華やかな舞台へと駆け上がっていく異色のシンデレラストーリーは、友情出演したボデイビル部主将の熱演も相まって名伏し難い感情を観客に与えたという。

「……ねえ西宮君。なんか今度は明らかに徒競争やる格好じゃない人達がグラウンドに集まってるんだけど。さっきの迫撃型200m走でも、まだ真つ当なジャージが集まってたわよね？」

「ああ、こりゃ無差別級徒競争ですね」

「確かにメンバー見ると無差別と言うか無秩序というか……」

そして現在、早苗とにとりが談笑しながらやや前で床に並んで女

の子座りをして、紫と西宮が後ろで椅子に腰かけながら見ているテレビ画面。

その中央。グラウンドのトラックに並んで映っているのは、ジヤージ姿で準備運動をしている少年少女。ではなく、男か女か分からない剣道防具装備の人物 with 竹刀だったり、黒帯を締めた胴着姿の少年だったり、明らかに時代を間違った長ランとリーゼント装備のヤンキー風の少年だったり。

確かにある意味で無差別級、或いは紫が言ったように徒競争をやるとは思えない無秩序なメンバーだ。

「もう嫌な予感しかしない構成だけど、これってどういうルールなの？」

「ええ、徒競争ですよ。100m先にあるゴールに先に辿り着いた方が勝ちです」

「絶対嘘よね？ それだけじゃないわよね？」

「いえ、嘘じゃないですよ。まあ確かにそれだけ、というわけでもありませんが　あ、始まりますよ」

猜疑心丸出しの紫が西宮に詰めよるが、それよりもDVDに映る競技の進行の方が早かった。

審判が空砲を掲げ、スタートの合図を口にする。

そしてその手にした空砲を鳴らした瞬間、いきなり大打撃が顕現した。

『飛べおらア！』

『食らいやがれエー！！』

などと言った叫びを筆頭に、徒競争のスタート地点で参加者による盛大な乱闘が開幕される。

ヤンキーが、胴着姿の少年が、剣道装備の人物が入り乱れての大

乱戦。

胴着姿がヤンキーのアップパーで飛び、ヤンキーが剣胴着の胴打ちを食らって悶絶し、飛ばされた後のダウンから復帰した胴着が剣胴着に『空手バツクドロップ!』と叫びながら投げ捨てジャーマンをキメる。

ぼかんと口を開ける紫に、横からの解説が入る。

「無差別級徒競争　その特徴は手段まで無差別な事です」

「無差別って……手段が？」

「ええ。平たく言えば妨害OKの徒競争ですね。まあここに至るまで例年各クラス各組による様々な試行錯誤があつたんですが、昨今では『全員ブチのめしてゴールすれば自軍だけポイント貰えて超お得』理論により、スタート地点での乱闘が風物詩になっています。抜け駆けしてゴールに走ろうとすると集中攻撃を食らうんですよ、これ」

訥々と語る西宮の言葉に、がつくりと紫が頂垂れる。

落ちた肩から立ち上る哀愁。最早彼女のこの姿を見て境界の大妖怪と納得する人はいないだろう。

「……徒競争という言葉に謝りなさいよ、もう」

「あとは前日から始まつていた各組対抗42・195kmリレーの途中経過報告は　あ、クソ。カットされてるじゃねーか、仕事しろよ新聞部」

「なにその気の長そうなりレー？　42・195kmを皆で走るの？」

「いえ、一人一人が42・195km走るリレーです。走者は7人……片道なら、長野から東京にまで行ける距離のリレーね」

参考までに諏訪湖がある長野県、その長野駅から東京までの距離

がおよそ220kmである。

愕然とする紫だが、さらに追い打ちをかけるように西宮が紫に頷き、

「ちなみにあんまり遅いと最終走者が戻ってくる前に体育祭が終わります」

「もはや罰ゲームに等しいわね……あ、でもみんなで盛大に迎え入れる準備とかするんでしょ？」

「いいえ、どうにかアンカーが戻って来ても、タイミングが悪いと他の競技の邪魔だからと、ゴールまで暫し待たされる事もあります。去年のウチのクラスの代表、通称Mr・カツアゲとか」

「Mr・カツアゲって……」

「さつき画面に映っていたウチのクラスのヤンキーです。渾名の理由は家が貧乏で昼飯が少なく、しょっちゅう昼飯を皆にたかって回るその習性から。別に暴力使ったり脅したりしてるわけじゃないんですけど、あのツラで『メシ分けてくれ』と言われるだけで半ばカツアゲですよ」と揶揄を込めて

酷い名付けもあったものである。

内心でそのMr・カツアゲとやらの同情する紫の目線の先。

テレビ画面ではそのMr・カツアゲが胴着相手に物凄く痛そうなパチキをかまして、『オラオラどうしたア！？』だの『もう終わりかア！？』だのと吼え猛っていた。

楽しそうなんて別に同情しなくて良いかなと、紫はちょっと内心で思い返した。

「そういえば西宮君はこの体育祭、何に参加してたの？」

「クラス対抗50m回転徒競争ですね」

「……何か変な枕詞を付けないと競技出来ないの？」

「その最右翼はその風祝ですが。あいつノリノリで変な競技を次

々と申請してましたし。騎馬玉転がし障害物二人三脚追撃型高跳びリレーとか」

「わあ、何もうその想像する事すら難しい競技」

脱力する紫がテレビ画面から視線を逸らすと、その狂った競技の元凶が、河童と仲良く語り合っていた。

元凶さなえは目を輝かせて曰く、

「いやあ本当に懐かしいですね。そうだ！ 幻想郷の上位者の皆さんに働きかけて、こういうイベントを幻想郷でもやってみましょうか」

「良いねそれ！ 私は全面的に付き合おうよ、早苗！」

その言葉に、疲れた表情の紫が西宮を見る。

大妖怪、八雲紫。 いや、今の彼女はまるで未知に怯えるただの乙女のような表情である。

シリアスな場面で出せば良い表情なのであるうが、こんなしょうもない場面が出る辺り、色々台無しであった。

ともあれその紫の視線を受けた西宮は頷き、

「本当にそんな事をしようとしたら、全身全霊で止めます」

「お願い……多分彼女と対峙してペースを崩されずに対話できるのは貴方と千里眼の白狼天狗くらいだから。後者には止める事とか頼めないし」

「そこまで言われますか……あ、でも八雲様。流石に全競技をノーカットでやってるワケじゃないですし、このディスク収録分はもう少しで終わる筈ですよ。おい東風谷、次の42・195km走り幅跳びは物凄い長いから飛ばすぞ、良いな？」

そして西宮が告げた言葉に、早苗が頬を膨らませて振りかえる。類袋に食物を詰め込んだハムスターのような表情だが、つまりは不満と言う事だろう。

そのまま口を尖らせ、西宮へと反論の声を向けて来た。

「えー。折角だから収録分はノーカットで見ましようよお」

「八雲様は俺やお前と違ってお忙しいんだよ。あんまりお引き留めするのも悪いだろ」

「……そうね。その42・195km走り幅跳びとやらは飛ばして貰って、次の競技が終わった辺りでお暇しましょうか。ところでその42・195km走り幅跳びってなに……？」

「助走が42・195kmなんです。踏み切りミスしたら42・195km走り直しで、確かこの年はパンツ奉行がリトライ食らったような」

「厳しいわね……」

「ですが一番キツツイのは42・195kmハードル走でしょうね。42・195kmを1m間隔で置かれたハードル飛びながら走るってんで、開校以来一度も完走者が出ていないんですよ」

「何故それをしつこく競技に残しているかを、まず疑問に持ちましようよ……」

そして不満そうに頬を膨らませながらも、「まあそれなら仕方ないですね」と紫に配慮して矛を収めた早苗が、リモコンを操作して早送りをする。

にとりはその早送り自体に、「凄い！これが紅魔館メイド長が持つてるって言う時を操る程度の能力!?」などと叫んでいたが、全くの勘違いである。

ともあれ、その早送りが終わり、このDVD収録分の最後に残っ

た競技は 騎馬戦。

しかし紫がハイライトの消えた瞳で見る先にある騎馬。それは騎馬と呼ぶには余りに大き過ぎた。

大きくデカく重く、そして不格好過ぎた。

それはまさに　　なんだろうコレ。

そんな思考が殆ど停止した紫の脳内を巡る。

そう、画面に映ったその光景を平たく言うなれば

□ 人

人人
□

これを通常の騎馬とすると。

赤組が組み上げたその騎馬は　　こうだ。

□ 人人

人人 人人人 人人

人人人人人人人人人

人人人人人人人人人

人人人人

人人人人人人

人人 人人

人人 人人 早くパンチです、ロボ！
□

なんかもう、六身合体とか目じゃないレベルで、胸やけするレベルの合体を繰り返した巨大な人型である。

足元でなんか見知った風祝がジャージ姿でノリノリで指示を出している事とか含めて、もう色々と常識とかそういうのは投げ捨てる物であった。

足とか腰を担当する生徒が非常にガクガクとされていて、顔色は真っ青だったり真っ赤だったり、明らかに騎馬戦が出来る状態じゃない

い点まで含めて突っ込み所が満載である。

「……誰が考えたのよ、アレ」

「足元で指示出してる馬鹿です。明らかに勝てる作戦じゃない旨は注意事項として馬鹿と赤組首脳陣には伝えたんですが、当人曰く『一度の勝利よりも一生残る伝説』とかで」

「ええまあ、一生残るでしょうよ……何身合体よコレ」

「確か騎馬戦の参加者上限が24人で、馬鹿が足元で指示出してるんでそれ抜いて23人ですから……23身合体ですね」

「うわあ合体シーンだけで胸やけしそう。……あ、崩れた」

そして紫の視線の先で、その言葉通りに合体ロボ改め巨大騎馬が崩れ落ちた。

『ぎゃあ』だの『うわあ』だの『ヒヤッホーイ』だのといった悲鳴と共に、開幕より前に終焉^{ゴール}を迎えた騎馬戦。まさかの不戦敗である。

倒れた騎馬を前にグラウンドにただ一人佇む今より少し昔の早苗は、しかし非常に満足げだった。

「……そういや東風谷。今にして思っけどお前、凄く満足げだなオイ」

「ええまあ。ジャイアントロボごっこが出来て楽しかったですよ！

あ、でも前口上が言えなかったのだけは心残りですね。ザ・ビッグ赤組。略してザ・ビッグA！ 神の名においてこれを鑄造す！

汝に罪無し！！」

「そうかそうか。最終的にこの騎馬戦を捨ててたせいで白組に僅差敗北した全ての赤組に土下座すると良いと思っぞ」

さして表情も変えずに投げ遣りに言う西宮と、にこやかな笑顔で応じる早苗。

その両者を見ながら、紫が肩を落としてつつ本日最大の溜息を吐く。

「もうやだ……ゆかりんもうやだ……どんだけ狂ってるのよ貴方達の学校う……」

「はあ、まあ俺としてはこれしか高校知らないので余り参考になるかは分かりませんが。去年の隣のクラスの文化祭の出し物が体感ゲームだったんですね」

「……体感ゲーム？」

「ええ。『骨折体感』ザ・首折り」と言うブツにして

「初っ端から全力で狂ってるわね……」

「それに対抗して逆隣のクラスが『粉碎体感』ザ・みんち」とかいづのを提出しまして

「ああもう、余計に酷くなってるし……」

「んでウチのクラスのパンツ奉行と東風谷が連名で『心霊体感』ザ・離脱」というのを出す辺りに至って流石に生徒会の武力介入がありました、昼飯の焼きそばパンで釣られたMr・カツアゲを筆頭にクラスの皆が抵抗しましたけど結局その出し物は却下されました
「……どうしよう。ゆかりん流石にどこから突っ込んで良いのかわからないわ……」

境界の大賢者、八雲紫。

世界は広いと実感し、そして人間の無限の可能性を負う方向で感じた日でもあった。

これもまた、守矢神社の日常の一部で

「あつてたまるか、こんな事!？」

……境界の賢者の雄叫び曰く、日常の一部ではないらしい。

どっとはらい。

閑話其の五：彼と彼女の体育祭・後編（後書き）

ホント好き勝手書きました。

色んな意味でごめんなさい。特に外の世界の常識。

第三十一話：異変の背景

結論から言ってしまうえば、一番の頼りと目していた紅美鈴による追加情報は無かったと言える。

冷静になつて少し考えれば、西宮も鈴仙もここに来る前にその可能性に思い至る事は可能だったであろう。

元々が気遣いの人である彼女のことだ。西宮が前々から色々この異変について調べていたのを知っている以上、何か分かったことがあつたならば彼女の方から何らかの手段で伝えて来ていた可能性が高いのである。

「あはは……そんな装備までしてせっかく来てくれたのに、お役に立てなくて申し訳ありません」

そして現在。濃霧に覆われた紅魔館の門前で、晴嵐対策に人里の服屋で買った雨合羽（七色の人形使いお手製）を揃いで装備した鈴仙と西宮に対し、いつもの人民服姿の美鈴が申し訳なさそうに頭を下げる。

それに対して慌てて首を振るのは西宮だ。

「いえ、そんな頭を下げないください。こっちが勝手にアテにしたんですから」

「そう言つて頂けると助かります。……しかし本当に、何なんですようかこの異変」

そして頭を上げた美鈴は、どこか気味が悪そうに自らから流れ出る気質が立ち昇っていく様子を目線で追いかける。

『気質』とは本来このように、誰の目にも分かる形で流れ出すような物ではない。

或いはなまじ気質についての知識があるだけに、この異変の異常さを最も肌で感じているのは彼女なのかもしれない。

「自然発生的な物ではない……それだけは確かです。このような事はありません。確実に誰かの意図、何らかの現象、能力。そのいずれか。もしくはそれら全てが関わっている。ただ、現状では積極的な悪影響が出ていないのが救いですけど……」

顎に手をやり、思案げに呟く美鈴。

しかし彼女に対して、鈴仙が困ったように否定の言葉を返す。

「そうとも言えないのよね。……博麗神社が潰されたって話、初耳でしょ?」

「は? ……博麗神社がですか!? 霊夢さんは!？」

「霊夢は無事。今は守矢神社で保護されているわ」

「そう……良かった」

驚愕の後に美鈴が浮かべた安堵は、社交辞令などでは無く心底から出たものである。

霊夢もあれで、なんだかんだで慕われる娘である。

胸に手を当て息を吐いた彼女は、数秒後には『あっ』とでも言いたげな表情で屋敷。つまりは自らが守る門の向こう、レミリアの気質である濃霧に包まれた紅魔館を見る。

「レミリアお嬢様がどんな反応を示しますかね……お嬢様もいい加減この異変に飽きて、犯人探しごっこが始めてるんですけど」

「犯人探しごっこ……ですか?」

「ええ」

つまりはあくまで遊びの範疇と言う事だろう。

レミリア・スカーレットは現状ではこの異変を然程重要視していないことの、逆説的な証明だ。

だがしかし、それを語る美鈴の表情は真剣そのものである。

そう、この異変事態はレミリアにとつては興味を持つに値しない、或いは暇つぶし程度にしかならない事柄に過ぎない。だが事は既に、それでは済まない領域に食いこみ始めている。

「博麗神社の崩壊。これがある以上、これから先はごっごじゃ済まないわね」

「でしようね。恐らくお嬢様　いえ、紅魔館も本格的に動く事になるでしよう」

確認するような鈴仙の言葉に美鈴が頷く。

それは即ち、博麗霊夢を自らの友と認めるレミリア・スカーレットの、ひいては紅魔館全体の出撃宣言だ。

美鈴自身真剣な表情をしているものの、それを厭う姿勢は見せていない。

つまりはこの異変が霊夢に害を為すならば、彼女も望んで解決に動くという事だろう。

しかしその為にも、まずはやらなければならない事が一つ。

「まずはレミリア様を止めないと不味いですね」

「あー、うん、まあそうでしようね」

「……不味いって、ああ、そっか。妖夢とレミリアだもんねえ」

西宮が溜息交じりに告げた言葉に、美鈴も同様に溜息を吐きながら返す。

数瞬遅れて思考を巡らせた鈴仙も同様だ。

現状でのレミリアの行動はあくまで遊びの域を出ず、適当に知り合いを捕まえて然程本気ではない探偵ごっこの出汁にしているに過ぎない。

その行為は全くの無駄とまでは言わないが、成果を上げる可能性は低いだろう。そもそも異変の中心に近い人物ならば、わざわざ紅魔館までついて来たりなどはすまい。

加えて幾ら被告人の拉致を担当している咲夜が時を止められると言えど、その能力とて万能無限と言うわけではないのだ。

これほどまで大規模な異変の首謀者レベルの相手ならば、何かしらの対処法はある筈。

つまりは時を止めて連れて来られたにしろ、口車に乗せられたにしろ、わざわざのこのこと紅魔館まで来ている時点でその人物が異変の首謀者・或いはそれに近い人物とは考えにくい。

そしてこの場が幻想郷である以上、連れて来られた人物とレミリアの意見が相違した場合はその確率で弾幕ごっこという名の決闘法トランプルに基づいた喧嘩が発生する。

レミリア自身、暇つぶしとしてそれを求めている面も否定できないだろう。付き合わされる側にはお疲れ様と言うほかに無いだろうが。

そしてその『付き合わされる側』が魂魄妖夢な時点で、巻き起ころであるう展開は色々とお察しだ。

妖夢は決して礼儀知らずでも非常識でもないが、同じ従者ポジションの鈴仙や咲夜などに比べ、短絡的というか短気な部分がある。斬れば分かるの代名詞が告げている通りだ。

その彼女をレミリアが『犯人探しごっこ』などという遊び半分で引っ張って来たのだ。

もう既に、惨事以外の光景が目には浮かばない。

そして溜息を吐く三者のその思考を肯定するように、紅魔館の中から轟音が響いた。

「……うわ、もう始めてますよこれ」

「ここで話している間に止めに行くべきだったかしらね……」

西宮と鈴仙がげんなりした様子で呟き、美鈴が慌てたように彼らに背を向けて屋敷の中に走り出す。

走りながら顔だけを後ろに、つまりは門前の二人に向けて、彼女は叫んだ。

「申し訳ありませんが、ついて来て下さい！ ちょっと急いだ方が良さそうです！」

「あー……うん、普段なら別に放置で良いだろうけど、この状況じゃね」

「無駄な消耗、避けるべしって状況ですしねえ」

そして言われた通りに美鈴の背を追う鈴仙と西宮の台詞通り、普段のそれこそ異変を解決する気が無いならば、弾幕ごっこだろうが何だろうが好きにやれば良いのだ。

しかし今後レミリアが、そして紅魔館が異変解決に動くならば、ここでの無駄な消耗は好ましくないだろう。

妖夢がレミリアに勝てるとは思わないが、決着が着くまでやり合えばそれなりの消耗を強いる事は可能な程度には彼女は強い。

そう判断して走る三者の行く先。

つまりは紅魔館が誇る大図書館では

#

「パチユリー様すっかりして下さい！ 衛生兵！ 衛生兵！ ツ

「……うわぁ」「」

大図書館ではレミアアと妖夢の高速戦闘で舞い上がった埃を吸い込み発作を起こした知識人と彼女を抱えるようにして叫ぶ小悪魔の姿が、駆けこんだ三人の視界にまず飛び込んで来た。

三者三様にやや間を置いて咳かれた『うわぁ』は、その光景のどうしようもなさを如実に表しているだろう。

小悪魔に抱かれた土気色の顔をしたパチユリー・ノーレッジ。見事なまでの虚弱ぶりであった。

紅魔館が誇る知識と日陰の大魔術師、まさかの異変解決開始前の脱落である。

「……呼ばれてますよ衛生兵。というか医者」

「え、アレ私が治療しないといけないの？ ……うう、やだなあ」

そして西宮に肘で小突かれた鈴仙が、おそろおそろといった様子でパチユリーと小悪魔に近付いて行く。

咲夜の能力で拡張されたこの大図書館は、外からの見た目以上に遥かに大きい。

遠くから聞こえる弾幕音と斬撃音、飛翔音と激突音とその他諸々総じて言えば戦闘音から察するに、レミアアと妖夢の戦闘は場所を変えつつも続行されているようだ。

距離は相当ある筈なのに聞こえてくる轟音。

それから察せられる現在進行中の戦闘の質量たるや、推して知る

べし。

西宮は即座に自分で何かする事を諦め、横の美鈴に視線を向ける。

「美鈴さん、向こうは頼めます？　ぶっちゃけ俺が割り込みに行っても、多分余裕で死ねます」

「分かりました。向こうはお任せ下さい」

美鈴側も西宮に何か要求する気は無かったのだろう。

当然の如く地を蹴って、林立する本棚に隠れて見えない戦場へと走り出していく。

それを見送った西宮は手持無沙汰に視線をパチユリーと鈴仙と小悪魔に向けるが、

「助けて下さい鈴仙さん！　パチユリー様が発作の度の毎度の事ですが、生まれたてのひよこのように弱々しく痙攣を！」

「ちよつと待ってもうコレ痙攣すら止まってない！？　生まれたてのひよこ通り越して銘菓ひよこになってない！？」

「それもいつもの事です！　だいたい5分で復活します！」

「なにその無駄な生命の神秘！？　っていうか毎度この状態になって、更に5分で復活するの！？　何この不死身の死にぞこない、っていうかそれなら医者いらなくない！？」

かなり関わり合いになりたくない面倒な状況になっていると判断。こつそりとその三者から距離を取るように、その辺の本棚に背を預けた所で

「チエツクメイト」

「なッ！？」

その瞬間、眼前に瀟洒なメイドが現れる。

手を伸ばせば触れるような距離、などというレベルではない。僅かに視線を下げれば、十数cmの先に十六夜咲夜の美貌がある。そんな距離だ。

左手には銀時計を持ち、右手は西宮の首筋に。

一瞬前まで確実にその場に居なかった筈の、紅魔館が誇る完全で瀟洒な従者が、一切の物理法則を無視してこの場に出現していた。

「……時間、操作……ですか」

「……」名答よ。驚いて貰えたようでは何よりですわ」

右手を突き付けられた首筋にひやりとした金属の感触を感じ、西宮は動けない。

冷たい感触に怖気すら感じながら硬直する彼に対し、咲夜はくすりと小さく微笑を浮かべる。

微笑と共に西宮の首筋から離された右手に握られていたのは、彼女が愛用する銀のナイフではなく食事用のスプーンだ。

つまりはスプーンの腹を首筋に突き付けられていたと言っただけの事。

その事実気付いて脱力し、全身から一気に冷や汗を噴き出させる西宮に対し、咲夜は西宮の直近にあった身体を離しながら、スプーンをポケットに仕舞い軽く笑う。

「驚かしちゃったわね。でも、ごめんなさいは言わないわよ。お嬢様から、貴方が来たら軽く脅かしてやれって言われてたからね」

「……本当に俺はあの方に好かれてないですね。というか、十六夜さんの能力……種は知ってても心臓に悪い事この上ありませんよコレ」

「手品に掃除にお料理に、とても便利な能力ですわ」

早鐘を奏でる心臓を抑えるようにして立つ西宮。その額に浮かんだ冷や汗を見て、『使う?』などと嘯きながらどこからともなくハンカチを取り出す咲夜。これも恐らく能力を使って取り出したのだらう。

西宮はそれには及ばないとも言つように軽く首を振って、服の袖で額を拭う。

「えーと、一応美鈴さんに言われてここまで来たんですけど、これって客扱いにはなりません?」

「お嬢様の命令優先ですもの。その上で美鈴が招いたならお客様ね」

「あ、その二つって矛盾せずに両立するんですね……」

呆れたような西宮の言葉を受け、咲夜は取り出したハンカチを仕舞いながら軽く肩を竦める。

そして彼女が視線を向けるのは、遠く戦闘音が響く図書館の奥だ。つまりは彼女が敬愛してやまないレミリアが楽しく戦あそんでっている場所である。

「ここ最近、異変による天候不順のせいでお嬢様はなかなかお出かけになれませんでしたからね。ストレス解消にはこういうのも良いでしょう」

「吸血鬼はその辺、縛りが多いらしいですからね。付き合わされる魂魄さんはたまったもんじゃないでしょうけど」

主の幸せは自らの幸せという事か。

楽しそうに遠くで戦ハンヤいでっている主君の居る方向を見やり、満足げな笑みを浮かべる咲夜。

その横顔を見ながら、しかし西宮はそれに賛同はせずに首を振る。

「というより現状、こうして遊んでられる雰囲気でもなくなっている気がします。美鈴さんも現在、レミリア様を止めに行っていますし」

「……どういう事？」

「博麗神社が潰れました」

「潰れた？ …… まあ経営状態が良いとは思えなかったけど」

「いえ、その潰れたではなくて」

そもそもそういう経済的な意味での『潰れる』はあの神社に適用される表現なのだろうか。

そんな事を内心で考えつつも、西宮は誤解を招かぬように言葉を選び、

「局地的地震で、物理的に倒壊しました。博麗は現在、守矢神社に退避して貰っています」

「……冗談じゃなくて？」

「疑うようならば洩矢神と建御名方神に誓いましょう」

自らが仕える二柱の名まで出した西宮の言葉に、どうやら冗談ではないと理解したのだろう。

咲夜の目が細まり、纏う雰囲気は鋭くなる。これまでののが日常の雰囲気だとするならば、今のこれは戦闘用・異変解決用のそれだろう。

西宮から視線を外した咲夜は銀時計を手に、レミリアが暴れている方に視線を戻す。

「とりあえず向こうを止めて来るわ。美鈴だけだと心許ないし」

「お願いします。その間、俺はここで待機していますので」

「ええ。すぐにお嬢様を連れて来るから、事情はその時に詳しく聞くわ」

そして瞬き一つの間、痕跡一つ残さず咲夜の姿がかき消える。
時間操作 “時間を操る程度の能力”を持つ彼女は時を止めての移動まで含めれば、単純飛行速度では確認されている限り幻想郷でも最速の射命丸をも上回れる可能性を持つ数少ない人妖だ。
恐らく既に現地に到着して、レミリアと妖夢を止めるべく動いているのだろう。

「……おつかねーの」

スプーンの腹を当てられていた首筋を撫でながら、西宮は小声でつぶやく。

改めて人間離れた能力だというのが、彼の素直な感想だ。

博麗霊夢、霧雨魔理沙、十六夜咲夜。彼女達は純正の人間でありながらも、各々が持っている能力はいずれも規格の外にある。

特にあくまで魔法という鍛え上げた『技術』で戦力を補っている魔理沙以外の、霊夢と咲夜はその傾向が顕著だ。

反則的なまでの勘とセンスで無謬と言えるほどの戦闘力を誇る霊夢と、時を操るといふ対処が極めて難しい能力と多くの実戦経験を持つ咲夜。

魔理沙は先の風神録異変のように、まだしもつけ込む隙があった。しかし仮に相対する事になったとして、残りの二者はそういった隙も見当たらない。

西宮文一のような特殊な能力を持たない人間からすれば、羨望と恐怖も混じろうという相手だ。

有り体に言えば彼から見たこの二人は、好きだの嫌いだの問題ではなく苦手な部類に属すと言えた。

「……あの二人程じゃないけど、俺もなんか能力が欲しかったというか。いや、無い物ねだりだな」

思わず口に出した思考を、首を振って頭から追い出す。

幻想郷の住人がしばしばもっている固有の能力。それは例えば紫の『境界を操る程度の能力』のように人知を越えた物もあれば、戦闘の役には立たない物もあるし、戦闘にも戦闘以外にも役立たないシヨボい物もある。

しかしそのような固有の能力持ちは、人妖どちらにしる少数派だ。全ての人妖がそれらのような能力を持っていないわけでもなく、そして当然の如く西宮は能力持ちではない多数派に含まれる。

それは先の異変でも十分に分かっていた事だが、眼前で見せつけられると流石に愚痴の一つも出よう物だ。少なくとも西宮は歳の割には冷静ではあるが、愚痴すら無しにその現実には納得出来る程には達観してはいなかった。

そして思考から目を逸らすように、視線を向けた先。

そこは鈴仙と小悪魔が生物学的に有り得ない顔色になったパチュリーを挟んで何やら騒いでいる場所だった。

「うわぁマジで息を吹き返した！ どうなってんのこれ、医学の常識とかに喧嘩売ってない!？」

「ああ、パチュリー様！ 御無事で何よりです、毎度のことですがこの小悪魔、凄く心配したんですよ!！」

「毎回これを繰り返してるの!？ 本当にどうなってんのコレ!？」

有り体に言って阿鼻叫喚の地獄絵図だ。

蓬菜人のリザレクシオンよろしく息を吹き返した知識と日陰の少女と、彼女の周囲で騒ぐ二人。

喘息と虚弱体質で死にかけながらも、毎度毎度奇跡の復活を繰り返す不死身の死にぞこないである。命の安さと復活に定評がある某聖闘士漫画でも、命の値段はこうまで値崩れを起こしてはおるまい。

そしてそれらの騒ぎをいつもの事と判断して、視線すら向けずに主君最優先で行動した十六夜咲夜。

確かに見上げた忠誠心なのだろうがこれはこれでどうよと思いつつも、距離を置いて見ている時点で自分も五十歩百歩だと気付いていない西宮だった。

#

一方その頃。下界、即ち幻想郷の大地にて、博麗神社の崩壊を皮切りに多くの人妖が動き始めたのを俯瞰しながら、天界 妖怪の山の遙か上空に位置する空に浮かぶ浮き島のような大地にて、一人の少女が下界の様子を見守っていた。

ロングのストレートヘアは綺麗な青色。

前垂れ付きの白ブラウスに近い形状の服に、髪と良く似た色の青いスカート。七色の飾り布がそれを彩り、頭には何故か桃の実をあしらった帽子を被っている。腰には緋色に輝く剣を佩いたその姿は、颯爽としていると表現する事も出来るだろう。

その顔立ち是非常に整っているが、反面些かスレンダーに過ぎるボディは好みが分かれるだろう。

だが整った容姿に関しては幻想郷においては珍しくは無い。人の形を取る妖怪・神々といった人以外の者は、得てして見目麗しい姿を取る物だ。

しかし人の身から人以外の身に至った彼女に関して言えば、この容姿は生得の物である。

そして人以外の身である事と住まう場所が天界である事が示すように、この少女は無論の如くただの少女ではない。

人から人以外の身、即ちこの天界に住む人々　　天人へと至ったこの少女。

その名を比那名居天子と言う。

彼女の一族が天人に至った経緯に関しては通常の天人とは違う少々ならぬ紆余曲折があり、彼女自身普通の天人とは一線を画す『不良天人』なのだが、その不良天人は今現在、下界を覗き込みながら眉を顰めていた。

「……まだ誰も来ない……」

苛立ちと困惑を足して二で割ったような口調での呟きが何を表しているか。

それは彼女が腰に佩いた剣と、現在下界で起こっている異変に深く関わっている。

彼女が佩いている剣。名を緋想の剣と言い、天人にしか使えない道具であると同時に「気質を見極める程度の能力」を持つ逸品だ。見極めるのみならず周囲の気質を集めて吸収し力に変換する事、並びに相手の気質を放出させ、その種類を見極める事。そして吸収した気質をコントロールして相手の弱点の気質に変化させ弱点を突く事が可能という、それはもう凄い武器である。

そして何を隠そう、現在地上で起こっている気質の異変は、彼女がこの緋想の剣の能力を用いて起こした物だった。

異変自体はレミリア、幽々子、輝夜、萃香が起こし、更には正確には異変と呼べるかどうか微妙だが、最新の物では守矢神社が幻想入りした事に端を発する風神録異変もある。こう言っては何だが、スペルカードルールと弾幕ごっこの導入後は、然程珍しい物ではない。

というか呑気な幻想郷の住人は、一種の祭りとすら見ている気すらある。

花の異変は 人為的な物ではないので、この場合は除外しても問題無いだろう。

この異変が花の異変を除くそれらの異変と比べて特殊なのは、その目的だ。

それらの異変の首謀者は各々、多少特殊な異変となった守矢神社の面々ですら、異変自体はあくまで手段であり、何かの目的が他にあった。

レミリアは日光が嫌いだから霧で幻想郷を覆おうとした と、本人は主張しているが、一説には妹であるフランドールが外に出る切っ掛けとしてだとも言われている。

幽々子は西行妖という桜の大樹を満開にさせんがため。余談だが、歴代異変の中で八雲紫が最も肝を冷やした異変である。

輝夜は月からの使者が来ないように密室を作る為。実際には幻想郷自体が既に密室なので、彼女達の試みは全くの無為だったとの話である。実際に術を施し永夜を造った永琳が本気でそれを見落としていたとは考えにくいので、永遠亭が外と交流を持つ為の切っ掛けとしてやらかしただけという説もある。

そして萃香は宴会がしたいから ある意味一番単純明快な理由だった。

ともあれ各々何らかの目的を持っていたのに対し、天子の目的は『退治される事』だ。

花を愛で、詩を詠い、酒を飲む。それくらいしかやる事が無い天界の日々は、『不良天人』である彼女にとっては余りにも退屈だった。

そんな日々に嫌気が差し、地上に憧れ、最近地上で多く行われている弾幕ごっこを用いた異変を起こしたという、世にも珍しい『退治される為の異変』だ。

解決される事自体を望んでいたという点では、守矢神社と近いだろう。

守矢神社の面々も本気で勝利を希求していたわけではなく、あくまでスペルカードルールの中で異変を起こし、力を示す事自体を目的としていた。

故に力を示した後は解決される事を是としたのだが、これは力を示す事が目的であったので、退治される事自体が目的である天子とは似てるようで大分異なっている。

ともあれ自らも異変を起こした天子だが、彼女の行動と結果は著しく計算が違っていたと言える。

気質を集めて天候を変えろという異変は、言ってしまう^{ぬる}えば温かっただのだ。

扱い次第ではむしろ生活の利になるこの異変を、幻想郷の人々は実にしたたかに利用していた。極端に生活に向いていない気質であり、尚且つ人里離れた場所に住んでいるなどで他者の気質の影響を受けにくい、そんな人物以外にはこの異変を問題視する者は殆ど居なかったのである。

そしてそれらの数少ない例外にしろ、異変の原因を探して天子の元に来るような行動はしなかった。

例えば電の気質を持つアリス・マーガトロイドなどは生活に適さない気質を持つ上に、他者の気質の影響を受けない一人暮らしの人物だ。

しかし彼女は『どうせそのうち霊夢か魔理沙が動くだろう』と高をくくり、自宅に引き籠ってしまっている。

彼女と似た立場にある他の人妖もだいたいそうだ。

だが博麗霊夢も霧雨魔理沙も、多少の不自由はあるもののわざわざ異変解決に行くほど生活に困る気質をしているわけではない。

結果として彼女らも動かず、即ち天子が異変を起こしてかなりの日数が経過しながらも、彼女の元を地上から訪れる者は皆無だった。

「あんたの言った通り神社に攻撃したのに、誰も来ないじゃない」

「んー、まあまだその情報が拡散し切ってないだろうしね。っていうかもう何日も待つてるんだから、もう少し待つくらい良いじゃないか。どれ、酒でも飲みながら気楽に待とうじゃないか」

「嫌よ。折角下界から来た相手に最初に見せる姿がへべれけとか、

天人の名が廃るじゃない」

「ちえっ。つれないねえ」

そう、過去形だ。

一人だけ、今朝早くに自らから流出した気質をたどってこの場に辿り着いた人物が居る。

何も無い中空へ向けて告げた天子の愚痴に答える声。

否、何も無いわけではない。彼女が呼びかけると同時に、その場に霧が集まって人の形を形作る。

そして数瞬の後、天子の横には一人の少女　　見方によっては幼女が座っていた。

年の頃で言えば、天子より幾つか下。

つまりはレミリアや諏訪子と同じ程度の外見年齢の、栗色の髪の少女。

しかしその身が天子以上に尋常な存在ではないのは、その髪の中から除く二本の大きな角が証明している。

鬼。

日本妖怪の代名詞であり、同時に最強の一角である妖怪。

その中でも特に、四天王と呼ばれる力を持つ鬼の一人。先の宴会の異変の首謀者でもある、伊吹萃香だった。

密と疎を操る程度の能力を用いて広く薄く拡散していたが為に見えなかったが、彼女は天子が声をかける前からそこに居たのだ。

「酒臭い」

「そりゃ悪かったね」

そしてそこに現れた、酒の入った瓢箪を傾けながら手酌で酒を飲む萃香。酒の匂いのする彼女へと天子が苦言を呈すが、柳に風だ。

軽く受け流された天子は苛立たしげに萃香を睨み、語気を強める。

「あのね。確かにこうすれば必ず誰か来るでしょうけど、ちょっとやり過ぎじゃないの？ 巫女の住む場所どうするのよ」

「やった本人が言う台詞じゃないね」

「……まさか一撃で倒壊する程にボロいとは思わなかったのよ」

しかし睨んだその目は、萃香の口に負けて程無く逸らされる。

そう、異変の元へと辿り着いた萃香は、天子へ向けてこう言い放ったのだ。

『手ぬるい』、と。

それは真実ではあっただろうし、異変を起こしながらも天子の元に誰もやって来ない最大の要因であっただろう。

しかしそれに対して萃香が出した解決案は、非常に過激な物であった。

つまりは異変の解決者たる霊夢の住居である神社へ向けてのピンポイント攻撃。

そうすれば必ず、彼女は異変を解決に来る筈だと。

そこまでやる事に少々葛藤はあったものの、結局は自身の欲望に負けて神社への攻撃を了承した天子は、緋想の剣の能力ではなく自身の能力を用いて神社への攻撃を決行した。

『大地を操る程度の能力』　地震、地盤沈下、土砂崩れなどを操るその能力は、しかし彼女の予想以上の効果を神社へ向けて発揮したのだ。

即ち問答無用の倒壊・全壊である。

「普通さ、ああいう神社って神様の加護とかで頑丈だったりするんじゃないの？　どう考えても並の建造物以下よアレ」

「あの神社は何の神を祀っているのかも定かじゃないレベルだしね。そういうのとは無縁だよ。っていうか補修とかもサボってるから、並よりボロいのはある意味当然だね」

「……真っ先に言いなさいよ。念の為にと巫女が外に出てる間を狙って正解だったわ」

自らが起こした想像以上の惨劇に溜息を吐く天子。

しかし横の萃香は酷く楽しそうだ。天子では無く彼女こそが、この状況を望んでいたとも言いたげに。

否、或いは実際に望んでいたからこそ、意図的に天子に神社の強度の情報を渡さなかったのかもしれない。

「良いじゃないか。これでこそ、きつと霊夢も本気で来るよ。
楽しみだなあ」

にやりと犬歯を見せて獰猛に笑う、その表情は戦いを前に高揚する鬼の貌。

そう、まさにこの状況は、萃香にこそ願ったり叶ったりの状況だった。

事件を起こし、退治に来た人間と本気で戦う。鬼退治に来た人間との争いは、しかしそれこそが鬼の本懐だ。

かつての山の四天王が一人にして大妖怪。現代においては半ば人格すらも語られる、酒吞童子　伊吹萃香。

神社への攻撃を煽った黒幕は、幻想郷にて再現されるであろう鬼退治の前に、爛々と瞳を輝かせるのだった。

第三十一話：異変の背景（後書き）

と、言うわけで。

緋想天の原作ストーリー自体が群像劇方式で一本じゃないのを良い事に、萃香ストーリーをやった場合彼女が天界に居付く事を鑑みてこんな形になりました。

伊吹萃香、天子サイドでの参戦です。

そしてちょっと感想の返信は帰って来てからにしますので遅くなります。

ご容赦ください。

第三十二話・何故と思えと彼女は告げた（前書き）

今回は重ねて自己解釈と言つかオリジナル解釈バリバリです。
出来ればその所をご了承願えれば嬉しいです。

第三十二話：何故と思えと彼女は告げた

遠くから聞こえた轟音、つまりは戦闘音は程無く止んだ。

そして西宮の前に慌てた様子で飛んで来たのは、やや服や帽子がボロつちくなつた赤い悪魔　　レミリア・スカーレットだ。

「おい西宮丈一！　博麗神社が倒壊したという話は本当か!？」

「洩矢神と建御名方神に誓つて本当です。俄かには信じられない事と思いますが、現在は博麗はうちの神社で保護されています。怪我などはありませんが、流石に神社の倒壊は堪えたようですね」

「貴様の神社に!？」　おい西宮丈一、貴様そこは我が紅魔館にこそ霊夢を預けるべきだろう!」

「お嬢様、気にするべき所が違うと思うんですが」

そして彼の言葉を聞いて、どこかずれた点に食い付くレミリア。

しかし彼女を諷めるような声を上げたのは、彼女に遅れて西宮の待っている図書館入り口に戻つて来た美鈴だ。

彼女は星飾りの付いた帽子の上からガリガリと頭を掻き、更にレミリアへと声をかける。

「お嬢様、進言をお許しください」

「……許す。言ってみる、美鈴」

「恐らくお嬢様は紅魔館の全力で異変の調査を行おうと考えておられるでしょう。それには賛成しますが、その前に一刻ほど準備時間を下さりませんか」

「何だと?　……おい美鈴、貴様それでも誇り高い紅魔の盾か。我が盟友に攻撃を仕掛けた阿呆に対して、一刻の猶予を与えるのが如何ほどの恥か分かつての発言だろうな?　適切な理由が無ければただでは済まさんぞ」

主の言を先読みし、それに賛意を示しながらも待ったをかける。そんな美鈴の言葉にレミリアの目が細まる。笑みではなく、不機嫌からの表情の変化だ。

口角は不機嫌そうに釣り上がり、鋭い目線が美鈴を射抜く。

瞬間、レミリアから噴き上がった気配に対し、彼女を挟んで美鈴と反対側に居る西宮の肌が粟立った。

それは怒気に分類される感情だろうが、幻想郷においても最上位の一角を占める彼女が剥き出しにしてぶつけるそれは、既に現象としては一種の攻撃に等しい。

真正面から受け止めれば、並の人間ならば心臓が止まってもおかしくない程の鬼気。

だが正面から吹き付けるそれを受け流しながら、美鈴は一言だけ言葉を発した。

「フランドール様が居ます」

「」

そしてその一言の効果は靦面であった。

彼女へ叩き付けられていたレミリアの怒気が霧散し、幼きデーモンロードは右手で顔を覆って天を仰いだ。

数秒。それだけの時間を置いてから、レミリアは静かに従者へと顔を向け直す。

「……すまん。血が上っていた」

「いえ。こういう時に諫めるのは、私かパチュリー様の役目ですからね。パチュリー様は現在、その……アレですし」

美鈴が言い淀みながら視線を向けた先。

図書館の隅っこでは、蓬萊人クラスのリザレクションっぷりを発揮したパチュリーが、しかし未だ完全復活とはいかない様子で、ビクンビクンと痙攣しつつ小悪魔と鈴仙の手で寝室へと運送されていく所だった。

美鈴の視線を追って、それを見送ったレミリアがバツが悪そうに頬を掻く。

「あー……パチエには迷惑をかけてしまったか。後で謝っておこう」
「まああの状態なら完全復活まで半刻という所でしょう。それから私と咲夜さんとパチュリー様で、紅魔館を覆う防御陣を張ります。流石にフランドール様を連れて行くわけにはいかない以上、相手が紅魔館に何か仕掛けて来ても対応し得る布陣が必要です。神社を狙った敵が、次は紅魔館や永遠亭と言った幻想郷の有力者を狙わない保証は無いのですから」

或いは首謀者である天子や萃香が聞いたら、嘆息するような言葉であろう。

彼女達の目的は、異変を解決しに来た相手と戦う事／退治される事。

だというに、起こした地震が原因で相手が来るのが遅れるというのは本末転倒だ。そういう意味で、美鈴のこれは無駄な気の回し方である。

その一方で彼女達の主観で見れば、美鈴の提案は非常に常識的な対応だとも言える。

相手の目的が分からない状態で、フランドールというアキレス腱が居る本拠地をノーガードには出来ない。最低限、神社を襲った地震と同程度の攻撃が来ても捌ける程度の防御手段は必須だ。

或いはこの手の魔術的な陣地構築などに優れるパチュリーは留守居役になるかもしれない。

ともあれ美鈴の言葉に頷いたレミリアは、嫌そうに西宮へと振り返る。

「と、言うわけだ。西宮丈一、そんな事情で私らはこれから忙しくなるから帰れ」

「直球ですねレミリア様。というか俺と鈴仙さんの目的を考えるとこの図書館で少々調べ物をさせていただけたいんですけど」

「調べ物だと？ ほれ、良いからこの本を貸してやるからとつとどっか行け」

彼の言葉を聞いたレミリアが、適当にその辺の本棚から本を一冊引っこ抜いて彼に投げ渡す。

投げ渡された本をキャッチすると、『図解！ 今日からできるたのしい狩猟』という題名が書かれていた。罾や簡単な狩猟道具の作り方を書いた本らしい。

ロープの両先端に球状の錘を取り付けた狩猟武器、いわゆるボアラを手にした鎧武者が恐竜を狩猟している表紙。それを見た西宮が眉を顰める。

「……お言葉ですが、これで何を調べると」

「何だ、違うのか？ ええい、運命を司るこの私の直感に逆らうとは生意気な。何が調べたいんだ、貴様は」

「この異変に関する情報です。気質の異変、それに関する調査の助になる資料でもあればと思ったのですが」

「……パチエがあの状態ではな。小悪魔も確かに読書家だが、この本棚全ての知識を網羅しているのはパチエぐらいだろうし、望みは薄かるう」

「……ですよね」

しかし本の知識に長けている筈の知識と日陰の少女は、現時点では知識と日陰の半死体にクラスチェンジ中だ。

奇しくも同時に溜息を吐いたレミリアと西宮。

その両者へと、不意に横から声がかかる。

「パチュリーならとりあえず寝かせておいたけど……不味かった？」

「ああ、兎か。いや、無理に叩き起こしても復帰までのタイムラグが伸びるだけだ。自然回復まで待った方が良い。手間をかけたな」「そう思うなら『兎』って呼び方は止めてよね」

視線を向けた両者の前に立っていたのは、鈴仙・優曇華院・イナバ。バ。

パチュリーの救護作業は完了して、後は小悪魔に任せて来たのだろう。

小悪魔は戻ってきておらず、パチュリーについているようだ。

そして彼女が戻って来たと同時に、レミリアと美鈴に遅れて図書館の奥より戻ってくる影が二つ。そしてその片方の横にふよふよと浮かぶ人魂も一つ。

「とりあえず彼女の治療も終わりましたわ」

「うう……未熟。結局あのまま続けても負けていただろうし……はあ」

十六夜咲夜

完全で瀟洒な従者と、彼女に先導されるようにして、レミリアよりもかなりボロボロになった魂魄妖夢がその半霊と共にその場を歩いてやって来た。

レミリアとの喧嘩で出来たのであろう傷には包帯が巻かれ、薬が塗られ、一通りの治療が終わっている。専門的な医学を習っている鈴仙の目から見ても、まず満点と言える処置だった。完全に瀟洒な従者は伊達ではない。

そして戻って来た咲夜と妖夢に視線を向け、レミリアは鷹揚に言葉を投げる。

「すまん妖夢。用事が出来たんでこれ以上お前に構っている時間は無くなった」

「いや、貴方達が拉致したんじゃない……いや、もう良いわ。それより、神社が倒壊したって聞いたけど」

加害者という立場を忘れたとしか思えないレミリアの言葉に呆れつつも、妖夢は視線を鈴仙と西宮へと向ける。

咲夜と美鈴が喧嘩を止める際に、神社の倒壊については聞いていたのだろう。

その情報の持ち込み主らしき二人への質問となるその言葉に、応じるのは鈴仙だ。

彼女は妖夢の言葉に頷きを返し、

「その通りよ。それで私と西宮はその異変の首謀者の手掛かりを探して来たんだけど……」

「気質の異変の延長線上なの？ だったら私も、その調査をしよう」と冥界から出て来た所よ。……地上に来てすぐに小町さんに捕まっつて、その後ここに拉致されて来たけど」

「それは……お疲れ様。あ、それなら一つ聞きたいんだけど」

開幕直後から躓いている妖夢の異変調査に同情の意を表し、そこで鈴仙はこてんと首をかしげる。

一拍遅れてへによりとウサ耳を揺らせながら、彼女は妖夢に問いかけた。

「どんな調査をする心算だったの？ っっていうか、何か当てはある？」

「うーん……最初は怪しい奴を片端から斬って回ろつかとも思ってたけど、それだところちの身もちそうにないし、予想以上に大変な状況になってるっばいし……」

「斬って回るて。意外と荒っばいんですな、魂魄さん」

「この子、元々が脳筋サムライガールだから……」

「聞こえてますよ、西宮さんも鈴仙さんも」

半眼でじろりと西宮と鈴仙を睨み、自身の半霊をふよふよと横に浮かせながら思考に沈む妖夢。

考え無しのように言われるのは業腹だが、いかんせん彼女自身、考えるのは苦手な性質^{たち}だ。

自らは白玉楼と幽々子を守る剣であり、考えるのは他の仕事である。

それが妖夢の基本的な思考形態であり、同時に幽々子が妖夢に成長を促したがっている要因でもある。

悩みが無いと言えば聞こえはいいが、彼女の場合はそれ以前の思考停止・思考放棄だ。

彼女の先代である魂魄妖忌のように、迷いも悩みもそれらを知り乗り越えた上で斬って捨てる剣の境地に至るには、彼女は少々経験が不足し過ぎている。

迷いを知り、しかしそれを斬り捨てるからこそその断迷の剣。故にこそ、真に悩みを知らぬ者が、迷妄を断ち切る事が出来るだろうか。故に幽々子は妖夢が成長する機会の一つとしてこの異変を考えていたのだが、

「……とりあえず気質の流れてる方向辿っていけば、それっばいのが居るだろうし、それ斬れば良いんじゃないですか？」

それこそ、三つ子の魂百までだ。

生憎とそのような性質は一朝一夕で変わるような物でもなく、妖夢の出した結論はやはり『斬る』を軸とした脳筋思考。彼女を送りだした幽々子が見たならば溜息が止まるまい。

しかしその場に於いて、それは意外な効果を持っていた。

「気質の流れを　　迎る？」

「え？　ええ。気質とは幽霊、或いは靈魂に非常に関わりの深い物です。ですので他の方々からは薄い霽程度にしか見えぬ、流れも良く分からないのかもしれませんが、元々幽霊に縁の深い私からすれば流れを迎る事も可能で　　どうしました、皆さん？」

流れ出る気質。

その流れを迎れば大元にボスが居る筈。

単純明快すぎる暴論だが、成程確かに正当な理論だろう。

むしろ幻想郷における異変解決の手段としては、正統派に近いとも言える。霊夢や魔理沙の力任せの異変解決手段を『正統派』と呼ぶならば、だが。

それを聞いた面々、特に地道な調査や推論を重ねていた西宮や鈴仙、美鈴ががっくりと肩を落とす。

「……そんな手があったのかよ」

「私らの苦労っていったい……」

「西宮さんと鈴仙さんはまだ良いですよ。実際に気質を追う手段に欠けてたんですから……。私とかその気になれば気質の流れをそのまま追えたのに、短絡的過ぎて考えすらしませんでしたから……。ああ何この脱力感」

「ゴルディアスの結び目って奴ですね。得てしてこういう問題は、単純明快な力技で解決されるもんですし」

「私そのエピソード初めて聞いた時、結び目が解けなかったから剣で斬ったアレクサンドロス3世ってなんて気の短い奴なんだろうとしか思わなかったんだけど……あれ、斬れば分かる思考の妖夢って、実はアレクサンドロス3世の系譜なんじゃない？」

「斬れば分かるの脳筋って意味においては確かに同類ですね、分かります」

「聞こえてますからね？　そこ、三人集まって遠回しに私の人格否定してるの聞こえてますからね？」

そして落ち込みながらも愚痴愚痴と何やら集まって呟いているウサ耳ブレザーと中華門番美鈴と平神職西宮に対して、脳筋サムライガールと妖夢がジト目で突っ込みを入れる。

そんな妖夢の横で、レミリアが感心したように頷いた。

「いや成程。時としては考え無しの方が半端な頭脳派よりも良い働きをする事もあるものだ。はつきり言ってお前はここに集まっているメンバーでも屈指の脳筋だと思っていたのだが」

「その場合、私と貴方でワースト2だからね？」

「……それ自覚があるって事だろ、お前」

はつきり無礼なその言葉に対し、妖夢の自爆覚悟の切り返し。

最早自分が脳筋である事を遠回しに認めている妖夢に対し、レミリア側も流石に怒るより先に憐れんだ。

ともあれそんな馬鹿話も束の間。

レミリアは思考を切りかえるように一度眼を伏せ、真面目な表情に戻って妖夢に視線を戻す。

「で、魂魄妖夢。冥界の御庭番の目から見て、私達から出た気質はどこへ向かっている？」

「まだ詳しくは。ただ、そうですね……まず第一に分かっているのは、気質は全て空へ向かって立ち昇っているという事です」

「となると、とにかく上空に向かって飛んで行って、そこから先は現地で見る事になるか？」

「そうですね。……ただその前に第二の指針として、なんとなく妖怪の山の上空に向けて流れ込んで行っているように見えるんです。ですから行くとすれば妖怪の山、その山頂から上に向かうのが正しいかと」

「成程、得難い情報だった。流石は白玉楼の御庭番だな。紅魔館の主、レミリア・スカレットが感謝する。後日改めて感謝の証として、菓子折か何かでも届けよう。あの亡霊ならばそれが一番喜ぶだろうしな」

「ありがとうございます。……こうして見ると当主っぽいんだけどなあ」

威厳と共に、しかし妖夢の功績に対して素直に頭を下げるレミリア。

妙なカリスマがあるその姿だが、ブレイクした時とのギャップを思い出して素直に感銘を受け切れない妖夢である。

そしてその両者から少し離れた所で

「ねえ西宮。妖怪の山の頂上って。妖怪の山の頂上って完全に私らのスタート地点よね？」

「完全に『振り出しにもどる』じゃねえか……晴嵐と戦いながら人里を越え、ここまで辿り着いた俺らの努力っていったい……」

「げ、元気出して下さいお二人とも！ 明日が、明日がありますよ……！」

「それもう、今日は駄目って事じゃん……」

「うわぁ更に落ち込んだア　　ッ!？」

がつくりと地面に手をついて落ち込む鈴仙と西宮を、美鈴が必死に励ましていたのだった。

#

紅魔館でのその会話とほぼ同刻。

早苗と椛もまた、スタート地点である妖怪の山へと戻る途中であった。

もっともこちらは異変の首謀者に対して目星がついたわけでもなく、単に然程の収穫の無いままの帰り道なのだが。

「西宮が情報を持ち帰っていてくれるといいんですけど……」

「アルティメット・サディステック・クリチャーも意外と役に立たないツスねー」

「ご本人はそう呼ばれるの嫌がってましたが」

「じゃあアルティメット・サディステック・クリチャー、略してイッーで」

「もつと怒る気もします。っていうかそれ発音できる椛さん、地味に凄いですね」

こちらは西宮・鈴仙組とは違って、然程困難な道のりを飛んでいたわけではない。

向こうが鈴仙の『晴嵐』に直撃されていたのに対し、こちらの天候は早苗の『凧』だ。

平穏と言う一点においては、他に追隨する天候もそうはあるまい。

下手をすれば異変の無い時の飛行よりも安穩とした飛行で神社に

戻りつつも、早苗は然程得意とは言えない思考を巡らせていた。
その内容は太陽の畑で幽香に言われた内容だ。

「……異変には悉皆、然るべき理由がある。幽香さんはそう言っていました」

「あー……なんか言ってたツスね。紅魔館の場合は恐らくフランな
んとかさんだったツスカ？ レミリアさんがそんな名前の妹さんが
外に出る機会を作りたがっていたんじゃないか　とか」

「そうそう、確かそんな名前でしたね。……腐乱ドールさんでした
っけ」

「なんかニュアンスが微妙に致命的に違う気もするツスけど、そんな
感じツスね」

穏やかな風の中、神社へ向けて飛びながら二人は言葉を交わす。

既にこの場は妖怪の山の領域。

周囲に広がる景観は、外の世界ではどんどんと失われていっている、あるがままの大自然だ。

「まあとにかく、レミリアさんの場合は多分それ。幽々子さんの春
雪異変も、永琳さんと輝夜さんの永夜異変も、そして萃香さんの宴
会異変も　各々表面上は馬鹿らしく見えても、裏にはそれぞれ
大事な事情がある。そう、幽香さんは言っていました」

思い出すのは、それらについて語った幽香の事。

完全な第三者だからこそ見える物がある。

花畑の中で、幽香は現在の異変の首謀者についての情報が無い事を詫びた後、二人にそう告げたのだ。

『幽々子は 当人は花見がしたいなどと言っていたけど、その
当人すら気付いていない所であの桜に惹かれてる。本能的に気付
いてると言っても良い。……あ、細かい事情は聞かない方が良
い、絶対に踏み込んだじゃ駄目よ。まああれも、根深い問題だつて事』

聞いている早苗と椀から目を逸らし、遠く 恐らく冥界が
あるであろう方向を見ながら、どこか悼むように幽香は呟いた。
そして次に視線を向けたのは竹林があると思しき方向。

『永遠亭の宇宙人たちは、これは自己申告の通り。月の使者が来る
のを防ぐ為だったかしら？ まあ、当人達にとっては間違いなくの
つぴきならぬ事情があった。花の異変は自然現象だから除外。そ
して伊吹の鬼は 』

幽香は何かを言い掛け、しかしそこで首を振った。

浮かんだ表情は痛ましい物を見るような、嘲弄するような、羨む
ような、そのどれでもあつてどれでもないような複雑な表情。

或いは彼女自身も分かっていないのかもしれない表情で幽香が呟
いた言葉は、しかし先程までの会話とはつながらない言葉だ。

『 強いて、どういうこと？ 』

その言葉を聞いた早苗は困惑した 椀は既にこの時点で思考
放棄していた が、恐らく幽香自身も返答を望んでの言葉では
なかったのだろう。

複雑な表情を消し去るように首を振りながら、返事を待たずに言
葉を続ける。

『靈夢は強い。彼女は鬼にとって最上の相手ね。魔理沙もそうだし、ええと、十六夜だったかしらあのメイド？ うん、あいつも強い。……けど、』

そして思い出すような表情で、幽香はぼつりと呟いた。

『人間は最初から、彼女達のように強かったのかしら？』

どういう意味かと聞き返す早苗に対し、幽香は困ったように笑い、

『ごめんなさい、難しかったわね。あくまで私の推測でしかないわけだし。けど、宴会の異変の裏で、あの小鬼の思考が私の思っている通りだったとしたなら、恐らくスペルカードルル制定後の異変の中で一番複雑な事情があったのは、一見すると一番単純だったあの異変』

続く言葉は完全な独白。

まるで自分に問いかけるような響きに、早苗には聞こえた。

『昔は　それこそ神術靈術に魔法に武術に陰陽術、そんな技術すら無かった大昔は、人間は今よりずっと弱い存在だった。当然よね、技術も道具も今より劣っている。そういった物が体系立てられ研磨されていったからこそ、人間はどんどん強くなって妖怪を駆逐していった。まあここ最近の人間の在りようは行き過ぎてるけど、それでも強い人間と言うのは、技術と道具の進歩の元で成り立つ物であった。少なくとも、平安くらいまでは確実に』

逆に言えば、そういった技術が確立される前の人間は、決して強い存在ではなかったという事だ。

それはどれほど昔の話だろう。

平安の世には既に安倍晴明という天才陰陽師が居たというから、少なくともそれより遙かに昔の話だ。

「しかし鬼が人を好み、人を攫い勝負を挑んだという伝承が残っているのは、平安の世の遙かに昔から。人が今より遙かに弱いその頃から、鬼は人を好み勝負を挑む事を生き甲斐にしていた。それは何故？ 鬼は人に何を見出したの？ 鬼はどうして弱い筈の人間を好きになつたの？」

鬼は別に霊夢のように突然変異的に強力な力を持った、一種の天才だけを狙つたわけではないとも幽香は言つた。

そういう人種は昔も居た事は居たし鬼にも好かれたが、鬼は別にそういう連中だけが好きだつたわけではない。

鬼は人間が好きだつたのだ。

「まあ、あの万年飲酒ロリータも、色々複雑だつて事よ。だから話が逸れたけど私が言いたい事は、異変が起きてその首謀者が居るならば、何故その首謀者がこんな事をしたのかの理由があるつて事。首謀者を探すなら、そこから逆算して考えてみるつて手もあるんじゃない？」

或いは鬼と似た、強者を好む性質を持つ幽香だからこそ分かる何かがあつたのだろうか。

ともあれ幽香はそこまで語つた所で話を戻し、別の方向からのアプローチを提案する。

つまりは異変の首謀者の思考を辿つてみる事で、首謀者の割り出しが出来ないかと言う事だ。

それはしかし

「……私らには無理ですね」

「そつスねー」

生憎と、言うべき相手が悪かったとしか思えない。

早苗と椀はきっぱりと頭脳労働が苦手な脳筋タイプだ。こういった頭脳労働に関しては、前者の相棒なり後者の上司なりの方が格段に向いている。

「まあ、とりあえず文さんはまだ戻って来てないと思うんで、文さんの家に言伝メモだけ残して、一旦神社に戻るとするツスよ。頭脳労働は出来る人に押し付けるに限るツス」

「……そうですね。あのアドバイスがあれば、或いは西宮や文さんなら何かアイディアが出てくるかもしれないし」

かくて二人は山へと戻る。

幽香がくれた一つの視点とアドバイス。

ひよつとすると、この異変の裏に潜む全てをバッドエンドから救い得るかもしれない可能性を秘めた、与えた側も受け取った側も気付いていない大事なピースを抱えて。

何故彼女達は未だ知らぬ、比那名居の総領娘はこのような異変を起こしたか。

ただ今の生活に嫌気が差したただけならば、勝手に地上に降りれば良かっただろう。それをせずにここまでの大事を起こしたのは何故か。

退治される為という歪んだ目的は、本当に構って欲しいという欲

望から来ているのか。

何故伊吹の鬼はそれを煽るような真似をし、天子に加担したのか。霊夢と本気で『鬼退治』を再現してみたいというその裏に潜んだ、彼女の 鬼の本当の望みとは何か。

#

「 ああ、そう言えば西宮丈一、それとそっちの兎も、あと妖夢もだ」

「何ですかレミリア様。俺の心は今随分とやさぐれているので手短にお願ひします」

「くだらない用件だったらハッ倒すわよ」

「……あの、西宮さんと鈴仙さん？ 随分荒んでませんか？ ねえ、ちよつと」

紅魔館を辞す間際、門前にて。

気質の流れを辿る事が出来るという妖夢を連れて、レミリア達紅魔館勢の準備が出来るより一足先に妖怪の山上空へ向かう為に出発しようとしていた西宮達へと、見送りに来ていたレミリアが声をかけた。

完全に心が荒み切っている西宮と鈴仙の言葉に妖夢が突っ込むが、言われたレミリアは呆れたように首を振る。

「今は非常事態だ。これくらいで怒りません。 博麗神社が地震で倒壊した件に関わっているかは知らんが、少し前に紅魔館に変な客が来てな」

「変な客？」

「ああ。パチエは後で竜宮の使いと言っていたな。大規模な天災などを予言して回ったりする事もある妖怪の一種……らしい。妙にパツツンパツツンな羽衣を着た、スタイルの良い藍色の髪の女だった」

眉をしかめてその竜宮の使いを思い出すレミリア。

その手は自らの胸部、即ち誰恥じるでもないトリプルAを誇るまな板に触れていた。

『或いは美鈴ならば互角か……』などという全く論点のずれた呟きを洩らしたものの、気の毒そうな目で見て来る鈴仙と西宮、そしてレミリアと同様に自らの胸部に触れて『幽々子様なら……』と咳いている妖夢に気付いて慌てて話を戻す。

「ん、ゴホンゴホン。……ともあれ、その天災予言がお仕事の妖怪パツツンフィッシュが言うにはだな」

そして、その話こそが比那名居天子が異変を起こした一つの鍵。

「遠からず、幻想郷で大地震が起こるそうだ」

確かに手段は滅茶苦茶だったが。

確かに憧れもあっただろうが。

確かに欲望もあっただろうが。

果たして彼女は。比那名居天子は本当に、自分の都合だけで異変を起こそうとしたのだろうか？

第三十二話：何故と思えと彼女は告げた（後書き）

幻想郷の少女達は、なんだかんだで根は優しいと思うのです。そうあって欲しい、という願望かも知れませんが。

第三十三話：竜宮の使い

竜宮の使い。

幻想郷において、その名は『竜宮』という名において真つ先に連想される『竜宮城の乙姫』に仕える者ではなく、深海魚の名前でもないし、かといって早苗の父の鞆からマツチが発見されて家族会議何故か西宮も参加 になった事があるキャバクラ『竜宮城』のキャバ嬢の俗称でもない。

一切の余談だがその家族会議にて、『同じ男だろう！ 助けてくれ！』という早苗父の視線での救援要請に対し、西宮はとぼちりを避ける為に必死になって徹底的に無言を貫いていた。

さて、話は竜宮の使いに戻るが、彼女達の役目は二つ。

まず一つは、幻想郷を守護する龍神の言葉を幻想郷に生きる人妖に伝えること。

幻想郷の最高神とされる彼（彼女？）は随分と長い間幻想郷の少なくとも一般の住人の前には姿を現しておらず、彼（彼女？）の言葉を実際に伝えるのは竜宮の使いの仕事だ。

もともと、矢鱈と話が長い上に竜宮の使い自身がその話のどこを切り取って伝えるかを決めているため、実際にマトモに伝わっているかはイマイチ信用が置けないのだが。

そして第二に 地震の起きる兆候を察すると、それを伝えて回る事がある。

一説にはこれは第一の業務、即ち龍神の言葉を伝える事と重複しているのではないか 即ち地震の予言自体が龍神の言葉なのではないかと言う意見もあるが、それについて知るのは当の竜宮の使い達と、或いは幻想郷の賢者たちくらいなので割愛する。

ともあれ重要なのは彼女達の業務の一つとして、地震の兆候を察した後の警告という業務がある事。

その業務に従って地上をうろついている竜宮の使いの一人 永江衣玖という名の女性は、ふわふわと飛行しながらのんびりと思考に浸っていた。

「 幻想郷も随分と様変わりした物ですね」

少なくとも、昔は今ほど平和な姿ではなかったと衣玖は思う。

今の幻想郷では、湖畔の館に住んでいた吸血鬼を含め、多くの住人が平和に暮らしている。

昔も人間と妖怪が共存する場所ではあったのだが、当初は人間側と妖怪側が頻繁に争いを起こし、その調停に巫女やスキマ妖怪が奔走していた筈だ。

それが現在では妖怪が人里に買い物に来るなどといった、当初からは考えられない穏やかな風潮も出来上がっている事。それはやはり、

「時間の経過による融和もあるでしょうが、やはり最大の要因はあのスキマ妖怪をはじめとした、多くの人妖の尽力ですね」

スキマ妖怪、八雲紫。

大妖怪である彼女が提唱した理想 妖怪と人間が共存する楽

園として、外の世界で忘れ去られた幻想が最後に辿り着く場所を作り上げるという、ともすればそれ自体が幻想ととられかねない程の夢見がちな理想に同調した人間や妖怪が、必死に作り上げて来た秩序。

それが今の幻想郷の光景を支える根幹だろう。

平和と言つのは決して何もせずには得られる安価な物ではない。人も妖怪も多くが集まれば意見や利害の対立が生まれるのだ。

八雲紫をはじめとした人妖は、それらの対立を必死に宥め、時には鎮圧し、現在の幻想郷の形を作り上げた。

今のこの平和な光景は、彼女達の努力なくしては決して得られなかったであろう。

衣玖は直接の面識こそ無いものの、龍神からは何度も話を聞いていたスキマ妖怪に対し、胸中で敬意を送る。

竜宮の使いは住居である雲海や天界や龍神周り 要は上空で完結したコミュニケーションを持っている為、地上に来る事は余り無いのだが、故にこそ客観的に、この幻想郷の光景がどれだけ貴重なのか、この光景を得る為にどれだけだけの努力が必要だったのか慮り、穏やかな自然を見せる幻想郷の光景に目を細める。

「成程。これは総領娘様が最近よく地上を見ているのも頷けます」

そして思い返すは、最近天界の端っこからよく地上を眺めていた少女 不良天人こと比那名居天子のこと。

天人でありながらも、その出自ゆえに天界に馴染めない少女。彼女からすれば、今の地上は大層眩しく見えているのだろう。

「……それに、スペルカードルールと弾幕ごっこでしたか。平和な手段で人間と妖怪が戦う為のルール。これも上手い。これを提唱したのは今代の博麗の巫女と、スキマ妖怪でしたね」

そのスペルカードルールを用いた異変が色々起こっていて楽しそうだと、地上の様子を見ていた天子が嬉しそうに語っていた事もあった。

何故かその後しばらくして、深刻な表情で地上を眺めている事が多くなつたが。

「或いは一度、総領娘様を地上に連れてくるのも良いかもしれないですね」

見ているだけで気でも滅入ったのかもしれない。

そう判断した衣玖は、仕事を終わらせた後にでもその総領娘たる天子の元へ行くべく、次の目的地へと足を向けた。

その場所の名前は守矢神社。

ごく最近幻想入りした、幻想郷の新たな一員である。

「……地震が来る前に、総領娘様には幻想郷の姿を見せてあげたいものです。今度の地震はかなり大きい。来た後には、今の姿を取り戻すまで相当な時間がかかるでしょうし……いえ、まずは山の上の神社ですね」

その守矢神社も、来たばかりで地震などという災厄に見舞われるとは思っていないだろうが　　こればかりは天災だ。諦めて受け入れてもらうしかない。

僅かな憂いを浮かべた表情で守矢神社へ向かった衣玖は、しかし

「あ、来客？　ごめん、今ちよつと非常事態なんでまた今度来て貰えるかな？　いや、折角来てくれたのに悪いねー」

「え、あの、ちよ……」

守矢神社の社務所玄関口にて、門前払いを食らう事と相成った。

締められた扉の向こうに消えた、変な帽子をかぶった小柄な少女。止める間もなく引っ込んだその少女に向けて、手を伸ばしかけた中途半端なポーズで永江衣玖は暫し固まる事となった。

遠くから聞こえて来た、『諏訪子、誰が来たんだい?』『知らん。なんかパツンパツンの服を着たボインちゃん』という会話が耳に届く。

「……ボインちゃんて。いつの時代の人ですか、あの少女は」

相手が守矢の祟り神とは露知らず。失礼な言動に溜息を吐いた衣玖は、自らの服をちらりと見やる。

そんなにパツンパツンかなあ。

そんな思考を一通り巡らせた後、仕事を思い出して慌てて社務所の玄関を叩き、嫌そうな顔をした諏訪子の中に入れて貰うのはその十分後の事だった。

#

妖夢が居たおかげで鈴仙の気質の発現が半分程度に減り、つまりは行きの半分程度の過酷さで守矢神社まで西宮達が戻って来たのは、既に早苗と椋が戻って来て少々時間が経過した後、そして永江衣玖という名の竜宮の使いがそこを辞した随分後の事である。

「いやもうマジで、魂魄さんのおかげで行きに比べると随分楽でした。もう俺の横の仮名ウサ耳ブレザーさんの気質は本当に厄介で厄介で」

「仮名ウサ耳ブレザーってのは誰の事よ？ ん？ こっちの顔見て言いなさいコラ」

「……晴嵐、確かに結構キツイ天候でしたね」

逆に言えば半分は晴嵐に見舞われていたとも言える道行きだったが、それでも行きに比べれば格段に楽な事に変わりは無い。

神奈子と諏訪子の気質の相殺により、ほどよく過ごし易い状態にある守矢の境内に戻って来たところで、三者三様、これまでの旅路に対する感想を口にする。

西宮が伸びをしながら息を吐き、鈴仙がその西宮へとガンを飛ばし、妖夢は肩を落として溜息を吐く、といったところだ。

ちなみに西宮と鈴仙の二着分しか無かった雨合羽だが、紅魔館出発の折に気を利かせた美鈴が備品を一つ提供してくれたので、三人とも雨合羽装備での到着だ。そうでなければ、このメンバーならば熾烈な譲り合いが起こっていた可能性が高い。

そして雨合羽に包まれた肩を落として息を吐いていた妖夢が、ふと気付いたように西宮へと向き直る。

「あ、西宮さん。魂魄さんって呼び方は慣れていないので、ちょっと別の呼び方にして貰えませんか？ なんかくすぐりたくて……」
「いやでも、魂魄さんもナリは確かに俺より年下ですが、実年齢は軽く俺の倍はあるんでしょう？」

「確かに半人半霊ですから人より格段に長生きですが……そういう所、デリカシー無いつて言われる事ありません？」

半眼で睨む妖夢に対して、西宮は軽く肩を竦める無言の肯定で答えた。

賢者と小才子の境界線上。

彼女が仕える亡霊の姫は、今彼女の目の前にいる少年をそう評した。

しかし彼女　　魂魄妖夢自身は守矢神社が幻想入りした直後の異変以降、彼本人との面識は然程無かったと言って良い。

人里で遭遇する事は無いでもなかったし、そもそも気質の異変の第一報もそうして会った時に西宮から貰った情報なのだが、人里の折には事務的な会話に終始し、宴会の折にはあくまで話していたのは幽々子と西宮。

つまりは妖夢と西宮という組み合わせは、これまであまり話した事が無かったのだ。

「……本格的に話してみると、思ったたよりも、なんというか……ノリが軽い方ですね。いや、それが必ずしも悪いというわけじゃないのは、流石に分かってますけど」

「はあ。俺にどんな印象持ってたんですか、魂魄……いや、名字呼び捨てもピンと来ないな。妖夢さん？」

「妖夢で良いです。敬語もいららないです。なんかこう、年上扱いされると自分の実年齢とか考えそうになつて嫌ですから。……私、幻想郷だと相当若いんだけどなあ」

ぷー、と頬を膨らませながら西宮の呼び方を否定しつつ、妖夢は頬に手をやって首をかしげる。

いかにも考えていますというポーズの通りに思考を巡らせ、考える内容は彼から受けた質問内容。

即ち、これまで彼女が西宮丈一に抱いていたイメージだ。

「西宮さん、いわゆる頭脳派・賢者系の人かなーって思ってたんですよ。それも割とガチガチのお堅い」

「こいつがぁ？ 妖夢、大丈夫？ 目薬要る？」

「ハハハこやつめ」

本気で心配そうに、しかし大概失礼な事を言っている鈴仙の耳を西宮が掴んで引っ張る。

この患者と医者のコソビは、どうやら晴嵐の中の旅路等を経て、お互いかなり打ち解けて来ている様子ではあった。それが良いか悪いかは別として。

『もげる、伸びる、取れる！！』などと鈴仙が騒いでいるのを聞きながら、妖夢は思う。

タイプが違う。

彼女が敬愛してやまない主である西行寺幽々子と、なんだかんだで尊敬はしている八雲紫。

妖夢が賢者と聞いてまず思い浮かべるのはこの二人だが、この二人と西宮とでは明らかに智者としての方向性が違うのだ。

周囲全てを把握し、操るような底の知れないタイプ　それが幽々子と紫の二人の共通項だろう。

妖夢は然程面識は無いが鈴仙の師である永琳もそのタイプだ。紫の式神である藍も、その傾向が強い。

平たくいつてしまえば西宮にはそれらの人妖に共通して感じる、一種の『凄味』や『底知れなさ』が無いのだ。

「……………っん」

耳を引っ張られた鈴仙の反撃

いつの間にか関節極めてひね

り上げてた　　で悶絶してタップしている彼を見つつ、妖夢は苦
手な思考を継続する。

紫は恐らく、彼を高く評価していた。

幽々子も『境界線上』と保留に近い答え方をしていたが、それは
逆説、今現在妖夢の目の前で兎の手で悶絶している少年が賢者の域
に至り得る可能性があるかと認めていたと同義だ。

そしてそれらの評価に加え、事実として『あの』霧雨魔理沙にひ
と泡吹かせ、異変からの事実上の脱落に追い込んだ策士　　。

「　　には、見えないなあ」

タップしたものの許して貰えず、ひとしきり悶絶した後でようや
く解放されて地面に転がっている少年を見つつ、彼女は思考をそう
締めくくった。

懐からまろび出た、結局レミリアに押し付けられた『凶解！　今
日からできるたのしい狩猟』という本が哀愁を漂わせている。

策士としてのタイプが違うのか、それとも自身には思い至らない
別の要素があるのか。

鈴仙の手で地面に転がされた少年のイメージと、所謂『賢者』と
いう言葉のイメージが釣り合わずに首を傾げる妖夢に、西宮を地面
に転がした当の本人が声をかける。

「どしたの？　そんな複雑そうな顔をして」

「……いえ、ホントにイメージと違うなあって。紫様とか、西宮さ
んを相当評価されてたんですよ。切れ者だって」

「あー、それは確かに……こいつが魔理沙を出し抜いて脱落させた
って聞いても、いまいちぴんと来ないって言うか」

「ですよね」

『痛かった』とでも言いたげに自身の耳を撫でさすりながらの鈴仙の言葉に、妖夢も頷く。

両者から見た西宮は、決して印象が悪いわけではない。

距離が近づけば鈴仙相手程度の悪ふざけをするような性格の持ち主ではあるが、はっきり言ってじゃれあいレベルだ。と言うか今回の場合、先に鈴仙の方が大概に失礼だった。

基本的には礼儀正しく、珍しい程に目上を立てる。鈴仙や妖夢のような従者ポジションの相手にも、まずは丁寧に距離を測るし、多少態度を崩した所で過度に無礼なわけでもない。

友達感覚で見ても付き合い易い相手だと言えるだろう。

だが、それだけ。

妖夢の目から見た西宮丈一という少年は、今のところは人里の間と比してもそれほど変わる所が無い、ただの人間だった。

しかし

「……紫様や幽々子様の鑑定眼が間違っているとは思えない。となると……」

自らの未熟さを自覚はしている妖夢は、前提として主君とその友人の言を信ずる事とする。

「となれば畢竟、まだ私には見えていない何かがある
あ
」
のかな

漸くダメージから復帰したようで、のろのろと立ち上がる西宮を眺めながら、妖夢は内心を彼には届かない程度の大ききさで口に出しながら首を傾げる。

横の鈴仙には聞こえていたようで、彼女は疑問げな表情を妖夢に向けるが、すぐに視線を西宮に戻す。

鈴仙はこういった他人の事情に関しては、意図的に深入りしない選択をする妖怪だ。

代わりに彼女が口から出したのは別の事。

「……まあとりあえず、スタート地点には戻って来た。後は紅魔館の連中が動くのを待てば良いわよね」

「待つんですか？　ここまで来たんですから、先んじて斬りに行けば良いのでは」

「あんまり深入りしたくないんだけどなあ……」

鈴仙・優曇華院・イナバはこの異変に対して積極的に動く意識が薄い。モチベーションが低いと言い換えても良いだろう。

元々が主の無茶振りが始まった件であるし、その時点で熱意はゼロどころかマイナスだ。

既に異変の解決へと向けた筋道も立った以上、これ以上の介入はせずに傍観したい。それが彼女の思考であるし、彼女の立場を考えれば妥当な意見とも言えるだろう。

しかし鈴仙がここで降りた場合、妖夢や西宮がどういう行動を取るのか。

ともすれば、彼女が降りたとしてもこの二人ならば異変の首謀者の元へ突っ込みかねない。

横目で妖夢を、そして正面に視線を戻して西宮を見ながら、鈴仙はそつと溜息を吐いた。

元来彼女は、酷く臆病な性質の持ち主だ。

地上に来た理由も、月で起こった戦争から逃げ出して来たに過ぎない。

先程西宮を制圧した時に見せたように、その時に積んだ訓練は無駄にはなっていないが、そうだとしても実力未知数の異変の首謀者に積極的に突っ込んで行く事が出来るほど、彼女は精神的に強靱でも無謀でもない。

では今回はどうするべきか。

恐らく妖夢は、そして神社出発時に聞いた話から考えると西宮も、紅魔館が動く前に異変の首謀者の元へ出向こうとする可能性が高い。ならばその場合、自分はどうするべきなのだろうか。

鈴仙の頭の中で、その思考がぐるぐると回る。

そして鈴仙が異変について、妖夢が西宮について思考を巡らせていること

「西宮！ 鈴仙さんも戻っていらしたんですか。あ、妖夢さんいらっしやいませ！」

境内で騒ぐ三人の気配に気付いたのだろう。

神社の中から顔を出した、先に神社に戻っていた早苗が三者に声をかけたのは、西宮が漸くダメージから復活して立ち上がった、丁度そのタイミングだった。

第三十三話：竜宮の使い（後書き）

どうにも自分の文章は説明がくどくなるなあと思う今日この頃。
中々話が進みません。

あとシリアスというか真面目なシーンばかり書いてると、ギヤ
グを書きたい症候群が発症します。

また外伝でも書こうかなー、今度は幻想郷の。

閑話其の六：早苗と阿求と文の女子会

話は少々遡る。

風神録異変終了から、非想天異変の開始までの期間。西宮丈一は色々と忙しく動き回っていたが。彼の相棒である東風谷早苗とて、この時期遊んではかりいたわけではないのである。

「お姉さん！ こつちにカルビ焼き追加おねがいしまーっす！」

「はい喜んでー！！」

「……あの、良いのですか射命丸さん。これ貴方のお金なのは」「いえいえ。阿求さんも取材ですから好きに頼んでくれて構いませんよ。おっと、早苗さんジュースが無くなってますよ。ささ、もう一杯」

「ありがとうございます！ いやあ、他人のお金で食べるご飯は美味しいですね！」

「満面の笑顔で言い切れる辺りが流石ですね……あ、私は野菜があればそれで」

訂正。

人里にて文々。新聞と幻想郷縁起の取材を受け、文々。新聞の取材費用で夕方の飲み屋にて飲み食いしている東風谷早苗は、ある意味全力で遊んでいると言えるのかもしれない。

#

事の始まりは大したことではない。

ある日の夕方に人里に布教活動に来ていた東風谷早苗と、何か事件は無いかと取材に来ていた射命丸文と、家の近くを散歩していた稗田阿求がばったり遭遇したただけの事。

自然な流れで挨拶から立ち話へと移行し、しかし阿礼乙女という特異体質の関係上、身体の弱い阿求を慮った射命丸が、『どこか座れる場所へ移動しましょう』と提案した。

そこで早苗が、『折角ですから皆でご飯を食べましょう』と言ったのだ。

時刻は夕方。

確かにそろそろ夕餉の時間であり、腹も空いて来る頃合いだ。

特に夕飯の予定が無かった射命丸が肩を竦めて了承し、阿求も友人と外食する機会などが殆ど無い身の上だった為に目を輝かせて頷き、射命丸に『家に連絡しなくて良いのか』と問われた早苗が慌てて射命丸に頭を下げて、彼女が使役する烏の足に手紙を括りつけて神社へ飛ばして貰ったりしつつ。

少女三名　約一名、実年齢千歳軽く突破　による、女子会が始まったのだった。

「前に西宮と来たんですけど、ここの料理が美味しいんですよ！」
「……めっちゃ大衆飲み屋に見えるんですが」

女子会と言いつつ、全力で大衆飲み屋だったが。

逢引するならもう少し誘う場所があるだろう、お前らの進展は良い酒の肴になるんだからもう少し根性入れろや馬鹿野郎（意識）と、各々心の中で西宮に悪罵を叩きつける射命丸&阿求。

しかしそれには気付かず、早苗は店員に対してにこにことした笑顔で人数を告げている。

「あの、早苗さん。貴方確かお酒は強くなかった筈では」

「ソフトドリンクもあるので安心ですよ。阿求さんもそれなら大丈夫ですよね！」

「ええ、まあ……恐らく早苗さんほど飲めないわけではないんですけど、私もそこまで強くはありませんし」

ならばまあ良いかと納得した三名。

仕事帰りの労働者なオッサン達が主力を占める飲み屋にて、少女三人（平均年齢400歳オーバー）のお食事会の開幕であった。

そして確かに早苗の言う通り料理は美味しく、大衆向け飲み屋ならではのポリウムもあって、三人は和気あいあいと皿を突きながら雑談に興じていた。

そんな中、ふとした疑問から射命丸が早苗にこんな質問を投げかけたのである。

「そういえば、外の世界の文化も随分様変わりしてるんですよ？」

最近私や貴方のようなうら若き少女の間では、どのような物が流行なのですか？」

「ゲッターですね」

「ほほう、下駄ですか。可愛い飾り下駄などなら、今のこちらでも通じそうですね」

「可愛い飾りゲッターですか？ うーん……私としてはゲッターは無骨で無頼な方が。ブラックゲッターとか最高ですよね！」

「早苗さんは無骨な下駄がお好みですか。……ブラック……つまり黒塗りの下駄ですか？ なるほど、中々渋い御趣味です」

横で聞いている阿求が『あれ、何か噛み合っていない気がする』と首を傾げる中。

折角なので外の世界の文化について聞いて、新聞のネタにしよう
と思い立った射命丸がこの店での奢りを条件として、早苗に外の世
界の少女の間での流行などを聞く事にした　　というのが、冒頭
の会話に繋がる話の流れである。

内心で『何かズレてる気がする』という博麗の巫女並の勘働きを
見せつつも、『まあ面白そうだからいいや』と放置した　　ある
意味で射命丸を見捨てた　　阿求も含めて、唐突に始まった女子
会はおかしな方向に走り出したのであった。

ちなみにゲッターが流行っていたと主張する早苗だが、これに関
しては彼女が周囲の友人に布教しただけであり、当然の如く世間一
般の女子高生の間でゲッターロボが流行っていたわけではないのだ
が。

何故か布教された面々には好評であり、真ゲッターが早苗の友人
の間でプチブームになった辺り、『奇跡を操る程度の能力』は伊達
ではなかった。

#

「ふーむ……『あにめ』でしたか。要は動く絵を使った音付きの紙
芝居ですね。幻想郷には無い文化ですし、再現も難しそうですが…
…成程、それが話題だったと」

「ええ！　日曜朝九時放送中だった、『マジカル首狩り未開系少女
バンゾック』……魔法少女系アニメの常識を打ち破る、血と臓物に
彩られたアニメ。友人の叔父がチーフディレクター……ええと、製
作の責任者をやってまして。色んな意味で話題でした。まあ、これ
は友達に関係者が居たからかもしれないけど」

「血と臓物ですか。……妖怪としては分からなくもありませんが、外の世界の人間はやはり野蛮ですね。そういう点は、あまり好きではないのですが」

「私もそういうのはちよつと……外の世界の少女って、随分とその……アグレッシブなんですね」

外の世界の少女に気を使った婉曲な表現で否定を述べる阿求と、真つ向から否定意見を吐く射命丸。

しかし世の女子高生の少なく見積もって九割五分は、血とハラワタと死で彩られたそんなアニメが女子高生の間で流行と断じられる事に対して、怒りと共に否定の声を上げる事だろう。

魔法の力の源は、狩りで鍛えた身体能力と少しの殺意。

一切魔法を使わずに原始的な武器と罫で敵を滅尽滅相していく魔法少女アニメは、流行ではないが確かに色んな意味で話題であった。主にいつまで放送できるのか的の意味で。

早苗が幻想入りした三日後、恐らく日本で最も楽しんでバンゾックを見ていた少女の幻想入りに殉ずるようにしてザンギャツクの放送停止が決定されたのは、当の本人も知らない事実であった。

「あとは大河ドラマですね！」

「ほほう、『虎タイガーどらま』ですか。『どらま』というと、『あにめ』

と違って絵を使わない……要は演劇でしたね。なるほどなるほど、^{たいが}虎を軸とした劇……外の世界では昨今、自然が失われて久しいと聞きます。そういった自然を伝える為の演劇とでも言う所でしょうか」

「自然？ えーと、はい。大河ドラマには（時代物なので）自然も多く出て来ますね。ただやっぱり、時代の中で生きる人々の姿が魅力と言いますか」

「時代ですか。慧音先生辺りが聞いたら喜びそうですね。……私も阿礼乙女として、興味が無いわけじゃありませんけど」

そして続く話題は大河ドラマ。

動物モノのほのぼの系演劇を想像して頬を緩ませる射命丸だが、致命的に何かの間違っていた。ついでに『虎ドラマ』^{とら}というと、一文字抜いただけで、ツンデレ少女が出てくるアニメになりそうであった。

全くの勘違いから『外の世界にも動物と自然を大事にする風潮が！』と感心している鴉天狗を他所に、時代物という所に食い付いたのは阿求だ。

彼女は永遠亭から仕入れているという売れ込みの人参で作られたスティックサラダを齧りつつ、

「歴史モノの演劇とのことですが、どのあたりの時代が軸なのか？」

「そうですね。幻想郷が作られる前の時代の話から、その後の時代の話まで　色々です。諏訪子様は武田家の話の時に随分と熱中しておられましたけど」

武田勝頼は諏訪信仰を司る諏訪氏と縁深く、諏訪大社の大祝を務めてきた一族である諏訪氏は実は早苗とは血縁的な意味でも縁浅からぬ関係なのだが　その辺りに関しては、当の早苗よりも西宮の方が詳しかったりする。

当の神様である諏訪子が諏訪大社ではなくその分家に近い扱いである守矢神社に居た辺り、色々と表沙汰に出来る物から出来ない物まで様々な事情があり、その辺りは守矢神社や諏訪大社の中でも失伝している物、ねじ曲がって伝わっている物があったりする。

早苗は諏訪子と神奈子が居る事に疑問を持つ事は一切なかったのだが、神社の成り立ちや二柱の神格を知った西宮が、何故諏訪大社

でなく守矢神社に居るのかを二柱に聞いた際、西宮に対して二柱が口伝で色々な事情を語った。　　というのは、この場では関係の無い事情なので割愛する。

ちなみに戦国時代は博麗大結界が出来る以前の話なので、武田信玄の名を知っていた射命丸は、

「甲斐の虎ですか……成程、確かに『^{タイガー}虎どらま』……。上手い事を考える物ですね、外の世界の人間は」

などと、全く目の付けどころが違う感心をしていた。

「あとはドラマやアニメ以外ですと……。ああ、最近近くに遊園地が出来たそうなので、友達内で話題だったんですね。私自身は西宮と予定が合わなかったんでまだ行ってなかったんですけど……。つていうか西宮が行きたがってなかったような」

「遊園地　……つて、射命丸さん、なんだか分かります?」

「いえ、残念ながら。阿求さんは?」

「私もちよつと……」

アニメやドラマはまだ分かり易い例えがあったが、遊園地という文化はそれら以上に幻想郷には無い文化だ。

その言葉に困惑する二人に対して、風祝は胸を張ってカルビとニンニクの香りが漂う息を吐く。

既に女子力は壊滅しているが、元よりその点は死んでいる身である。まるで気にした様子も無く、『うわニンニク臭え』という顔をした射命丸と阿求の表情にも気付いた様子は無い。

「遊園地とは、様々な遊具が置かれたカップルや家族連れが遊ぶためのレジャー施設です。外の世界の技術で作られた巨大な物が多いので、一概にはイメージしづらいかもしれませんね」

「外の世界の技術で作られた巨大遊具ですか……」

「にとりとかが喜びそうですね」

「というかカップル向けって言うなら、西宮さんには是非に早苗さんを連れていっておいで欲しかったのですが」

「そういう所、本気で使えませぬあの糸目」

たゆんと胸を張るニンニク臭い風祝。

その姿を見ながら小声で呟き交わす二人の前で、しかし

「近所に出来た遊園地の見どころは、最高時速150kmを誇る世界最速のメリーゴーラウンドでした」

早苗さんの語る遊園地は、いきなり常識をぶつちぎっていた。

『振り切るぜ!』と言わんばかりのF1並のスタートダッシュを切った、早苗さんの遊園地語り。

なんぞそれと言わんばかりの表情で話を聞く二者には遊園地の知識など無いが為、突っ込みなど期待できよう筈もない。

或いは妖怪の賢者が居れば突っ込みは確保できたのかもしれないが、その場合は当の妖怪の賢者の心労が並ではなからう。

「ハイウェイ並の速度で回転するくせに、オブジェは無闇やたらとファンシーなのがチャームポイント。愛し合う男同士が乗れば結ばれると言う伝説があり、そのケの人達が日本どこるか世界中から詰めかける人気スポットです!」

ちなみにそのメリーゴーラウンドの横には、つなぎ姿の男が座ってそうなベンチやら、ハッテン場として非常に都合が良さそうな公衆トイレなどがある所も、そっちのケの人には高評価であった。

「そして続いている魅力はジェットコースター。絶叫マシンは定番です
ね」

「……絶叫マシン、ってなんですか？」

「えーと、怖いもの見たさってありますよね？ それと同じでスリ
ルを味わうために乗るアトラクションで、すごい速さで動く乗り物
に乗るなどが一般的ですね。件の遊園地は特に凄く、メリーゴーラ
ウンドを凌駕する平均速度に加え、コースタージャンプ、火の輪く
ぐり、ループ頂点での緊急一時停止など、世界初の動きが売りだっ
たそうですね」

まさかの変態機動である。

耐G訓練でもするのかという突っ込みが関係各所より出た、世界
最狂のジェットコースターだった。

逆さ吊りの状態から後方に疾走しつつ一連のアクションをこなし、
最後まで乗客は後ろ向きのままという理不尽さが魅力のそのジェッ
トコースターは、屈強な海兵隊員ですら泣きが入るとの評判だった。

「……外の世界のカップルやご家族連れは、恐ろしい場所を好むの
ですね」

そして聞く射命丸と阿求の方は、既に大分勘違いが入っていた。

『外の世界怖エ』という共通認識を抱く二人に向けて、早苗はこ
こで最大の恐怖を投下する。

「そしてマスコットのネズミが『ハハッ』という特徴的な笑い声と
共にお出迎えしてくれ」

以下の話は、余りにも恐ろし過ぎるので後略とさせて頂く。

外の世界に於いてはネズミは有史以来最も扱いに気を使う動物で
あり、迂闊な扱いをすれば世界のどこでも黒服が飛んで来るのだ。

そしてその早苗さんによる外の世界の流行講座が終わった数日後

#

文々。新聞 第122季 夏の特集号

〈外の世界の少女達の流行とは！？〉

・外の少女達の間で、今は下駄が流行中！？
可愛らしい飾り下駄や、大人っぽい黒下駄で女子力アップ！
人里の履物屋にて、皆さんも新しい下駄を探してみても如何でしょうか？

筆者のお薦めは (後略)

・虎を軸に据えた時代演劇、『^{タイガー}虎どらま』も人気。
外の世界にも動物や自然を大事にする人々がまだまだいるようです。

甲斐の虎、武田信玄に関する物語もあった模様。
外の世界の少女は、意外と歴史好きで真面目なようです。
私としてはイメージとの違いに (後略)

・恐怖の施設、遊園地の存在！
少女達は思い人との逢引の際に、しばしば遊園地という施設に出向くらしいですね。

しかし外の世界の技術をふんだんに使った遊具で満ちたそこは大変恐ろしく、衆道を極めし者達が集まる高速回転木馬や、殺す気し

が見えないスリル満点の乗り物などに支配された一種の地獄らしいです。

恐らく少女達はそんな場所を恋人と乗り越える事により、絆を深めているのでしょう。

しかしながら、最も恐ろしいのはマスコットで

(後略)

#

ある日の昼ごろ、式神である藍の用意した食事を食べながら発行された文々。新聞を見た妖怪の賢者は、脱力感の余りにちやぶ台へと倒れこみそうになるのを根性だけで辛うじて堪えた。

「ゆ、紫様！？ どうかなされたのですか!？」

「……藍、私くじけそう……あの風祝の子、ある意味でマジ怖い……」

……」

妖怪の賢者が『いやいや有り得ないから』と内心で叫ぶ内容が幻想郷に流布された、とある夏の日の事だった。

閑話其の六：早苗と阿求と文の女子会（後書き）

諏訪大社ではなく守矢神社に諏訪子様と神奈子様が居た理由についてには 割愛。

なんか色々理由がありそうな気がしますけど、作中で明言する事はしません。というか考えてません。

諏訪大社⇨守矢神社とする二次小説もありましたけど、西風遊戯では諏訪大社 守矢神社です。

閑話其の七：女子会のその裏で（前書き）

ちょっと忙しくて本編が中々進まないのので、外伝でお茶を濁してみます。

女子会で早苗さんが遅くなった守矢神社。

その頃の西宮は　　みたいな感じでしょうか。

ヤマ無しオチ無しの超日常的な風景です。

西宮＋割と彼と仲の良い二人。

閑話其の七：女子会のその裏で

早苗と射命丸と阿求が、後に八雲紫を脱力の渦に巻き込む原因となる女子会を開いている頃。

西宮は射命丸の鴉が持つてきた手紙を見て、溜息を吐いていた。

「……ぶっちゃけもう少し早く言えよな、東風谷。こっちは既に飯の準備始めてんだよ」

「妻の帰りが遅くて旦那が不満漏らしてるぞ、どーすんだあれ」

「あー、負け犬は風祝さんをくんくんしながらメシ食べないと調子悪くなるんスよ」

「お前らくたばっちまえよ。いや、くたばる前に俺の事をどう見てんのか説明してからくたばれ」

場所は神社の社務所、その中にある台所。

西宮丈一はその台所にて、横に椀を、後方の空き部屋　今は信者から寄付して貰ったテーブルを置いて、簡易の居間になっている　に魔理沙を置いて、料理中だった。

二名は各々飯をたかりに来た招かれざる客だが、椀は山菜を、魔理沙はキノコ（食用）を持って来たので、結局それらを使った料理を振る舞う事になった西宮だった。

しかし、とんとんとリズムよく包丁で山菜を刻んでいるのは、意外にも西宮ではなく椀の方だ。

西宮はボールに卵黄、酢、油などを原料とした自家製マヨネーズを作っている所であり、手紙を横に置くと作業を再開する。

その様子を後ろから見ながら、いつもの魔女帽子を床に置き、女の子座りをしていた魔理沙が眉を顰めて思い出しながら声を上げる。

「……そつちの天狗……えーと、椀だよな？　そう、確か宴会で見た顔だぜ」

「うっす。天狗の里広しと言えども、手に一本下駄を装備して逆立ちして、そのまま駆け回る事に関しては右に出る物が居ない犬走椀とはボクの事ッスよ」

「ああ、名前が合ってたようでは何より　　なんだけど、どういう競技だよそれ。想像したら普通に怖いよ」

「いやほら、白狼天狗って一人前になる前に教練受けたりとか割とシステマティックな教育受けてるんすけど、ボクってその教練所で遅刻と早弁と忘れ物にかけては歴代屈指と賞賛されるほどの腕前の持ち主だったんすよ」

「それ褒めてないよな。絶対褒められてないよな」

「そんなボクは特別授業としてよく廊下に立たされてたんすが」

「特別授業じゃねえよそれ。単なる罰則だよ。慧音が時々寺小屋で子供に命じてるよ」

さくさくと山菜を切り分け、手もとの鍋に放り込む椀。

アク抜きなのだろう。水を張られた鍋は火にかけられてはいない。

そんな椀に対して、魔理沙が意外にも突っ込み根性を発揮して突っ込んでいるが、そんな突っ込み程度で揺らぐ犬走椀ではない。

過去を思い返して居るような、遠くを見るような目で新たな山菜を取り出してまな板の上に乗せながらも言葉は止まらず。

「　　その時、ボクは思ったんすよ。『ただ立っているだけじゃ暇だ』……と」

「こいつ立たせる意味ねえよ。反省の色が全く見えねえよ」

「そしてちよつと下駄を手に装備して逆立ちなんぞしてみんとしたら、なんか意外と上手く出来て」

「授業終わって廊下に出たら、一本下駄手に装備して逆立ちしているバカが居たお前の同期に心底同情するよ」

「なんか逃げられたんで、一本下駄逆立ちで追い掛けたらマジ泣きされたツス」

「お前すげえよ。何で一本下駄逆立ちで普通に走るのに張り合えるんだよ。世界新記録だよ、バカの」

「霧雨、俺から言わせればそれは何を今更だぞ」

戦慄すら交えての魔理沙の言葉に、マヨネーズを作るのに熱中していてこれまで会話に参加していなかった西宮が声を返す。

対する魔理沙は唇を尖らせ、

「これまで知らなかった相手なんだから仕方ないだろ。まあ文の後輩って事はこれからちよくちよく関わる機会もあるだろうし、こうして一緒に食事して親睦を深めるのもアリだと私は思っぜ。って事で飯まだー？」

テーブルの上に置かれていた箸で茶碗を叩き、行儀悪く催促する魔理沙。

彼女に対する返答は、『これでも食ってる』という言葉と共に西宮が放り投げた、しなびた大根の切れはしだった。

「……泣けるぜ」

少しだけ齧ってみた大根は、ほんの少しだけ辛かった。

さて、何故神社にこのような一貫性の無いメンバーが集まったかと言うと、先にも説明したように夕飯をたかりに来たのが最大の理由だ。

椀は文が人里に行つてしまつて暇な為。

魔理沙は香霖堂という、魔法の森の近くの古道具屋に寄つた帰りだという。

道具屋の青年店主は道具弄りに熱中すると、食事キヌコもろくにしない無精者なので生きていかどうか確認ついでに、食料キヌコを手土産にメシを作りに行つてやつたとは魔理沙の弁。

しかし道具屋は出掛けており 恐らく無縁塚辺りに道具探しに行つたのだろう 彼女は仕方なく、手土産のキノコで料理を作つてくれそうな奴が居る場所 即ちこの神社に来たとの事だ。

『……ぶつちやけ帰れよ霧雨。つーかお前その道具屋にメシ作る気だつたなら、台所貸してやるから自分で作れよ』

『嫌だね。私はあいつに作る心算で出向いたんだ。他の奴に作る気分じゃない』

事情を聞いた西宮と魔理沙の会話はこのような物だつた。

なにやら拗ねたような様子の魔理沙相手に、下手に強硬に反対しても面倒な事になるかと判断した西宮は、結局彼女を迎え入れて夕飯を作る事と相成つた。

そこに山菜を手にした椀が『一人で食うのもつまないから一緒に食べよう』とやってきた結果が今の状況である。

本来であれば神奈子や諏訪子、早苗も居る筈の神社だが、今日はたまたま神奈子は河童の宴会に呼ばれており、諏訪子は諏訪子で蛙の神様らしく大蝦蟇との会談があるとか言つて出掛けてしまつていた。

そこに加えて、早苗の女子会参加だ。

「……まあ、一人で食うのも空しいからな」

ぼそりと呟いた西宮は、かちやかちやとボールの中のマヨネーズをかき混ぜながら、騒がしい二人の招かれざる客に、しかし嫌そうには見えない苦笑を浮かべた。

#

それからしばし後。

料理を終えた二人と何もせず待っていた魔理沙の前。

つまりは三者が囲むテーブルの上には、山菜を混ぜ込んだ炊き込みご飯と、マヨソースを塗って焼いた椎茸の照り焼きが乗っていた。後は今日の昼に西宮が人里で買って来た、鮎の塩焼きである。

「……いただきます」

三人は揃って手を合わせ、食材への感謝を言葉に出してから、目の前の食事に手を付ける。

西宮は鮎の塩焼きから、椀は炊き込みご飯から、魔理沙は椎茸の照り焼きからだ。

各々手を付けた食事を口に運び、咀嚼し、飲み込んで一息つく。

「美味しいな」

「こっちもいけるぜ。やっぱり私が取って来たキノコが最高だな」

「ふっ、それはマヨネーズの力に決まってるだろ霧雨。マヨは何にでも合う至高のソースだ」

「……マヨラーかよお前」

「まあ別に他人の味覚を否定はしないっすけど。こっちの山菜ごはんも美味しいっすよー」

「どれどれ。……あ、美味しいなコレ。駄犬、お前普通に料理出来たんだな」

「一人暮らしツスからね。自分で食べるもんは自分で作るしかないツスから」

「道理だな。うちの風祝にも聞かせてやりてえよ」

意外と生活力のある椀の言葉に、感心したように西宮が頷く。

しかし頷いた西宮に対して、鮎の塩焼きを丁寧に分解して小骨を取りながらも、魔理沙が意地の悪い声をかける。

「早苗は別に良いんじゃないの？ お前が料理作ってやれるんだから」

「……別に男は働いて女は家事みたいな前時代的な事を言う心算は無いが、あそこまで出来ないのもどうかと思うんだよ」

「そう言いながらも結局西宮君が作ってあげるから、風祝さんは出来ないままなんスよね」

「お前意外と鋭い事言うな、駄犬……」

そして苦虫を数十匹纏めて噛み潰したような表情で、西宮は少し乱暴に椎茸を口に放り込み、咀嚼して飲み込む一連の動作で間を置いてから言葉を返す。

「あいつにやらせようとしても惨事になる上に、あいつが俺の料理が食べたくなって言うから……」

「お前地味にそういう所で早苗に甘いよな」

「まあ風祝さんが甘え上手なのかもしれないツスけど」

間髪いれずに戻ってきた魔理沙と椀の言葉に対して、西宮は反論せずに食事に集中する事にした。

反論してもこの話題では分が悪いと思ったのだろう。

会話が途切れた所で椀も目の前の食糧の征服にとりかかり、魔理沙は小骨が嫌なのかやたらと丁寧に鮎を分解し続けている。

「そーいや、私らが来なくて早苗も向こうで食事をしてこなかったら、お前と早苗は今晚二人きりだったわけだ」

「熱い夜ツスね。そうなたらそうなたで、文々。新聞の特派員しつぱいんとしては色々取材したい所ツスけど」

「お前ら良い感じに脳沸いてるんじゃないやねえよ。俺らに何期待してるんだお前は」

「えーと、そうだな。式には呼んでくれ」

「引き出物はなるべくお金かけて欲しいツスね」

「帰れよお前ら。コレ食ったらマジ帰れ」

これといったヤマもなければオチもなく。

二柱＋現人神も居ない神社にて、割と平穏な西宮の幻想郷での生活の一風景であった。

第三十四話：恐怖と後悔と鈴仙と

鈴仙・優曇華院・イナバは月の兎である。

月の都。地上より遙かに進んだ文明を持つそこで、彼女は軍人だった。

真面目で、そして“狂気を操る程度の能力”という強力な能力を持つ軍人だった。

しかし彼女は、臆病で弱虫な軍人だった。

厳しい訓練を越えて、同僚の月兎達と友情を築いていた。

軍人という職業が自身に向いていたとは思わなかった。

だが、友と笑いあいながら過ごすのは楽しかったし、戦いが無い月の都での軍人生活は気楽だった。

だが、彼女は逃げ出した。

人間の月への侵攻に怯えて、彼女は仲間も主も全てを捨てて逃げ出してしまった。

地上ではアポロ計画と呼ばれていたそれが、侵攻などと呼べる物ではなかった事を知る前に逃げ出した。

彼女はあまりに臆病で、決定的なまでに軍人に向いていなかった。そして彼女は、仲間を見捨てて逃げて来た事への呵責も無く生きていられるほどに強くはなかった。

地上に逃げて来た彼女は、何の因果か永遠亭と呼ばれる屋敷に辿り着く。

そこで月人であった蓬萊山輝夜、そして彼女の師となる八意永琳に出会った。

仲間を見捨てて来た呵責に潰されそうになりなっていた彼女に、永琳は医術を教えた。

軍人時代に教えられた人を殺す技術とは対極の、人を生かす技術である医術。

それを活かす医者という職業は、恐らく小野塚小町が言っていた通りに彼女に向いたモノであった。天職と言つてもいいだろう。

彼女には才能があつた。

頭の良し悪しではない。人を助ける事を『嬉しい』と思え、そして人を助ける為に必死に親身になれる心根という、医者として最大の才能にして財産を彼女は持っていた。

軍人としては荷物にしかならない才能だが、医者としては至上の才であつた。技術や頭脳よりも余程大事な、彼女の財産だ。

最初は少しでも鈴仙の気が紛れればと思つて医術を教えていた永琳が、本気で彼女を弟子にしようとしたのはその性格が最大の理由だろう。

その彼女自身の性質と最高の師匠という比翼を以て、彼女は医者としてめきめきと成長した。

森羅万象の理すらねじ曲げる『蓬萊の薬』などというブツを作り上げる永琳はともかくとして、世間一般的な視点から言えば技術・知識的には鈴仙は既に名医だ。枕詞に『屈指の』を付けても良いだろう。少なくとも、幻想郷においては永琳のもとで修業を積んだ鈴仙は、その永琳を除けば最高の知識と技術を持っている。

だがそれでも、かつて犯した一つの罪が彼女を縛っていた。

仲間を見捨てて逃げ出したという事。それに対する呵責、心の傷。それがただでさえ臆病な性格の持ち主であつた彼女を、更に自らに自信を持たない性質にしてしまっている。

故に幾ら優秀な知識や技術と、人を救う医者になりたいという意思は持っていて、彼女は真には名医足り得ない。

いざという事態になればなるほど、自らの選択に自信を持たずに右往左往する。

そんな弱さを抱えた医者は、決して名医とは呼べないだろう。

小町が言っていたように閻魔が、そして何より永琳が気にかけている鈴仙の心の傷。

実際のところはアポロ計画は侵攻と呼べる代物ではなかったし、鈴仙の脱走を自分達の課した訓練が厳しかったからだと勘違いしたかつての鈴仙の主である綿月姉妹の方針で、現在の月兔の軍が非常に緩い物になっていくくらいが最大の影響であり、実害など無いに等しかったのだが。

それでも鈴仙は自分を責め、それが彼女の成長を妨げていた。彼女は臆病ながらも真面目で優しく、しかしそれ故に悩み苦しんでいる。

#

「良く来たな、鈴仙だったか。それと冥界の……魂魄妖夢だな。まあ、まずは休んで行くが良い」

出て来た早苗は軽く互いの調査状況を語り合いながらも、境内に集っていた三名を神社の本殿に招き入れた。

そこに待っていたのは、旧き大和の軍神である八坂神奈子だ。上座にあぐらをかき、集まった面々

早苗、西宮、鈴仙、妖夢

を堂々と睥睨するその姿は、まさに神の威容と呼ぶべき威

圧感を持っていた。

ただし

「はふはふっ！ もぐもぐっ！ ンまい！ ンまいッスよ神奈子様、この『ちきんらめん』！」

「そうかそうか、もっと食べ。私の奢りだ」

ただし、すぐ横で顔面をどんぶりに突っ込むようにしてラーメンを啜ってる某わんこが居なければ、という注釈が付くが。

早苗と一緒に調査に出て、西宮達よりも一足先に戻っていた犬走椀。

神奈子オススメのチキンラーメンを尻尾をぶるんぶるんと振り回しながら食べ、見事なまでに御満悦であった。

見守る神奈子も嬉しそうな辺り、意外とこの二人は相性が良いのかもしれない。

「……えーと、はい、ありがとうございます。……ところでどうしたんですか、その天狗。そのまま尻尾の回転力で空も飛べそうなくらい尻尾を振ってますが」

そしてその光景におずおずと突っ込みを入れたのは、下座に正座で座る妖夢だ。

刀を横に置き、しっかりと背筋を伸ばして座るその姿は、確かに若いながらも武人の立ち振る舞いを想わせる。

ただしその表情は、笑って良いのか突っ込んで良いのか分からないとも言いたげな微妙な物だが。

「ああ、こちらの天狗は白狼天狗の犬走椀だ。色々あって、よくう

ちに入入りしている」

「はふはふっ！ もぐもぐっ！ がふがふっ！」

「……はあ。そうですね」

鷹揚に頷いて説明する神奈子。その横で顔を上げる事もせずには
ーメンを嚙っている椛を見て、妖夢は思考を停止する事にしたら
しい。

疑問を全て投げ捨てつつ、意識的に椛を視界に入れないように目
線を調整して座り直す妖夢。

その彼女の代わりとでも言うように、手を上げたのは鈴仙である。

「八坂様」

「神奈子で良い。そう硬くなるな」

「はっ……では、神奈子様。ええと、守矢神社は現在起こっている
異変に対して、これからどうなさるおつもりですか？」

「さてな。とりあえず、この場に霊夢を迎え入れているのだ。八雲
への借りもある。私と諏訪子は霊夢を守るためにも、ここを動けん
となると決定権を持つのは自然と丈一と早苗になるが」

「その前に情報を整理しましょう。鈴仙さんも妖夢も、東風谷も良
いな？」

神奈子が向けた視線を受けた西宮が頷き、その場の一同の顔を見
回して提案する。

一同　　椛除く　　が頷いたのを確認し、

「まずは気質の異変に関しては、妖夢が見た限り妖怪の山の上空へ
と気質が流れて行っているように見える」

「山の上空　　か。とすれば空に住まう妖怪か、はたまた仙人か
天人か……妙な話だ。どれにしる、地上の出来事には関心が薄い連
中だと聞いているのだがな」

その言葉に対し、神としての知識か紫辺りから教わっていた地域情勢か、ともあれ疑問げな言葉を神奈子が呟く。

西宮はそれに頷きつつも、

「何にせよ、気質の異変の原因が上空にあるらしいのは事実です。

妙な話だとしても、ここで何を言っても推論にしかないかと」

「まあ、そうだな。許せ丈一、話の腰を折った」

「いえ、お構いなく。神奈子様に限らず、疑問点が思い浮かんだ方はすぐに言っして下さい。何かそこから気付く事があるかもしれない」

「うめー！ この『ちきんらめん』マジうめー！」

「ただし、その駄犬は黙っているように」

快哉を叫ぶ椀に対し、聞いているのかどうかも怪しい釘を刺して、彼は話を再開する。

「尚、紅魔館で聞いた話で他に参考になりそうな物は 竜宮の

使いと名乗る女性が、地震の警告に訪れていたそうです」

「紅魔館よりも博麗神社に必要なだった気がするけどね、その竜宮の使いとやらの警告」

続けた言葉に、肩を竦めて鈴仙が一言補足。

その言葉に対し、神奈子の眉が僅かに上がる。

それは疑問というより、訝しがるような表情だ。

「……うちにも来たぞ。その竜宮の使いとやら」

「その竜宮の使いは何か言っていましたか？ 神奈子様」

「いや、当たり障りのある話ではない。地震が来るから注意すると、事務的にそれだけだ。ぶっちゃけ既に地震が起こっている以上アテ

になるまいと聞き流していたのだが……もう少し詳しく聞くか、と
つちめておくべきだったか」

「まあ今更ですね。その竜宮の使いについては情報が少ないですし、
保留としましょう。本格的にあちこちに警告を出して回ってるっば
い事が分かったただけでも十分です」

果たしてその竜宮の使いが、異変の首謀者と関係があるのか否か。
そこを疑問に思いながらも、西宮はそれを思考の片隅に置くだけ
に留め、話を進める。

「で、レミリア様をはじめとする紅魔館勢は紅魔館の防衛準備が終
わり次第打って出る心算だと仰っていました」

「……なるほど。紅魔館が動くか」

「はい。当主であらせられるレミリア様の妹君、フランドール様は
留守居をなさるそうですし、ノーレヅジ様と小悪魔さんはフランド
ール様と紅魔館の防衛の為に残る可能性もありますが　だとし
ても、最低でもレミリア様、十六夜さん、美鈴さんの出陣は確実か
と」

状況説明を続ける西宮の言葉に、神奈子が頷く。

紅魔館の出陣　それはつまり、幻想郷の大勢力の一角が本腰
を入れてこの異変の解決に動き出すという事だ。

「ちよつと良い？」

「どうぞ」

その言葉を待っていたかのように手を上げたのは鈴仙。

彼女は神奈子の表情を伺って一拍置いてから、おずおずと自分の
意見を口にする。

「ええと……その場合、今後私らが動く理由つてあるの？ 各組織の下っ端である私達が動き回つて、異変の根を探す段階は終わったとも取れるわよね？ ぶっちゃけ紅魔館が動いて駄目な相手に私らが向かつてつてどうにかなる物とも思えないし」

「そうですね。実際、異変の首謀者でもあつたレミリア様の實力は隔絶してます。先の宴会で諏訪子様と同格の實力を發揮し、弾幕ごっこをしていた事からも分かります。加えて十六夜さんの實力は、東風谷や妖夢、鈴仙さんよりも頭一つ上。美鈴さんも弾幕はともかく、純粋な格闘技術で見れば相当だと伺っています」

遠回しに『もう私らの役割終わったよね？』と主張する鈴仙の言葉。それに西宮はあっさりと同意する。

出発前の西宮の言葉　つまりはこの異変の首謀者と、靈夢を泣かせてしまった自分自身に対する憤りを聞いていた鈴仙は肩透かしを食らつたような表情で、彼に視線を向ける。

彼女としてはてつきり反発があると思つていた安全論なのだが、意外にも西宮はその意見を全面的に肯定した。

即ち、自分達が行くよりもレミリア達が動くのを待つた方が確実だという事。

安堵したように息を吐き、鈴仙は意外と冷静そうな糸目の横顔から目を外す。

そして

「だったら

」

「故に」

『だったらここで待つていれば良いのではないか』。

そう言い掛けた鈴仙の言葉を断ち切るように、西宮はそこに言葉を重ねた。

慌てて再びそちらを見る鈴仙の目に映ったのは、いつもの糸目ではなく、開かれた目が据わった横顔。

「ぶっちゃけこれ以上は戦術的・戦略的に見て無意味ですが、この異変の首謀者には大概腹が立ってますので、俺は行きます。参加希望者はご自由にどうぞ」

「ま、西宮も行く事ですし当然私もです！ いきなり神社を壊すような罰あたりには、私が直々にお説教してあげますよ！」

「説教云々は閻魔様の仕事だと思っただけ……。まあ、私も行きませう。幽々子様から申しつけられた仕事は異変の解決。故に私に関しては、元より首謀者を斬りに行く所存でしたし」

鈴仙から冷静になったように見えたのは、どうやら表面上だけだったようである。

無意味を理解し主張しながらも、異変の大元へ行く気満々の西宮。そしてその完全に本気と書いてマジと読む精神状態になっている彼に、同調するのは早苗と妖夢だ。

意気軒昂と言って良いだろう。三人は完全に異変の元凶へと向かう心算である。

その様子を見て、鈴仙の胸がずきりと痛む。

我知らず奥歯を強く噛み、脳裏に思い浮かべたのは地上に逃れてくる前の自分。

戦いから逃げた自らの姿。

なんだこれは。まるで月から逃げる前と同じではないか。

怖くて仲間を見捨てて逃げ出したあの時の焼き直しではないか。

膝の上に置いていた手を、無意識に強く強く握り締める。

恐怖と後悔、それが等分に彼女の胸中に去来し

「鈴仙さんには、ここで神社の守りをお願いしても良いですか？」

「えっ……」

しかしそんな鈴仙にかけられた西宮の言葉は、彼女の参戦を拒否するような物だった。

否、拒否とは呼べまい。防衛というならば神が二柱で十二分。その戦力に加えて鈴仙が居るか居らないかなど、誤差の範疇でしか無いだろう。

故に鈴仙が異変の首謀者の元へ行きたがっていないのを察して、適当な用事を申しつけて遠ざけるそれは、ただの気遣いだ。或いは分かり易い方便に過ぎない。

いつそ臆病者と罵ってくれた方が楽なのに。
いつそ逃げられない状況で戦場へ連行してくれた方が楽なのに。

内心に去来した感情は酷く醜く、自身を氣遣って遠ざけてくれた言葉に対してそんな感情を抱いた自身に対し、彼女は更に強く奥歯を噛み締める。

噛み締めた歯の間から、知らず言葉が漏れる。

「……………」

「どうして、と言われましても。鈴仙さんはここから先、積極的に関わる理由は無い筈でしょう？ そちらの姫様から申しつけられていた仕事は、『異変の解決』ではなく、『異変の調査』だった筈では「そうだとしても！ 強弁して私を連れて行く理由を作る事は出来る筈でしょう!？」

そして冷静に話す西宮の言葉に、思わず鈴仙の声が大きくなる。並ぶようにして下座に座っていた妖夢と早苗が驚きの表情で鈴仙を見ているが、対する鈴仙は両者に構わずに紅い瞳で西宮を睨みつけるのみ。対する西宮の表情は、明確な困惑だ。

神奈子は　　少なくとも鈴仙からは表情は読めない。彼女は西宮に食ってかかる鈴仙を、無表情のまま眺めている。

「……らしくないですね、鈴仙さん。どうしたんですか？」
「丈一」

困惑した西宮の言葉を横合い　　上座から断ち切るように一言。激昂した鈴仙と困惑する西宮が同時に視線を向けた先に居るのは、「軍神」八坂神奈子。

彼女は小さく溜息を吐いて、鈴仙に視線を向けた。

「私は少し、この兎と話がある。他の連中を連れて出ている」
「……しかし」

「お前は賢いが、経験が不足している。この兎が抱えている問題は説明されないと分からぬだろうし、恐らく簡単に説明して良い物でもない。重ねて言うぞ。少し出ている」

「……畏まりました」

反論は許さぬ。

そうとでも言うつように静かに、しかし威厳を以て告げられた言葉に、一度は反論しかけた西宮が頭を下げて肯定の意を返し、立ち上がる。

状況が飲み込めていない様子の早苗と妖夢は西宮、神奈子、鈴仙の三者をおろおろと眺めていたが、立ち上がった西宮が『失礼』と一言断った上で神奈子の横を通り、我関せずとどんぶりを舐めていた椀の襟首を引っ掴んで退出するに至って、慌てて彼らの後を追っ

て部屋を出た。

残されたのは神奈子と、やり場の無い怒りを堪えるように俯き、拳を握りしめている鈴仙だけだった。

第三十四話・恐怖と後悔と鈴仙と（後書き）

西宮は鈴仙の裏事情を知ってるわけでもなく、単純に『嫌がってる人を無理に誘う事は無いか』程度の善意でした。

もろに心の傷抉ってましたがね！

と、いうわけで鈴仙の内心についての掘り下げ回です。

ウチの主人公は全く役に立たず。次回は神奈子様のターンですね。

そして感想返信の途中で出掛ける為、返信が中途半端になります。申し訳ありません、戻って来たらやります。

小ネタ集その1（前書き）

色々リアルでゴツタゴツタしてたり、サークルの方だったりニコニコの方だったりで色々してたりして、更新滞りまくりで申し訳ありませんorz

と、とりあえず思い付いた小ネタだけでも形に……。

時間軸関係無し。一種の平行ルとお思い下さい。

小ネタは随時追加。追加は西風遊戯のトップでお知らせします。

1万文字を越えたら『その2』に移行する予定。

小ネタ集その1

アルティメットロリスティッククリチャー（三十二話参照）

ある日、稗田家当主稗田阿求、風祝の早苗に尋ねて曰く。

「幽香さんと会ったそうですけど、どんな人でした？」
「イエス、ロリータ。ノータッチな人でした」

その日、幻想郷縁起の『人間友好度：最悪』の妖怪に、『幼女友好度：最高』という一文が追加された。

永遠亭のヒエラルキー（十七話参照）

ある日、永遠亭の主である蓬莱山輝夜が、たまたま用事で永遠亭に来ていた西宮を捕まえて困ったように呟いた。

「うちって私がトップだけど、実質的には永琳が取り仕切ってるのよ。でも永琳ってば律儀だから、私を立てようと色々と苦心してたりするのよね」

「天才」と伺ってますけど、俺からは接点殆ど無いんですよ
あの人。っていつか最初に得た印象が強すぎて天才と言うより別の印象が」

「あら？ 貴方は永琳にどんな印象を持ったのかしら」

恐らくは鈴仙辺りに頼んでいたのであろう、永遠亭の特産物である筈と人参を風呂敷に包みながらの西宮に、輝夜は興味ありげに視線を向ける。

口元を隠して上品に笑う輝夜に対し、西宮は真顔で告げた。

「駄犬の先輩」

「ぶはっ!？」

そういや永琳、何を血迷ったのかあの犬の後輩を自称していたか。

『私つてばそんなに若く見えるのね』と物凄く嬉しそうにしていた月の天才を思い出し、輝夜は優雅も上品も投げ打って思い切り噴き出したのだった。

料理と血筋

『そういえば、神奈子様は料理がお得意ですけど、諏訪子様は全然駄目ですよね』

ある日の守矢神社の食卓で、雑談の流れから西宮が諏訪子にそう告げた晩。

当の西宮と早苗が寝静まった後、本殿で差し向かいに酒を飲みながら、諏訪子は神奈子に愚痴を言っていた。

「私はさあ……なんとというか、こつ、女は料理出来るべき」って
いう既成概念が嫌いなものよ」

「そこは分かるが、それを料理を出来ない言い訳にするのは如何な物かと思うぞ。……早苗が料理出来ないのも、まさかお前の血筋なんじゃないだろうな、諏訪子」

呆れたような神奈子の言葉に、諏訪子は嫌そうな視線を投げ返す。
手元の酒をぐいっと煽り、

「そりゃ無いよ。確かに守矢の祭祀は私の家系だけど、その中にはちゃんと料理出来る奴だつて沢山いるじゃん」

「隔世遺伝とか」

「ただ離れてるのさ。……ああでも、あれは確かに隔世遺伝かも。私からじゃないけどね」

ふと思いついたように諏訪子が告げた言葉に、神奈子はこてんと首を傾げる。

『意外と可愛らしい動作するよなコイツ』などと思いつつも、諏訪子は首を傾げた神奈子に向けて苦笑しつつ、

「早苗の母の父、私とは一切関係無い人間なだけどね。神奈子は聞いてなかったかもしれないけど、どこぞの食品会社で開発やってたらしいのよ。そこからの隔世遺伝って可能性はあるかも」

「食品会社で開発というが、それは料理が出来る部類の人間なんじゃないのか？」

「いやー……」

決まり悪げに頬を掻いて、諏訪子は眼前の神奈子に対して苦笑する。

「開発内容が『スパークリングおでん缶』とか『スポーツお汁粉レモン味』とかでも？」

「間違いなくそこからの遺伝だな」

余りの黒歴史っぷりに歴史から抹消され忘れ去られたそれらのレシピが、後に香霖堂で発見されるのはまた別の話である。

「そういえば紅霧異変の時に、魔理沙さんは和食派だと言っていたんですよ」

「見た目が西洋人みたいなのに、ギャップが凄いですね」

ある日の大図書館。

以前のゴキブリ事件の際に、図書館の立ち入りと貸出許可を得ていた西宮は、本の返却ついでに小悪魔と軽く雑談を交わしていた。

図書館の主人であるパチュリーは我関せずと奥で本を読んでいる。彼女は基本的に来客に関しては、自分の邪魔になる相手か興味がある相手である場合はノータッチだ。

西宮の場合はさしてパチュリーの興味を引く相手でもないし、彼女の読書を邪魔する手合いでもない。

以前パチュリーから出された条件通りに魔術に関わらない範囲の本を、至極常識的に返却しに来ただけの話である。

「ギャップと言つなら西宮さんも相当ですよ。これ、全部洋食関係の本ですよね」

「あー……まあ確かに」

そして小悪魔と西宮の会話内容は、小悪魔の手元にある返却された本。

それらは全て料理書であり、尚且つ小悪魔の言葉通り、いわゆる洋食に分類される本だった。

ギャップと言う小悪魔の言葉に西宮は頷き、苦笑する。

「神社の見習い神職が洋食派っていうのはギャップありますよね」

「まあ外の世界では珍しくないのかもしれませんが。何か理由でもあつたんですか？」

「あー……何だったかなあ」

洋食派である理由を問われた西宮は、本のページをぱらぱらと捲りながら思考を巡らせる。

味は確かに洋食が好きだが、それは自分で作るのがその系統が多いから慣らされた物ではないかと言うのが彼自身の分析だ。

となれば原因はもつと前

「……あ」

「何かあつたんですか？」

「東風谷の奴がガキの頃、ハンバーグ大好きだったんですよ。それで」

「そうですかリア充爆発して下さい」

そして原因に辿り着いた西宮に対し、小悪魔は笑顔で言葉を断ち切りつつも、彼にこの話題を聞いた事を後悔したのだった。

以下随時追加

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1133u/>

東方西風遊戯

2011年12月18日03時47分発行